浦添市文化財調査報告書

前田（まえだ）・経塚（きょうづか）近世墓群（きんせいぼぐん） 6

前田真知堂A丘陵（1）・前田西上原A丘陵・前田西前田原A丘陵

―浦添南第一土地区画整理事業に伴う緊急発掘調査報告書―

2015（平成 27）年 2 月

沖縄県 浦添市（うらそえし）教育委員会

浦添市文化財調査報告書

前田（まえだ）・経塚（きょうづか）近世墓群（きんせいぼぐん） 6

前田真知堂A丘陵（1）・前田西上原A丘陵・前田西前田原A丘陵

―浦添南第一土地区画整理事業に伴う緊急発掘調査報告書―

2015（平成 27）年 2 月

沖縄県 浦添市（うらそえし）教育委員会

巻頭１　前田真知堂Ａ丘陵南側完掘状況（上）と北側完掘状況（下）

巻頭２　前田西上原Ａ丘陵完掘状況（上）と前田西前田原Ａ丘陵完掘状況（下）

序　文

本報告書は、浦添南第一土地区画整理事業に先立ち、平成 25 年度に浦添市教育委員会が実施した、埋蔵文化財「前田・経塚近世墓群」の真知堂Ａ丘陵、西上原Ａ丘陵、西前田原Ａ丘陵の発掘調査の成果をまとめたものです。

前田・経塚近世墓群は、浦添市字前田と経塚に分布する丘陵に横穴を掘り込んで造られた伝統的な掘込墓を主とする墓群です。これまでの発掘調査では 1,000 基を超える墓が発見されており、調査成果によるとこれらの多くは近世に造営されたことがわかっています。

この近世の墓には、「ジーシガーミ」と呼ばれる蔵骨器が安置されており、その中に納められた人骨を分析することで、被葬者の性別や年齢、顔立ち、体格、病気など様々な生活の履歴を知ることができます。また、多くの蔵骨器には被葬者名や社会的地位、洗骨・没年月日等を記した「ミガチ（銘書)」が墨書きされており、被葬者をとおして当時の歴史的情報を得ることができます。このことは、文献資料が少ない沖縄において近世の人や家族の歴史にとどまらず、当時の浦添の歴史、ひいては沖縄全体の歴史を明らかにできる歴史資料であるともいえます。

今回調査した各丘陵では、沖縄戦の一端を窺い知ることができる遺構も確認されております。西前田原Ａ丘陵では民間人が構築したと考えられる避難壕跡が検出されました。持ち込まれた様々な日用品や壕内の状況から戦時下の緊迫した様子が伝わり、激戦地となった浦添前田地域の戦時下の様子が垣間見える貴重な発見がありました。

本報告書が沖縄・浦添の近世から近代を通じた葬制・墓制、また、沖縄戦を知る上で、市民をはじめ多くの方々に活用されますとともに、文化財の保護と活用についてより一層の関心を持って頂けるものになれば幸いに存じます。

末尾になりますが、現地調査および資料整理にあたってご指導・ご協力を賜りました方々、並びに事業実施にあたりご協力を賜りました方々に深く感謝申し上げます。

平成 27 年 2 月

浦添市教育委員会
教育長　池原 寛安

例　言

1．本報告書は、浦添南第一土地区画整理事業に先立ち、沖縄県浦添市前田に所在する埋蔵文化財「前田・経塚近世墓群」前田真知堂Ａ丘陵・前田西上原地区・前田西前田原Ａ丘陵の発掘調査の成果をまとめたものである。

2．「前田・経塚近世墓群」は、沖縄県浦添市の字前田から経塚の丘陵一帯に所在する墓群である。なお、発掘調査地点の所在地は、前田真知堂Ａ丘陵：沖縄県浦添市前田真知堂 1015 他 21 筆と里道、前田西上原Ａ丘陵：沖縄県浦添市前田西上原 1243 他２筆、前田西前田原Ａ丘陵：沖縄県浦添市前田西前田原他 683 他 13 筆と里道である。

3．発掘調査は、浦添南第一土地区画整理事業に伴う発掘調査であり、浦添市都市建設部区画整理課の委託を受けて、浦添市教育委員会文化課が実施した。

4．資料の整理にあたり、下記の方々の指導・助言をいただいた。記して感謝申し上げる。
陶磁器　新垣　力（沖縄県立埋蔵文化財センター）

5．発掘調査に係る現場作業は、平成 25 年度に実施した。調査期間は、平成 25 年７月 22 日～平成 25 年 12 月 26 日である。調査の実施にあたっては、株式会社イビソク 沖縄営業所、有限会社ティガネーの支援を受けた。

6．報告書作成は、平成 25 ～ 26 年度の二ヶ年にわたって実施し、浦添市教育委員会文化課職員及び嘱託職員がこれにあたった。

7．副葬品および戦争遺物、人骨の実測及び写真撮影については、文化課職員及び嘱託職員がこれにあたった。なお、蔵骨器の実測及び写真撮影等については、株式会社 琉球サーベイに委託した。

8．本書の執筆を以下のように分担した。編集は安斎 英介が行った。
安和 吉則　　第１章第３節（1）、第２章、第３章第１～４節・６節
安斎 英介　　第１章第１節・２節・３節（2）、第４章１～４節・６節
上原 千明　　第１章第３節（3）、第５章１～４節・６節
菅原 広史　　第３章第５節、第４章第５節、第５章第５節

9．本文中で使用した引用・参考文献は、各章末に記した。

10．調査に関わる実測図や写真等の記録は、浦添市教育委員会文化課において保存している。

凡　例

1．本書に表示した基準高はすべて海抜高を用い、メートル単位で表した。

2．地形測量図に記した座標は、世界測地系を用いた。日本測地系を用いる場合は、その旨を明記した。

3．平面図に記した方位は、基本的には座標北を示す。磁北を用いる場合は、その旨を明記した。

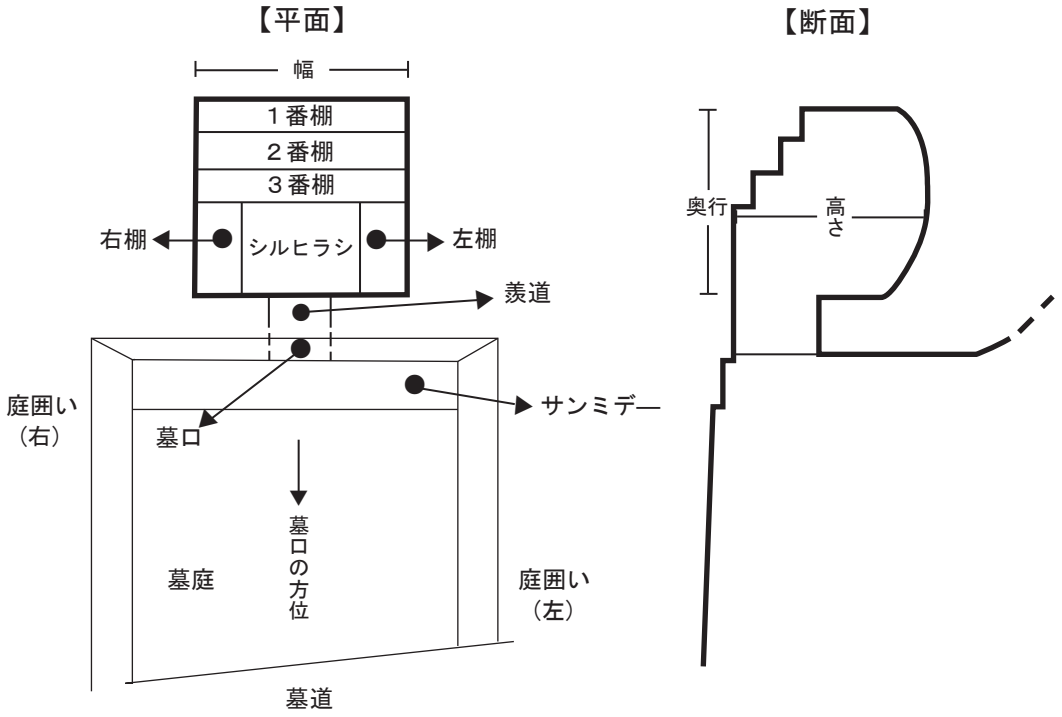
4．遺構断面図を作成した位置は、遺構平面図に横断ラインを示し、方向は英字で表した。

5．地形測量図については 1/200 を基本として作成し、1/200 ～ 1/500 の縮尺で掲載している。

6．遺構図については、1/20 を基本として作成し、1/40 ～ 1/100 の縮尺で掲載している。

7．遺物の実測図は、出土品のうち蔵骨器は 1/6、それ以外は、1/1 ～ 1/4 の縮尺で掲載した。それらについては、掲載頁に明示している。

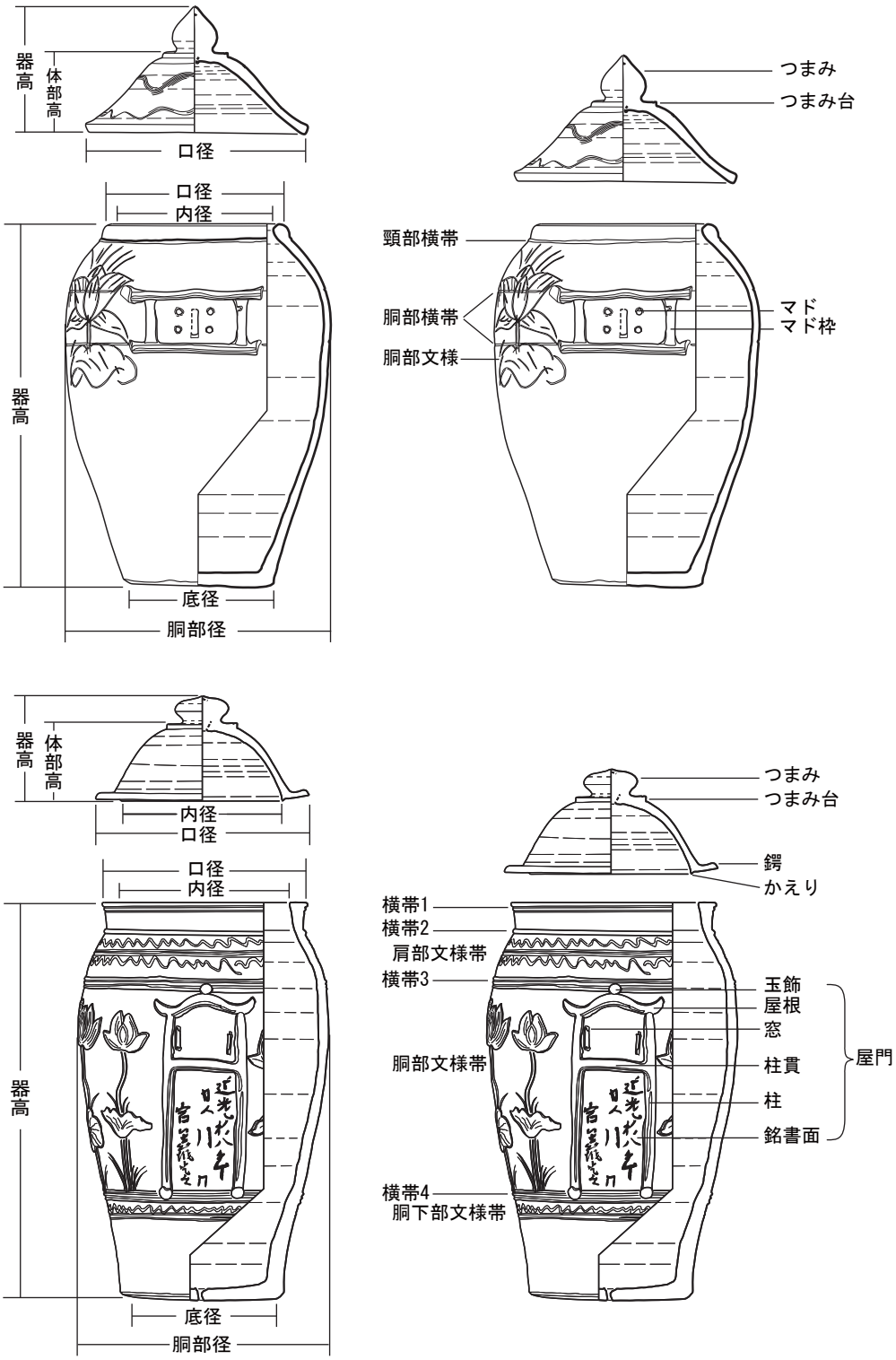
8．掘込墓の各部名称と計測位置については以下のとおりである。



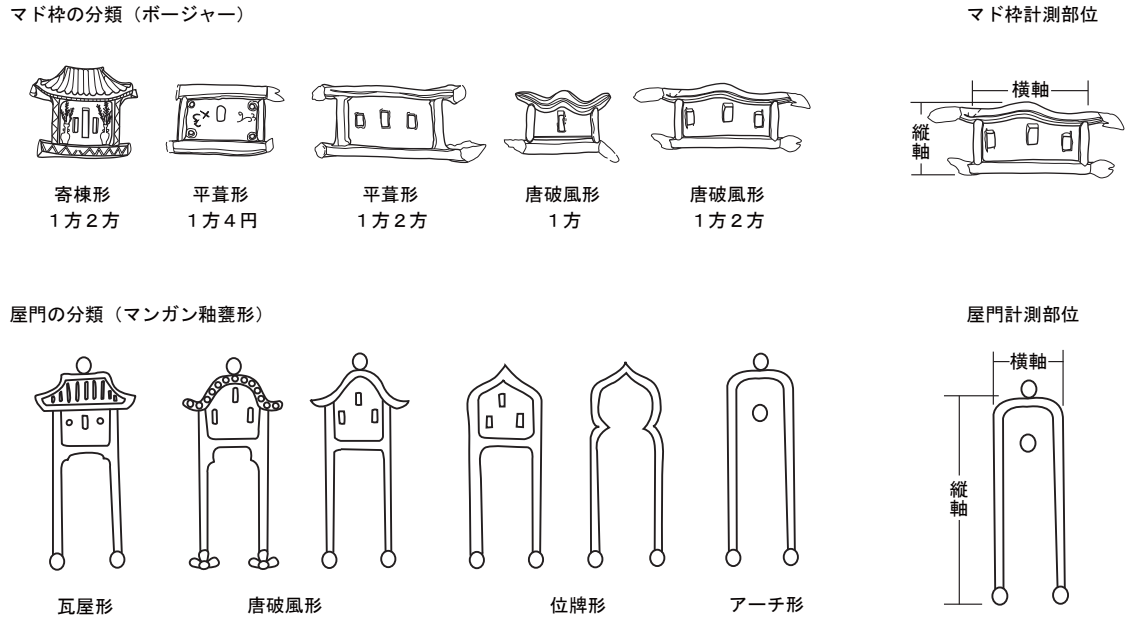
・墓口から墓室に至る通路の名称については、伝統的・一般的な呼称が確認されていないことから「羨道」と仮称した。

・墓口の方位は、座標北を表す。主軸方位は墓室奥壁を背にして墓口方向をみている。

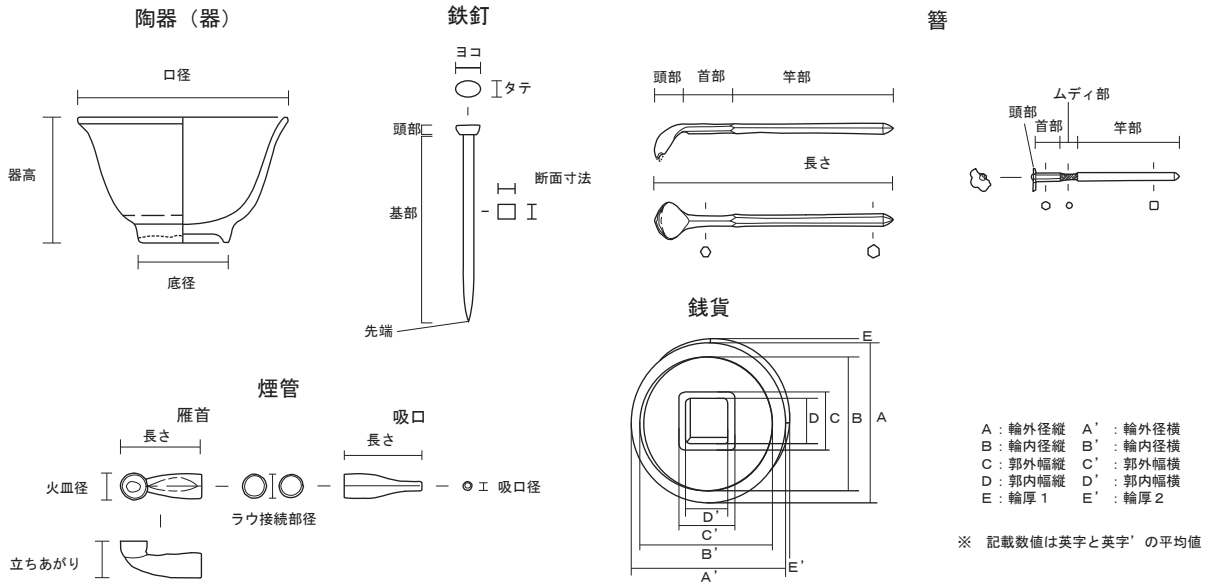
9．蔵骨器の分類及び名称と、各部名称・計測位置については、浦添市教育委員会刊行の浦添市文化財調査研究報告書第 25 集『伊祖の入め御拝領墓の厨子甕と被葬者』（1997 年）および浦添市文化財調査研究報告書『比嘉門中墓の家族史－家族の数だけ歴史がある－ 比嘉門中墓の調査概要』（2006 年）を参考にしている。



10. 窓・屋門の部位名称と計測位置は下記のとおりである。



11. 下記の遺物の各部名称と計測位置は以下のとおりである。



目　次

巻頭図版

序文・例言・凡例・目次

第１章　はじめに

第１節　調査に至る経緯 …… 1
第２節　調査体制 …… 1
第３節　調査の経過 …… 2

第２章　遺跡の位置と環境

第１節　浦添市の地理的環境 …… 7
第２節　遺跡の地理的環境 …… 7
第３節　遺跡周辺の歴史的環境 …… 9

第３章　前田真知堂Ａ丘陵の調査成果

第１節　調査の方法 …… 12
第２節　層序と遺構 …… 12
第３節　遺物 …… 13
第４節　各墓の調査成果 …… 19
第５節　人骨分析に関する所見 …… 46
第６節　まとめ …… 50

第４章　前田西上原Ａ丘陵の調査成果

第１節　調査の方法 …… 61
第２節　層序と遺構 …… 61
第３節　遺物 …… 62
第４節　各墓の調査成果 …… 66
第５節　人骨分析に関する所見 …… 85
第６節　まとめ …… 87

第５章　前田西前田原Ａ丘陵の調査成果

第１節　調査の方法 …… 89
第２節　層序と遺構 …… 89
第３節　遺物 …… 93
第４節　各墓の調査成果 …… 97
第５節　人骨分析に関する所見 …… 144
第６節　まとめ …… 147

報告書抄録

巻頭写真

巻頭 1　前田真知堂Ａ丘陵南側完掘状況（上）と北側完掘状況（下）
巻頭 2　前田西上原Ａ丘陵完掘状況（上）と前田西前田原Ａ丘陵完掘状況（下）

挿図目次

第 1 図　遺跡の位置 ･････････････････････ 8
第 2 図　前田・経塚の小字図 ･･････････････ 8
第 3 図　調査地区の位置図 ･･････････････ 11
第 4 図　前田真知堂Ａ丘陵地形図 ･･････････ 14
第 5 図　33 号墓遺構図 ････････････････ 21
第 6 図　33 号墓出土蔵骨器 ･････････････ 22
第 7 図　49 号墓遺構図 ････････････････ 23
第 8 図　49 号墓出土蔵骨器 ･････････････ 25
第 9 図　51 号墓遺構図 ････････････････ 27
第 10 図　51 号墓出土転用蔵骨器（1）･･････ 28
第 11 図　51 号墓出土転用蔵骨器（2）･･････ 29
第 12 図　51 号墓墓室出土遺物 ･･････････ 30
第 13 図　55 号墓遺構図 ･･･････････････ 32
第 14 図　55 号墓出土蔵骨器 ････････････ 33
第 15 図　55 号墓出土遺物 ･････････････ 34
第 16 図　56 号墓遺構図 ･･･････････････ 35
第 17 図　58 号墓遺構図 ･･･････････････ 37
第 18 図　60 号墓遺構図 ･･･････････････ 39
第 19 図　60 号墓出土蔵骨器 ････････････ 41
第 20 図　60 号墓副葬品 ･･･････････････ 42
第 21 図　66 号墓遺構図 ･･･････････････ 43
第 22 図　66 号墓出土蔵骨器 ････････････ 45
第 23 図　前田真知堂Ａ丘陵全体地形図 ･････ 53
第 24 図　前田西上原Ａ丘陵地形図 ････････ 63
第 25 図　1 号墓遺構図 ････････････････ 67
第 26 図　1 号墓出土蔵骨器 ･････････････ 69
第 27 図　4 号墓遺構図 ････････････････ 72
第 28 図　4 号墓蔵骨器 ････････････････ 74
第 29 図　4 号墓出土遺物 ･･････････････ 75
第 30 図　6 号墓遺構図（1）････････････ 76
第 31 図　6 号墓遺構図（2）････････････ 77
第 32 図　6 号墓出土蔵骨器 ･････････････ 78
第 33 図　6 号墓出土遺物（1）･･･････････ 80
第 34 図　6 号墓出土遺物（2）･･･････････ 81
第 35 図　その他の墓の出土遺物 ･････････ 83
第 36 図　前田西前田原Ａ丘陵地形図 ･･････ 90
第 37 図　2 号墓・28 号墓遺構図 ･････････ 98
第 38 図　2 号墓出土遺物 ･････････････ 100
第 39 図　28 号墓出土蔵骨器 ･･･････････ 101
第 40 図　4 号墓遺構図 ･･･････････････ 105
第 41 図　4 号墓出土遺物 ･････････････ 106
第 42 図　13 号墓・14 号墓遺構図 ･･･････ 107
第 43 図　13 号墓出土遺物 ････････････ 110
第 44 図　14 号墓出土遺物（1）･････････ 111
第 45 図　14 号墓出土遺物（2）･････････ 112
第 46 図　15 号墓・25 号墓遺構図 ･･･････ 114
第 47 図　15 号墓出土遺物（1）･････････ 116
第 48 図　15 号墓出土遺物（2）･････････ 117
第 49 図　15 号墓出土遺物（3）･････････ 118
第 50 図　25 号墓出土遺物（1）･････････ 119
第 51 図　25 号墓出土遺物（2）･････････ 121
第 52 図　16 号墓遺構図 ･･････････････ 124
第 53 図　16 号墓出土遺物 ････････････ 125
第 54 図　17 号墓遺構図 ･･････････････ 127
第 55 図　17 号墓出土遺物（1）･････････ 131
第 56 図　17 号墓出土遺物（2）･････････ 132
第 57 図　17 号墓出土遺物（3）･････････ 133
第 58 図　17 号墓出土遺物（4）･････････ 134
第 59 図　17 号墓出土遺物（5）･････････ 135
第 60 図　17 号墓出土遺物（6）･････････ 136
第 61 図　21 号墓遺構図 ･･････････････ 137
第 62 図　21 号墓出土遺物 ････････････ 138
第 63 図　26 号墓遺構図 ･･････････････ 139
第 64 図　26 号墓出土遺物（1）･････････ 140
第 65 図　26 号墓出土遺物（2）･････････ 140
第 66 図　9 号墓・19 号墓・20 号墓出土遺物 ･･ 142
第 67 図　20 号墓・24 号墓・28 号墓出土遺物 ･ 143

表目次

第 1 表　墓室の平面形の類型 ････････････ 15
第 2-1 表　前田真知堂Ａ丘陵の遺構一覧表 ･････ 16
第 2-2 表　前田真知堂Ａ丘陵の遺構一覧表 ･････ 17
第 3 表　前田真知堂Ａ丘陵の出土遺物一覧表 ･･･ 18
第 4 表　前田真知堂Ａ丘陵の出土人骨一覧表 ･･･ 48
第 5 表　前田真知堂Ａ丘陵の検出された人骨の個体数一覧（墓別）･･････････････ 49
第 6 表　上顎骨及び下顎骨の歯列残存状況 ････ 49
第 7 表　骨に見られる変異等の観察表 ････････ 49

第 8 表　齲歯一覧表 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 50
第 9 表　下顎犬歯に観察されるエナメル質減形成
一覧表 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 50
第 10 表　真知堂 A 丘陵遺構一覧表・・・・・・・・・・ 51
第 11 表　真知堂 A 丘陵遺構と類型・・・・・・・・・・ 54
第 12 表　銘書からみた墓の使用年代 ・・・・・・・・ 57
第 13-1 表　真知堂 A 丘陵の銘書一覧・・・・・・・・・ 58
第 13-2 表　真知堂 A 丘陵の銘書一覧・・・・・・・・・ 59
第 13-3 表　真知堂 A 丘陵の銘書一覧・・・・・・・・・ 60
第 14 表　西上原 A 丘陵の遺構一覧表 ・・・・・・・・ 64
第 15 表　西上原 A 丘陵の遺物一覧表 ・・・・・・・・ 65
第 16 表　4 号墓出土陶磁器の観察一覧表・・・・・・ 75
第 17 表　6 号墓出土陶磁器の観察一覧表・・・・・・ 79
第 18 表　西上原 A 丘陵の出土人骨一覧表 ・・・・・ 86
第 19 表　上顎骨及び下顎骨の歯列残存状況 ・・・・ 86
第 20 表　下顎犬歯に観察されるエナメル質減形成 86
第 21-1 表　西前田原 A 丘陵の遺構一覧表 ・・・・・ 91
第 21-2 表　西前田原 A 丘陵の遺構一覧表 ・・・・・ 92
第 22-1 表　西前田原 A 丘陵の出土遺物一覧表 ・・ 95
第 22-2 表　西前田原 A 丘陵の出土遺物一覧表 ・・ 96
第 23 表　28 号墓の蔵骨器観察一覧表・・・・・・・ 103
第 24 表　28 号墓の蔵骨器銘書一覧表・・・・・・・ 104
第 25-1 表　13・14 号墓出土陶磁器の観察一覧表 108
第 25-2 表　13・14 号墓出土陶磁器の観察一覧表 109
第 26-1 表　15・25 号墓出土陶磁器の観察一覧表 115
第 26-2 表　15・25 号墓出土陶磁器の観察一覧表 118
第 26-3 表　15・25 号墓出土陶磁器の観察一覧表 120
第 27 表　16 号墓出土陶磁器の観察一覧表・・・・ 125
第 28-1 表　17 号墓出土陶磁器の観察一覧表 ・・ 128
第 28-2 表　17 号墓出土陶磁器の観察一覧表 ・・ 129
第 28-3 表　17 号墓出土陶磁器の観察一覧表 ・・ 130
第 29 表　その他の墓の出土陶磁器の観察一覧表　141
第 30 表　6 号墓の蔵骨器銘書一覧表・・・・・・・・ 144
第 31 表　西前田原 A 丘陵の出土人骨一覧表・・・ 144
第 32 表　墓別による人骨の最小個体数一覧表 ・ 146
第 33 表　上顎骨及び下顎骨の歯列残存状況 ・・・ 146
第 34 表　骨に見られる変異等の観察表 ・・・・・・ 146
第 35 表　統制番号を付する陶磁器一覧表 ・・・・ 149

図版目次

図版 1　着手前（左）と蔵骨器検出状況（右）・・・ 20
図版 2　丘陵北東側から撮影 ・・・・・・・・・・・・・・ 21
図版 3　33 号墓出土蔵骨器 ・・・・・・・・・・・・・・・ 22
図版 4　49 号墓遺構・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 24
図版 5　49 号墓出土蔵骨器と銘書・・・・・・・・・・・ 25
図版 6　簪 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 25
図版 7　51 号墓遺構・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 26
図版 8　51 号墓出土転用蔵骨器 ・・・・・・・・・・・・ 28
図版 9　55 号墓遺構 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 31
図版 10　55 号墓出土蔵骨器 ・・・・・・・・・・・・・ 33
図版 11　56 号墓位置・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 35
図版 12　56 号墓遺構・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 36
図版 13　58 号墓遺構 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 37
図版 14　60 号墓遺構位置 ・・・・・・・・・・・・・・・ 38
図版 15　60 号墓遺構 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 40
図版 16　60 号墓出土蔵骨器 ・・・・・・・・・・・・・ 42
図版 17　66 号墓位置 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 44
図版 18　66 号墓・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 44
図版 19　66 号墓出土蔵骨器 ・・・・・・・・・・・・・・ 45
図版 20　1 号墓 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 66
図版 21　1 号墓出土蔵骨器 ・・・・・・・・・・・・・・・ 70
図版 22　1 号墓・8 号墓出土遺物 ・・・・・・・・・・ 71
図版 23　4 号墓遺構 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 73
図版 24　4 号墓蔵骨器 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 74
図版 25　6 号墓遺構（1） ・・・・・・・・・・・・・・・・ 77
図版 26　6 号墓遺構（2） ・・・・・・・・・・・・・・・・ 78
図版 27　6 号墓出土蔵骨器 ・・・・・・・・・・・・・・・ 78
図版 28　6 号墓出土遺物（戦争遺物）・・・・・・・・ 82
図版 29　その他の墓の出土遺物・・・・・・・・・・・・・ 83
図版 30　その他の墓 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 84
図版 31　6 号墓出土人骨 ・・・・・・・・・・・・・・・・ 86
図版 32　2・28 号墓遺構 ・・・・・・・・・・・・・・・・ 99
図版 33　28 号墓出土蔵骨器 ・・・・・・・・・・・・・ 102
図版 34　4 号墓遺構 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 104
図版 35　13・14 号墓遺構 ・・・・・・・・・・・・・・・ 108
図版 36　15 号墓・25 号墓遺構 ・・・・・・・・・・ 113
図版 37　25 号墓出土遺物 ・・・・・・・・・・・・・・・ 122
図版 38　16 号墓遺構 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 123
図版 39　17 号墓遺構 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 126
図版 40　21 号墓遺構 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 138
図版 41　26 号墓遺構 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 139
図版 42　26 号墓出土遺物 ・・・・・・・・・・・・・・・ 140

第１章　はじめに

第１節　調査に至る経緯

浦添南第一土地区画整理事業は、浦添市を事業主体とする字前田、経塚にまたがる総面積 82.4 ヘクタールの土地区画整理事業である。本事業は平成３年度に都市計画決定し、平成４年度より同事業が着手されている。

当該事業の実施に伴い浦添市教育委員会は現地踏査を実施し、更に平成６～９年度にかけて同事業地内の分布調査を実施した。その結果、地内の丘陵各所において方言名で「フィンチャー」と称する横穴式の墓を多数確認した。その総数は事業地内に約 1,000 基の墓が所在するものと推定された（浦添市教育委員会 1998）。その後、事業の進捗に従って随時範囲確認調査を実施し、実数の把握に努めるとともに（浦添市教育委員会 2007a、2010、2013a）、開発スケジュールとの整合性をとりながら順次緊急発掘調査を行い、その調査成果をまとめている（浦添市教育委員会 2007b、2011、2012、2013b、2014）。

同区画整理事業地の前田地区に位置する真知堂Ａ丘陵、前田西上原Ａ丘陵、前田西前田原Ａ丘陵においても道路・宅地造成工事が予定されており、その緊急発掘調査成果を報告するものである。

発掘調査を実施することとなり、平成 25 年６月 25 日付で市区画整理課と市教育委員会の間に、埋蔵文化財の緊急発掘調査業務委託契約が締結された。また平成 26 年度には、平成 26 年５月 23 日付で新規の現場の業務委託とあわせて、本報告書刊行のための資料整理業務委託契約を締結した。

第２節　調査体制

調査の体制は下記のとおりである。

調査主体	浦添市教育委員会	教育長	池原 寛安（平成 25 ～ 26 年度）
事業所管	浦添市教育委員会文化部	部長	下地 安広（平成 25 ～ 26 年度）
事業総括	同	文化課　課長	松川 章（平成 25 ～ 26 年度）
事業調整	同	文化財係長	渡久地 政嗣（平成 25 ～ 26 年度）
事業事務	同	文化財係主任	安和 吉則（平成 25 ～ 26 年度）
	同	文化財係主事	安斎 英介（平成 25 年度）
	同		菅原 広史（平成 25 ～ 26 年度）
	同	文化振興係主事	松田 奈津子（平成 25 年度）
	同	臨時職員	宮里　磨（平成 25 年度）
	同	臨時職員	上原 仁美（平成 26 年度）
調査員	同	文化財係主任	安和 吉則（平成 25 ～ 26 年度）
	同	文化財係主事	安斎 英介（平成 25 年度）
	同	グスク整備係主事	安斎 英介（平成 26 年度）
	同	文化財係主事	菅原 広史（平成 25 ～ 26 年度）
	同	嘱託職員	宮城 明恵（平成 25 ～ 26 年度）
	同	同	鈴木　悠（平成 25 ～ 26 年度）
	同	同	上原 千明（平成 25 ～ 26 年度）

資料整理・嘱託職員
平成 25 年度（嘱託職員） 糸数 永子、金城 真由美、島袋 吏乃、白木 由子、新城 京美
平成 26 年度（嘱託職員） 池宮城 聡子、糸数 永子、浦崎 祐子、新城 京美、照屋 芳美、比嘉 美智子
調査協力　志良堂 恵、勝野 久美子、照屋 葉史、宮城 かの子

委託業務
平成 25 年度　発掘支援業務委託（前田真知堂Ａ丘陵） 株式会社 イビソク 沖縄支店
平成 25 年度　発掘支援業務委託（前田西上原Ａ丘陵・前田西前田原Ａ丘陵） 有限会社 ティガネー
平成 26 年度　遺物実測等業務委託　株式会社　琉球サーベイ

第３節　調査の経過

（1）前田真知堂Ａ丘陵
○平成 25 年 7 月 22 日～ 8 月 30 日
　発掘調査に伴う諸準備、赤土流出防止申請、現場の着手前RC撮影、防蛇網設置、伐採作業等を行った。

○平成 25 年 9 月 2 日～ 9 月 7 日
　測量基準点の設置、防蛇網解体作業、現場事務所設置、磁気探査を行った。

○平成 25 年 9 月 9 日～ 9 月 14 日
　引き続き磁気探査を実施。地質調査、重機等による除根作業、排土運搬を行った。

○平成 25 年 9 月 16 日～ 9 月 21 日
　排土運搬、表土掘削を行う。不発弾の発見に伴い、磁気探査を行う。

○平成 25 年 9 月 23 日～ 9 月 28 日
　沈砂池の設営、重機で丘陵東端部尾根北側より遺構確認作業を行う。小規模な墓が 6 基出土（31 ～ 36 号墓）。尾根南北両側の盛土を 1 ～ 2 m厚さで除去。尾根地形及び墓の略測を行った。

○平成 25 年 9 月 29 日～ 10 月 4 日
　尾根南面の磁気探査、重機による遺構確認作業を実施。8 基の埋没墓（39 ～ 46 号墓）が出土したが、周辺地盤が緩く、遺構の残存状態も悪い。週末は台風接近に伴う養生作業を実施した。

○平成 25 年 10 月 7 日～ 10 月 11 日
　南面東端部より遺構の掘削作業を開始。墓に関係しない人骨や不発弾が出土し、警察・自衛隊へ連絡した。北面上段の遺構（31 ～ 34 号墓）の掘削を行った。

○平成 25 年 10 月 15 日～ 10 月 18 日
　南面東端部の磁気探査を行った。遺構（39・40・41・42・47 号墓）の掘削作業を進め、完掘後（39・40・41 号墓）に撮影を実施。42 号墓では蔵骨器の身が出土し、平面プラン確認のための半截を行った。

北面の遺構（31 ～ 33・35 ～ 37 号墓）の掘削を行い、32 号墓は遺物取上げ、33 号墓は蔵骨器安置状況の撮影を行った。

○平成 25 年 10 月 21 日～ 10 月 25 日

蔵骨器（33・36・42 号墓）の取上げ作業、遺構（39・48・49 号墓）の掘削作業、完掘後（33・35・36 号墓）の撮影を行った。39 号墓は石組遺構の撮影、測量を行った。23 ～ 25 日は雨天のため作業を中止。図面作成、台帳整理、遺物整理を行った。

○平成 25 年 10 月 28 日～ 11 月 2 日

遺構（37 ～ 39・51・52 号墓）の掘削作業を行った。39 号墓では石材取り外し後、下層から多量の蔵骨器片が出土し、同墓は下層の墓の崩落後に構築された墓と判断され、下層の墓を 51 号墓とし遺構の掘削作業を進め、完掘後撮影、測量を行った。尾根南面では完掘後の全景撮影のための清掃作業を行い、撮影後に地形測量を実施した。10 月 30 日に尾根北面下段の墓（54 ～ 64 号墓）の撮影を行った。尾根南面の埋め戻しを 11 月 1・2・8・11 日に行った。

○平成 25 年 11 月 5 日～ 11 月 8 日

尾根北面の墓（54 ～ 65 号墓）の掘削作業を行った。墓室より蔵骨器 1 点確認（55 ～ 57 号墓）し、撮影、測量を行った。小規模な墓（54 ～ 57・59・61・63・65 号墓）が多く完掘後、随時撮影と測量を行った。

○平成 25 年 11 月 11 日～ 11 月 15 日

尾根南面の埋め戻し終了。遺物の洗浄作業を開始。60 号墓の墓室奥壁の閉塞石を確認し、撮影、測量を行った。測量後に閉塞石を取り外し、イケ状の掘り込み部に安置された蔵骨器 1 点を確認した。撮影、蔵骨器の取り上げ、測量を実施した。

○平成 25 年 11 月 18 日～平成 25 年 11 月 22 日

遺構掘削作業の終了により、尾根北側の清掃作業、完掘状況の全景撮影、地形測量を行った。測量後は、現場の埋め戻しを開始した。

○平成 25 年 11 月 25 日～平成 25 年 12 月 10 日

沈砂池の埋め戻し、遺物洗浄、図面写真等整理作業を行った。12 月 10 日に現場事務所の撤収及び調査区の吹き付けを行った。

（2）前田西上原 A 丘陵

○平成 25 年 10 月 28 日～ 31 日

ラジコンヘリで着手前の調査区全景撮影を行った。30 日には、墓の個別の現況撮影を実施した。現況で確認できた墓に 1 ～ 6 号の仮番号をふった。31 日には、下草の伐採作業と防蛇網の設置作業を実施した。

○平成 25 年 11 月 5 日～6 日

引き続き調査区全体の伐採作業を実施し、伐採木の集積、一部の搬出作業を行った。6 日には伐採作業が完了した。遺構番号で仮 1 としたものはコンクリート墓の下方や後方に遺構が確認されなかったために遺構番号を抹消し、遺構番号を仮番号から正規の番号（1 ～ 5 号）にふり直しを行った。

○平成 25 年 11 月 7 日～ 13 日

調査区に散在・集積していたごみの片付けを実施。ごみの除去後に、不発弾確認のための磁気探査や地質調査のためのサウンディングを実施した。8 日には、探査中に不発弾を発見し、警察に通報後、自衛隊による緊急回収が行われた。11 日より遺構近くの木の抜根作業や掘削着手前の土量の検測作業を実施した。12 日には調査区北側斜面の掘削作業を実施し、50cm ほどで地山を検出した。13 日にはコンクリート墓 1 の除去作業を実施した。

○平成 25 年 11 月 14 日～ 22 日

1 号墓と 2 号墓の調査を実施。1 号は墓口付近の掘削を実施し、墓口の閉塞石を検出した。墓室内を完掘後に、測量・写真撮影などを実施した。2 号墓は墓庭部分の埋土の半裁を実施したところ、小規模な遺構を検出した。遺物等から戦時中の遺構と判断された。また、2 号の脇に小規模な遺構が検出された（8 号墓とした）。遺構内より赤瓦を検出した。

○平成 25 年 11 月 26 日～ 29 日

3 号墓と周辺の機械による表土掘削を実施した。墓庭を半裁したところ 3 号墓の墓庭より戦時中の遺骨を検出した。また、3 号墓の墓庭の掘削を進めたところ下部より別の墓室を検出した（6 号墓とした）。3 号墓は墓室を完掘し、測量・写真撮影などを実施した。4 号墓は埋土がほとんどなく、蔵骨器が倒れている状態であった。遺物を取り上げ後、撮影を実施した。平行して 5・6 号墓も掘削作業を実施した。

○平成 25 年 12 月 2 日～ 5 日

4 号墓から 6 号墓の作業を実施。4 号・5 号墓の墓庭からピットや鉄片、木片などが多数出土した。これらは遺物などから戦争時の遺構であると考えられた。6 号墓の掘削を実施し、シルヒラシに該当すると思われる部分を検出した。シルヒラシより陶製の蔵骨器が出土した。墓室棚にも潰れた蔵骨器が確認されたことから、戦時中に天井が崩落して埋没した遺構であることが判明した。また、3 号墓の南側の掘込遺構を 7 号墓とした。

○平成 25 年 12 月 6 日～ 9 日

4 号墓から 7 号墓の調査を実施した。4 号・5 号は主に墓庭を精査し、測量・写真撮影などを実施した。6 号は掘削作業を行った後に、遺物検出作業の測量と写真撮影などを実施した。7 号墓は完掘後に測量・写真撮影などを実施した。並行して調査区東側の遺構確認調査を実施したが、クチャ層が厚く堆積しており、遺構がないことを確認した。9 日は雨天中止。

○平成 25 年 12 月 10 日～ 26 日

引き続き 6 号墓の掘削作業を実施し、完掘後に測量・写真撮影などを実施した。調査区全体の清掃を実施した。11 日から 13 日には遺物の洗浄作業を実施した。26 日にはラジコンヘリで、丘陵全体の全景撮影を実施した。

(3) 前田西前田原 A 丘陵

○平成 25 年 7 月 24 日～ 8 月 6 日

調査区の墓の基数確認調査を行い、測量基準点の設置など調査にかかわる準備作業を行った。そのほか、調査前の全景写真と遺構の個別写真を撮影した。

○平成 25 年 8 月 7 日～ 15 日

調査区範囲内の伐採作業と並行し、防蛇網の設置や赤土の流出防止対策を行った。

○平成 25 年 8 月 16 日～ 22 日

1 ～ 18 号墓の遺構検出作業および写真撮影を行った。並行して、磁気探査を行った。

○平成 25 年 8 月 23 日～ 9 月 5 日

遺構の掘削作業を開始したところ、新たに墓を検出したため (19・20 号墓) 遺構の検出作業と写真撮影を行った。その後掘削作業を実施し、終了次第完掘状況の写真撮影を行った (6・10・11・19・20 号墓)。また、6 号墓の墓庭埋土の掘削作業を開始した。 9 月 3 日は雨天のため作業を中止した。

○平成 25 年 9 月 6 日～ 13 日

遺構の掘削作業を行い、終了次第完掘状況の写真撮影を行った (5、7 ～ 9 号墓)。7 号墓は掘削後に遺物検出作業と写真撮影を行い、遺物の取り上げを行った。また、9 号墓下方の掘削作業により新たに墓を検出したため (21 号墓) 遺構の検出作業と写真撮影を行い、掘削を開始した。

○平成 25 年 9 月 17 日～ 10 月 1 日

遺構の掘削作業の際、新たに 4 基の墓を検出 (22 ～ 25 号墓)。これらは遺構の検出作業と写真撮影ののち、同様に掘削作業と完掘状況の写真撮影を行った (12 ～ 14、21 ～ 24 号墓)。うち、13・14・21・25 号墓で遺物検出作業を行い、写真撮影後遺物の取り上げを実施した。また、15 号墓の東側から新たに墓を検出したため、遺構検出作業と写真撮影を行った (26 号墓)。並行して、調査区上面の掘削作業も行った。

○平成 25 年 10 月 2 日～ 12 日

引き続き遺構の掘削作業を行った (3・4・15・16・25・26 号墓)。うち、15・16・25・26 号墓で遺物検出作業を行い、写真撮影後遺物の取上を実施した。26 号墓は完掘し写真撮影を行った。そのほか 17 号墓下方よりフールに伴う排水溝、3 号墓及び 4 号墓の墓庭門側袖から左袖の一部と見られる石積を検出し、完掘写真を撮影した。11、12 日には 3・4・15・16・25 号墓の写真実測を行った。10 月 4 、 7 日は台風接近のため作業を中止した。

○平成 25 年 10 月 15 日～ 28 日

引き続き遺構の掘削作業を行っていた際、新たに 3 基の墓を検出 (28 ～ 30 号墓)。これらは遺構の検出作業と写真撮影ののち、同様に掘削作業と完掘状況の写真撮影を行った (1 ～ 5、15 ～ 18、25、27 ～ 30 号墓)。うち、27・28 号墓で遺物検出作業を行い、写真撮影後遺物の取上を実施した。なお、28 号墓からは蔵骨器のほか人骨も検出し、写真撮影後取り上げを行った。28 日には調査を終えたため、現場内外の清掃を行い、調査区の完掘後の全景と遺構の個別写真を撮影した。24 日は雨天のため作業を中止した。

○平成 25 年 10 月 29 日～ 12 月 25 日

出土した遺物の洗浄・整理作業と、遺構の実測作業を行った。そのほか、12 月 24 日に赤土流出防止のため、調査区に種子散布を実施した。

〈引用・参考文献〉

浦添市教育委員会 1998『浦添間切前田村・沢岻村域の近世墓と水田跡分布調査』
浦添市教育委員会 2007a『市内遺跡発掘調査報告書（１）－平成 13 ～ 18 年度調査報告－』
浦添市教育委員会 2007b『前田・経塚近世墓群』
浦添市教育委員会 2010『市内遺跡発掘調査報告書（２）－平成 14 ～ 20 年度調査報告－』
浦添市教育委員会 2011『前田・経塚近世墓群 2 首里大名地区』
浦添市教育委員会 2012『前田・経塚近世墓群 3 前田真知堂 B 丘陵（１）・前田真知堂 C 丘陵（１）』
浦添市教育委員会 2013a『市内遺跡発掘調査報告書（３）－平成 18 ～ 23 年度調査報告－』
浦添市教育委員会 2013b『前田・経塚近世墓群 4 経塚子の方原 A 丘陵（１）』
浦添市教育委員会 2014『前田・経塚近世墓群 5　経塚南小島原 A 丘陵』

第２章　遺跡の位置と環境

第１節　浦添市の地理的環境

前田・経塚近世墓群が所在する浦添市は、沖縄本島中南部の西海岸に位置し、南側に県都である那覇市、東側に西原町、北側に宜野湾市が隣接する。西側は東シナ海に面しており、遠くには慶良間諸島を望むことができる。市域は東西 8.4km、南北 4.6km、面積は約 19.09㎢で、人口は 114,254 人、46,926 世帯（平成 26 年 11 月末現在）を擁する市である。市の西部には国道 58 号線、市中央部には県道 330 号線と県道那覇宜野湾線、東部には沖縄自動車道がそれぞれ南北に走り、島の南北を結ぶ主要交通路が縦貫する。海浜部は、約 270ha の地域を米軍牧港補給基地が占めている（第 1 図）。

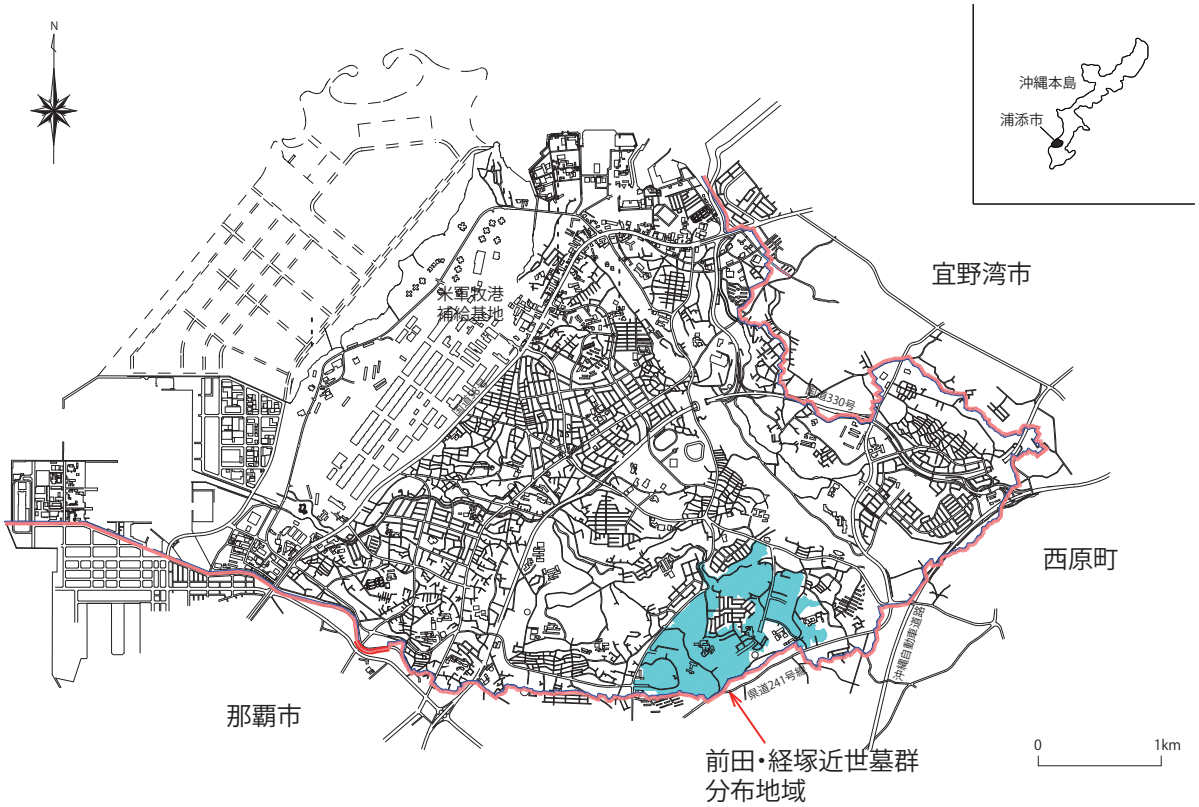
市の地形は、標高約 40m 前後でほぼ二分され、東部は起伏の小さな丘と浅い谷が連なる波浪状の丘陵地、西部は東シナ海に続く東高西低の地形である。北部には、北西－南東方向に標高 120 ～ 140m の浦添断層崖が形成されている。本市の最高点は、字仲間から前田に所在する国指定史跡浦添城跡内の 138.4m である。それらの丘陵を分水嶺に北流する牧港川、シリン川、西流する小湾川、安謝川の四河川はいずれも東シナ海へ注いでいる。海岸線はほぼ全面で沖合にかけ豊かなサンゴ礁が発達している。

本市に分布する地層は、下位から上位に島尻層群、琉球層群、海浜堆積地及び沖積層に大別できる。島尻層群は、本市の基盤を形成し市の中央部から南東部に広く露出するが、市西部や北部では琉球層群が広く分布する。沖積層や海浜堆積物は四つの河川の河口付近や海岸沿いにみることができる。植生については、本市全域が去る大戦の激戦地であったために、ほとんど焼け野原の状態になり、現在残っている植被は二次林となっている。気象は隣接する那覇市において年平均気温 22.3 度、降水量 2107.8mm で、冬は北東、夏は南東の季節風が卓越する。気温的には亜熱帯で、降水量は多く特に梅雨期や台風期に多い。風は東アジア季節風帯に属している。

第２節　遺跡の地理的環境

前田・経塚近世墓群は、浦添市の南東に位置する字前田と那覇市に隣接する字経塚一帯の丘陵地に分布する墓群の総称である。この地域は小湾川と安謝川の上流域で、その分水嶺にまたがる地域であり、一帯の地形はそれに由来する幾筋もの狭く浅い谷底低地と尾根から構成される。そのため、土地の起伏に富む丘陵地となっており、幾つもの舌状の小丘陵が入り組む複雑な地形が形成されている。これらの表層の地質は、豊見城層（小禄砂岩層）で構成されている。この砂岩は固結度が低い細粒の砂岩層であり、方言名で「ニービ」と呼ばれている。この地域の谷筋は、尾根の森を水源涵養林として古くから水田や畑として開発されてきたが、その斜面にはニービを掘り抜いた多くの掘込墓（方言名：フィンチャー墓）が形成されている。

現在、区画整理事業が進められている前田・経塚近世墓群が所在する丘陵地一帯は、地形上小湾川上流の安波茶川水系と安謝川上流の沢岻川水系に分かれ、現在の行政区域では字前田と字経塚に属している。この地区の小字は、安波茶水系に属する山川原、前田原、前原、東前田原、西前田原、黒島原、真和志堂原、真知堂、西小島原、南小島原と沢岻水系に属する子ノ方原、上平良大名原、下平良大名原の 14 小字からなる（第 2 図）。かつては、安波茶川水系の全ての小字と沢岻川水系の最上流域の子ノ方原が字前田に属し、沢岻川水系の上・下平良大名原が字沢岻に属していたが、大正５年の



第１図　遺跡の位置

字経塚の新設にあたり、字沢岻・字前田・字安波茶の子字をそれぞれ割いて設立した時より、現在の帰属になっている。

この地域一帯は、平成３年に浦添市が実施する浦添南第一土地区画整理事業が都市計画決定され、その翌年から着手された。同事業が進行する過程で、上記の墓群が次々に発見され、現在までにその数が 1,000 基を超えている。墓は、西前田原、東前田原、真和志堂原、前原、真知堂、南小島原、下平良大名原、子ノ方原に主に分布し、特に真知堂に集中している。平成 21 年度調査では、前田・経塚近世墓群が市域をまたいで南側の那覇市大名区域まで広がることが明確になった（浦添市教育委員会 2011）。

今回報告を行うのは、字前田に所在する真知堂Ａ丘陵、西上原Ａ丘陵、西前田原Ａ丘陵の三つの丘陵である。

前田真知堂Ａ丘陵は、浦添市字前田の南端に位置する。周辺は国際センター線及び沢岻石嶺線が開通しており、同丘陵の北側丘陵は経塚公園予定地となっている。丘陵は砂岩（ニービ）の地山であり、東西方向に伸びる形状をしている（第３図）。本調査地は、標高約 99 ～ 108m で、丘陵頂部と裾の平坦部の比高差が 10m の斜面地であり、その斜面部に横穴を掘り込んだ墓などの遺構が 36 基

第２図　前田・経塚の小字図

確認された（浦添市教育委員会 2013）。調査面積は約 2,100㎡の範囲である。

前田西上原Ａ丘陵は、浦添市字前田の東端に位置する（第３図）。西隣は、那覇市首里石嶺地区である。丘陵の西方が最も標高が高く、西側にむけてなだらかな下り勾配の斜面地になっている。丘陵は砂岩（ニービ）の地山であり、丘陵北側の一部は泥岩（クチャ）層である。本調査地は、標高 118 ～ 126m で比高差が６m程であり、丘陵の裾部に横穴を掘り込んだ墓などの遺構が８基確認された。調査面積は 990㎡である。

前田西前田原Ａ丘陵は、浦添市字前田の北西端に位置する（第３図）。現況では独立した丘陵地であるようにみえるが、戦時中の地形図ではもう少し東側に伸びる丘陵であったことが判明しており、戦後の造成で削られた痕跡が見受けられる。丘陵は砂岩（ニービ）であるが、東側斜面は泥岩（クチャ）層がある。本調査地は、標高 82 ～ 90m で比高差は約 8m 程であり、丘陵斜面や裾部に横穴を掘り込んだ墓や戦時中の防空壕などの遺構が 31 基確認された。調査面積は 1,900㎡である。

第３節　遺跡周辺の歴史的環境

浦添市が所在する沖縄本島中南部の遺跡分布の特徴としては、貝塚時代後期には海浜部に遺跡群が形成され、比較的内陸部の遺跡は少ない。グスク時代には、畑作や稲作が行われるようになり、遺跡も内陸部の石灰岩台地周辺に展開した。前田・経塚地区のように石灰岩台地がなく谷底低地が発達した地域は、グスク時代遺跡の分布が希薄な地域であると言われている。

古琉球期の状況については不明な点が多い。「浦添城の前の碑文」によると、1597(万暦 25) 年に尚寧王が「宿道」と呼ばれる街道の整備を行い、首里から浦添に至る道を石畳にした。この時、木橋だった安波茶橋が石橋に替わり、経塚を通る「宿道」が石畳に改められたとされる。また、1609(万暦 37) 年に島津軍が琉球に侵攻した際には、首里への侵攻路として利用された。

近世には地方統治制度として「間切・村制度」が採用され、1649(順治３) 年に作成された『琉球国絵図郷村帳』には、南第一地区一帯に「前田村」・「沢岻村」・「あはき村」(安波茶村) の３ヶ村の名が見える。経塚は行政単位の「村」として成立していないため同図には登場しない。「経塚」の地名は 1524(嘉靖３) 年に日秀上人が、現在「経毛」と呼ばれる場所に経塚を建立したことに由来する。同集落は首里士族の屋取集落として成立、発展した。その成立年代は明らかではないが、1800 年代前半には屋取集落が成立していたとされる。その後、1879(明治 12) 年のいわゆる「廃藩置県」によって職を失った士族が多く移り住んだことによって、現在の字経塚の基ができた。1916(大正５) 年には、沢岻から「洗江良原」「経塚原」「上平良大名原」「下平良大名原」、安波茶から「北経塚原」「南経塚原」、前田から「南小島原」「西小島原」「子の方原」が分割されて字経塚が成立した。

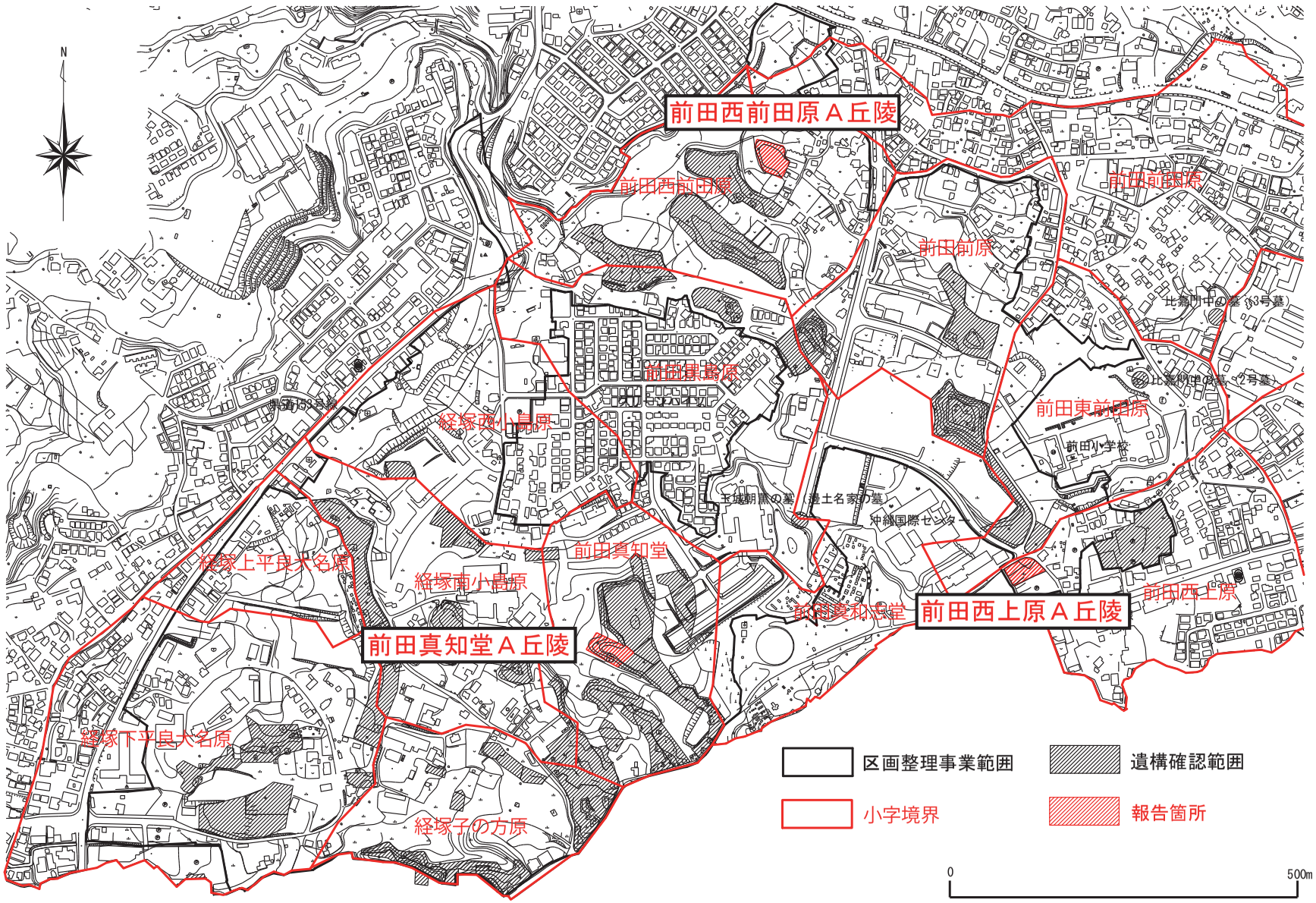
前田・経塚近世墓群では 1700 年頃の銘書がある蔵骨器もみられることから、この頃には墓地としての利用が始まったと考えられる。これまで確認されている同墓群の墓の所有者については、概ね北側の前田一帯の墓は、前田の人のものが多く、南側の経塚一帯の墓は、首里の人の墓が多いというデータがある。経塚は首里の近郊に位置するため、首里の士族層を中心に多くの墓が建立された。そして、近世以降も現在に至るまで墓の造営は続けられ、墓域としての利用が続いている。

また、去る沖縄戦において前田・経塚地域は激戦地となった前田高地（浦添城跡）と首里の軍司令部との中間地点に位置したため、多くの部隊が戦闘の経過とともに入れ替わり駐留したようである。その際に丘陵斜面に坑道式の壕を構築することもあれば、墓を転用することもあり、これまでの調査

で戦争に関連する遺構が確認されている。また、墓は民間人の避難場所になっており、これらの墓については多くの証言が得られている。

〈引用・参考文献〉

浦添市教育委員会 1980『うらそえの文化財』
浦添市史編集委員会 1981『浦添市史 第二巻 資料編 1 』浦添市
浦添市史編集委員会 1984『浦添市史 第五巻 資料編 4 戦争体験記録』浦添市
浦添市史編集委員会 1987『浦添市史 第六巻 資料編 5 』浦添市
浦添市史編集委員会 1987『浦添市史 第七巻 資料編 6 』浦添市
浦添市史編集委員会 1989『浦添市史 第一巻 通史編』浦添市
浦添市教育委員会 1998『浦添間切前田村・沢岻村域の近世墓と水田跡分布調査』
経塚自治会 2006『字経塚史』
浦添市教育委員会 2011『前田・経塚近世墓群 2 首里大名地区』
浦添市教育委員会 2013『市内遺跡発掘調査報告書（3）－平成 18 ～ 23 年度調査報告－』
浦添市 2015『広報うらそえ 平成 27 年 1 月号』



第３図　調査地区の位置図

第３章　前田真知堂Ａ丘陵の調査成果

第１節　調査の方法

本地区（第３図）の調査前の状況は、東側から西側にゆるやかに傾斜する丘陵の尾根部分のみが露頭していた。これは、該丘陵と周辺標高では３～５ｍの比高差があって、降雨等の度に丘陵外縁に水が溜まってプール状になる危険な状況があったため、安全対策として一時的な盛土が行われて平坦地を形成したことによる。このような状況から、当丘陵の調査はまず露頭する尾根部分の伐採を人力で、除根と盛土の除去を重機等で行った。盛土の除去に際しては、排土置き場の関係から、西側に比べて標高がやや高い尾根北側東端部から行った。北側の墓は傾斜地形に沿うように東側から西側へ横並びして造られており、部分的に上段・下段を形成していた。盛土を除去していくと墓口上部が僅かに確認できるものや、墓室の天井が崩落したと想定される地形上の凹みが散見された。

丘陵南側の調査も北側同様に東側から西側に進めていった。南側は北側に比べて遺構の上部層が軟質のせいか遺構の残存状態は著しく不良で、盛土と表土を除去すると、尾根頂部から遺構床面までは比高差６～10ｍでほぼ垂直になる崖状地形を呈した。また、沖縄戦時の砲弾片や銃弾等が多数確認されたほか、一部の墓では戦後の補修等が確認された。

これらの盛土及び表土の除去については、作業効率上バックホウを用いた機械掘削で行った。掘削の過程で、墓正面や庭囲い等が露出し出すと、順次人力掘削に切り替えて遺構細部の検出作業を行った。前田・経塚近世墓群の遺構は、そのほとんどが地山である細粒砂岩（ニービ）の丘陵に掘りこまれていることから､地山まで掘り下げることで造墓時および使用時の遺構面を検出することができる。人力掘削の結果、前田真知堂Ａ丘陵では、北側では丘陵の中央付近で部分的に上・下に段を形成しつつ、各段で墓が横並びする状況が確認され、合計31基の墓を検出した。遺構番号については、発掘調査の際には検出した順に１号墓、２号墓と付していたが、平成15年度に該丘陵東側の範囲確認調査を実施していることから、整理作業の際に平成15年度時の墓番号に後続させて、31号墓から順に番号を振り直して資料整理を行った。

これらの遺構を検出した後、順次遺構内の掘削を進めた。その結果、遺構や遺物の残存状態が確認できる８基の墓と、戦後も使用されて区画整理に伴い移転した墓や後世の攪乱などの影響から遺構や遺物の残存状態が悪い「空き墓」とそれに近い状態の23基の墓の計31基の墓が所在していることが判明した。前者の遺物を伴い、かつ遺構との関係性が明確な墓については、1/20の実測図の作成を行った。後者の墓については、略測図の作成を行った。写真撮影は適宜、調査開始から完掘まで行った。また、これ以外に戦時中に造られた壕が１箇所確認されたが、先述した比高差10ｍの軟質層下に位置していたため作業の安全面を考慮して調査は行わなかった。

第２節　層序と遺構

前節に記したとおり、本調査地は戦時中もしくは近現代の攪乱が確認されたため、墓の上部や墓庭については、重機と人力による掘削によってこれらの土層の除去作業を行い、遺構面の検出を行った。特に丘陵南側では天井部分が崩壊している遺構は、墓室内に墓の天井部分を形成していた細粒砂岩のブロックと表土層（戦後の土層）が混在して厚く堆積している状態であり、墓の入り口のみが埋没し

た墓については、墓の内部にはほとんど埋土がない状態が確認された。このような状況であることから、本調査区では明確な層序関係を把握することはかなわなかった。

ところで、層序とは関係しないが墓を造る際に基盤層の中で最も固い層理に墓室天井（又は墓正面上部）を構築する傾向が窺えた。このことは同地区の墓が複数段を形成しても整然と横並びする一因と推察された。

検出された遺構は 31 基（丘陵南側 9 基、北側 22 基）で、全て横穴状の掘込墓であった（第 4 図）が、丘陵の南北で墓の残存状態が異なることが確認された。南側の遺構は、墓室天井が崩落して埋没する状況であったが、墓口や墓室のプランも掴めないほど攪乱され、出土した遺物も日用品や戦争関係遺物で占められていた。近辺で壕に構築されている状況も併せて考えると一連の状況が戦時中の攪乱によるものと推察された。これに対して、北側は全体的に遺構の残存状態が良好で、墓が機能していた頃の状態がパックされた状態で 2 基検出されたほか、移転時に蔵骨器を廃棄した墓も 5 基確認された。また、遺構は北側で一部、上下に段を形成する部分もあるが、上段は西側へ向かう途中から墓が造られなくなる。その原因は尾根近辺での横穴部の奥行きの確保が出来なかったことが推察された。それぞれの遺構の特徴については、第 2 表にその概要を記した。なお、墓室の類型については、浦添市教育委員会 2007『市内遺跡発掘調査報告書（1）』掲載の第 1 表を改訂して用いている。

第３節　遺物

遺物は、総計で 471 点出土した。数量と内訳は、第 3 表のとおりである。主たるものとしては、陶製蔵骨器や副葬品と思われる陶磁器類が出土している。また表土層からは、戦時中の砲弾片などの戦争遺物も多く出土した。遺物については、基本的に墓毎に取り上げ作業を行った。以下に種類ごとにその概要を述べる。

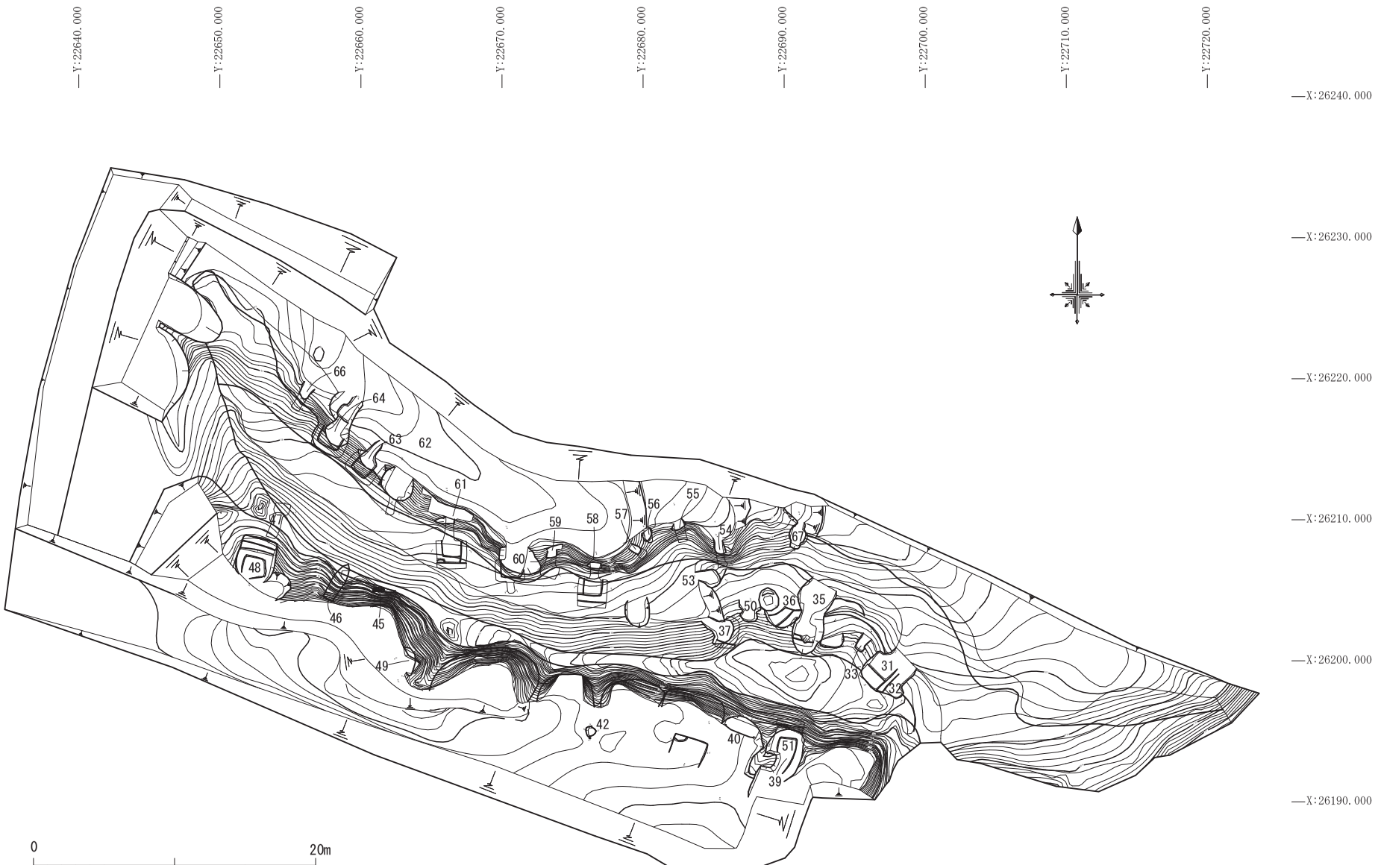
（1）蔵骨器

出土遺物中、最も多かったのが蔵骨器である。総点数は 385 点が検出された。そのうち、接合・復元できたものは蓋 47 点、身 58 点であった。その種類と数量は第 3 表に記したとおりである。沖縄の那覇市壷屋産のものと考えられる。

蔵骨器は専用蔵骨器と転用蔵骨器に大別できる。専用蔵骨器は甕形のボージャー形とマンガン釉甕形、家形の上焼御殿形が得られている。転用蔵骨器は日常雑器などで水甕や壷などである。専用蔵骨器が圧倒的に多数で、主にマンガン釉甕形で占められている。復元できた個体は蓋 34 点、身 44 点を数える。ボージャー形は蓋 3 点、身 1 点で、家形は蓋 1 点、身 1 点という出土状況である。転用蔵骨器は蓋 4 点、身 5 点であった。転用蔵骨器の身は、水甕や小さなアンダガーミを利用しているものがみられたほか、上焼御殿形の蓋を天地逆にして身に利用しているものが確認されている。

蔵骨器の時期としては、ボージャー形は安里分類（安里・新里 2006）の蓋Ⅴｂ式・身Ⅲａ式の資料が出土している。また､マンガン釉甕形は安里編年（安里 1997）のⅠ～Ⅵ式の資料が出土している。これらのことから、本調査の資料は概ね 18 世紀から 20 世紀（現代）の時間幅で捉えられる。

次章では、遺構・遺物が確認できた墓について個別に報告を行うが、その中で蔵骨器の状態の良いものを中心に、その特徴について報告を行う。



第４図　前田真知堂Ａ丘陵地形図

第１表　墓室の平面形の類型（浦添市教育委員会 2007『市内遺跡発掘調査報告書（1）を一部改変』）

		墓室平面形と棚の形状		調査実績 （調査墓数・面積等）	墓室及び棚の特徴や構築方法
1類	a	―		10基 最小面積：0.19㎡ 最大面積：3.0㎡ 平均面積：1.26㎡	墓室内に棚は無く、楕円またはいびつな形状。
	b			9基 最小面積：0.32㎡ 最大面積：3.06㎡ 平均面積：1.91㎡	墓室内に棚は無いが、直線的な規格性をもって造る。
	c			16基 最小面積：0.28㎡ 最大面積：2.12㎡ 平均面積0.75㎡	棚は無く、蔵骨器が数点置けるくらいの広さで、墓口から奥壁まで直線的に造る。平面形は縦長の方形となる。1人（一次葬人骨）を安置する墓として造られる。棺箱は遺構形状と同様に縦置きとなる。 ※ 奥壁の片側または両側を拡張して蔵骨器を安置する場合もある。
	d			6基 最小面積：0.30㎡ 最大面積：3.28㎡ 平均面積：1.42㎡	棚は無く、蔵骨器が数点置ける広さで平面形は楕円に近い。1c同様一次葬人骨を安置する墓として造られる。1cでは棺箱を縦置きするが、1dは横置きになる。
2類	a	出窓状			正面の奥壁を凸状（＝出窓状）に成形。棚幅が汁ヒラシ幅より短くなる。
	b				正面奥壁と左右側壁を凸状に成形。
	c				正面奥壁と、左右側壁のいずれか片側を凸状に成形。
3類	a	「コ」字状		7基 最小面積：2.80㎡ 最大面積：5.45㎡ 平均面積：3.77㎡	平面形が「コ」字を90度左に回転した形状。棚は平坦になる。 ※ 左右棚の片側いずれかと正面棚の接地部に段差ができることもある。 ※ 棚の高さで分類できる可能性あり。
	b			4基 最小面積：2.97㎡ 最大面積：4.28㎡ 平均面積：3.83㎡	平面形は3類aと同じだが、正面棚と左右棚の接地部に段差ができる。 正面に比べて左右の棚が低くなる。
	c	「L」字状		3基 最小面積：2.21㎡ 最大面積：3.60㎡ 平均面積：2.70㎡	奥壁（正面）と側壁のいずれか片側のみ棚を造る。 平面形は「L」字を90度または180度、右に回転した形状。
4類	a	段状 （階段状）		7基 最小面積：1.92㎡ 最大面積：5.04㎡ 平均面積：3.21㎡	墓室内が楕円またはいびつな形状で、ほぼ平行するように正面１段の棚を造る。
	b			9基 最小面積：1.43㎡ 最大面積：2.95㎡ 平均面積：2.45㎡	墓室内が直線的な規格で造られ、正面に1段の棚を造る。 ※ 棚の高さで細分類できる可能性あり。
	c			1基 面積：2.64㎡	墓室内が直線的な規格で造られ、正面に2～3段の棚を造る。
5類	a	「コ」字状 ＋ 階 段 状		6基 最小面積：4.93㎡ 最大面積：6.55㎡ 平均面積：5.76㎡	3類a＋4類c
	b				3類b＋4類c
	c	「L」字状 ＋ 階 段 状		1基 面積：4.13㎡	3類c＋4類c
6類	a	「コ」字状 ＋ 段 状		6基 最小面積：3.99㎡ 最大面積：6.92㎡ 平均面積：4.68㎡	3類a＋4類b
	b			2基 最小面積：4.94㎡ 最大面積：7.28㎡ 平均面積：6.11㎡	3類b＋4類b
	c	「L」字状 ＋ 段 状		1基 面積：4.46㎡	3類c＋4類b

※調査実績の数字は、浦添市文化財調査報告書『前田・経塚近世墓群（2～5）』で報告した埋没墓のうち、造営当初の状態を保持している遺構（墓室）を根拠としている。

第 2-1 表　前田真知堂Ａ丘陵の遺構一覧表

番号	墓室類型	墓室（㎡）	墓口方位	墓室寸法（m）			蔵骨器	所見
				高さ	幅	奥行		
31	不明	3.52	北東 N43.56°E	1.47	1.67	2.11	×	天井が崩落した埋没墓。32号墓との先後関係は不明。埋土中の出土遺物無し。奥壁際にはやや幅広の棚がある。
32	1d	1.56	北東 N43.55°E	1.01	1.12	1.39	×	天井が崩落した埋没墓。墓室左側壁は羨道から直線的、右側壁はその延長線上より外側に掘り込まれている。遺物は羨道部の埋土中から瓶子が1点出土。
33	1c	0.75	北東 N36.42°E	0.72	0.63	1.19	○	天井が崩落した埋没墓。検出状態で蔵骨器蓋のつまみが露出。狭小な墓室には蔵骨器1点を安置する。閉塞石は無い。
34	1b	1.53	北 N6.73°W	0.74	1.53	1.00	×	天井が崩落した埋没墓。墓室側壁がわずかに残る。埋土中からは古銭が出土。
35	不明	3.30	北北東 N16.76°E	1.97	1.48	2.23	×	天井が崩落した埋没墓。奥壁際に2段の棚を設けているが根攪乱で変形する。羨道及び墓庭も形状が不自然である。墓室左側壁際から、瓶子、蔵骨器蓋が出土。
36	4a	4.46	北西 N37.85°W	0.78	2.31	1.93	○	天井が崩落した埋没墓。墓室の一部のみ残存する。正面棚に蔵骨器を2点安置する。天井崩落の影響により、蔵骨器は状態不良で胴～底部のみ残存する。隣接する35号墓との先後関係は不明。
37	不明	3.00	西北西 N64.4°W	1.97	2.29	1.31	×	天井が崩落した埋没墓。墓口の閉塞石が半分程残っていて、ニービ石と成形された石灰岩、拳大の石灰岩で閉塞する。墓室は攪乱されていて、左壁側に低い棚が1段ある。墓口付近で陶器壺が1点出土。表土掘削中、該墓前から4、5個体分の蔵骨器片が出土しており、骨を整理後に廃棄したとみられる。
39	不明	4.64	南南西 N166.81°W	0.44	2.16	2.15	×	51号墓埋没後に造られた石組施設。切り出した石灰岩が通路上に組み上げられる。石組は内側に面をもち、表面の所々にはモルタルが付着する。石組外側には拳大石で裏込めが施され、底面には切石のほか、ニービ石も使用されている。用途や墓の部位ついては不明。該墓と下位墓の間層や墓前から7個体分の蔵骨器片が出土し、蔵骨器に伴うとみられる人骨も出土した。
40	不明	5.96	南南西 N157.3°W	1.85	2.77	2.15	×	墓室は原形をとどめない。正面壁下にニービ石を利用した棚とみられる遺構があるが、判然としない。石灰岩切石組をモルタルで固めたサンミデーのみ確認できる。
42	1d	0.23	東 N83.52°E	0.20	0.58	0.40	○	地山面にてピット状のプランを検出。検出時、蔵骨器の一部が露出した。半截作業を行ったが、蔵骨器内で骨は未検出。脇墓の底部のみ遺存したものであろうか。
45	不明	－	南 N180°	－	－	－	×	未調査。地山面との比高差が大きいため、尾根がある程度埋没してから造られたものとみられる。
46	壕	－	南南西 N148.58°W	－	－	－	×	未調査。墓を壕に利用か。墓口からの奥行きは約3mを測る。
47	1c	1.71	南南西 N157.71°W	0.95	0.67	2.55	×	48号墓埋没後に構築。石灰岩の切石で閉塞されていたが、墓室からは蔵骨器などの遺物は出土していない。羨道部両側壁には構築時のノミ跡が明瞭に確認できる。
48	5a	6.27	南南西 N165.79°W	1.68	2.46	2.55	×	埋没墓。墓室埋土中からは9個体分の蔵骨器片のほか、人骨片が出土。それ以外にも銃弾などの戦争遺物が大量に出土している。
49	4b	(2.17)	南南西 N148°W	1.32	1.55	1.40	○	天井が崩落した埋没墓。墓室の西半分が消失する。埋土中から蔵骨器片や骨が出土。正面棚に蔵骨器を3点安置するも、うち2点は胴～底部のみ残存する。
50	1d	0.59	北 N8.69°E	1.16	1.00	0.59	×	墓室・庭共に狭小。遺物の出土はなかった。

第 2-2 表　前田真知堂Ａ丘陵の遺構一覧表

番号	墓室類型	墓室（㎡）	墓口方位	墓室寸法（m）			蔵骨器	所見
				高さ	幅	奥行		
51	5a 撹乱	4.50	南 N169.67° W	2.12	1.90	2.37	×	39号墓の下位墓。天井は正面壁際の一部のみ残存する。墓室内や墓口付近の埋土中から手榴弾や銃弾などの戦争遺物が出土。戦時中に墓内部が利用されたものとみられる。墓室右側壁は地山が動いた状況が確認できるため、隣接する40号墓埋没後に構築された可能性も考えられる。
53	1c	1.89	西 N82.85° W	0.69	1.00	1.89	×	埋没墓。墓室のみ検出。遺物の出土はなかった。
54	1c	0.93	北 N9.44° W	1.04	0.53	1.75	×	墓口が埋没した小規模な墓。埋土中から蔵骨器片、国産磁器皿、陶器瓶子が出土した。
55	1c	1.04	北北西 N17.59° W	1.16	0.66	1.58	○	墓口が埋没した小規模な墓。墓室に蔵骨器を1点安置する。蔵骨器内の人骨を整理後、廃棄したものとみられる。
56	1c	0.53	北北西 N24.71° W	0.68	0.54	0.98	○	墓室が埋没した小規模な墓。墓室に蔵骨器を1点安置する。蔵骨器は胴～底部が残存する。
57	1c	0.70	西北西 N56.9° W	1.00	0.55	1.28	○	墓口が埋没した小規模な墓。墓室に蔵骨器を1点安置する。蔵骨器内の人骨を整理後、廃棄したものとみられる。
58	6a	4.12	北 N6.44° E	1.68	2.07	1.99	○	墓口が埋没した大規模な墓。羨道と墓室の境界部分埋土中から、23個体分の蔵骨器片が出土。蔵骨器内の人骨を整理後、同位置に廃棄したものとみられる。
59	1b	0.99	北 N6.87° E	1.15	1.30	0.76	×	墓口が埋没した小規模な墓。遺物の出土はなかった。
60	3a 撹乱	3.12	北 N3.55° W	2.59	2.05	1.52	○	天井が崩落した埋没墓。奥壁中央部にはイケ状遺構が設けられ、分厚い石灰岩で閉塞する。その内部には転用甕（身は御殿形の蓋、蓋は甕形の身を半分にしたもの）を安置し、周囲の埋土には人骨が混じっている。イケ状遺構の閉塞石前部には同じく石灰岩を用いた、香炉、サンミデーが設けられる。その他、正面奥壁には数か所の窪みがみられ、中心部に鉄片が埋まる状況から爆撃の痕跡とみられ、天井もそれにより崩落した可能性が推察された。
61	6a 変形	4.26	北 N3.58° E	1.69	2.12	2.01	×	墓庭・墓口が埋没した大規模な墓。墓庭の埋土からは4個体分の蔵骨器片が出土。墓室の出土遺物はなかった。整理後廃棄されたものとみられる。
62	不明	2.62	北北東 N13.7° E	1.09	0.56	1.40	×	墓庭・墓口が埋没した墓。埋土中からは数点の蔵骨器片が出土したのみ。墓室は狭く、墓口にはサンミデーが設けられる。
63	3a	3.62	北東 N42.68° E	2.19	2.25	1.61	×	墓全体が盛土で埋まる。天井崩落の危険性から、途中で調査を断念した。
64	3a	3.67	北北西 N30.84° W	1.89	2.37	1.55	×	天井部は1/3程度残存。墓室内は盛土で埋まる。墓庭の状況は不明瞭であるが、埋土からは8個体分の蔵骨器片が出土した。
66	1c	1.25	北北西 N31.88° W	0.73	0.61	2.05	○	墓口が埋没した小規模な墓。墓室には横倒しになった蔵骨器身（ボージャー形）と奥壁際から蓋が出土している。
67	1c	1.34	北 N6.2° E	1.44	1.23	1.09	×	天井が崩落した小規模な埋没墓。遺物の出土はなかった。奥壁には直径20～30㎝程度の穴がみられたが、根撹乱の可能性が高い。

第３表　前田真知堂Ａ丘陵の出土遺物一覧表

種類		墓	32号	33号	34号	35号	36号	37号	38号	39号	42号	48号	49号	51号	54号	55号	56号	57号		58号	59号	60号	61号	62号	63号	64号		65号	66号	表採	合計
			墓室	墓室	墓室	墓室	墓室	墓庭	墓庭	墓庭	墓室	墓室	墓室	墓室	墓室	墓室	墓室	墓室	墓庭	墓室	墓庭	墓室	墓庭	墓庭	墓庭	墓室	墓庭	墓室	墓室		
蔵骨器	ボージャー形	蓋																		1			1						1		3
		身																					1								1
		破片					1	1				1								3	3		2								11
	マンガン釉甕形	蓋		1		1		1	3				1	6		1		1		15			1		2						33
		身		1			1	1	9				1	5		1	1	1		17			1		3		2				44
		破片				1	1	14	25	31	1	51	3	5	1		1	2		42	6		4	1	34	1	33	1	4		262
	マンガン釉庇付甕形	蓋																		1											1
		身																													0
		破片																							1						1
	御殿形（陶製）	蓋							1																						1
		身							1																						1
		破片						1		1										1	1			1							5
	転用	蓋						1						2								1									4
		身						1						2								1	1								5
	その他	蓋												3						2											5
		身												4						3											7
		破片												1																	1
陶磁器	瓶	完形	1			1				1				1					1		2						2			4	13
		破片				1				1						1														1	4
	皿	完形												1	1																2
		破片				1								1																	2
	小杯	完形																									1				1
		破片								1																					1
	鉢	完形																												1	1
		破片												1																	1
	碗	完形								1		1		7						1										1	11
		破片				1	1		1			7				1				3	1				2		2		1		20
	袋物	破片												2										1					1	1	5
	不明	破片																									2				2
	アンダガーミ	完形								1																					1
		破片								1																					1
	アンダガーミ蓋													1																	1
	壷													1																	1
	水注・急須																										1				1
	湯のみ																					1									1
	合子									2																					2
	香炉									1																					1
かんざし													1																		1
銭貨					2							1																			3
指輪																						1									1
歯ブラシ												1																			1
不明				1								4															3				8
合計			1	3	2	6	4	20	40	41	1	66	6	43	2	4	2	4	1	89	13	4	11	3	42	1	46	1	7	8	471

（２）蔵骨器以外の陶磁器

蔵骨器以外では、陶磁器の小物類が多く出土している。これらの多くは、一次葬時の副葬品や墓が機能していた際に墓前などに供献されたものであると考えられる。その種類と数量は第３表に記した。そのほとんどが沖縄産であり、瓶、瓶子、碗、皿、小杯、壷などがみられ、主体は瓶と碗であった。多くは破片での出土だが、瓶や瓶子、小杯などは完形の資料が割合多い。技法や彩色から、これらは近世～近代に流通したものと考えられる。

（３）金属製品

金属製品は、銭貨３点、指輪１点が出土した。銭貨は寛永通宝２点と五銭アルミ貨（昭和 16 年銘）１点で、いずれも墓室埋土中から出土している。指輪は銅製だが、破損が著しく詳細は不明である。60 号墓の転用蔵骨器内から人骨とともに出土したものである。

（４）その他の製品

その他の副葬品として、49 号墓の蔵骨器内から櫛が出土している。プラスチック製であることから近現代のものであると判断し、写真掲載のみとした。

（５）戦争遺物

本調査区では、多くの戦争関連遺物が出土しているが、その内容は不発弾がほとんどであった。砲弾は 75、105、155mm が各１点、81mm 迫撃砲弾１点、50kg 爆弾１点が発見されたほか、手榴弾や薬莢も大量に出土した。これら不発弾は、全て自衛隊による現地処理等によって回収された。

上記以外の戦争遺物としては、軍靴の破片と考えられるものや支給品と思われる歯ブラシがあった。戦争関連遺物と考えられる鉄くずも多く出土したが不明であった。

以上が今回の発掘調査の出土遺物の概要である。第４章各節では、遺構と遺物が確認された墓について、実測図などを図示しつつその詳細について報告を行う。また前述したように、本調査地区は、平成 15 年度に範囲確認調査を行っており、浦添市教育委員会刊行の『市内遺跡発掘調査報告書（２）』（2010 年）の第７図等を参照されたい。

第４節　各墓の調査成果

真知堂Ａ丘陵の調査では、合計 31 基の遺構（墓）が確認され、墓に関係する蔵骨器や副葬品等の遺物も得られている。これらの遺構と遺物の概要については、第３章の第２表と第３表に既に示したとおりである。本節では、これらの墓の中から遺構と遺物が確認できた８基（33・49・51・55・56・58・60・66 号墓）の報告を行う。なお、遺物の取り上げ番号については遺構図中に番号を図示しており、本章で報告を行う以外の墓については、第４図と第２～３表をもって報告とする。

（1）33 号墓

1）遺構（第 5 図）

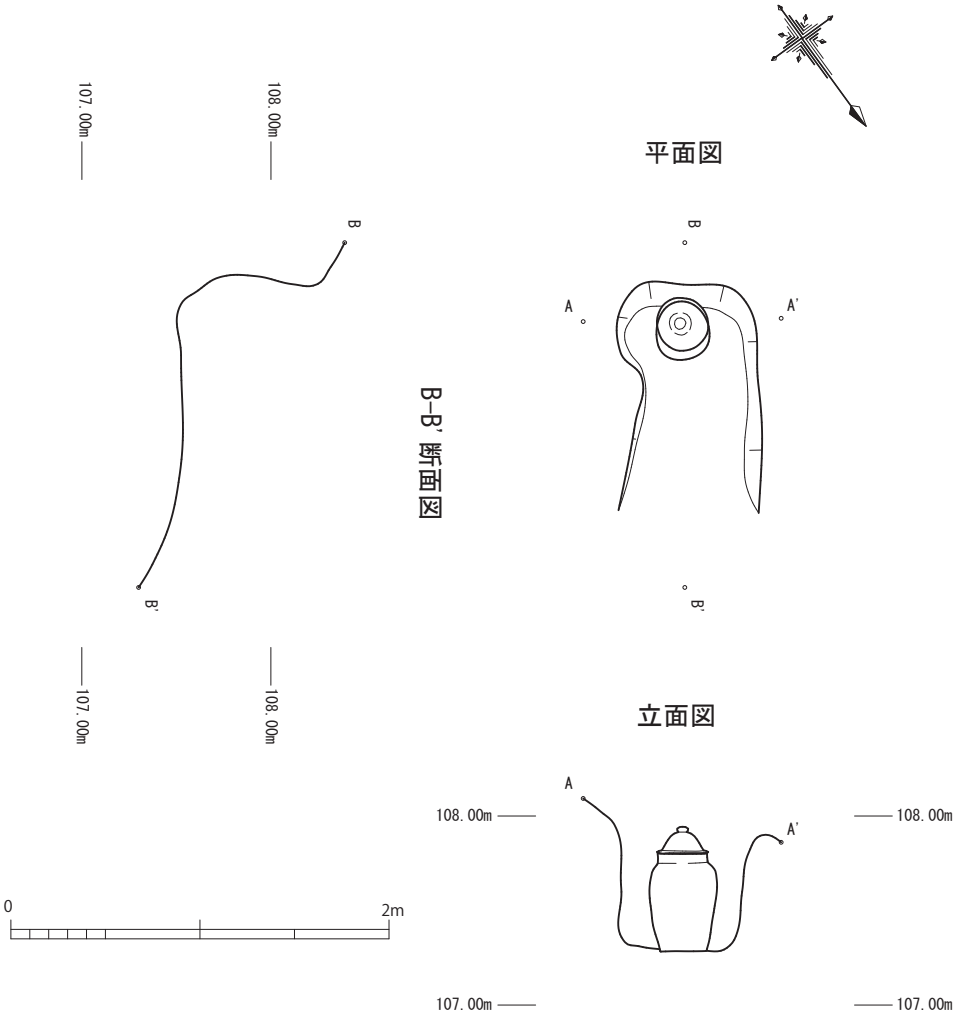
33 号墓は、丘陵北東側頂上付近の北斜面に構築する横穴式の掘込墓で、調査区内では最も標高の高い場所に位置する（第 4 図）。墓の立地する標高は 107 ～ 108 mである。周辺はやや傾斜のある斜面で西側に尾根が延びており、その斜面の途中から南側に向けて墓室が掘り込まれている。墓は、墓室天井が崩落して埋没した状態で見つかり、埋土を除去したところ墓室から蔵骨器が 1 点検出された。墓室の平面形は縦長の略方形で、墓口から奥へ直線的に 1.3m 掘り込んでおり、棚は造られていない。墓室平面形の類型は 1 類 c に分類される。墓室の幅は 0.64m で、天井は崩落により残存しないため高さは不明である。墓口の方位は、北東（N36° E）を向く。

蔵骨器の安置状況についてみると、屋門の向きは主軸よりやや東側を向いていたが、直立した状態で出土したことから原位置を保持していると考えられた。墓室の規模や蔵骨器の数から個人墓と考えられる。造墓年代は不明であるが、蔵骨器の蓋裏で「光諸二■・・・」（光諸年間＝ 1875 ～ 1908 年）の銘書が確認されている。ただし、蔵骨器の身については、マンガン釉甕形の安里編年のⅡ式（1770 ～ 1810 年頃）に分類されるため、銘書年代と蔵骨器の製作年代で矛盾する状況となっている。後世の追葬による蓋の交換であろうか、身の再利用であったのか判然としない。

2）遺物（第 6 図）

第 6 図 1 は、マンガン釉甕形の蓋で、口径 29.7cm、内径 22.7cm、器高 15.35cm、体部高 12.1cm を測る。饅頭形の有孔つまみをもち、つまみ台はヘラ削りで成形され、つまみ台外縁部と体部上方に 2 条の圏線を廻らせる。鍔の端部は丸く、かえりの成形はやや雑で 4mm を測る。内外面に付着物が散見され、外体部の回転ヘラ削りの際に付着物を引きずる箇所がみられる。マンガン釉を外面に薄く施し、特に鍔部で顕著となる。身（第 6 図 2）は、口径 27.1cm、胴径 34.2cm、器高 52.1cm、底面 21.2cm を測る。口縁部がほぼ直口し、口唇部は平坦となる。文様は、帯 1 以外は全て突帯で、帯 2 と帯 3 の間に叉状工具によるくずれた波文が廻る。屋門は、貼り付けの瓦屋形で、頂部に玉飾りは無いが、柱には円形花文の玉飾りが貼り付けられる。屋門の左右には同型の型づくりの蓮華文を貼り付けし、茎は叉状工具で線刻される。外面は叩き成形をして箆で横削りされ、マンガン釉が全面に施釉されるが口唇部は露胎する。

図版 1　着手前（左）と蔵骨器検出状況（右）



第５図　33 号墓遺構図

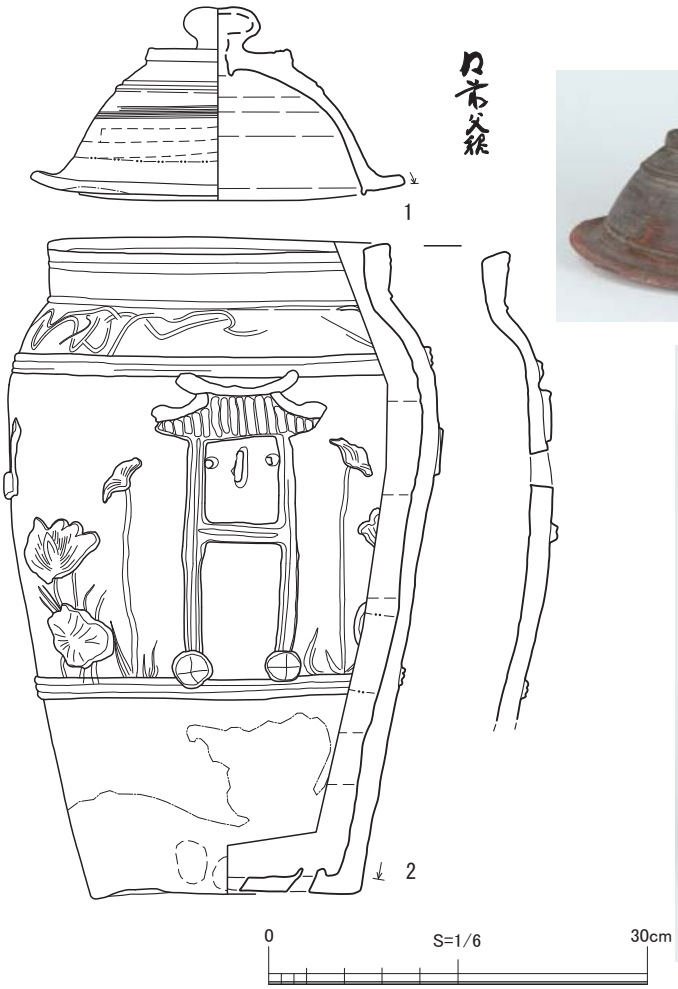
図版２　丘陵北東側から撮影

３）銘書と人骨

銘書では、女性（妻）と男性（父親）が確認できる。人骨の被葬者情報は、性別不明の成人１体と推定されている。

〈蓋〉①辺野喜…/…/…/ 洗骨②…喜筑登之親雲上…③…綱同人妻④…■綱妻…⑤…巳⑥光緒二■〔拾ヵ〕…

〈身〉同前父親



第６図　33 号墓出土蔵骨器

図版３　33 号墓出土蔵骨器

（２）49 号墓

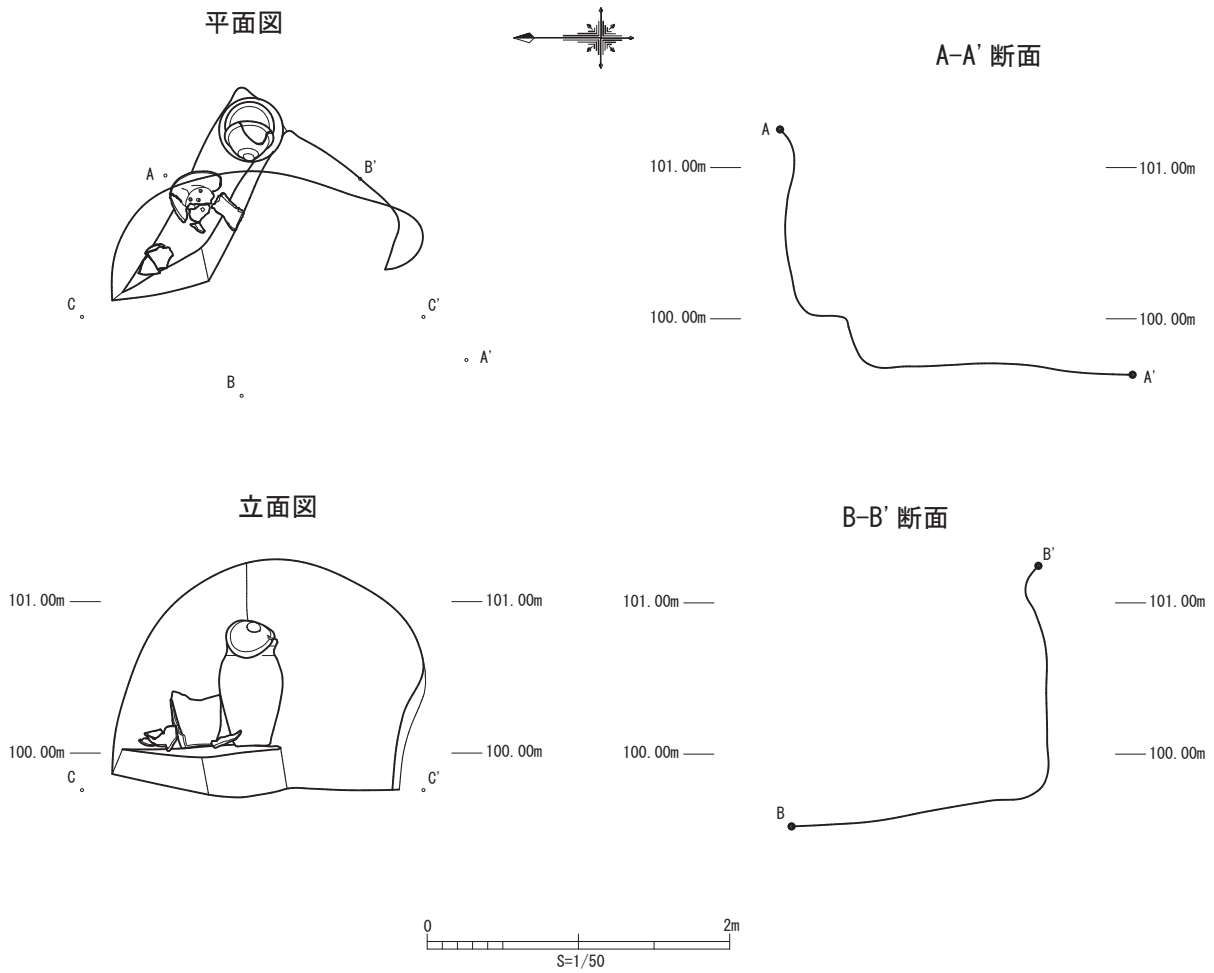
１）遺構（第７図）

49 号墓は、丘陵南面のほぼ中央付近に位置する横穴式の掘込墓で、標高約 100 mに立地している（第４図）。丘陵斜面部の機械掘削中に蔵骨器と遺構の壁面の一部が検出されたため精査したところ、遺構の床面と奥壁、棚の一部であることが判明した。墓室の天井や壁面、入り口側が崩落しており遺構の残存状況は良くないが、残存部から類推される墓室類型は４類ｂと推測される。墓口方位は南

南西（N148° W）側を向くものと思われる。棚上で２点の蔵骨器が直立した状態で検出され、１点はほぼ完形品であった。蔵骨器の種類はマンガン釉甕形で、２点とも原位置を保持しているものと考えられた。蔵骨器を複数個安置する状況から家族墓と考えられる。墓の造営年代は不明であるが、蔵骨器の蓋裏の「昭和七年」（昭和７年＝ 1932 年）や「昭和十四年」（昭和 14 年＝ 1939 年）の洗骨を記す銘書から、20 世紀前半には機能していたことが窺え、沖縄戦で埋没した可能性が高いと推測された。

２）遺物（第８図）

蔵骨器は、マンガン釉甕形で完形１点のほか、身の底部と蓋の縁部の破片で２個体分得られた。蓋（第８図３）は、口径 32.4cm、内径 25.6cm、器高 16.1cm、体部高 11.6cm を測り、扁平形の有孔つまみをもち、つまみ台はヘラ削りで２段に成形する。体部には６～８条の沈線を廻らせる。鍔の端部は



第７図　49 号墓遺構図

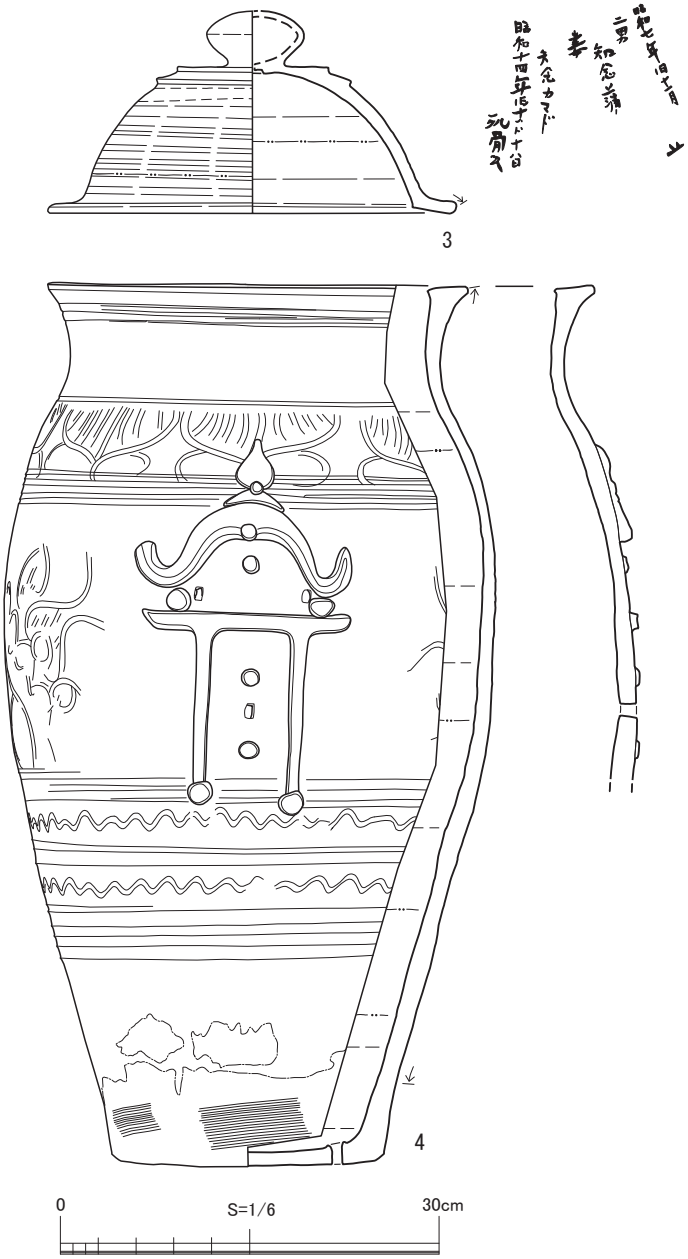
図版４　49 号墓遺構　上：墓の位置　左下：蔵骨器検出後　右下：完掘後

丸く、かえりは無い。外体部では回転ヘラ削りの際に胎土中の微粒子を引きずる箇所が散見される。釉は外面に薄く施す。

身（第８図４）は、口径 33.3cm、胴径 39.0cm、器高 69.9cm、底径 21.6cm を測り、外反口縁で口唇部は平坦に成形される。肩部文様帯は沈線で葉文を描く。屋門は唐破風形の貼り付けで、玉飾りも貼り付けられる。横帯は全て沈線で、屋門左右の胴部文様も沈線で蓮華文が描かれている。釉は外面に薄く施す。安里編年のⅥ式（1930 年代以降）の資料である。このほか、蔵骨器内から人骨とともにプラスチック製の簪（長さ 10.1cm）が得られている（図版６－５）。

３）銘書と人骨

第８図３の蔵骨器の銘書と人骨についてみると、銘書では男性（二男知念蒲■）と女性（妻知念



第 8 図　49 号墓出土蔵骨器

図版 5　49 号墓出土蔵骨器と銘書

図版 6　箸

カマド）が確認された。人骨の被葬者情報では老年男性 1 体と性別不明成人 1 体と推定されており、銘書と被葬者情報で概ね一致することが確認された。また、人骨については未成人 1 体を含む 5 体分が確認され、既述した家族墓を裏付ける結果が得られている。

〈蓋〉昭和七年旧十一月廿七日 / 洗骨 / 二男 / 知念蒲■ / 妻 / 知念カマド / 昭和十四年旧十月十八日 / 洗骨ス

（3）51 号墓

1）遺構（第 9 図）

51 号墓は、丘陵北面のほぼ東側に位置する横穴式の掘込墓で、標高 102.5 ～ 103 mに立地している（第 4 図）。当墓の直上、標高 103.5 ～ 104 mには、方形の石灰岩製の石組遺構（39 号墓）が造られていた。石組遺構は幅 1.25 m、奥行き 2.15 mで内側に面を持ち、表面の所々にモルタルが確認された。外側には拳大石で石灰岩の裏込めが施され、底面には切石とニービ石が使用されている。石組の奥には、墓室と推定される幅約 2 m、奥行き 0.9 m、高さ 1.2 mの空間があるが、蔵骨器は確認されていない。石組遺構は、記録後に取り外して地山まで掘り下げた。その結果、墓室と推定される箇所が、51 号墓の墓室奥壁の上部分であることが判明した。51 号墓は沖縄戦で埋没し、戦後、同じ場所に 39 号墓を造墓したものと推測された。ところで、39 号墓の調査着手前、該墓の前面にはコンクリートの家形墓が存在していた。年代は特定できないが、39 号墓は戦後早い段階で補修され、後になってコンクリート家形墓を新造し、移転したものと考えられた。以下で 51 号墓について詳述する。

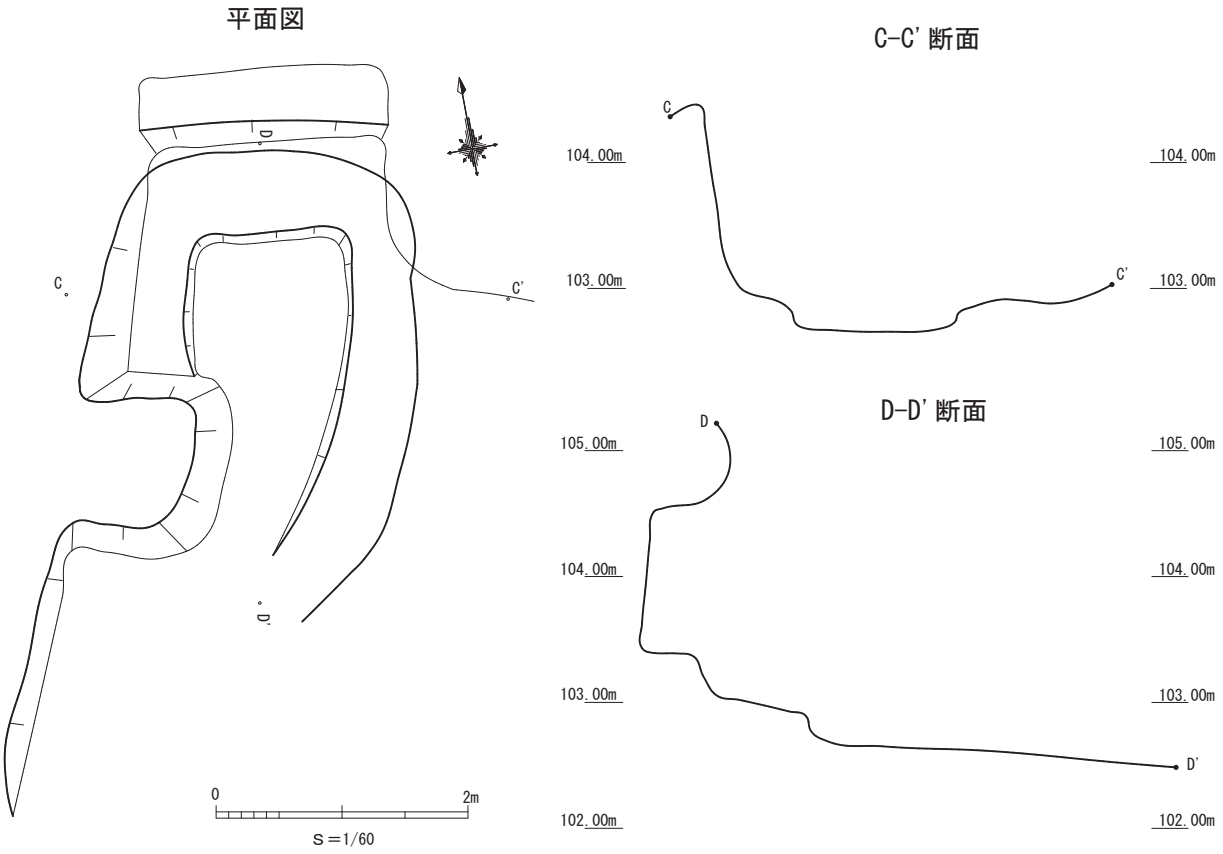
墓口の寸法は、幅約 0.6 mで高さは不明、羨道部の長さは 1.3 mを測り、墓口の方位は南（N170° W）を向く。墓室の寸法は、幅 1.9 m、奥行き 2.37 m、高さ 2.12 mで、面積は 4.32㎡を測る。墓室類型は 6 類 a（コ字状＋階段状 1 段）に分類される。しかし、奥と手前で棚の奥行きを比べると、前者の奥行きが 37cm で、後者は 70cm と約 2 倍の大きさとなる状況から、2 番棚の削平が推測されるため、本来の棚形状は 5 類 a（コ字状＋階段状 2 段）の可能性が高いと考えられた。天井は奥壁際の一部のみ残存する。墓室及び墓前埋土からは、蔵骨器の破片（10 個体余）や人骨片が出土し、また、それ以外にも手榴弾や銃弾などの戦争遺物も出土したため、戦時下の墓利用が確認された。

墓の造営年代は不明であるが、蔵骨器の銘書では「光諸八年」（光諸 8 年＝ 1882 年）や「昭和十七年」（昭和 17 年＝ 1942 年）が確認されることから、沖縄戦時に埋没したものと考えられる。

2）遺物

蔵骨器はすべて破片出土で、接合を試みたが完形に至らないため、専用蔵骨器の図版等は省略した。蔵骨器の種別及び個体数は、身がマンガン釉甕形 8 個体分のほか、転用蔵骨器 2 点、現代甕形 4 点で、

図版 7　51 号墓遺構　左：墓の位置　右上：39 号墓　右下：51 号墓の完掘状況

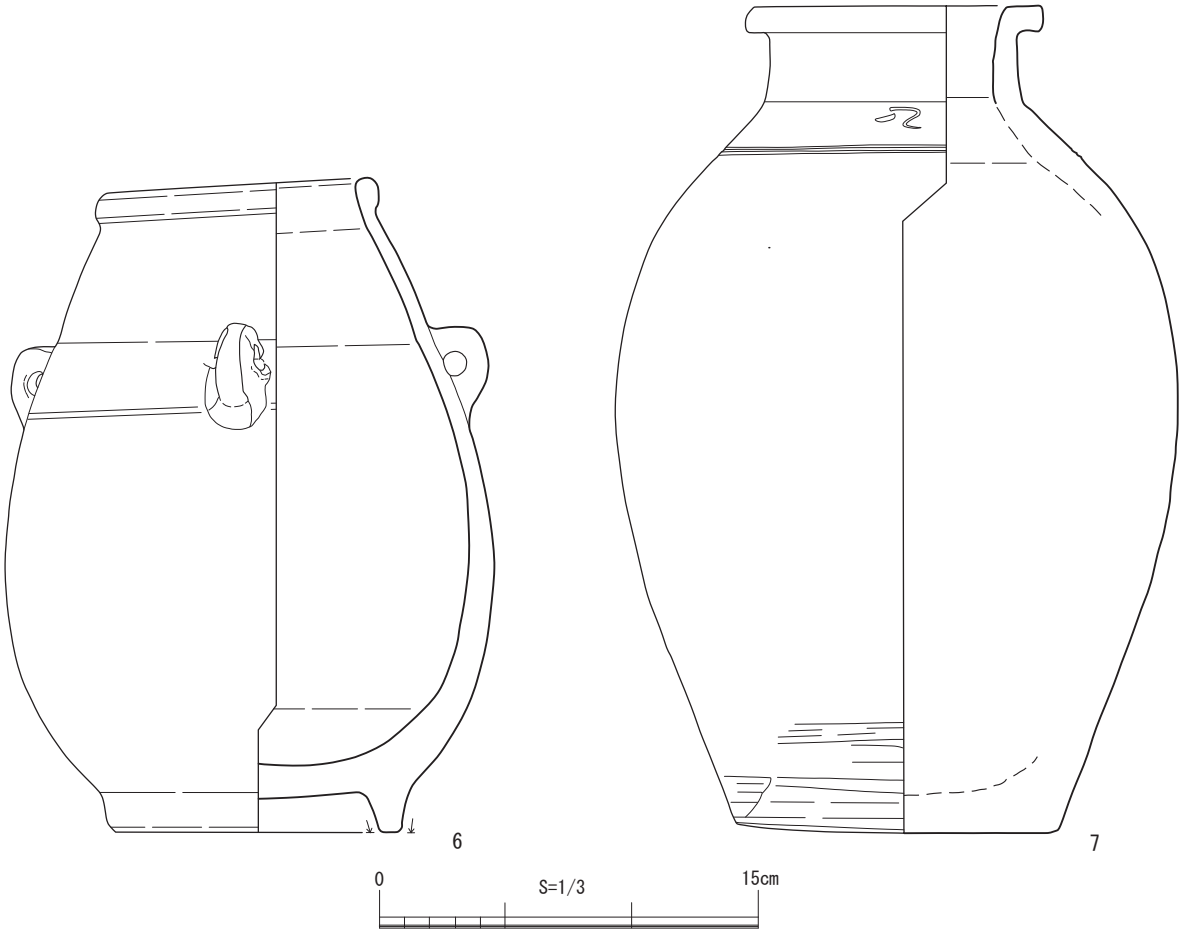


第９図　51 号墓遺構図

蓋がマンガン釉甕形６点、転用蔵骨器２点、現代甕形３点であった。マンガン釉甕形の身は、安里編年のⅣ式（1850 ～ 1890 年代）が３点、Ⅴ式（1900 ～ 1920 年代）が４点、Ⅵ式（1930 年代以降）が１点であった。転用蔵骨器の身（第 10 図 6･7）の器種は２点とも壺であった。第 10 図６は、方言で「アンダガーミ」と称される褐色の釉が施された四耳壺である。各部の寸法は口径 11.2cm、器高 25.8cm、底径 11.8cm を測る。第 10 図７は、口径 11.8cm、器高 32.8cm、底径 12.8cm を測る沖縄産無釉陶器の壺である。頚部と肩部の境に１条、肩部に２条の沈圏線が施され、圏線間には判（窯印）が彫られている。これらは日常品の雑器であり、戦時中に持ち込まれた可能性も否めないが、後述する転用蓋とセット関係になる可能性が考えられたため転用蔵骨器として扱った。

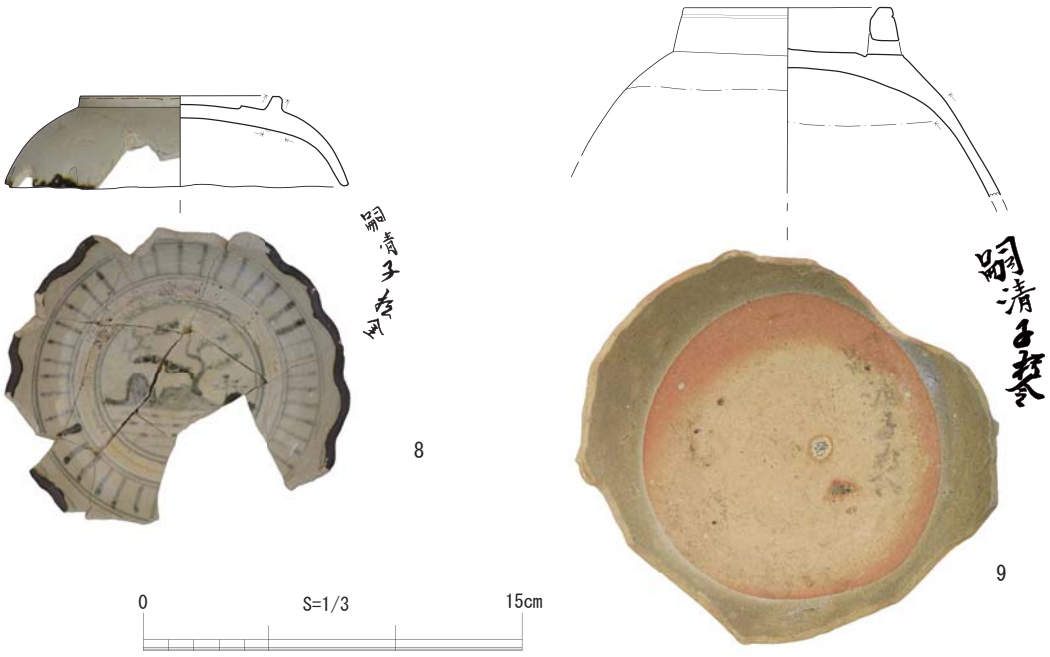
転用蔵骨器の蓋（第 11 図８・９）は皿と鉢を使用しており、内面に銘書が墨書されている。銘書は２点とも「嗣清子松金」と記されている。第 11 図８は、沖縄産施釉陶器の輪花皿で、口径 13.7cm、器高 3.8cm、底径 8.2cm を測り、内面に染付で山水文や圏線を描く。文様は２本を１組とする三重の圏線内の中央に山水文が描かれ、その外周を蛇の目釉剥ぎする。蛇の目の外周の二重圏線内には縦位の線文を 7mm 幅で廻らす。口唇には鉄釉が施され、畳付は露胎となる。胎土は緻密で混入物は見られず、質感は磁器に近く、内外面ともに細かい貫入が認められる。銘書は蛇の目釉剥ぎで露胎となった部分に墨書される。第 11 図９は、沖縄産施釉陶器の灰釉鉢で口縁部から胴上部を欠く資料である。底径は 8.4cm を測る。高台に紐通しの穿孔が３箇所あり、孔径は 7mm を測る。浸し掛けで、内面胴部途中から外面胴下半部まで施釉する。

墓室からは、上記以外にも碗、皿、花生け、蓋が出土している。第 12 図 10、11 は、型紙摺絵の



第 10 図　51 号墓出土転用蔵骨器（1）

図版 8　51 号墓出土転用蔵骨器



第 11 図　51 号墓出土転用蔵骨器（2）

技法で絵付けされた碗である。沖縄では一般的に「スンカンマカイ」と称され、愛媛県伊予郡砥部町で主に大正時代に生産されたとされる磁器である。10 は、口径 13.7cm、器高 6.7cm、底径 4.6cm を測る。外面の文様は宮城（2002）のスンカンマカイ分類の窓絵花文に分類される。見込みに圏線と松竹梅の三友文があり、重ね焼き時の目痕が 5 箇所残る。三友文は中央から外に松、梅、竹の順の配置となっている。11 は、口径 13.8cm、器高 5.8cm、底径 5.0cm を測る。外面文様は窓絵鶴文で、見込みの文様構成は 10 と同じだが、三友文の型紙が異なる。文様パターンは松 3・竹 2・梅 2 を小円内に配している。この二つのスンカンマカイを比べてみると、吉祥文の文様構成が異なる点や点描の緻密さ、丁寧さ等で違いがみられることから、型紙の彫師の違い以外にも年代差が考えられた。12 は、銅版転写の技法で絵付けされた皿で瀬戸美濃産と想定される資料である。成形は型で、寸法は口径 11.3cm、器高 2.2cm、底径 6.6cm を測る。内面の文様は中央の二重圏線内に桜、圏外に桜と吉祥文？を廻らす。13 は、沖縄産施釉陶器の花生けである。寸法は口径 6.4cm、器高 13.5cm、底径 6.1cm を測る。頚部の耳の片側と口縁部を半分ほど欠損し、もう片側の耳には 1cm ほどの溶着物が認められる。胎土は緻密で細かな白色粒が点在する。白化粧後に高台をつまんで淡い青緑色の釉を浸し掛けする。14 は、アンダガーミの蓋である。縁部径 11.5cm、器高 3.9cm、つまみ径 3.0cm、かえり径 7.2cm を測る。外面は黒色釉を施し、中央を蛇の目釉剥ぎして、同箇所を白化粧する。内面は露胎で水挽き調整が残る。

3）銘書と人骨

銘書では、男性 2 人（三男嗣清、嗣和）と女性 1 人（三男嗣清妻）、不明 2 人（嗣清子松金、氏名欠損）が確認できる。一方、人骨の被葬者情報は年齢性別不明 3 体と推定されている。出土した 10 個体余の蔵骨器数と被葬者数は一致しない状況となるが、墓が同じ場所で二度に渡り補修や新造していることから、その都度人骨が回収された可能性が考えられた。

〈蓋〉光緒八年壬午九月十四日洗骨三男嗣清宜野座筑登之親雲上同十一年■〔一ヵ〕月十六日同人妻洗骨

①昭■〔和ヵ〕〈欠損〉/ 五〈欠損〉/ 宜■〔野ヵ〕〈欠損〉②〈欠損〉旧午〈欠損〉/〈欠損〉■〔洗ヵ〕〈欠損〉

昭和十七年一月十日■〈欠損〉故陸■〔軍ヵ〕〈欠損〉■〔座ヵ〕嗣和 / 中支湖南省■〈欠損〉■〔戦ヵ〕斗ニ於テ戦死

〈欠損〉辛卯■〈欠損〉■真清貴〔ママ〕洗 / ■〔蒲ヵ〕戸 /〈欠損〉■〔洗ヵ〕〈欠損〉

嗣清子松金

第 12 図　51 号墓墓室出土遺物

（4）55 号墓

1）遺構（第 13 図）

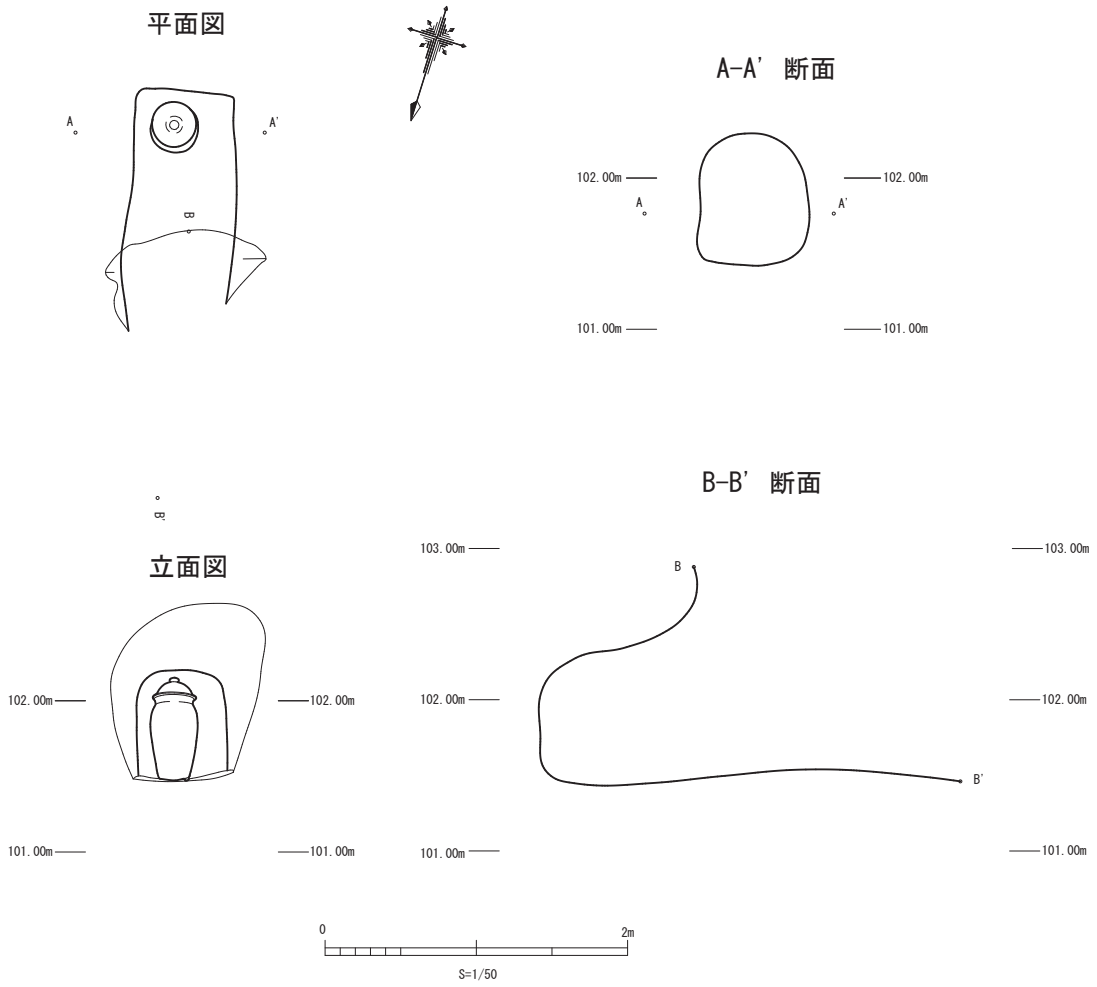
55 号墓は、丘陵北面下段の東側に位置する横穴式の掘込墓である（第 4 図）。当墓の上段には 53 号墓が所在し、53 号墓は北側上段における最も西側に位置する墓である。また、周辺には 54 号から 57 号墓まで横並びで墓が所在している。これらの墓が立地する標高は 101 ～ 102m である。当墓は墓口が埋没した墓で、堆積土を除去したところ閉塞石は確認できず、墓室から蔵骨器が 1 点確認された。墓口方位は北北西（N18° W）で、蔵骨器の屋門の向きも一致している。しかし、蔵骨器内に骨がないことから墓の移転後に墓室に戻されたものと判断された。墓室の寸法は奥行き 1.58m、幅 0.66m で、天井高 1.16 mを測り、墓室類型は 1 類 c に分類される。棺箱を安置する際に造られ、改葬後も継続使用された個人墓と考えられる。

墓の造営年代は不明であるが、蔵骨器はマンガン釉甕形で安里編年のⅣ式（1850 ～ 1890 年代）に位置づけられる。また､蔵骨器の銘書で「光諸二十年」（光諸 20 年＝ 1894 年）が確認されており、19 世紀後半には墓として機能していたと考えられる。沖縄戦の際には小規模な墓であることと北側に立地する状況から、攪乱されることなく戦後も使用され、移転したものと推察される。

2）遺物（第 14 図～第 15 図）

遺物は、蔵骨器と瓶、碗が出土している。第 14 図 15 はマンガン釉甕形の蓋である。寸法は、口

図版 9　55 号墓遺構　　右上：位置　左上：発見時　右下：蔵骨器出土状況　右下：完掘状況



第 13 図　55 号墓遺構図

径 30.0cm、内径 24.4cm、器高 15.0cm、体部高 10.9cm を測る。宝珠形の有孔つまみで、二本の溝で簡略化したつまみ台を持つ。鍔は反り端部を丸く成形し、かえりは認められない。成形については、内面をヘラ削り、外面はつまみ台をヘラ削り後ナデ調整、体部を回転ヘラ削り、縁部から端部をナデ調整する。釉はマンガン釉を外面に薄く施す。内面体部下半に墨書の銘書が廻る。

第 14 図 16 はマンガン釉甕形の身で、口径 27.2cm、胴径 31.7cm、器高 54.0cm、底径 20.3cm を測り、外反口縁部で口唇部は平坦に成形される。屋門はアーチ形で、横帯 3 は突帯だが屋門左右の蓮華文と横帯 4 は沈線で表現される。安里編年の第Ⅳ～Ⅴ期（1850 ～ 1890 年代、1900 ～ 1920 年代）の資料である。

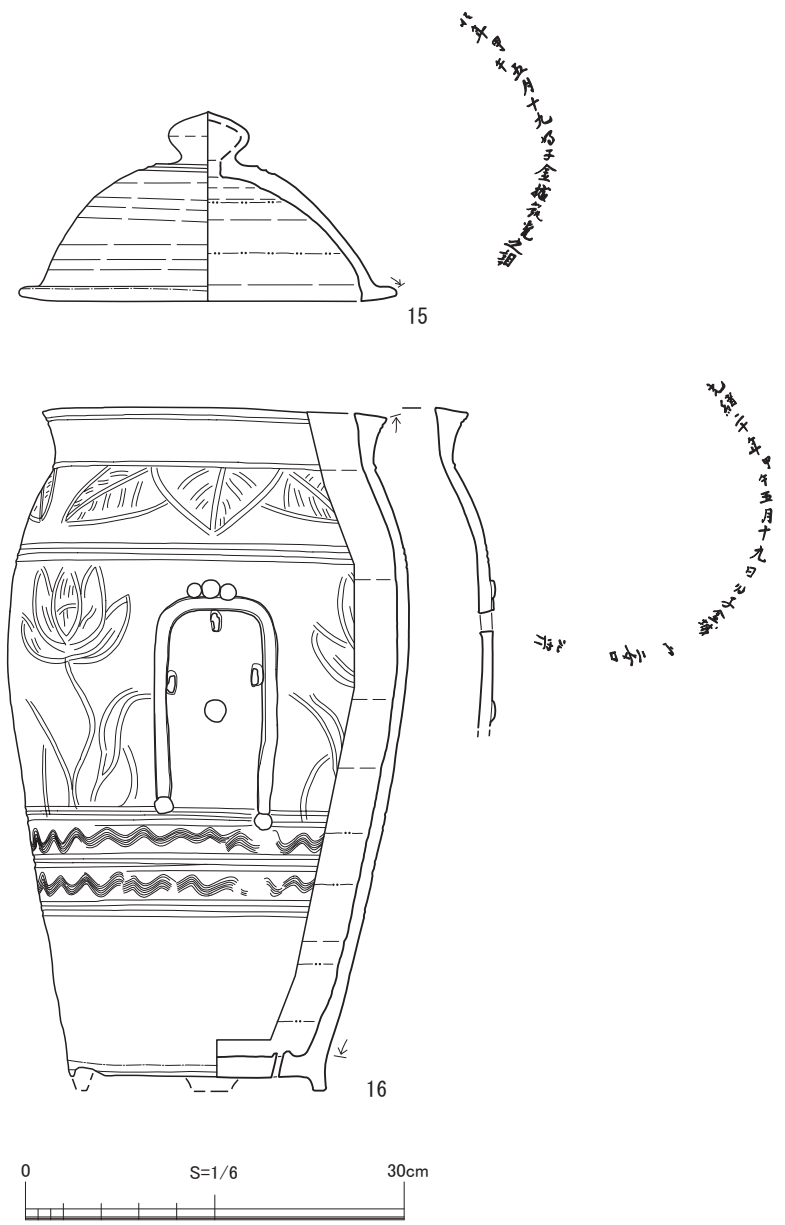
第 15 図 17 は口縁部と高台を欠損する瓶子で、計測可能な部位は胴部径 6.9cm のみである。頚下部と胴中央部には飛び鉋の技法で斜位に細かな削りを廻らす。全体を白化粧後、飛び鉋を施した部分に呉須と飴釉を施し、最後に全体を透明釉で仕上げる。粗密な貫入が認められる。第 15 図 18 は碗の口縁資料である。口縁部はわずかに外反し、推定口径 13.0cm を測る。白化粧後透明釉を施し、内外面に粗い貫入が認められる。

３）銘書

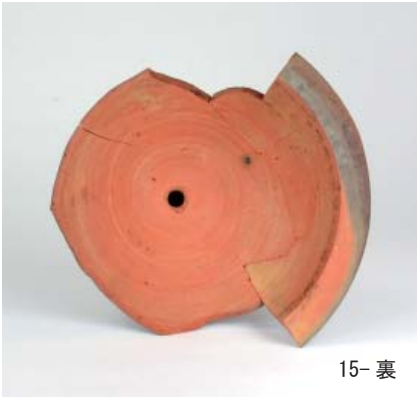
銘書は、蔵骨器の蓋裏と身の口唇部にあり、ほぼ同じ内容が墨書されていた。

〈蓋〉〈大清光緒ニ〉拾年甲午五月十九日嫡子金城筑登之親〔雲上カ〕

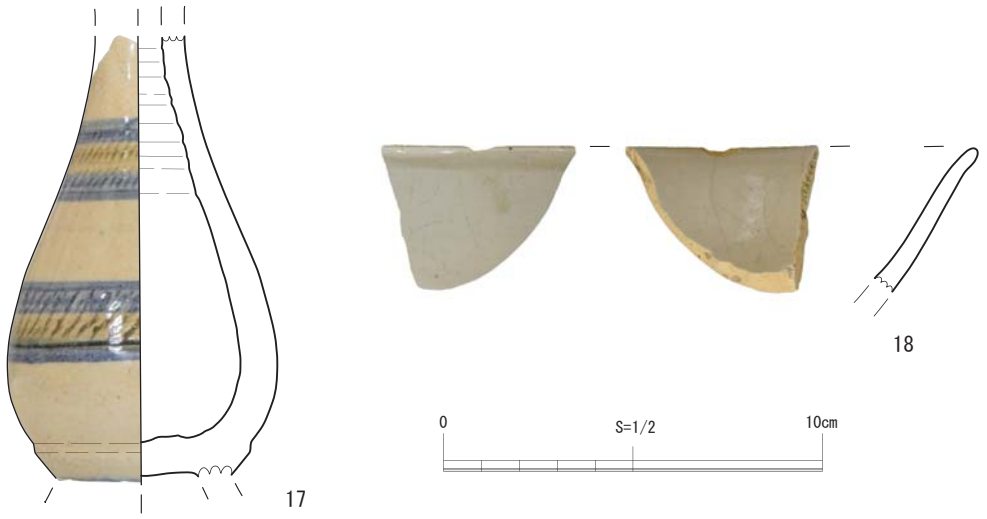
〈身〉光諸二十年甲午五月十九日嫡子金城親雲上二女■■洗骨



第 14 図　55 号墓出土蔵骨器



図版 10　55 号墓出土蔵骨器



第 15 図　55 号墓出土遺物

（5）56 号墓

1）遺構（第 16 図）

56 号墓は、丘陵北面下段の東側に位置する横穴式の掘込墓である（第 4 図）。周辺は標高 101.5 ～ 102.5m で、西側に向かって緩やかに傾斜している。該墓の東側 2 mの位置に 55 号墓、西側 1 m の位置に 57 号墓が隣接して所在している。墓室天井と墓口が崩落して埋没した墓で、墓室内の埋土を除去すると破損した状態の蔵骨器が 1 点検出された。墓口の閉塞方法は不明である。残存部から推察される墓室類型は棚が無くやや歪な縦長の方形を呈することから 1 類 c と判断される。墓室の寸法は奥行き 0.98m、幅 0.54m、天井崩落により高さは不明で、残存部は 0.6 mを測る。墓口の方位は北北西（N24° W）を向く。蔵骨器は胴下半部のみが残存するものの直立状態で検出されたことから原位置を保持しているものと考えられた。墓の造営年代は不明である。墓室内の蔵骨器は 1 点のみであり、個人用の墓と考えられる。

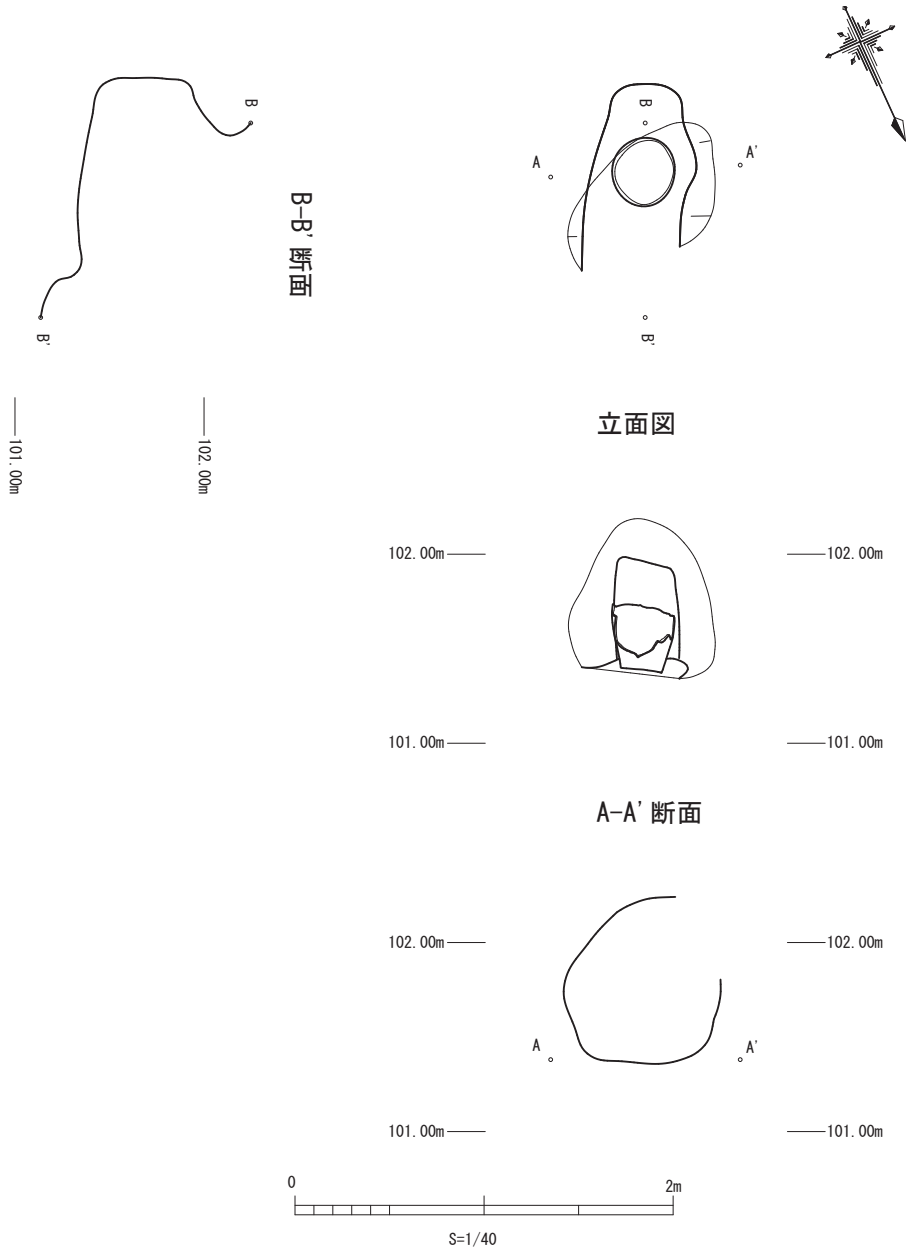
2）遺物

蔵骨器の蓋と身が各 1 点出土している。種別はマンガン釉甕形で、接合を試みたが完形に至らないため図版等は省略した。以下で詳細を記述する。

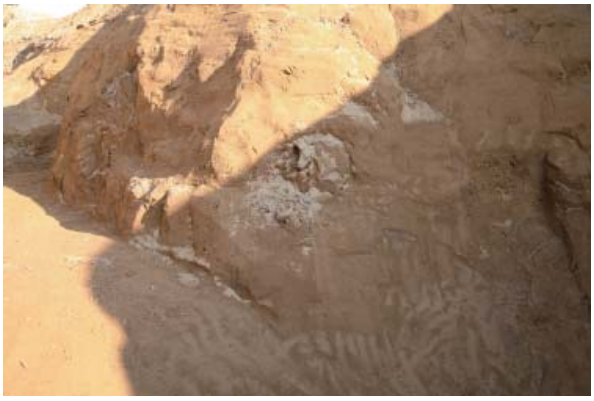
蓋は、つまみ台から鍔縁端部まで残存しており、全体の半分程が残っている。推計部位は外径 29.0cm、内径 22.8cm、体部高 10.8cm を測る。鍔の端部は丸みを帯び、縁部は平坦となる。かえりの突起は 1 ～ 3mm を測る。成形については、内面をロクロ成形、体部下半を回転ナデ、外面はつまみ台をヘラ削り後ナデ調整、体部を回転ヘラ削り、縁部から端部をナデ調整する。釉は、マンガン釉が外面に薄く施される。内面体部下半には、墨書の銘書が廻る。

身は、胴部から底部が残存し、口縁部や屋門の一部が破片で得られている。残存部と同一個体破片の特徴についてみると、屋門の形状は不明だが柱の貼付文下部に玉飾があり、横帯 3 が突帯、横帯 4 が沈線、胴部左右に線彫りの蓮華文が確認できた。これらの情報から安里分類のⅣ式（1850 ～ 1890 年代）に位置づけられる蔵骨器と考えられる。また、計測可能な部位についてみると、底径 21.6cm、口径 28.0cm、胴部残存径 34.6cm、胴～底部の器高 36.7cm を測る。底部には、孔が 7 個

図版 11　56 号墓位置



第 16 図　56 号墓遺構図



図版 12　56 号墓遺構　　左：発見時、右：蔵骨器出土状況

あり、中心孔のまわりに均等に 6 箇所の孔を配する。孔は外側から穿たれており、内底には押し出された粘土がそのままの状態で残っている。残存部の観察によると、孔の形状と大きさは、平面形が蒲鉾状で 1.3 × 0.8cm を測る。釉は、マンガン釉を全体に施すが、胴部で厚薄が目立ち、胴下半部から底部にかけては薄釉または無釉箇所もみられる。蔵骨器の製作年代については、蓋の銘書からは年代に関する情報は得られなかったが、身の型式から 19 世紀中頃から後半の年代観が与えられる。

3）銘書と人骨

銘書で「女子」が確認でき、人骨の被葬者情報も成年女性 1 体と推定されている。

〈蓋〉・・・■■■卒■■■■■■女子■■■・・・

（6）58 号墓

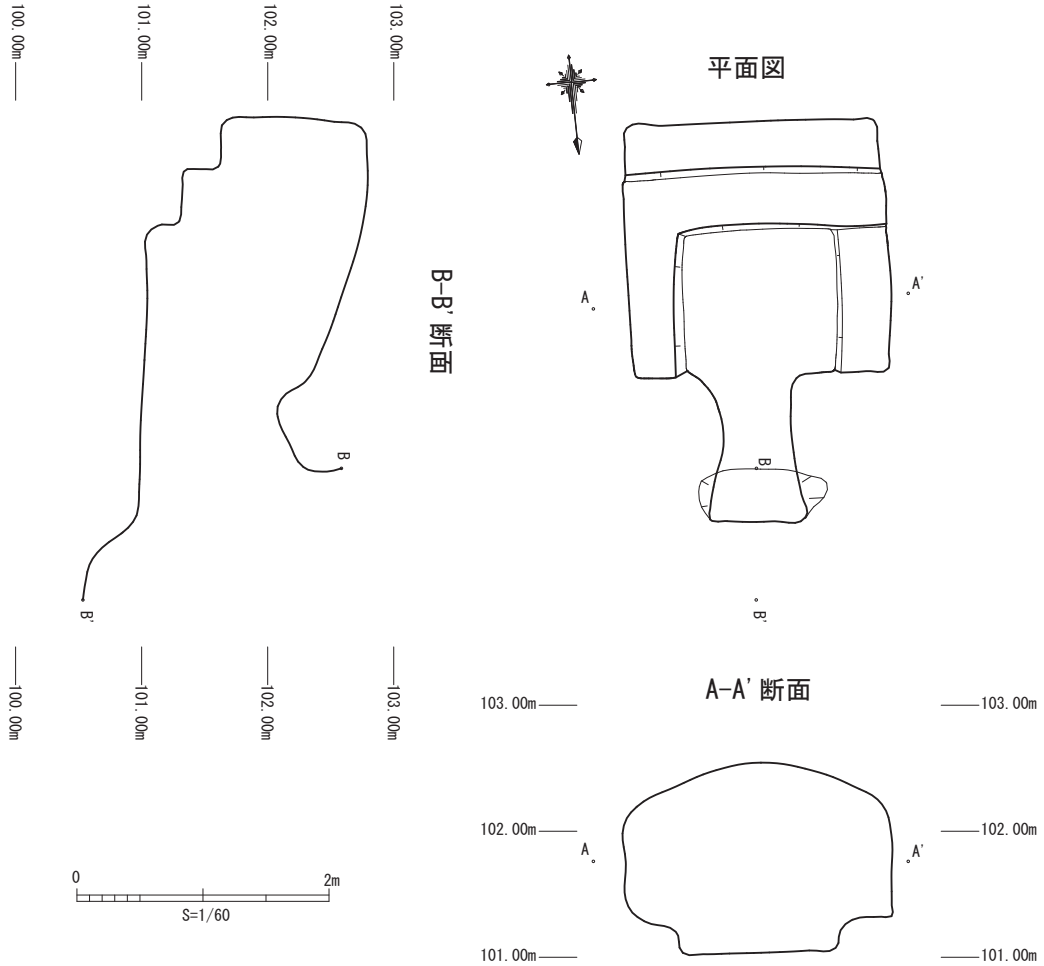
1）遺構（第 17 図）

58 号墓は、丘陵北面下段の中央よりやや東側に位置する横穴式の掘込墓で、標高 101m に立地している（第 4 図）。該墓の東側に 57 号墓、西側に 59 号墓が隣接して所在している。隣接する墓同士の間隔は 2 m程で、地形的には東側から西側に向かって緩やかに傾斜している。

墓は、墓口前のみが崩落等で埋没していたが、墓口は開口していたため閉塞方法は不明である。墓口とシルヒラシの間には、蔵骨器が割られて一箇所にまとまって置かれていた。人骨が無いことから、墓移転に伴い廃棄されたものと判断された。

墓口の寸法は、幅 0.7 m、高さ 1.3 m、羨道部の長さは 1.15 mを測る。墓口の方位は、北（N7° E）を向く。墓室は、棚とシルヒラシからなり、墓室類型は 6 類 a（コ字状＋階段状 1 段）に分類される。墓室の寸法は、奥行き 1.99m、幅 2.07m、高さ 1.68 mを測り、面積は 2.05㎡となる。コ字棚は正面と右側は平坦だが、左棚側は段差がつき、わずかに低くなっている。

墓の造営年代は不明であるが、蔵骨器の銘書で最も古いのは、「同治四年」（＝ 1865 年）で、新しいのは「平成二年」（＝ 1990 年）が確認されたことから、19 世紀中頃には墓は機能していたものと判断され、また、23 点前後の蔵骨器数が得られたことから、数世代にわたって使われた家族墓と考えられる。



第 17 図　58 号墓遺構図

図版 13　58 号墓遺構　　左上：位置　右上：廃棄蔵骨器　左下・右下：墓室完掘状況

２）遺物

蔵骨器は、すべて破片で完形は得られていない。整理作業の過程で、蔵骨器の個体数を把握するために分類集計を試みた結果、マンガン釉甕形が主体であることが確認された。これらを安里編年でみると、Ⅳ式（1850 ～ 1890 年代）5 点、Ⅴ式（1900 ～ 1920 年代）7 点、Ⅵ式（1930 年代以降）2 点、Ⅳ - Ⅴ式 2 点、Ⅴ - Ⅵ式 1 点の計 17 点に分類され、また、口縁部や底部のみの資料から導き出した個体数を加えると、身 23 点、蓋 27 点であった。なお、これらの蔵骨器については、破片化が著しいため、図と写真は省略した。

３）銘書

銘書では男性 7 人（男子次良、三男、金城三郎次男牛、長男金城松、■男松金■■、金城謝根男、金城一郎）、女性 7 人（金城蒲牛妻、女子二人、長女稲福カメ、金城三郎妻、金城松二女ウシ、二女真呉勢）、不明 8 人（金城寅、■子、故金城■、金城筑登之、牛■、金城三良、氏名欠損、判読不能）が確認できる。出土した 23 点余の蔵骨器数と被葬者数でほぼ一致する状況が確認された。

（７）60 号墓

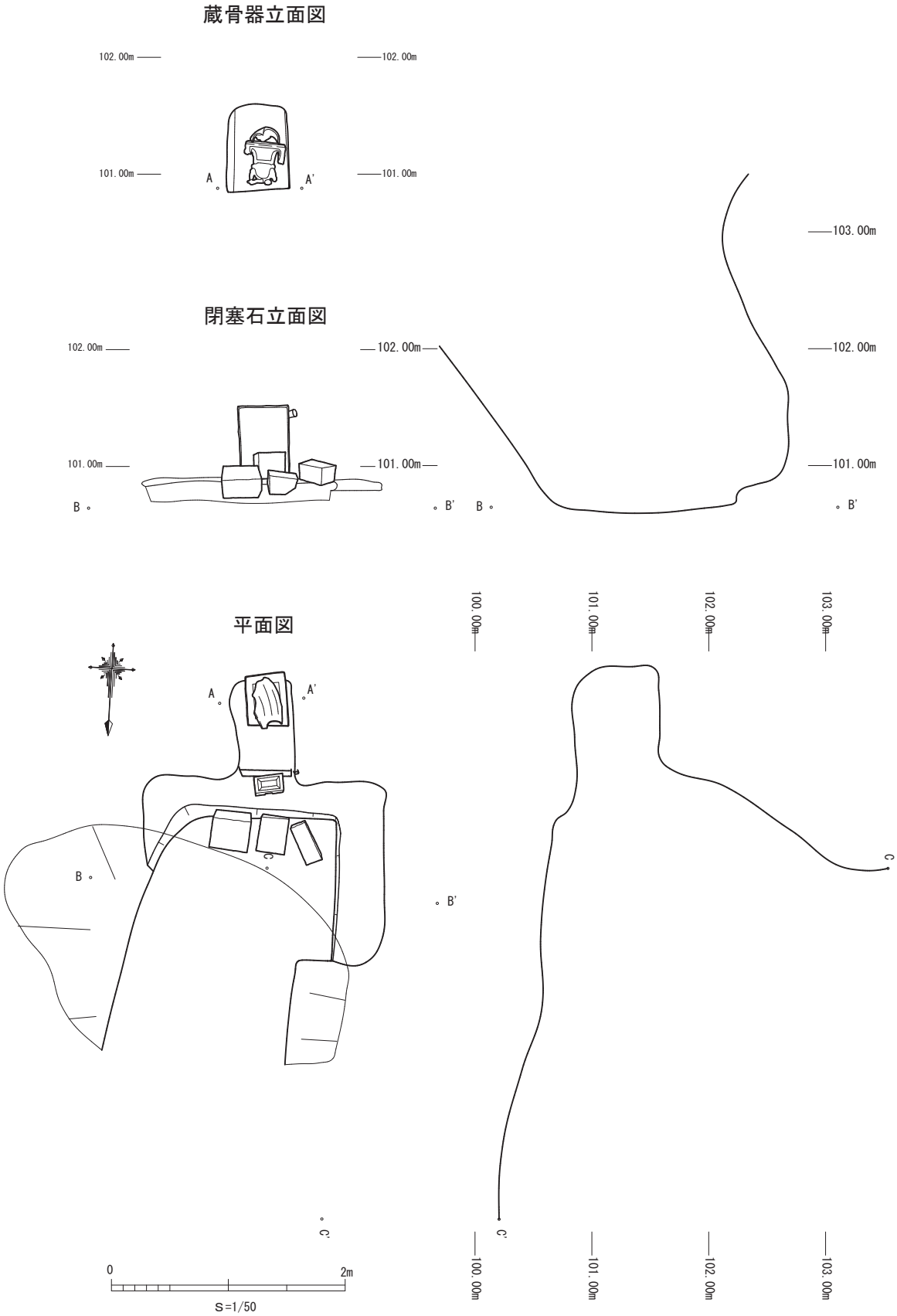
１）遺構（第 18 図）

60 号墓は、丘陵北面下段の東から西に緩やかに傾斜する途中のほぼ中央付近に位置する横穴式の掘込墓である（第 4 図）。墓周辺の標高は 101 m で、該墓を含む北面下段には概ね丘陵裾部の標高 101 ～ 102m 付近に横並びで造墓されている。該墓は天井が崩落して埋没しており、全体的に崩落の度合いが大きく遺構の残存状況は良くないが、残存部の状況から墓室の棚形状は、3 類 a（コ字状）と判断された。

墓室正面奥壁中央には、出窓状の掘り込み箇所があり、石灰岩の切石で閉塞する状況が確認された。閉塞石の前には石灰岩製の香炉が置かれており、さらに香炉の前にはサンミデーを意図するかのように石灰岩の切石が 3 個置かれている。この出窓状の掘り込み部分には蔵骨器が安置され、その周囲の埋土中にも人骨がわずかに混在していた。その他、墓室内の奥壁には数箇所の窪みがみられ、中心部に鉄片が埋まる状況が確認され、これらは爆撃の痕跡とみられ、天井の崩落原因と推察された。

墓口の方位は、残存する墓の平面形から推測すると北（N4° E）を向く。墓室の寸法は、墓口及び右棚側が消失していて、その形状は明確ではないが、シルヒラシの奥行き 1.2 m、同幅 1.5 m、正面棚幅 2.0 m、同棚高約 0.2 m を測る。墓室中央部の遺構内部についてみると、奥行き 0.8 m、幅 0.5 m、高さ 0.75 m で、平面形は縦長の方形状を呈する。当遺構は集骨施設としての「イケ」の様相を呈しているものと考えられたが、内部に安置された蔵骨器をみると、戦後の補修又は改修による可能性も考えられた。蔵骨器の状況は、上焼御殿形の蓋が逆さに置かれ、蓋内部には土が満杯

図版 14　60 号墓遺構位置



第 18 図　60 号墓遺構図

図版 15　60 号墓遺構　　左上：発見時、右上：墓室検出時、左下：イケ状遺構に安置された蔵骨器
右下：完掘状況

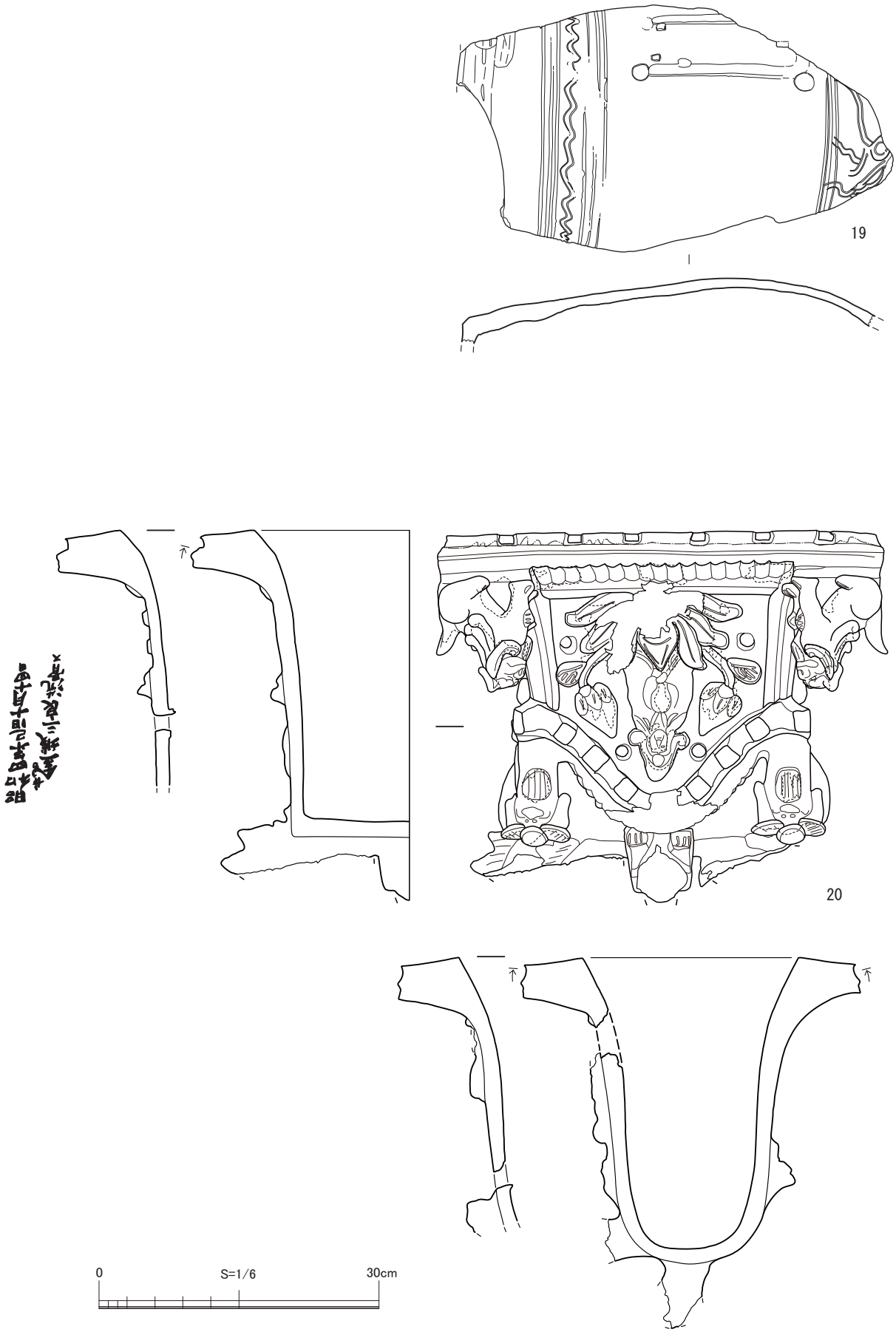
状態で骨も混在していた。その上にはマンガン釉甕形の身の胴部片が覆うように置かれおり、明らかに蓋を意識して置かれたものと判断された。このような状況から、戦後に該墓の関係者が蔵骨器と骨を集めて再葬したものと推察された。イケ状遺構が造墓当初からのものかどうかは判然としないが、墓室天井が消失する状況からすると、戦後の再葬時の新造が推測される。

墓の明確な造営年代は不明であるが、上焼御殿形の蓋裏の銘書に昭和四年（＝ 1929 年）の洗骨が記されていることと、マンガン釉甕形の胴部破片も安里編年の V 式（1900 ～ 1920 年代）に位置づけられることから、少なくとも 20 世紀前半には墓が機能していたことが窺える。

２）遺物（第 19 図）

上焼御殿形の蓋とマンガン釉甕形の胴部破片、湯呑み、指輪破片が各 1 点出土した。

蔵骨器は、上焼御殿形（第 19 図 20）の蓋であるが、使用時には天地逆となり身として使用されたものである。寸法は、口径 46.0 × 35.0cm、器高 39.7cm を測る。屋根は入母屋形で、正面は唐破風形に作られる。本来ならば大棟に一対の鯱を配し、唐破風の頂部には龍の飾りがあるが、これらはすべて欠損している。四隅に向かい合うように獅子像を貼り付ける。唐破風の下には、蓮華の上に法師像を貼り付け、その周りに葉文の貼り付けと円形の孔を 4 個配する。円形孔は両側面にも 2 個あり計 8 個が穿孔されている。蓮華の中央に 4.0 × 4.5cm の孔を穿っているが、焼成後に内面側から穿孔している。背面の唐破風の下は飴釉と緑釉で円文を描く。当資料は、蓋を逆さにして身として使用されたものである。それ故、所々に手が加えられていることに気づかされる。逆さにした時に安定を図るため、大棟の鯱や唐破風頂部の龍頭が意図的に打割されている。また、正面の法師像下の蓮



第 19 図　60 号墓出土蔵骨器

図版 16　60 号墓出土蔵骨器

左上：蔵骨器（身）　左下：蔵骨器（銘書）　右上：蔵骨器（蓋）

第 20 図　60 号墓副葬品

華中央の穿孔は、蔵骨器の身の正面中央にあるマド穴を意識した結果と推察された。

次に、蓋として使用されたマンガン釉甕形の身胴部片（第 19 図 19）についてみると、残存部の観察から、アーチ形の屋門の柱には玉飾りの貼付があり、胴部に線彫りの蓮華文、横帯３・４が沈線となっている。これらの要素から既述した安里分類のⅤ式に位置づけている。

第 20 図 21 は、型成形の湯のみで近代頃のものと推察されるものである。口径 6.3cm、器高 7.7cm、底径 3.9cm を測り、高台内に銘款がある。指輪は、破片で得られており、残存率は 40％程で著しく石灰化する。わずかに緑青が見られることから銅製と推測される。計測可能な部位から推定される寸法は、直径 2.3cm、幅 0.5cm、厚さ 0.1cm を測る。図化に耐えないことから、図･図版ともに省略した。

３）銘書と人骨

銘書では、男性１人（長男金城三良）が確認できるが、人骨の被葬者情報は、性別不明乳幼児１体と不明１体の計２体分と推定されている。銘書と人骨の情報が一致しないのは、戦後の集骨によるものと判断された。

〈蓋〉昭和四年巳旧十月十四日 / 長男 / 金城三良洗骨ス

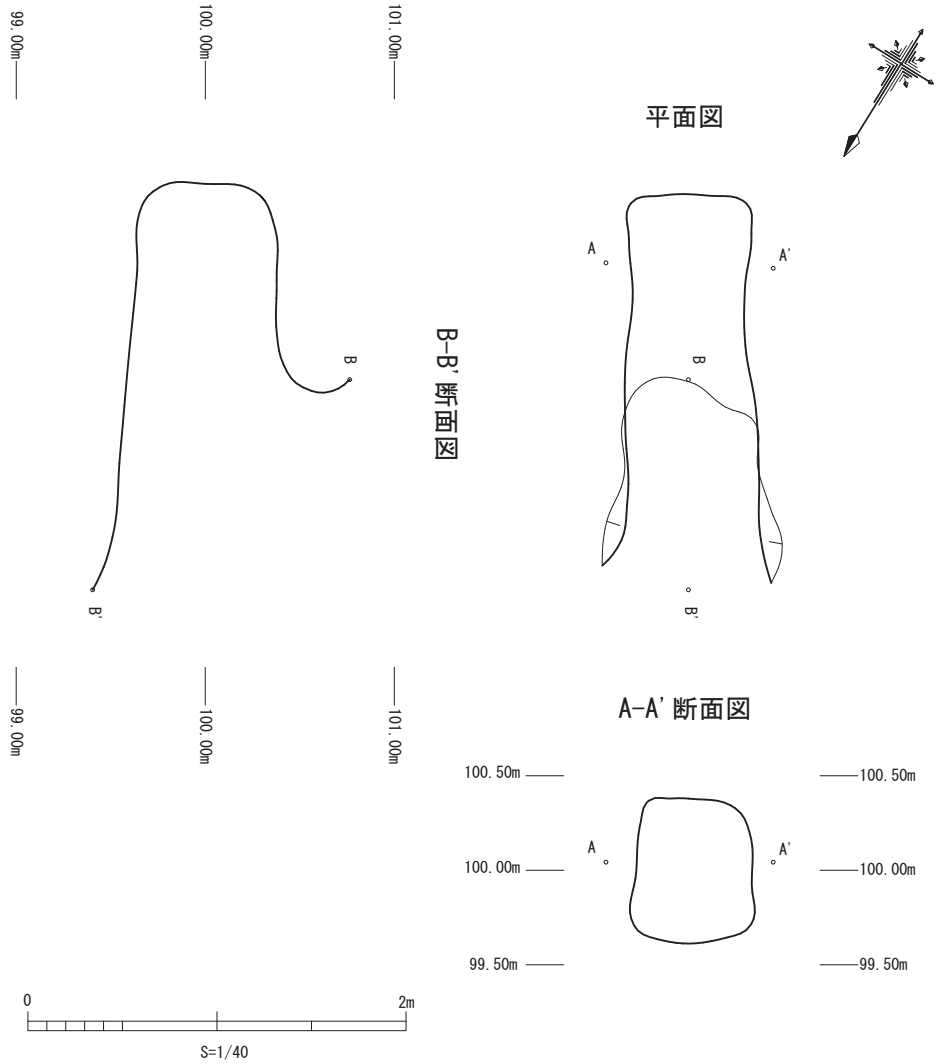
（8）66 号墓

1）遺構（第 21 図）

66 号墓は、丘陵北面下段の西側に位置する横穴式の掘込墓で（第 4 図）、標高 99 ～ 100m に立地している。墓室天井の一部と墓口前が崩落等で埋没した墓で、崩落土を除去したところ、閉塞石は無いが墓室内で完形の蔵骨器が 1 点確認された。蔵骨器の身は手前に倒れていて、蓋は身の後方から出土した。蔵骨器の種別はボージャー形である。

墓口の寸法は幅 0.61m、高さ 0.73m で、墓口の方位は北北西（N32° W）を向く。墓室に棚は無く、平面形は縦長の長方形となることから類型の 1 類 c と判断される。寸法は墓口サイズで奥行き 2.05m を測る。

墓の明確な造営年代は不明であるが、蔵骨器の蓋裏の銘書で「乾隆三拾二年」（乾隆 32 年＝ 1767 年）が確認できることから、少なくとも 18 世紀中頃には墓が機能していたことが窺える。また、墓室の規模や蔵骨器の数から、当墓が一次葬時に造られ、改葬後も継続して使用された個人用の墓と考えられた。一方で、閉塞石が無かったことについてその理由は判然としないが、戦時中に開口されたものの墓の規模が小さいために利用されずに済んだのではないかと推察された。



第 21 図　66 号墓遺構図

図版 17　66 号墓位置

図版 18　66 号墓　　左：発見時、中央：蔵骨器出土状況、右：完掘後

２）遺物（第 22 図）

遺物は、ボージャー形のほか、マンガン釉甕形の身胴部片と蓋鍔破片、沖縄産施釉陶器碗の胴部片と袋物の胴部片が得られた。いずれも小破片のため図版は省略した。ボージャー形の蓋（第 22 図 22）は寸法が口径 29.8cm、内径 29.0cm、器高 9.4cm、体部高 11.6cm を測る。つまみ台はヘラ削りで２段に成形され、内外面ともヘラ削りで成形する。該資料は、上下逆さにして甕の口縁に重ねて焼いており、外面に温度差による変色と、内面中央には別の重ね焼きの目痕が認められた。安里編年の Vb 式（1740 ～ 1770 年）に分類される。身（第 22 図 23）は、口径 31.1cm、胴径 41.7cm、器高 54.1cm、底径 23.4cm を測る。玉縁状に肥厚する口唇部は内湾しており、焼き歪みで左右非対称となる。横帯 1 は沈線 2 条、マド枠は平葺形、透かしマドは 1 方 2 円、胴部に文様は無い。外面は叩き、ヘラ削りで成形され、泥釉が施される。横帯 1 と横帯 2 の間にヘラ書きの判有り。安里編年のⅢａ式（1700 ～ 1800 年）の資料である。セット関係でみると、Ｖｂ式の頃と判断される。

３）銘書と人骨

銘書では、不明 1 人（金城子）が確認できる。「七■壽」は７０歳を超える長寿の意と考えられる。一方、人骨の被葬者情報は性別不明小児 1 体と不明 1 体の計 2 体分と推定されている。

〈蓋〉〈判読不能〉十五日死前之金城子伯七■壽■十七■ / 洗骨 / 大清乾隆三拾二年■〔丁ヵ〕亥閏七月八日■〔洗ヵ〕■■也 / 〈判読不能〉

第 22 図　66 号墓出土蔵骨器

図版 19　66 号墓出土蔵骨器　　右上：蔵骨器（蓋・身）、左下：銘書（蓋）、右下：窯印（身）

第５節　人骨分析に関する所見

（１）資料について

本調査区からは、９基の墓遺構から出土した蔵骨器中および墓室埋土から人骨の出土が確認された。全体的に残存状態は良くないものが多く、破片・微細片状態がどうにか残存する程度の状況が多い。本節では出土した人骨について基礎的データを主体とした報告を記載する。

人骨の分析は、部位同定とそれに基づく個体識別および最小個体数の計数・性別および年齢推定・病変等の異常形態の観察と記載・頭蓋及び四肢骨の計測作業を基本として行い、それぞれ一覧表に記載した（第４表～第９表）。個体識別と個体数の計数は蔵骨器単位で行い、識別した個体ごとに№を付した。一次葬を除く墓室埋土や床面出土の人骨については、同定対象と記載には含めたものの、計数・性別・年齢判定等の対象からは除外している。性別判定は、頭蓋および寛骨形態によることを基本とした。しかし、判別に必要な残存状態を保っていない資料も多い事から、それらの資料については性別不明とした。年齢については骨の発達形状から成人と未成人の区別は可能であったが、詳細な年齢区分の推定は困難である資料が大半である。未成人骨の一部に下顎骨あるいは乳歯・形成中の永久歯の遊離歯が残存しているものについては小児・乳幼児段階への分類を試みている。

（２）観察所見

１）３３号墓

蔵骨器１点の中から人骨の出土が確認された。しかしながら、椎骨や手根骨・足根骨の一部などが同定された他は四肢骨が断片的に残存するのみであることから、形態的な詳細は不明である。ただし、遊離歯の状態から成人が納められていたことが窺われる。

２）３６号墓

蔵骨器２点の中から人骨の出土が確認された。蔵骨器１内に残存していた人骨は全て破片となっていること正確な部位同定が困難である。

蔵骨器２内からは成人１体・未成人１体分の人骨の出土が確認された。ただし、成人は頸椎及び仙骨破片のみであることから個体の詳細な情報は不明である。未成人骨については下顎骨・尺骨・大腿骨・脛骨が同定され、下顎骨の歯槽の状態から i_1～m_2 までがいずれも未萌出であると想定されることから乳児段階であると判断される。

３）３７号墓

本遺構では墓室内の埋土から人骨が出土している。一部の部位が断片的に残存するのみで、成人であることが推定される以外の詳細は不明である。

４）４８号墓

墓室埋土から一括して人骨が出土しており、骨の発達形状から成人骨と未成人骨が混在している様子を窺うことができる。成人骨は大腿骨・脛骨の部位重複から２体分が含まれていると判断され、骨の残存状態などから頭蓋骨・下顎骨などを含んで残存する一群とそれ以外の一群について個体識別し、№１・№２として一覧表に記載した。

未成人骨は成人骨と明瞭に区別することができ、下顎骨および上腕骨が同定される。下顎骨の M_1

が未萌出ないし萌出直後の状態であるとみられることから、幼年段階の個体であったと推定される。

５）４９号墓

蔵骨器３点の中からそれぞれ人骨の出土が認められた。

○蔵骨器１

本蔵骨器からは鎖骨・上腕骨・腓骨・基節骨が確認され、未成人骨であると判断される。ただし、いずれも断片的であることから詳細な観察は難しい。ただし、遊離歯（永久歯）の歯根形成状態から概ね小児段階程度ではないかと想定される。また上下の犬歯の歯冠にはエナメル質減形成が観察される。

○蔵骨器２

頭蓋骨破片・橈骨・尺骨・寛骨・大腿骨・脛骨・腓骨がそれぞれ同定され、左の大腿骨が重複することから２体分が含まれていることが窺われる。しかしながら、重複する大腿骨と他の部位がいずれの個体に属するものであるかは判断することができないため一覧表においては一括して表記した。

これらのうち大腿骨・脛骨・腓骨は比較的骨幹が細く筋粗面の発達もそれ程強くない。一方、橈骨・尺骨は強い発達形状を呈する様子が観察される。また、寛骨は大坐骨切痕角から男性のものではないかと想定される。このことから、本蔵骨器には成人２体分が含まれ、内１体は男性であると思われる。また、上肢と下肢の部位がそれぞれ異なる個体に属する可能性が考えられる。

○蔵骨器３

同定された部位の重複から成人２体が納められていたことが確認できる。頭蓋骨・鎖骨・四肢骨・寛骨で重複しており、それぞれに明瞭なサイズ差が認められることから、各部位の個体識別が可能である。これらのうちより大きなサイズを呈する一群を同一個体と判断し№.１、それ以外を№.２とした。№.１は№.２に比べ残存状態が良好で劣化が少ない。また、筋粗面や骨の発達形状も比較的発達している様子が窺われたことから、重複していない部位についても上記の観察所見から個体識別が可能であると考え、分類している。ただし、いずれとも判断しかねる部位については一括して判断を保留した。№.１については寛骨形状から男性であろうと推定した。一方№.２は残存状態が不良で、明確な観察所見を得ることが困難であったことから性別・年齢等の判断は不明とした。なお、左の脛骨の栄養孔位から骨幹にかけての外側表面に凹凸状の変異が認められる。

６）５１号墓

51 号墓では墓室埋土中から頭蓋骨及び四肢骨の破片が複数体分確認された。これらのうち大腿骨の部位重複から最小個体数が３と判断される。いずれも骨幹が残存するのみであることから年齢・性別などの識別は不能である。

７）５６号墓

蔵骨器１の中から本調査区ではもっとも残存状態の良好な人骨が出土しており、概ね１体分の全身の部位が同定される。頭蓋は頭頂骨と後頭骨・上顎骨・下顎骨がそれぞれ一部残存している状態であることから十分な観察は難しい。一方で、胸椎・腰椎・仙椎の椎体関節面が未癒合である点、大腿骨遠位端・脛骨近位端の骨端癒合ラインの残存が認められる点、M_3・M^3が萌出済みであるが大臼

歯の咬耗は全体的にそれ程進行していない点などから、この個体が若年～成年段階初頭頃の年齢段階に位置づけられると考えられる。加えて、寛骨の大坐骨切痕角がやや小さく感じられるものの、耳状面直下に比較的明瞭な前耳状溝が認められる点、後頭稜の発達がそれ程強くない点から女性であろうと推定される。

なお、左右の脛骨のヒラメ筋線の発達に違いが見られ、左では窪んだ形状を呈している。

８）６０号墓

蔵骨器１内に人骨の残存が確認されたものの、残存状態は悪く四肢骨の一部が断片的に同定できるのみであるが、骨のサイズから少なくとも２体分が含まれることが窺われる。このうち概ね成人になると思われるサイズの一群を№１、未成人骨の一群を№２として個体識別し、一覧表に記載した。しかし、それ以上の詳細な形態観察は困難である。

９）６６号墓

蔵骨器１内から人骨が出土しているが、残存状態は悪く前頭骨・大腿骨・脛骨の破片が認められるのみである。ただし、大腿骨に重複が見られることから最小個体数は２と判断される。両者はサ

第４表　前田真知堂Ａ丘陵の出土人骨一覧表

墓No.	蔵骨器No.	人骨No.	年齢	性別	出土部位	備考
33	1	1	成人	不明	頸椎、腰椎、鎖骨L/R、月状骨L、第４中手骨L、第５中手骨L、中節骨、寛骨臼L/R、大腿骨L･R、舟状骨L、第３中足骨L	
36	1	1	不明	不明	破片のみ	
36	2	1	成人	不明	頸椎、仙骨破片	
36	2	2	乳児	不明	下顎骨、尺骨R、大腿骨L、脛骨L	
37	墓室埋土	1	成人	不明	第１中手骨L、寛骨臼＋腸骨R、踵骨L	
48	埋土	1	熟年～老年	M	頭蓋骨、下顎骨、橈骨L、尺骨L、寛骨臼R、大腿骨L･R、脛骨L･R、腓骨L･R、第１中足骨R、第２中足骨R、第４中足骨R	
48	埋土	2	不明	不明	大腿骨L、脛骨R	
48	埋土	3	幼児	不明	下顎骨、上腕骨R	
48	不明	1	不明	不明	頭蓋骨破片	
49	1	1	小児	不明	鎖骨R、上腕骨R、基節骨(3)、腓骨L･R	
49	2	1	成人	不明	大腿骨L･R	
49	2	2	成人	不明	大腿骨R	
49	2	一括	—	M	頭蓋骨破片、橈骨R、尺骨L･R、寛骨臼＋腸骨L、脛骨L･R、腓骨L･R	
49	3	1	老年	M	頭蓋骨、下顎骨、鎖骨L･R、上腕骨L･R、橈骨L･R、尺骨L･R、寛骨臼＋腸骨L･R、大腿骨L･R、脛骨L･R、腓骨L･R	
49	3	1	成人	不明	頭蓋骨、上腕骨L、橈骨L、尺骨L、寛骨臼L、腸骨R、大腿骨L･R、脛骨L･R、腓骨L･R	
49	3	一括	―	―	環椎、頸椎(2)、胸椎(12)、腰椎(5)、仙骨、肩甲骨L･R、有頭骨L、舟状骨L、第1中手骨L･R、第2中手骨L･R、第3中手骨L･R、第4中手骨L･R、第5中手骨L･R、第1基節骨L･R、基節骨（8）、中節骨（3）、膝蓋骨R、踵骨L･R、距骨L･R、外側楔状骨L･R、中間楔状骨R、内側楔状骨L･R、立方骨L･R、舟状骨L･R、第1中足骨L･R、第2中足骨L･R、第3中足骨L･R、第4中足骨L･R、第5中足骨L･R、第1基節骨R	
51	墓室埋土	1	不明	不明	大腿骨L･R	
51	墓室埋土	2	不明	不明	大腿骨L･R	
51	墓室埋土	3	不明	不明	大腿骨R	
51	墓室埋土	一括	―	―	破片のみ	
56	1	1	若～成年	F	頭蓋骨、下顎骨、環椎、軸椎、頸椎(5)、胸椎(11)、腰椎、仙骨、肩甲骨L･R、鎖骨L･R、上腕骨L･R、橈骨L･R、尺骨L･R、小菱形骨L･R、有頭骨L･R、有鈎骨L･R、舟状骨L･R、月状骨L･R、三角骨L･R、第1中手骨L･R、第2中手骨L･R、第3中手骨L･R、第4中手骨L･R、第5中手骨L･R、第1基節骨R、基節骨(7)、中節骨(5)、寛骨L･R、大腿骨L･R、膝蓋骨L･R、脛骨L･R、腓骨L･R、踵骨L･R、距骨L･R、外側楔状骨L･R、中間楔状骨L･R、内側楔状骨L･R、立方骨L･R、舟状骨L･R、第1中足骨L･R、第2中足骨L･R、第3中足骨L･R、第4中足骨L･R、第5中足骨L･R、第1基節骨L･R、基節骨(3)、末節骨	
60	1	1	不明	不明	頭蓋骨破片、大腿骨L･R、脛骨L	
60	1	2	乳幼児	不明	頭蓋骨破片、鎖骨R	
60	埋土	一括	―	―	頭蓋骨破片、大腿骨L/R	
66	1	1	不明	不明	前頭骨、大腿骨L、脛骨R	
66	1	2	幼～小児	不明	大腿骨L	

イズから成人と思われる一群と、未成人骨に識別できることからそれぞれを№.１・№.２として一覧表に記載した。

第５表　前田真知堂Ａ丘陵の検出された人骨の個体数一覧（墓別）

墓№.	成人										未成人				不明	計
	成年			熟年		老年		不明			若年	小児	乳幼児	不明		
	M	F	不明	M	F	M	F	M	F	不明						
33										1						1
36										1			1		1	3
37										1						1
48						1							1		2	4
49						1				3		1				5
51															3	3
56		1														1
60													1		1	2
66												1			1	2
合計	0	1	0	0	0	2	0	0	0	6	0	2	3	0	8	22

※推定年齢段階がまたがっている場合はより上の段階でカウント

凡例）歯種記号：残存歯，○：歯槽開放，×：歯槽閉鎖，／：歯槽破損，
△：歯根のみ残存，（ ）：未萌出，〔 〕：萌出中・閉鎖中，
網掛：齲歯，空白：欠失・未形成

第６表　上顎骨及び下顎骨の歯列残存状況

墓No.	地点	人骨No.	残存状況 R								残存状況 L							
36	2	1					○	○	○	○	○	○	○	○	○	○		
48	墓室埋土	1	×	○	○	×	×	／	／	／	／	○	○	○	○	○	○	○
48	墓室埋土	3		(M_2)	(M_1)	／												
49	3	1	×	／ ×	M^1 ×	P^2 ×	× ×	○ ×	／ ×	／ ×	× ×	× ×	C C	P_1 P_1	○ ○	× ×	× ×	× ×
56	1	1	M^3 M_3	M^2 M_2	M^1 M_1	P^2 P_2	P^1 P_1	／ C	／ I_2	／ I_1	I_1	I_2	C	P_1	P_2	M_1	M_2	M_3

第７表　骨に見られる変異等の観察表

墓No.	蔵骨器No.	人骨No.	部位	左右	変異種別	観察所見
49	3	2	脛骨	L	変形	栄養孔位から遠位側骨幹の外側表面を中心に凹凸状の変形
			腓骨	L	変形	脛骨に類する変形
56	1	1	寛骨	LR	前耳状溝	比較的明瞭な前耳状溝
			脛骨	L	変形	ヒラメ筋線の発達が右と比べ異形

第８表　齲歯一覧表

墓No.	蔵骨器No.	人骨No.	歯種	左右	位置	所見
49	3	1	P^2	R	近心・遠心面	歯冠下端に小孔状の齲蝕
			M^1	L	近心面	歯冠下端に楕円状の齲蝕
			M^1	R	近心・遠心面	歯冠下端に小孔状の齲蝕
			C(下顎)	L	近心・唇側・遠心面	全体的に齲蝕

第９表　下顎犬歯に観察されるエナメル質減形成一覧表

墓No.	蔵骨器No.	人骨No.	歯種	LR	出現数	類型	歯冠最下端からの距離(mm)	ストレス受容推定年齢(歳)	備考
49	1	1	C(下顎)	R	3	線状	—	—	歯冠下端が欠損していることから計測不可
						線状	—	—	
						線状	—	—	
49	3	1	C(下顎)	L	3	線状	—	—	歯冠下端が欠損していることから計測不可
						線状	—	—	
						線状	—	—	
56	1	1	C(下顎)	L	3	線状	1.76	5.5～6.0	I_1～M_1までに出現
						線状	3.20	4.5～5.0	
						線状	5.24	3.5～4.0	

第６節　まとめ

前田真知堂Ａ丘陵では、今回（平成25年度発掘調査）報告する近世墓31基以外に、平成15年度に25基の範囲確認調査を、平成24年度に10基の発掘調査を実施しており、延べ66基の調査を行っている。第10表は、該丘陵の各墓の調査状況を整理したものである。墓域の形成や墓の築造年代、戦争遺跡としての墓地利用を考えるうえで丘陵全体の状況を整理する必要があるため、過年度分の状況も併せて報告し、まとめとしたい。

１．遺構の特徴と墓域の形成について

平成25年度調査の31基を墓室類型でみると、１類14基、３類３基、４類２基、５類２基、６類２基に分類されたほか、不明７基と壕１基が確認された。立地でみると１類が丘陵北側上段に５基、下段に７基と北側に集中し、３・６類は北側に、５類は南側にのみ所在した。また、平成15・24年度調査では、１類４基、２類２基、３類２基、４類２基、５類６基、６類４基、コンクリート墓４基、不明７基、壕４基が確認され、これらの墓は全て丘陵の南側に所在していた。

該丘陵の墓の立地を概括すると、北側に１・３類が、南側に４・５類が立地する状況が窺える。北側の１類は12基中10基がｃ・ｄ型であった。このタイプの墓室は面積が1㎡以下で棺箱（＝棺桶）を安置するために造られた棚の無い墓である。棺箱の置き方によって、平面観が縦長か横長となり、その際に頭位が重要視されたと考えられる。埋没墓として発見される際は、一次葬人骨が検出されるほか改葬後の蔵骨器が１点だけ安置されることが多く、仮墓や脇墓等と称される個人墓と考えられている。

第 10 表　真知堂 A 丘陵遺構一覧表

墓番号	墓室類型	調査年度	墓室面積（㎡）	高さ/幅/奥行			立地	備考
1号墓（旧BG006号墓）	3ｂ	15	4.10	－	2.10	1.95	南	蔵骨器3点安置（墓室） 戦争遺物、蔵骨器破片（墓庭）
2号墓（旧BG007号墓）	3a	15	4.57	－	2.31	1.98	南	蔵骨器2点安置（墓室） 戦争遺物、蔵骨器破片（墓庭）
3号墓（旧BG008号墓）	1b	15	2.80	－	1.63	1.72	南	蔵骨器3点安置（墓室）
4号墓	6b撹乱	15	4.92	(2.38)	2.46	2.7	南	墓口幅1.12m（戦時中に拡張？）
5号墓	壕	15	12㎡以上	2.08	2.38	5.21	南	灯取り、不明円形土坑（墓室）
6号墓	6a撹乱	15	5.18	1.83	2.42	2.14	南	一番棚削平（墓室）
7号墓	5a撹乱	24	5.63	1.69	2.28	2.47	南	二番棚削平（墓室）
8号墓	壕	24	4.22	1.79	1.92	2.2	南	竈遺構、灯取り（墓室）
9号墓	5ｂ	24	5.72	1.8	2.2	2.6	南	左棚側削平（墓室）
10号墓	壕	24	22㎡以上	1.84	2.30	9.5	南	平面観Ｌ字形、病院壕の可能性あり
11号墓	2b撹乱（壕）	24	4.40	1.91	2.22	1.98	南	灯取り（墓室）
12号墓	壕	14	17㎡以上	1.7	2.0	8.7	南	平面観T字形、灯取り、右壁側途中に小部屋を造る
13号墓	4b	15	4.92	1.18	1.91	1.62	南	手榴弾、軍靴ほか戦争遺物、戦争遺骨（墓庭）
14号墓	5a撹乱	15	6.36	1.92	2.4	2.65	南	一・二番棚削平、灯取り、壁面に刻文字（墓室）
15号墓	5a	15	5.17	2.18	2.2	2.35	南	左棚にイケを設ける
16号墓	4b撹乱	15	5.52	1.51	2.4	2.3	南	灯取り？（墓室）、墓外観をｺﾝｸﾘｰﾄで修復
17号墓	2b撹乱(壕)	15	7㎡以上	1.98	2.68	5.22	南	灯取り（墓室）
18号墓	壕	15	8㎡以上	(2.11)	1.94	4.52	南	平面観Ｌ字形
19号墓	1c	15	0.85	－	0.6	1.42	南	サンミデーと香炉を石灰岩で設ける
20号墓	3b	15	2.76	1.64	2.14	1.68	南	左右棚を石灰岩で補強、汁ヒラシで二列の縦長土坑検出
21号墓	5a撹乱	15	7.02	－	2.6	2.7	南	薬莢、照明弾、軍靴ほか戦争遺物（墓庭）
22号墓	不明	15	－	－	－	－	南	竈状石組遺構3基（墓庭） 薬莢、照明弾、軍靴ほか戦争遺物（墓庭）
23号墓	5a撹乱	15	7.07	－	2.56	2.76	南	廃棄蔵骨器（墓庭外） 薬莢、照明弾、軍靴ほか戦争遺物（墓庭）
24号墓	不明	15					南	塔式墓、未補償墓
25号墓	ﾀﾝｸ墓	15					南	
26号墓（旧H24001号墓）	1ｄ？	24	0.66	0.86	0.8	0.82	南	
27号墓（旧H24002号墓）	1c？	24	1.78	(0.79)	0.96	2.59	南	円形土坑（墓室）
28号墓（旧H24003号墓）	1a撹乱（壕）	24	左1.13 右0.82	左1.09 右（0.81）	左1.39 右1.63	左2.83 右2.96	南	2基の墓室を連結
29号墓（旧H24004号墓）	不明	24	(4.73)	(.18)	(2.29)	(2.06)	南	
30号墓（旧A-031）	5類？撹乱	15	(5.14)	－	2.00	2.57	南	廃棄蔵骨器（墓庭外） 薬莢、照明弾、軍靴ほか戦争遺物（墓庭）
31号墓	不明	25	3.52	1.47	1.67	2.11	北	
32号墓	1d	25	1.56	(1.01)	1.12	1.39	北	瓶子1点（羨道部）
33号墓	1c	25	0.75	0.72	0.63	1.19	北	蔵骨器1点安置（墓室）
34号墓	1b	25	1.53	0.74	1.53	1.00	北	寛永通宝2点（墓室埋土）
35号墓	不明	25	3.30	1.97	1.48	2.23	北	瓶子、蔵骨器蓋（墓室）
36号墓	4a	25	(4.46)	(0.78)	(2.31)	(1.93)	北	蔵骨器2点安置（墓室）、遺構の半分以上消失
37号墓	不明	25	3.00	1.97	2.29	1.31	北	5個体分の蔵骨器（墓庭）
39号墓	不明	25	4.64	0.44	2.16	2.15	南	モルタル付着の石組施設（戦後の墓補修） 薬莢・手榴弾ほか戦争遺物（墓庭）
40号墓	不明	25	5.96	1.85	2.77	2.15	南	薬莢、手榴弾ほか戦争遺物（墓室・墓庭）
42号墓	1d	25	0.23	0.20	0.58	0.40	南	蔵骨器1点安置（墓室）
45号墓	不明	25	－	－	－	－	南	崩落の危険から未調査
46号墓	壕	25	－	－	0.65	3.00	南	崩落の危険から未調査
47号墓	1c	25	1.71	0.95	0.67	2.55	南	
48号墓	5a	25	6.27	1.68	2.46	2.55	南	9点分の蔵骨器（墓室） 軍靴、歯ブラシほか戦争遺物（墓室）
49号墓	4b	25	(2.17)	(1.32)	(1.55)	(1.40)	南	蔵骨器2点安置（墓室）、遺構の半分以上消失
50号墓	1d	25	0.59	1.16	1.00	0.59	北	
51号墓	5a撹乱	25	4.50	2.12	1.90	2.37	南	10点分の蔵骨器（墓室） 薬莢、手榴弾ほか戦争遺物（墓室・墓庭）
53号墓	1a	25	1.89	0.69	1.00	1.89	北	蔵骨器1点安置（墓室）
54号墓	1c	25	0.93	1.04	0.53	1.75	北	蔵骨器破片、磁器皿（墓室埋土）
55号墓	1c	25	1.04	1.16	0.66	1.58	北	蔵骨器1点（墓室、移転廃棄）
56号墓	1c	25	0.53	0.68	0.54	0.98	北	蔵骨器1点安置（墓室）
57号墓	1c	25	0.70	1.00	0.55	1.28	北	蔵骨器1点（墓室、移転廃棄）
58号墓	6a	25	4.12	1.68	2.07	1.99	北	23点分の蔵骨器（墓室入口側、移転廃棄）
59号墓	1b	25	0.99	1.15	1.30	0.76	北	
60号墓	3a撹乱	25	3.12	2.59	2.05	1.52	北	イケ状遺構（戦後の補修？）
61号墓	6a変形	25	4.26	1.69	2.12	2.01	北	4点分の蔵骨器（墓庭、移転廃棄）
62号墓	不明	25	2.62	1.09	0.56	1.40	北	
63号墓	3a	25	3.62	2.19	2.25	1.61	北	天井崩落の危険から未調査
64号墓	3a	25	3.67	1.89	2.37	1.55	北	8個体分の蔵骨器（墓庭）
66号墓	1c	25	1.25	0.73	0.61	2.05	北	蔵骨器1点（墓室内で横転）
67号墓	1a	25	1.34	1.44	1.23	1.09	北	
BG001号墓	6a撹乱	15	4.57	－	2.31	1.98	南	亀甲墓 日本兵埋葬、戦争遺物、蔵骨器破片（墓庭）
BG002号墓	6a撹乱	15	2.80	－	1.63	1.72	南	亀甲墓 塹壕？構築（墓室） 副葬品廃棄土坑、方形石組遺構（墓庭）
BG003号墓	ｺﾝｸﾘｰﾄ墓	15					南	
BG004号墓	ｺﾝｸﾘｰﾄ墓	15					南	
BG005号墓	不明 （戦後補修）	15					南	亀甲墓、戦後に墓室をｺﾝｸﾘｰﾄﾌﾞﾛｯｸで補修する 蓋付碗埋納、暗渠、庭囲い石垣（墓庭）

※ 括弧内の数値は残存部の最大値

1類a・bや2～6類については、墓室の面積が比較的広く、複数の蔵骨器を安置できることから、数世代に渡り使用する家族墓と考えられている。家族墓の墓室は棚の有無や形状で分類され、時代とともに変化していく可能性が高いため、編年が期待できる。第11表は、各類型の墓室面積と構成蔵骨器を整理したもので、前田・経塚近世墓群の既報告書（2～5）のうち、攪乱の少ない埋没墓と該墓に伴う蔵骨器の最も古い洗骨年を抽出したものとなっている。ただし、2類については、該丘陵では壕に改築されていることと、既報告書で良好な事例がないため除外している。各類型の墓室面積平均値は、3類3.92㎡、4類2.98㎡、5類6.52㎡、6類4.79㎡であった。6類型は、平面観がコ字状と階段状1段を組み合わせたもので、事例の増加に伴い新たに設定した類型である。3類（コ字状）から5類（コ字状＋階段状2段）へ発展する間を埋めるものか、5類の簡略とみるかは課題を残すところであるが、面積的にみると3類から5類への変化は、可能な限り永く墓を使用するために墓室を拡張した可能性が高いと考えられるため、3→6→5類の順に正面棚の数を増やしたものと推測している。次に、蔵骨器の最も古い洗骨年を援用した類型毎の墓の使用開始年代についてみると、1類が18世紀中頃から20世紀中頃までの長期間に渡ってみられ、3類が18世紀前半から19世紀中頃、4類が18世紀後半から19世紀中頃、5類が19世紀中頃、6類が18世紀中頃から19世紀中頃と、前述した3→6→5類の順に概ね変化していく様子が窺える。しかしながら、情報量の多い埋没墓数が充分とは言えないため、事例の増加に伴う資料蓄積と再検討が今後の課題となる。

ところで、平成15年度に調査した3基の亀甲墓（第23図参照、BG001・002・005号墓）については不明な点が多く、以下で判明している点を整理しながら考えてみたい。この亀甲墓は前田・経塚近世墓群では類をみない大型の墓であった。BG002号墓の所有者は、金城筑登之親雲上猛英を元祖とする兆氏の子孫であった。該地では産出しない石灰岩を大量に用いて構築しており、所有者の身分や財力を窺い知ることができる。沖縄戦時の攪乱により墓室の残存状態は良くないが、残存部から推測される墓室類型は6類a（BG001・002号墓）に分類される。この3基の亀甲墓に共通する特徴として、相方積みを多用している点が挙げられる。BG001号墓では墓室奥壁と側壁、墓正面、庭囲いに、002号墓では墓室奥壁と両側壁、庭囲いに、003号墓では墓正面と庭囲い石垣で確認された。亀甲墓で造墓年代の古いものは、17世紀後半頃と考えられており、伊江御殿家墓（1685年）や護佐丸の墓（1686年）、大山上江家古墓（1699年）等が知られている。これらの亀甲墓に共通する特徴として墓正面や庭囲いを相方積みで構築している点が挙げられる。亀甲墓は、小港松原墓（1718年）を参考にすると18世紀前半頃に定型化していくと考えられ、墓正面を大型の方形石組で構築するようになる。墓口上部にはジョウカブイ（門被い）とカガンイシ（鏡石）が、両側にはシミイシ（隅石）が構築される。以上のことから、該丘陵の3基の亀甲墓の造墓年代を推察すると、相方積みを多用することから17世紀後半頃まで遡れる可能性が考えられるものの、墓室類型と併せて考えると、現段階では18世紀前半～中頃に比定しておきたい。

既述した状況から該丘陵の墓域の形成について考えてみると、南側の亀甲墓3基と2類（11・17号墓）、3類（1・2号墓）、北側の3類（60・63・64号墓）が、初期段階に造墓され、時代が下ると共に概ね4→6→5類の順で墓が造られて墓域を形成したことが推察される。掘込墓は一見すると同じような大きさの墓が隙間無く横並びして立地する様から計画性をもって造墓されたかのように見えるが、例えば隣り合う墓同士の墓室構造が異なる点からすると、年代的に差異がある可能性が高いと考えられる。故に該丘陵においては、初期段階では比較的間隔が空けられて造墓していたが、墓数の増加に伴いその間隔が狭まり、最終的には隙間を埋めるように造墓されていったものと推察される。年代的には概ね18世紀前半頃から墓が造られ始め、18世紀中頃から19世紀中頃に墓域が拡大し、

第 23 図　前田真知堂 A 丘陵全体地形図

後述するように沖縄戦時に大部分の墓が日本軍陣地の一角を担う壕に改築されたものと考えられる。

第 11 表　真知堂 A 丘陵遺構と類型

報告書No.　墓番号	類型	面積	使用開始年代（洗骨年）	備考
前田･経塚近世墓群3　C-41号墓	1ａ	0.63	18ｃ中頃～19世紀前半	ボージャー1点（蓋Ⅶ・身Ⅳ）
前田･経塚近世墓群2　17号墓	1ｂ	1.04	19ｃ後半（1888年）	
前田･経塚近世墓群5　56号墓	1ｂ	2.37	18ｃ後半（1780年）	
前田･経塚近世墓群2　15号墓	1ｂ	3.00	19ｃ中頃（1838年）	
前田･経塚近世墓群3　C-42号墓	1ｃ	0.45	18ｃ中頃～19世紀前半	ボージャー1点（蓋Ⅶ・身Ⅳ）
前田･経塚近世墓群2　16号墓	1ｃ	0.48	20ｃ前半（1931年）	
前田･経塚近世墓群2　22号墓	1ｃ	0.48	20ｃ前半（1923年）	
前田･経塚近世墓群2　24号墓	1ｃ	1.04	20ｃ中頃（1944年）	
前田･経塚近世墓群4　08号墓	1ｃ	1.35	18ｃ中頃～19世紀前半	ボージャー1点（蓋Ⅶ・身Ⅳ）
前田･経塚近世墓群4　49号墓	1ｃ	2.12	19ｃ前半（1832年）	
前田･経塚近世墓群3　B-37号墓	3ａ	4.16	19ｃ前半（1820年）	
前田･経塚近世墓群4　27号墓	3ａ	3.80	19ｃ中頃（1871年）	
前田･経塚近世墓群5　58号墓	3ｂ	3.75	19ｃ中頃（1843年）	
前田･経塚近世墓群5　57号墓	3ｂ	4.28	18ｃ前半（1701年）	
前田･経塚近世墓群5　27号墓	3ｃ	3.60	18ｃ後半（乾隆20年代）	
前田･経塚近世墓群3　C-09号墓	4ａ	2.66	19ｃ前半（1808年）	
前田･経塚近世墓群3　B-49号墓	4ａ	5.04	18ｃ後半（1795年）	
前田･経塚近世墓群4　02号墓	4ａ	3.53	19ｃ後半	一次葬人骨の頭骨の傍らに古典焼きを副葬
前田･経塚近世墓群4　04号墓	4ａ	2.54	18ｃ後半	ボージャー3点（蓋Ⅴ、Ⅶ2・身Ⅲ、Ⅳ、Ⅵ）
前田･経塚近世墓群4　23号墓	4ａ	2.02	19ｃ前半（1821年）	
前田･経塚近世墓群3　C-39号墓	4ｂ	2.55	19ｃ前半（1815年）	
前田･経塚近世墓群3　B-27号墓	4ｂ	2.89	19ｃ中頃（1869年）	
前田･経塚近世墓群5　51号墓	4ｂ	2.95	18ｃ後半（1792年）	
前田･経塚近世墓群5　54号墓	4ｃ	2.64	19ｃ前半（1894年）	
前田･経塚近世墓群3　C-19号墓	5ａ	6.48	19ｃ中頃（1843年）	
前田･経塚近世墓群5　55号墓	5ａ	6.55	19ｃ中頃（1867年）	
前田･経塚近世墓群3　B-29号墓	6ａ	4.60	19ｃ中頃（1865年）	
前田･経塚近世墓群5　62号墓	6ａ	6.92	18ｃ中頃（1758年）	
前田･経塚近世墓群4　32号墓	6ａ	3.61	18ｃ中頃（1766年）	
前田･経塚近世墓群4　35号墓	6ａ	4.37	19ｃ中頃（1839年）	
前田･経塚近世墓群4　01号墓	6ｃ	4.46	19ｃ前半	1795年死去

２．戦争遺跡としての真知堂Ａ丘陵の様相

該丘陵の平面観は、南東から北西方向に細長く延び、途中から扇状に広がる形状を呈する（第 23 図)。丘陵の全長は約 210m で、南側に 44 基、北側に 22 基の墓が確認された。66 基のうち、空き墓は 49 基（74.2％）で、蔵骨器が確認された墓は 14 基（21.2％）であった。この 14 基の墓を立地でみると南側 6 基､北側 8 基で､このうち蔵骨器が原位置を保持したと判断される墓は 10 基であった。この 10 基の墓は、全て埋没墓で墓室天井や墓口上部が崩れた状態で発見されている。

空き墓が多い理由としては、区画整理事業に伴う墓移転の進捗によるものと沖縄戦の際に墓が壕に利用されたことが挙げられる。該丘陵の南側では、44 基中 30 基（68.18％）の墓で壕利用を含む戦争関連の遺構や遺物が検出されており、これらの墓では壕構築の際に蔵骨器が墓外へ出され、墓室は拡張されて原形を止めない状況が確認されている。特に 5、10、12、17、18 号墓では、墓室正面壁を掘り込んで 5 ～ 10m 規模の壕に改築しており、15 ～ 20 mの間隔を空けて立地する状況から計画的な壕の構築が推察された。また、周辺からも大量の薬莢や砲弾をはじめ、銃剣や軍靴、飯ごうなどの戦争関連遺物が出土したほか、日本兵を埋葬した土坑も検出されている。一方で、北側では墓数が少ないこともあるが壕に利用された墓は皆無であった。このことは首里に置かれた日本軍司令部を中心に同心円状に陣地が構築されていたことが推察され、首里の北側に位置する該地では丘陵南側に開口する墓が壕に利用されたことが考えられた。類例は仲間稲マタ原陣地壕群で報告する複郭陣地壕のほか、該丘陵南側に位置する真知堂Ｂ丘陵においても北側に埋没墓が多く、南側に壕が造られていた事例が挙げられる。各丘陵単位での壕の立地をはじめ、県内（中南部）で把握されている他の壕との

比較検討が課題となる。

３．銘書からみる真知堂Ａ丘陵の被葬者について

平成 25 年度調査で出土した蔵骨器の銘書情報を整理したところ､｢金城｣ 姓が多いことがわかった。該当する墓は 8 基（23・27・35・55・57・58・60・66 号墓）で、特に丘陵北側の 55 ～ 60 号墓は比較的距離が近く横並びして立地することから近縁関係が推察される。このことからすると、60 号墓で戦後に集骨されて構築されたとみられるイケ状遺構は関係者が整理した可能性が高いと考えられた。

該丘陵の墓所有者の身分についてみると、士族の可能性があるのは 1 基（59 号墓庭盛土中）で、百姓は 8 基（9・13・21・23・27・35・37・58 号墓)、他は不明であったが、既述した 3 基の亀甲墓（BG001・002・005）については、BG002 号墓が士族の墓であることからすると他 2 基も同様に考えられるため士族身分の墓は 4 基としておきたい。銘書の情報が少ないなかで推察せざるを得ない状況ではあるが、該丘陵の墓地利用をみると士族よりも百姓身分の人々が占有していたものと考えられる。一概には言えないが､士族の墓が百姓よりも先に造墓されていたことが考えられるため、該丘陵において 3 基の亀甲墓は、比較的早い段階の造墓と推測している。

最後に、該丘陵と前田・経塚近世墓群の他丘陵を比較して判明したことについて述べる。比較対象とした丘陵は、真知堂Ａ丘陵とほぼ同じ墓数調査を行った経塚地区の南小島原Ａ丘陵（既報告書 5）とした。該丘陵では銘書の判読により 69 基中 18 基の墓で身分が特定され、その内訳は士族 7 基、百姓 4 基、不明 7 基であった。また、該丘陵で最初に造墓したのは百姓身分で、次第に士族層の墓が増加していったことがわかっている。真知堂Ａ丘陵では士族の墓から造墓していくことを推察しているが、南小島原Ａ丘陵の事例とは異なっている。士族の墓が百姓よりも多いことも異なっており、墓域の形成を考えるうえで多様な形があることが確認された興味深い事例といえる。

〈引用・参考文献〉

安里進 1997「伊祖の入め御拝領墓の厨子甕と被葬者－近世墓の考古学的調査による家族復元－」『伊祖の入め御拝領墓の厨子甕と被葬者』浦添市文化財調査研究報告書第 25 集

安里進・新里まゆみ 2006「比嘉門中墓の家族史－家族の数だけ歴史がある－」『比嘉門中墓の家族史－家族の数だけ歴史がある－ 比嘉門中墓の調査概要』浦添市文化財調査研究報告書

浦添市教育委員会 2004『墓からわかる家族の歴史　近世墓シンポウジム報告書』

浦添市教育委員会 2005『仲間稲マタ原近世墓群 稲マタ原陣地壕群』

浦添市教育委員会 2007a『市内遺跡発掘調査報告書（１）－平成 13 ～ 18 年度調査報告－』

浦添市教育委員会 2007b『前田・経塚近世墓群』

浦添市教育委員会 2010『市内遺跡発掘調査報告書（２）－平成 14 ～ 20 年度調査報告－』

浦添市教育委員会 2011『前田・経塚近世墓群（２）首里大名地区』

浦添市教育委員会 2012『前田・経塚近世墓群（３）前田真知堂Ｂ丘陵（１）前田真知堂Ｃ丘陵（２)』

浦添市教育委員会 2013『前田・経塚近世墓群（４）経塚子の方原Ａ丘陵（１)』

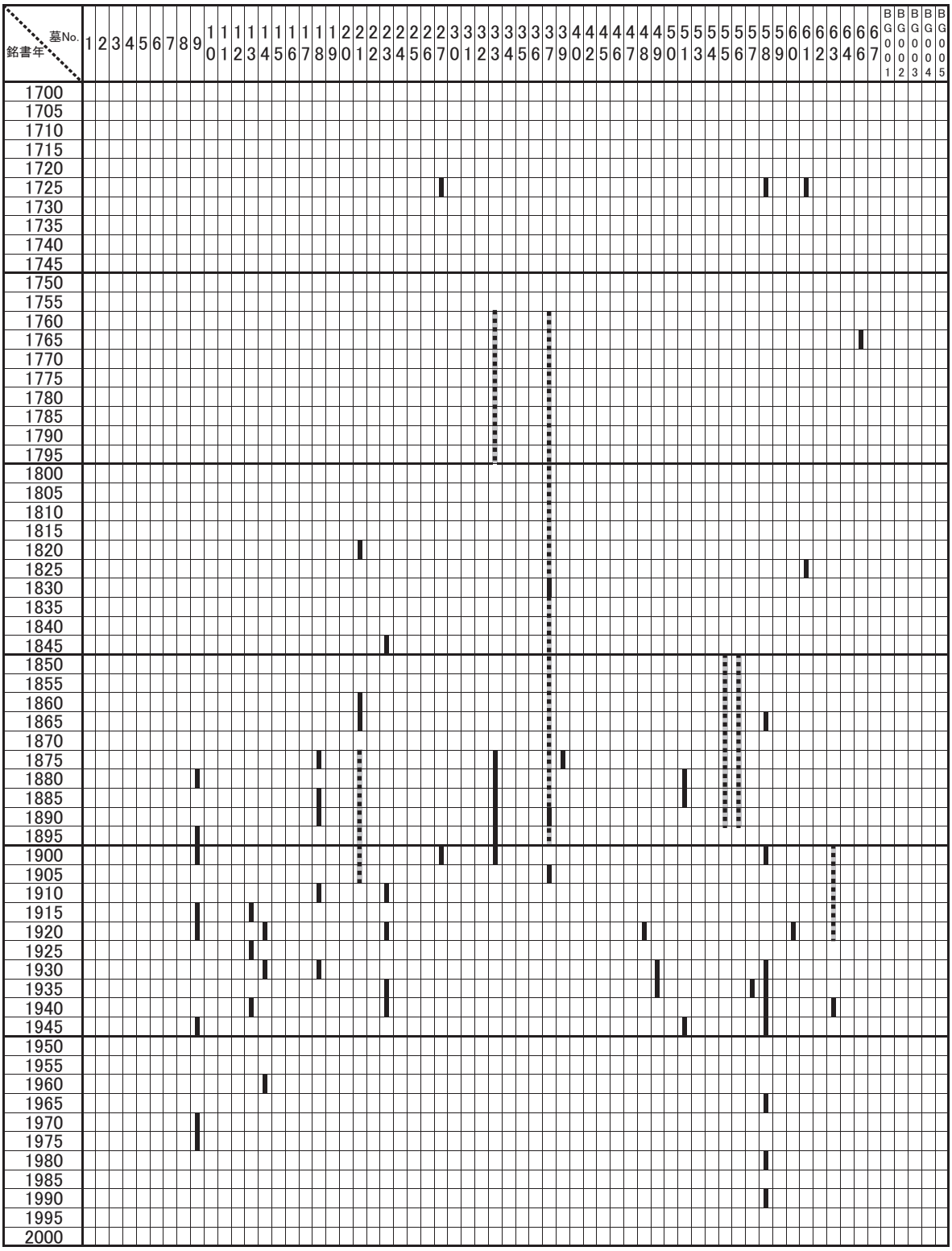
浦添市教育委員会 2014『前田・経塚近世墓群（５）経塚南小島原Ａ丘陵』

江藤盛治編 1991『人体計測法 2』人類学講座別巻 1　雄山閣

宜野湾市教育委員会 2008『宇地泊西原丘陵古墓群』

宜野湾市教育委員会 2008『市内埋蔵文化財発掘調査報告書２』
小橋川剛ほか 2009「沖縄県読谷村大当原貝塚出土人骨について」『沖縄埋文研究』紀要６　沖縄県立埋蔵文化財センター
谷畑美帆・鈴木隆雄 2004『考古学のための古人骨調査マニュアル』学生社
土肥直美・北條真子 1998「那覇市銘苅古墓群（B・E）地区出土の人骨」『銘苅古墓群（Ⅰ）』那覇市教育委員会　那覇市文化財調査報告書第 39 集
土肥直美・譜久嶺忠彦 1999「那覇市銘苅古墓群南（A・C・D）地区出土の人骨」『銘苅古墓群（Ⅱ）』那覇市教育委員会　那覇市文化財調査報告書第 40 集
徳嶺里江ほか 2009「沖縄県座間味村古座間味原シル地区砂丘地出土人骨について」『沖縄埋文研究』紀要６　沖縄県立埋蔵文化財センター
譜久嶺忠彦・土肥直美・石田肇 2000「那覇市ナーチュー毛古墓群出土の人骨」『―那覇新都心土地区画整理事業に伴う緊急発掘調査報告Ⅶ―』那覇市教育委員会　那覇市文化財調査報告書第 44 集
譜久嶺忠彦・土肥直美・石田肇・瑞慶覧朝盛・泉水奏・佐宗亜衣子・比嘉貴子 2001「ヤッチのガマ・カンジン原古墓群出土の人骨」『ヤッチのガマ カンジン原古墓群原古墓群』沖縄県立埋蔵文化財センター
藤田尚編 2013『古病理学事典』同成社
山本美代子 1988「日本古人骨永久歯のエナメル質減形成」『人類学雑誌』96 日本人類学会
Knussman.R 1988 Martin/Knussman Anthropologie.Band1, Stuttgart, Gustav Fischer Yerlag
I.W.Cornwall 1964 Bones for the Archaeologist. Phoenix House LTD
D.R.Brothwell 1981 Digging up Bones. Cornell University Pres
E.SCHMID 1972 Atlas of Animal Bones For Prehistorians, Archaeologists and Quaternary Geologists. Elsevir Publishing Company

第 12 表　銘書からみた墓の使用年代



第 13-1 表　真知堂 A 丘陵の銘書一覧

No.	墓番号	蔵骨器No.	図版番号	銘書内容	死去年	洗骨年	年	備考
	9	1		三代/座波亀				身
	9	1		①大正八年午旧十二月十二日死亡母座波カミ②大正十二年旧四月七日洗骨	1919	1923		蓋
	9	1		①大正七年午旧五月七日死行年六十五才②大正八年旧十二月二十三日洗骨三代目座波亀	1918	1919		蓋
	9	6		光諸八年壬午七月十日かめ座波男子まつ座波洗骨候事		1882		蓋
	13			大正八年旧十二月貳拾参日洗骨長女ウト		1919		蓋裏
	13			①昭和三年辰旧十一月三十日②三男金城■・・・			1928	蓋裏
	13			①昭和十六年旧正月十九日洗骨二男金城三郎②己年・・・・・・・		1941		蓋裏
	13			大・・・・・十二月貳拾参日洗骨三良				蓋裏
	13			①・・・■大■・・・②・・・■去同・・・				蓋破片
	14			①大正七年・・・②大正八年旧・・・③大山朝■・・・・・・・・〔夭亡〕壱ヶ〔月〕			1918 1919	蓋裏
	14			①大正七年旧二月十九日死亡②大正八年旧三月四日洗骨③大山朝昌男子夭亡一ヶ月			1918 1919	蓋裏
	14			大山朝昌男子蒲戸夭亡一ヶ月				身上部裏
	14			①大山朝昌次男亀夭亡壱ヶ月②大正八年旧三月四日死亡③昭和六年旧十月十九日洗骨	1919	1931		蓋裏
	14			大山朝昌次男亀				身内側
	14			①■②第十世②真覚昌道信士④1963年11・・・九十ス俗名故大山朝昌〔霊〕・・・才			1963	蓋裏
	14			①1963年十一月十五日②故大山朝昌霊③行年六七才			1963	身正面
	14			故大山ツル之霊				身正面
	18			①大山朝柱男子三人かめ三ら山戸②光諸五年卯十二月六日死去嫡子大山子朝柱嫡子思亀③光諸十三年丁亥三月廿七日洗骨④光諸十二年丙戌十一月十日死⑤大山朝柱次男真三良⑥歳七ツ⑦光諸十二年丙戌十二月六日死⑧大山朝柱三男山戸⑨歳壱ツ⑩光諸二十年甲午二月廿日⑪洗骨両人三ら山戸	1879 1886	1887 1894		蓋裏
	18			①光・・・四年寅九月十一日死去②光諸十三年■亥三月廿七日洗・・・③大正二年■・・・④大■・・・・・・・■■・・・・④昭〔和〕六年■■・・・十月・・・	1878	1887	1913 1931	蓋裏
	18			①・・・正弐年拾壱月十九日■・・・■②昭和六年拾〔月〕十九日洗■③月■男・・・		1931		蓋裏
	18			①■・・・②・・・■山里之子親雲上③朝〔宜〕				身正面
	18			①朝柱妻②マイヌ				身正面
	18			①・・・■・・・②・・・朝宜・・・				蓋破片
	18			・・・〔光諸〕■■十・・・				蓋破片
	18			・・・骨次男大山■・・・				蓋破片
	21			①同治一年亥②七月七日三男③石川④かな■■⑤洗骨⑥候事		1862		蓋裏
	21			①同治〔七〕年戊辰②九月五日次男かめ③石川④■■洗骨⑤候事		1868		蓋裏
	21			光諸・・・・・廿九日・・・■石■・・・				蓋裏 光諸年間1875～1908年
	21			・・・〔道〕光三年癸未七月廿■・・・			1823	蓋破片
	21			①・・・■・・・②・・・十一月■・・・				蓋破片
	21			■十三■・・・				蓋破片
	21			①・・・■隆■・・・②・・・■　■■・・・③・・・〔三〕男思■・・・■■・・・				蓋破片 乾隆年間1736～1795年
	21			①・・・〔上〕女子・・・②・・・■思■・・・				蓋破片
	21			①・・・■廿三日②・・・■・・・				蓋破片
	21			①同・・・②■・・・③■・・・				蓋破片
	21			・・・日七・・・				蓋破片
	22			・・・親雲上妻・・・				蓋裏
	23			①〔道〕光二十五年己巳②・・・月六日骨洗③安里親雲上		1845		蓋裏
	23			光諸二・・・				蓋縁
	23			大正十四年丑旧八月・・・■■松■・・・洗骨		1925		蓋裏
	23			①二男■■油屋金城松妻カマ二人②大〔正元〕年〔壬〕子旧十月廿三・・・■骨③骨④・・・・・⑤・・・・・⑥■・・・・		1912		蓋裏
	23			①・・・〔昭和〕十四・・・②・・・・・・・・洗骨③・・・・・・			1939	蓋裏
	23			①昭和十五②■③年・・・・④■■⑤■・・・・⑥・・・・			1940	蓋裏
	23			①宜の湾間切②嘉数■・・・③■■呉屋④巳⑤八〔月廿五日〕				蓋裏
	23			①・・・閏七月廿日・・・・■洗骨②・・・■戌十二月十八日死				蓋裏
	23			・・・■■ノ長■・・・サ洗・・・				蓋破片
	23			・・・■骨				蓋破片
	23			・・・■年戌■・・・				蓋破片
	23			・・・■女子■・・・				蓋破片

第 13-2 表　真知堂 A 丘陵の銘書一覧

No.	墓番号	蔵骨器No.	図版番号	銘書内容	死去年	洗骨年	年	備考
	27	1		①明治四十二年云々②添石③なへ			1909	蓋
	27	2		①雍正弐年②己正月廿二日③死去④金城尓也⑤同六年甲酉⑥二月十五日⑦洗骨	1724	1728		蓋
	27	3		①明治四十二年云々添石②新垣筑登之			1909	蓋
	27	4		①云々②明治四十二年③添石			1909	蓋
	30			嫡■・・・・・・・・・や				蓋裏
	30			大城				蓋裏
	30			①兄②大城にや				蓋裏
	30			①与那城親雲上②妻③與那城・・妻				蓋裏
	30			①長■・・・②亀③長女④カ・・				蓋裏
	30			①・・・五年旧■・・・②・・・女③大城シゲ④・・・一■・・・				蓋破片
	30			①・・・■日死同〔拾〕②・・・■■大城名・・・③・・・■■・・・				蓋破片
	30			①・・・■大・・・②■■旧七月七日■・・・				蓋破片
	30			・・・十一月廿■・・・				蓋破片
	30			昭和■■・・・				蓋破片
	30			①・・・■■②・・・■死③・・・■				蓋破片
69 93	33			①辺野喜…/…/…/洗骨 ②…喜筑登之親雲上… ③…綱同人妻 ④…■綱妻… ⑤…巳 ⑥光緒二■〔拾ヵ〕…				光諸:1875～1908年
	33	1		同前父親				
	35			〈蓋〉〈欠損〉日金城次良長〈欠損〉				31号墓の庭囲いと判断
26	36			乾隆…■〔骨ヵ〕仕申候/お戸				乾隆:1736～1795年
53	37			〈蓋〉亥正月廿■〈判読不能〉				
40	37			〈蓋〉明治〈判読不能〉年旧十二月九日死〈判読不能〉旧十一月三日〈判読不能〉■〔妻ヵ〕〈判読不能〉■〔蒲ヵ〕/明治四十年旧十二■〔月ヵ〕〈判読不能〉洗骨日昭和■■〔三年ヵ〕旧十一月〈判読不能〉/稲福二男/蒲			1907	
	37	1		〈蓋〉〈欠損〉年子三月三日嫡〈判読不能〉				
	37	3		〈蓋〉〈判読不能〉■〈判読不能〉筑登之親〈判読不能〉				
	37	4		〈蓋〉〈判読不能〉				
	37	5		〈蓋〉大■〔清ヵ〕〈欠損〉				
	37	7		〈蓋〉〈欠損〉■道光六年〈欠損〉			1826	
	37	8		〈蓋〉〈欠損〉三十二■■〈欠損〉/〈欠損〉長女■■/〈欠損〉■■〈欠損〉				
	37	10		〈蓋〉〈欠損〉骨■〈欠損〉				
	37			〈蓋〉〈欠損〉治廿一年旧子六月七日稲福筑登之/のんそや/〈欠損〉年子旧六月七日稲福筑登之/のんそや〈身〉明治廿一年子旧六月七日稲福筑登之/のんそや/明治廿一年子旧六月七日のんそや/稲福筑登之			1888	
	39			①…洗骨/■■■〔三ヵ〕人■〔入ヵ〕…/■■ ②大■〔正ヵ〕…/■〔父ヵ〕■… ③…■■■〔比ヵ〕嘉… ④明治四…				
	48			〈蓋〉大正九年申十月■日〈欠損〉/〈欠損〉■〈欠損〉/〈欠損〉亡年〈欠損〉			1920	
	49			…七日■…/洗骨セ■…				
	49			①…■日■〔死ヵ〕■… ②…■子七月七日本上■…				
	49			〈蓋〉①〈欠損〉二年丁子〔ママ〕七月七日本上■〈欠損〉②〈欠損〉■日■〔死ヵ〕■〈欠損〉				
	49	3		昭和七年旧十一月廿七日/洗骨/二男/知念蒲■/妻/知念カマド/昭和十四年旧十月十八日/洗骨ス		1932 1939		
	51			〈蓋〉光緒八年壬午九月十四日洗骨三男嗣清宜野座筑登之親雲上同十一年■〔一ヵ〕月十六日同人妻洗骨		1882 1885		
	51			〈蓋〉①昭■〔和ヵ〕〈欠損〉/五〈欠損〉/宜■〔野ヵ〕〈欠損〉②〈欠損〉旧午〈欠損〉/〈欠損〉■〔洗ヵ〕〈欠損〉				
	51			〈蓋〉昭和十七年一月十日■〈欠損〉故陸■〔軍ヵ〕〈欠損〉■〔座ヵ〕嗣和/中支湖南省■〈欠損〉■〔戦ヵ〕斗ニ於テ戦死			1942	
	51			〈蓋〉〈欠損〉辛卯■〈欠損〉■真清貴〔ママ〕洗/■〔蒲ヵ〕戸/〈欠損〉■〔洗ヵ〕〈欠損〉				
	51			嗣清子松金				
	51			嗣清子松金				
	55	1		…■〔拾ヵ〕年甲午五月十九嫡子金城筑登之親…				

第 13-3 表　真知堂 A 丘陵の銘書一覧

No.	墓番号	蔵骨器No.	図版番号	銘書内容	死去年	洗骨年	年	備考
	57	1		昭和九年旧十月十八日金城筑登之雲親雲八重山郡石垣村〈判読不能〉玉■〈判読不能〉/向テキタ			1934	
	58	1		■■〔雍正ヵ〕二年■辰六月十二日死■/同〈判読不能〉月十〈判読不能〉洗骨			1724	雍正：1723～1735年
	58	2		次男松金城寅五月廿日死去/明治三十四年丑正月五日骨洗		1901		
	58	3		〈蓋〉西一九四八年九月/昭和廿三年/戊昭和五十七年八月十七日〈欠損〉/金城〈欠損〉/■子/五■			1948 1982	
	58	4		大清光緒二十七年丑三月十一日二世金城蒲牛妻死同二十八年寅七月四日滑洗/合葬牛近所男子壱人次良/同女子二人	1901	1902		
	58	5		同治四年癸丑七月七日/三男■儀小之金城筑登之/洗骨仕候事			1865	
	58	6		十一月…■長女二ツ稲福■/■■〔稲福ヵ〕カメ…洗骨日/■和二年旧十一月…			1927	
	58	7		金城三■〔郎ヵ〕…/妻…/一九四一年死亡…/享年四十■〔四〕…	1941			
	58	8		〈蓋〉金〈欠損〉拾六年旧巳（ミ）年五月七日洗骨				「巳」にフリガナで「ミ」と記されている。
	58	9		武地小金城三郎次男牛昭和拾壱年旧七月拾六日洗■骨		1936		
	58	10		〈蓋〉〈判読不能〉				
	58	11		申年/…九六八年正月廿■日一九五…/故金城■…			1968	
	58	12		〈蓋〉大正〈欠損〉年未旧三月/九日■〔金ヵ〕城松二女ウシ/洗骨				大正：1912～1925年
	58	13		〔判読不能〕				
	58	14		〈蓋〉…■五月〈欠損〉/				
	58	15		〈判読不能〉二而死去之金城筑登■之/同治四年癸丑七月〈欠〉洗骨仕候事		1865		
	58	16		…■〔親ヵ〕雲上二女真呉勢洗骨				
	58	17		…■〔年ヵ〕長男金城松昭和拾六年旧巳（ミ）…			1941	
	58	18		…■〔男ヵ〕松金■■…/…■■/…■洗				
	58	19		…三月十■…				
	58	20		〈蓋〉〈欠損〉八年未旧三月/■〔三ヵ〕男金城■〔蒲ヵ〕				
	58	21		〈蓋〉牛■〈欠損〉				
	58			〈蓋〉平成二年/九月二十二日卒/故金城一郎/■■■■七歳	1990			現代
	58			〈蓋〉金城三良				現代
	58	22		①金城謝根男戊昭和五十七年八月十七日/昭和廿三年/西一九四八年八月/四才 ②…子/…五■…			1982 1948	
	59			…七年丁■■〔十ヵ〕二月二十一日毛氏高■〔良ヵ〕…				
	60			〈蓋〉昭和四年巳旧十月十四日/長男/金城三良洗骨ス		1929		
	61			康熙■■七年戊戌二■〔月ヵ〕…死…/雍正三年乙巳四月…			1725	康熙：1662～1722年
	64			〈蓋〉紀元■〔二ヵ〕六〇三年■〈欠損〉			1943	
	64			〈蓋〉①〈欠損〉四年辛亥又六月〈欠損〉②〈欠損〉■〔日ヵ〕孝■〔要ヵ〕〈欠損〉				
	64			〈蓋〉〈欠損〉二〈欠損〉②〈欠損〉骨				
	64			〈蓋〉〈欠損〉雲上孝■〔殷ヵ〕■〈欠損〉				
	64			〈蓋〉〈欠損〉■月〈欠損〉				
	64			〈蓋〉①〈欠損〉■当山孝保〈欠損〉②〈欠損〉新拾貳■〈欠損〉③〈欠損〉■■〔舊十ヵ〕■〈欠損〉 ④〈欠損〉■■〈欠損〉⑤〈欠損〉■■〈欠損〉				
	64			〈蓋〉〈欠損〉月八■■〔骨洗ヵ〕〈欠損〉/■三女ツル当■〈欠損〉/〈欠損〉■〔次ヵ〕■〈欠損〉				
	66	1		〈蓋〉〈判読不能〉十五日死前之金城子伯七■壽■十七■/洗骨/大清乾隆三拾二年■〔丁ヵ〕 亥閏七月八日■〔洗ヵ〕■■也/〈判読不能〉		1767		
	BG001			①大〔清〕■・・・②八年壬丑七■・・・③嫡子與那城・・・④洗骨				蓋裏
	BG001			①・・・次良②・・・・・■③年四・・・・全人妻カマ四・・・・・・洗骨				蓋裏
	BG001			・・・九月廿五日■・・・・嫡子たる與・・〔城〕				蓋裏
	BG001			①大・・・・・三月三日（旧正月二十八日）②福岡縣・・・田郡伊田町ニ於テ死去③與那・・・・・・■				蓋裏
	BG002			長女〔思〕・・・				身正面
	BG004			・・・■嫡子				蓋破片
	BG004			・・・■八月■■・・・				蓋破片
	BG005			①・・・■七月二■■四男②■・・・・・■				蓋裏
	BG005			・・・森田筑登・・・				蓋破片
	BG005			①大・・・・・三月三日（旧正月二十八日）②福岡縣・・・田郡伊田町ニ於テ死去③與那・・・・・・■ ②・・・〔思〕戸				蓋破片
	不明			①■・・・②■■・・・③光諸■・・・④正■八日■・・・⑤〔同〕八■・・・⑥七日洗骨・・・				蓋裏 光諸：1875～1908年
	不明			①・・・・・②・・・・・・・・・③■〔諸〕三十二年④九月二十四日■■			1906	蓋裏
	不明			・・・間筑■・・・				蓋破片

第４章　前田西上原Ａ丘陵の調査成果

第１節　調査の方法

本地区（第３図）の調査前の状況は、丘陵西側が最も標高が高く東側にかけてゆるやかに下る斜面地で、草木に覆われていた状態であった。その中に、丘陵の裾部に墓口と思われる遺構が数基視認可能な状態であったことから、古墓群であることは事前踏査などで確認されていた地域である。ただし、これまでの周辺での調査の状況を勘案し、丘陵の裾部を中心に埋没墓の有無の確認に主眼をおいて調査を実施した。まず、丘陵全体の伐採作業を行い不発弾の有無確認のための磁気探査を実施し、その後重機による表土掘削を実施した。

調査は、調査区の北側から開始したが、北側については地表面から 50cm ほどで地山面が確認され、平坦地でもあったため、遺構が分布していないことが確認された。また、丘陵の西から南斜面にかけては、丘陵の裾部から頂上までほぼ島尻泥岩層（クチャ層）であり、遺構の分布は確認されなかった。そのため、遺構は丘陵の東側から南側にかけての砂岩層（ニービ）が斜面全体に堆積するエリアのみに限られることが判明した。また、同遺跡の他の地区のように丘陵斜面に上下の複数段に墓の墓口が横並びになるような構造ではなく、裾部を中心に地山を掘り込んだ横穴墓が点在して分布することが確認された。

掘削の過程で、墓正面や庭囲いが露出し出すと、順次人力掘削に切り替えて遺構細部の検出作業を行った。人力掘削の結果、前田西上原Ａ丘陵では、合計８基の遺構を検出した。そのほとんどは、古墓であるが、それらの多くは戦時中に壕などとして利用された形跡が認められる等、戦争遺跡としての様相も確認された。遺構番号は検出順に１号から８号まで連番で付した。

これらの遺構内の掘削を進めたその結果、遺構や遺物の残存状態が確認できる３基の墓と、戦後も使用されて区画整理に伴い移転した墓や、後世の攪乱などの影響から遺構や遺物の残存状態が悪い「空き墓」とそれに近い状態の５基の墓の計８基の墓であることが判明した。前者の遺物を伴い、かつ遺構との関係性が明確な墓については、1/20 の実測図の作成を行った。後者の墓については、略測図の作成を行った。写真撮影は適宜、調査開始から完掘状況まで行った。

第２節　層序と遺構

前節に記したとおり、丘陵全体については、重機と人力による掘削によってこれらの土層の除去作業を行い、遺構面の検出を行った。遺構は調査前にすでに墓口が見えていたものも多く、現表土は全体的に薄く、直下に墓の遺構面を形成する地山が堆積しているような状況で、堆積土はそれほどない状態であった。また、天井が崩落して埋没していた６号墓などは、墓室内に墓の天井部分を形成していた細粒砂岩のブロックと表土層（戦後の土層）が混在して厚く堆積している状態が確認された。全体的に戦時中の遺物の出土も確認されたことから、堆積土は大きく攪乱を受けていることが確認された。これらのことから、本調査区では明確な層序関係を把握することはかなわなかった。

検出された遺構は８基で、全て横穴状の掘込墓であった（第 24 図）。１号墓と２号墓は丘陵東側斜面で隣あっており比較的小規模な遺構が分布していた。４号墓から７号墓は標高が一段低い南側裾部に横並びになるような位置関係にあり、６号墓が最も大型の墓室を有する遺構であった。これらの

遺構は1・2号墓の周辺と比較しても、地山の堆積が厚い箇所であることから、このような箇所を選択して大型の掘込墓が造られたものと推測される。また、3号墓の墓庭は6号墓の墓室埋土直上に位置しており、6号墓の崩落を経て埋没後に形成された遺構であると考えられる。全体的に墓庭部を中心に、戦時中の攪乱を認めることができた。

それぞれの遺構の特徴については、第14表にその概要を記した。なお、墓室の類型については、第3章の第1表によるものとする。

第3節　遺物

遺物は、総計で1,755点出土した。数量と内訳は、第15表のとおりである。主たるものとしては、墓に関連する遺物としては、陶製の蔵骨器がみられ、副葬品と思われるものは比較的少ない。また、遺構の墓庭から水甕などの戦時中の遺物が多く出土し、赤瓦も多く検出された。これらの遺物については、基本的に墓ごとに取り上げ作業を行った。以下にその概要を述べる。

（1）蔵骨器

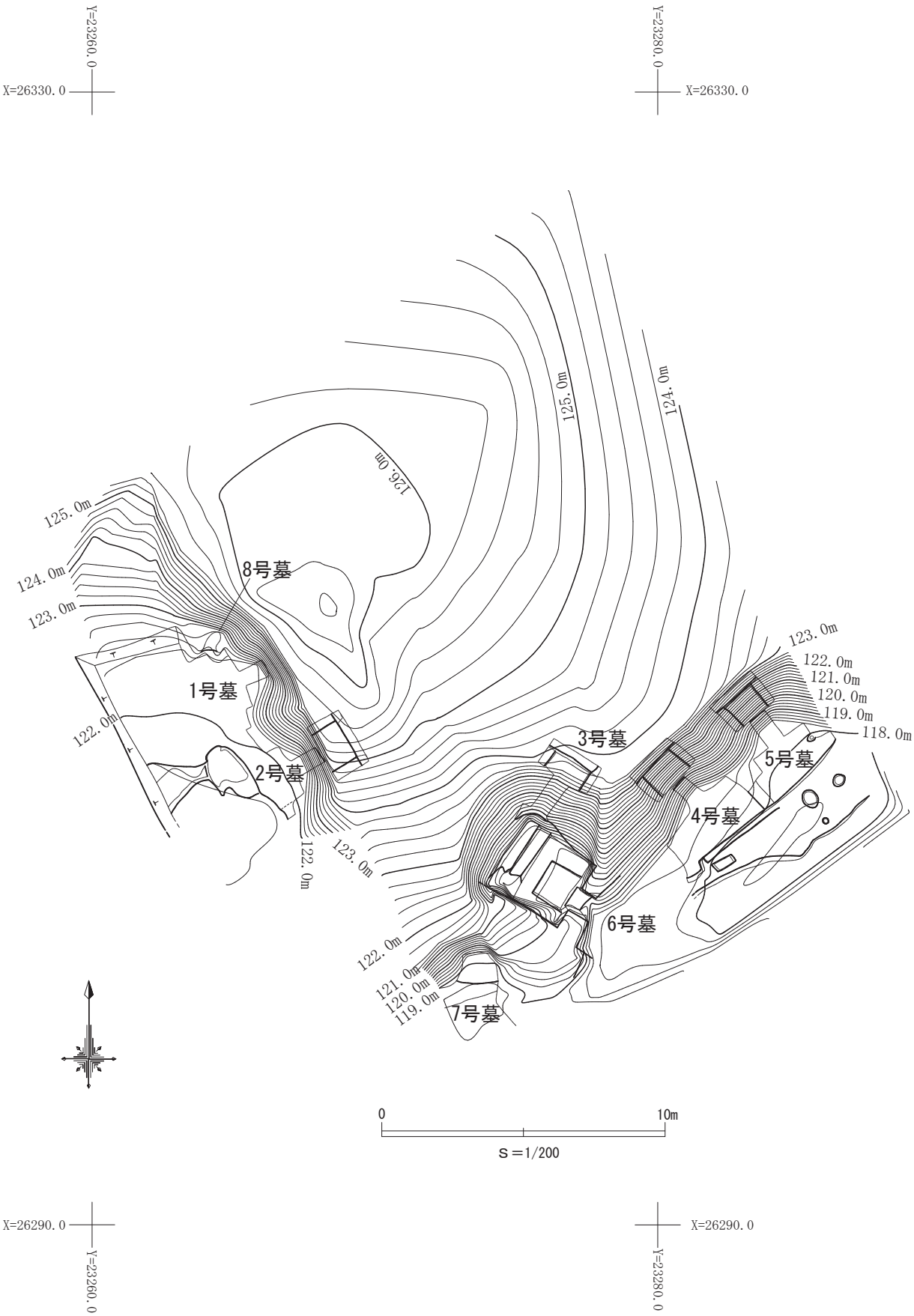
蔵骨器は全て陶製のものである。その種類と数量は第3表に記したとおりである。蔵骨器はすべて専用蔵骨器で、比較的年代が古いものとしては6号墓からボージャー形の破片が数点出土している。また、6号墓を中心にマンガン釉甕形が数点出土しており、1号墓・4号墓ではコバルト釉御殿形の蔵骨器が完形で検出された。1号墓では火葬用と思われる上焼甕形の蔵骨器が検出された。遺構内が埋没している墓が少ないため、蔵骨器を含めた遺物の残存状況は総じて良くない。また、埋没墓である6号墓についても、墓室内が戦時中に攪乱されており、戦争関係遺物も多く検出された。6号墓以外の遺構も、戦時中の攪乱を受けていたり、戦後墓の移転が行われ空き墓となっている遺構が多かった。そのためか蔵骨器の出土数は比較的少ない傾向にあった。

蔵骨器の時期としては、ボージャー形の破片が数点のみの出土であることや、マンガン釉甕形もほとんどが破片資料であるため年代の詳細は不明である。最も特徴的なのはコバルト釉御殿形と上焼甕形の出土である。これらは戦前から戦後にかけて流通した資料であるため、墓の使用が近代から現代まで継続的に行われたことを示している。

次章では、比較的状態が良い墓を取り上げた上で個別に報告を行うが、その中で蔵骨器については状態の良いものを中心に、その特徴について報告を行う。またこれらの蔵骨器には、墨書の銘書が記されたものが多数確認されている。その内容は、次節に記すためここでは割愛する。

（2）蔵骨器以外の遺物

蔵骨器以外では、陶器の水甕や小物、瓦が多く出土している。香炉などを除いては、墓に伴う副葬品などの遺物はほとんど検出されていない。陶磁器類については、水甕や碗や皿などの食器類が多数出土しているが、いずれも近代に流通したものであり、戦時中に避難壕として使用され、これらの遺物が持ち込まれた可能性が想定される。また、墓庭付近に瓦が多く検出されている遺構もある。すべて近現代の赤瓦であり、周辺に戦中や戦後などに何らかの建物が建てられていた可能性もある。また、銃剣やボタンなど明らかに戦時中のものと思われる遺物も確認されており、この丘陵周辺は軍人が立ち入るような場所であったことを物語っている。上記の遺物については、次節に墓ごとに特徴的なものを図示して報告を行う。



第 24 図　前田西上原 A 丘陵地形図

第 14 表　西上原Ａ丘陵の遺構一覧表

番号	外観形式	墓室類型	墓室（㎡）	墓口方位	墓室法量(m)			蔵骨器の出土状況	一次葬の出土状況	備考
					高さ	幅	奥行			
1号墓	掘込墓	1b	(0.30)	西南西 N104° W	(0.86)	0.60	0.92	○	×	天井が崩落した埋没墓。墓室平面形は方形。墓口部分は崩落しており、残存していない。墓室内埋土から蔵骨器片（1個体分）を検出。
2号墓	掘込墓	3b	2.77	南西 N132° W	1.40	2.14	1.32	×	×	天井が残存する墓。墓室平面形は方形。奥壁側と左右に一段の棚を有する。墓庭の一部には戦時中の攪乱あり。
3号墓	掘込墓	3b	2.21	南南西 N150° W	1.34	2.40	1.20	×	×	天井が残存する墓。墓室平面形は方形。墓庭の直下に6号墓が位置するため、6号墓が埋没した後に造られた墓であると考えられる。
4号墓	掘込墓	3b	2.31	東南東 N111° E	1.40	2.06	1.34	○	×	天井が残存する墓。墓室平面形は方形。奥壁側と左右に一段の棚を有する。墓室内より蔵骨器が検出。墓庭に大きな攪乱あり。
5号墓	掘込墓	3b	2.43	南東 N142° E	1.50	1.82	1.32	×	×	天井が存存する墓。墓室平面形は方形。墓室内より、戦争遺骨が検出された。また墓庭には戦時中の攪乱あり。
6号墓	掘込墓	5a	6.04	東南東 N112° E	−	2.53	2.70	○	×	天井が崩落した墓。墓室平面形は方形。3号墓の墓庭部分の直下に位置する。墓室埋土より戦争遺物が出土。シルヒラシには蔵骨器片が検出された。
7号墓	掘込墓	1a	(1.26)	南 N176° E	−	1.24	1.10	×	×	天井が崩落した遺構。墓室平面形は不成形。遺構内からは戦時中の遺物が出土したため、壕として利用された可能性がある。
8号墓	掘込墓	1a	(0.15)	西南西 N110° W	−	0.40	0.73	×	×	1号墓の左袖部に位置する小規模な遺構。遺構内からは瓦が出土した。位置や規模から1号墓の脇墓の可能性がある。

※括弧付きは残存部分の数値

第 15 表　西上原Ａ丘陵の遺物一覧表

種類		墓	001号		002号		003号		004号			005号		006号			007号	008号	コンクリート墓	合計
			墓庭	墓室	墓庭	墓室	右袖	墓室	右袖	墓庭	墓室	墓庭	墓口	斜面表採	墓庭	墓室	墓室	床面直上		
蔵骨器	ボージャー形	蓋																		0
		身																		0
		破片														8				8
	マンガン釉甕形	蓋														1				1
		身													1	1				2
		破片						1	1			1			11	96				110
	マンガン釉庇付甕形	蓋																		0
		身																		0
		破片													1					1
	御殿形(陶製)	蓋		1							1									2
		身		1							1									2
		破片			1										12	179				192
	上焼甕形	蓋	1																	1
		身	1																	1
		破片												2	1					3
	現代厨子	蓋																	2	2
		身																	2	2
		破片	1			1			1											3
陶磁器	水甕	完形																		0
		破片			10					6		3			26	295				340
	瓶	完形	2						3	1		4								10
		破片	1						7	1										9
	碗	完形			1					4					2	8				15
		破片	3		26					1				1	5	20				56
	皿	完形								1										1
		破片			2					4						3				9
	小杯	完形						1		5										6
		破片			1											4				5
	湯のみ	完形	4						8	2		3				1				18
		破片							1	1										2
	壷	完形														1				1
		破片								4										4
	アンダガーミ	完形																		0
		破片														1				1
	水注・急須	完形														1				1
		破片														1				1
	蓋	完形														3				3
	擂鉢	破片	1																	1
	香炉・火入	完形	1				1													2
		破片												1						1
	灯明具	破片			1															1
	火炉	完形			1															1
		破片			3															3
	不明		2	1	16				4	6		5				21	3			58
煙管																1	1			2
瓦			202	1	2				50	443		28	10		8	84		8		836
石製品																1				1
銃剣			1																	1
不明鉄製品										1						3				4
ボタン										1										1
靴類																2	1			3
ガラス製品			4				1	1		4					1	5				16
木片										1						2				3
その他					1				1	1					1	4	1			9
合計			224	4	65	1	2	3	76	487	2	44	10	4	69	746	6	8	4	1,755

第４節　各墓の調査成果

前田西上原地区Ａ丘陵の調査では、合計８基の遺構が確認され、墓に関係する蔵骨器や副葬品等の遺物が出土している。これらの遺構と遺物の概要については、第２～３節の第 14 ～ 15 表に既に示したとおりである。本章では、これらの墓の中から遺構と遺物が確認できた４基（1･4･6･8 号墓）の報告を行う。なお、遺物の取り上げ番号については遺構図中に番号を図示しており、本章で報告を行う以外の墓については、第 24 図と第 14 ～ 15 表及び第４節（4）の図版 30 をもって報告とする。

（１）１号墓・８号墓

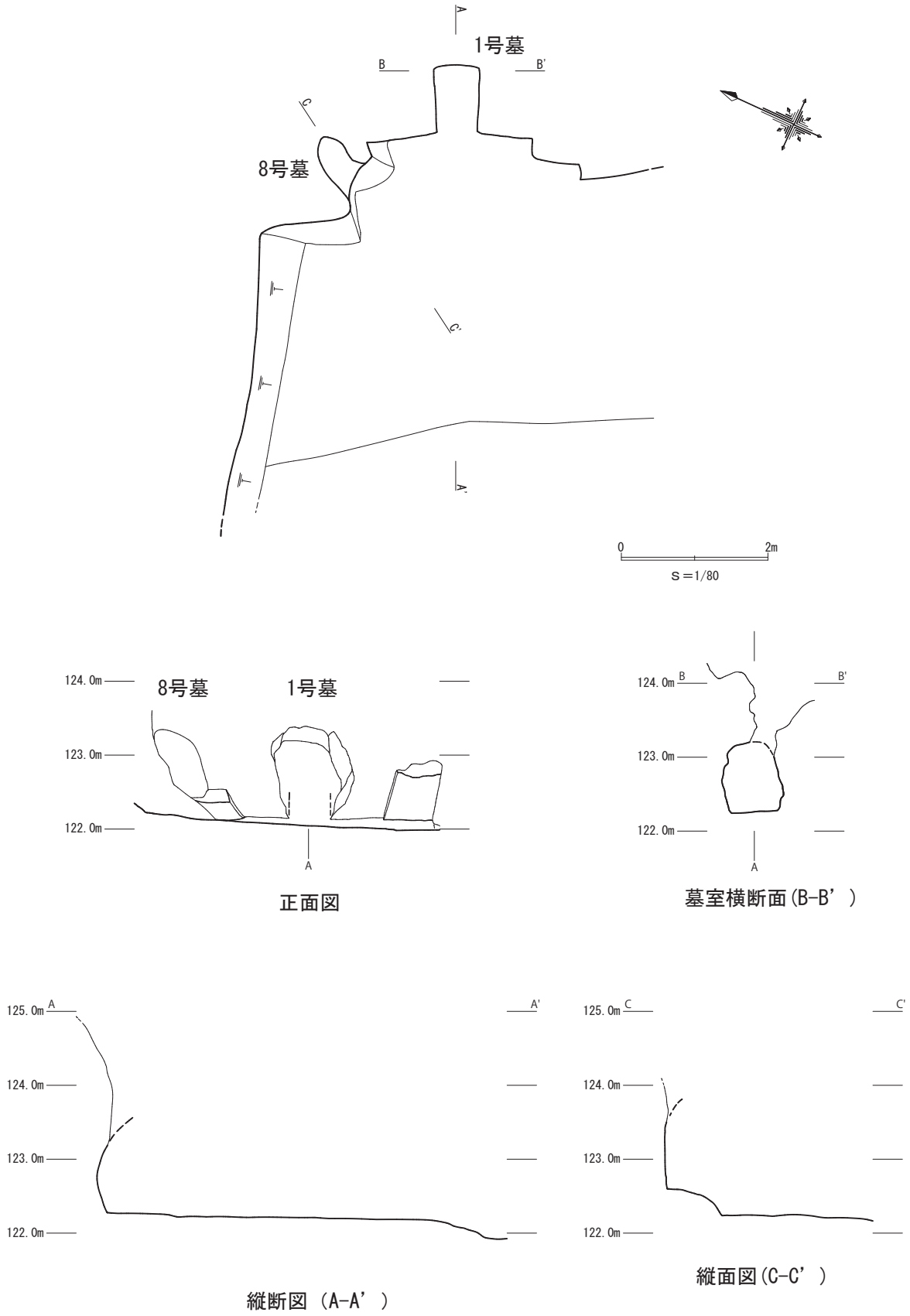
１）遺構（第 25 図）

１号墓は、丘陵西側に位置する横穴式の掘込墓で、調査区南側に位置する３から６号墓よりも標高が高い位置にある（第 24 図）。墓の立地する標高は 122 ～ 123 mである。墓庭付近は草木で覆われ、墓口がわずかに確認できる状況であった。墓室と思われる箇所はほとんど埋没していたが、遺構内の埋土を除去したところ墓室の壁面部の遺構が検出され、床面の直上から蔵骨器の１個体分の破片が検出された。

墓室の平面形は、縦長の長方形で墓口から 0.92m 掘り込んで造られており、遺構内に棚は造られていない。墓室平面形の分類は、１類ｂに分類される。墓室の幅は 0.60m で、天井は崩落により残存しないため高さは不明である。墓口の方位は、西南西（N104° W）を向く。

蔵骨器は、破損した状態であったが一個体分であり、墓の大きさはこの１個体で一杯になるくらい

図版 20　１号墓　　左上：１号墓蔵骨器出土状況、右上：８号墓遺物出土状況、
左下：１号墓完掘状況、右下１号墓・８号墓遠景


1号墓
8号墓
B
B'
C
C'
A
A'
0
2m
S＝1/80
124.0m
123.0m
122.0m
8号墓
1号墓
A
正面図
B
B'
墓室横断面(B-B')
125.0m
124.0m
123.0m
122.0m
A
A'
縦断図（A-A'）
C
C'
縦面図(C-C')

第 25 図　1 号墓遺構図

の法量であることから個人用の墓である可能性がある。墓の明確な造営年代は不明であるが、蔵骨器がコバルト釉御殿形であることや、墓庭から出土した小型の上焼甕形蔵骨器に「･･･一九五七年洗骨」の銘書があることなどから、おそらく戦前から戦後にかけて使用された墓であると考えられる。また、1 号墓の墓庭から戦時中に使用されたと考えられる銃剣などが出土していることから、この辺りが戦時中に利用された可能性も想定された。

そのほかには 1 号墓の庭囲い（右）部分に小規模な掘込みが確認された。遺構の位置や規模から 1 号墓の脇墓の可能性があることから、これを 8 号墓とした。遺構の規模は奥行き 0.74m ×幅 0.40m である。ただし、遺構内から蔵骨器は確認されておらず、かつ赤瓦が重なった状態で出土したため、もともとが墓として利用されたか遺構であるかどうか詳細は不明である。

２）遺物

1 号墓と 8 号墓から出土した遺物の種類と数量については、第 15 表を参照頂きたい。このうち、比較的残存状態の良好な蔵骨器 2 点について図化した。また、1 号墓墓庭から出土した銃剣（図版 22 の 28）と 8 号墓出土の瓦（図版 22 の 29・30）については、写真のみを掲載した。

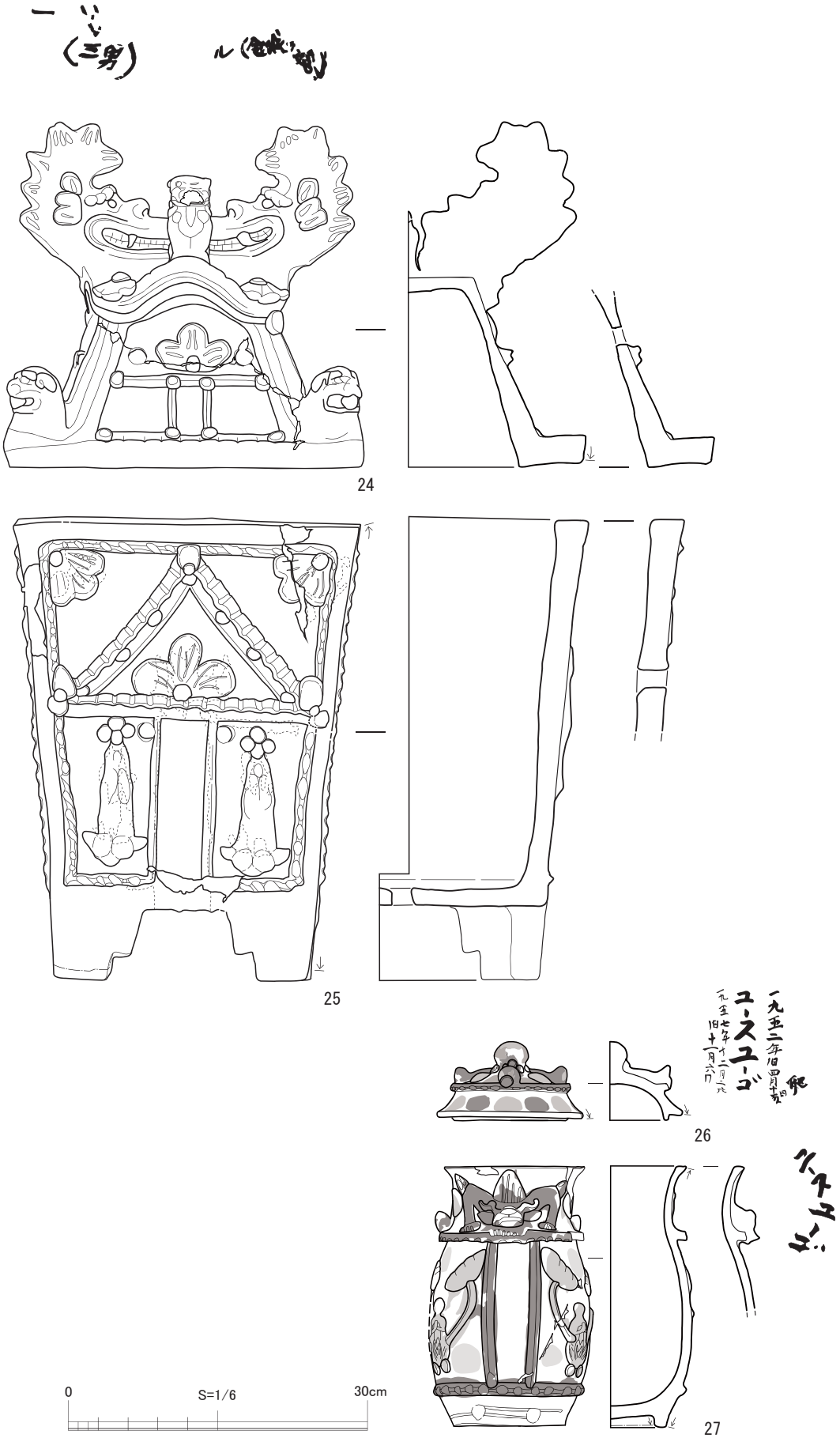
第 26 図 24 と 25 はコバルト釉御殿形の蔵骨器である。第 26 図 24 の蓋は、棟長 20.8cm、桁長 36.2cm、梁長 29.6cm、器高 34.7cm である。形状は入母屋形で、軒部分は唐破風形である。ほぼ中央付近に、円孔が四面の計 8 個あけられている。文様は主に貼付で、大棟の両端に鯱、正面唐破風軒の中央に立像獅子、その左右隅棟に亀、一階瓦屋根の四隅先端に玉取獅子がそれぞれ貼り付けられている。型造り成形で、白化粧土の上に全体的にコバルト釉が掛けられ、一部に飴釉で彩色される。蓋の内面に墨書の銘書があり、「・・・(三男)・・・ル（金城娘)」と書かれている。

第 26 図 25 の身は、上部 35.0cm × 28.9cm、底部 26.2 × 20.6cm、器高 46.8cm である。正面中央に瓦葺破風の屋門が貼付られ、破風の下に牡丹、入口の左右に仏像と蓮華が貼り付けられる。裏面には文様がない。四面に円孔が各 2 個の計 8 個あけられている。底面には円形の穴が 1 個あけられている。型造り成形で、白化粧土を施された後に、表面の屋門内以外全体にコバルト釉が掛けられ、蓋と同様に部分的に飴釉で彩色される。

第 26 図 26 と 27 は上焼甕形の蔵骨器である。第 26 図 26 の蓋は、上部径 12.0cm、口径 14.7cm、内径 11.0cm、器高 7.9cm、体部高 5.0cm である。つまみは丸い玉状につくられている。つまみから軒まで 3 本の降棟が三方に延びる。庇には 12 個の水玉文が釉薬で彩色される。轆轤成形の後に全体に白化粧土が施され、表面は施釉される。なお内面の白化粧は、刷毛塗りで施されており、刷毛目が明瞭に残る。釉色は、コバルト釉、銅緑釉、飴釉である。内面に銘書があり、「一九五二年旧四月十五日死 / ユースユーゴ / 一九五七年十二月二六 / 旧十一月六日」と書かれている。

第 26 図 27 の身は、口径 14.0cm、胴径 16.4cm、底径 11.2cm、器高 26.3cm である。正面に 2 条の貼付で屋門が造られる。また、頸部と底部付近に縄目状の横帯が 2 条貼り付けられている。屋根の軒中央部には獅子が貼り付けられる。また、表面の左右には蓮華文が貼り付けられ、裏面はコバルトで格子文が描かれる。轆轤成形の後に、白化粧土が施され、施釉されている。屋門と獅子、横帯はコバルト釉で、蓮華部分は飴釉で施釉される。口縁内面に蓋と同様に銘書で「ユースユーゴ」と書かれている。

図版 22 の 28 の銃剣は、1 号墓の墓庭から出土したものである。全体に錆がみられるが、形状が比較的分かる資料である。長さは約 39cm である。図版 22 の 29 と 30 の瓦は 8 号墓の遺構内に積まれた状態で出土したものである。29 は長さ約 31 ×幅 14cm、30 は長さ約 30 ×幅 16cm である。



第 26 図　1 号墓出土蔵骨器

24- 銘書

26- 銘書

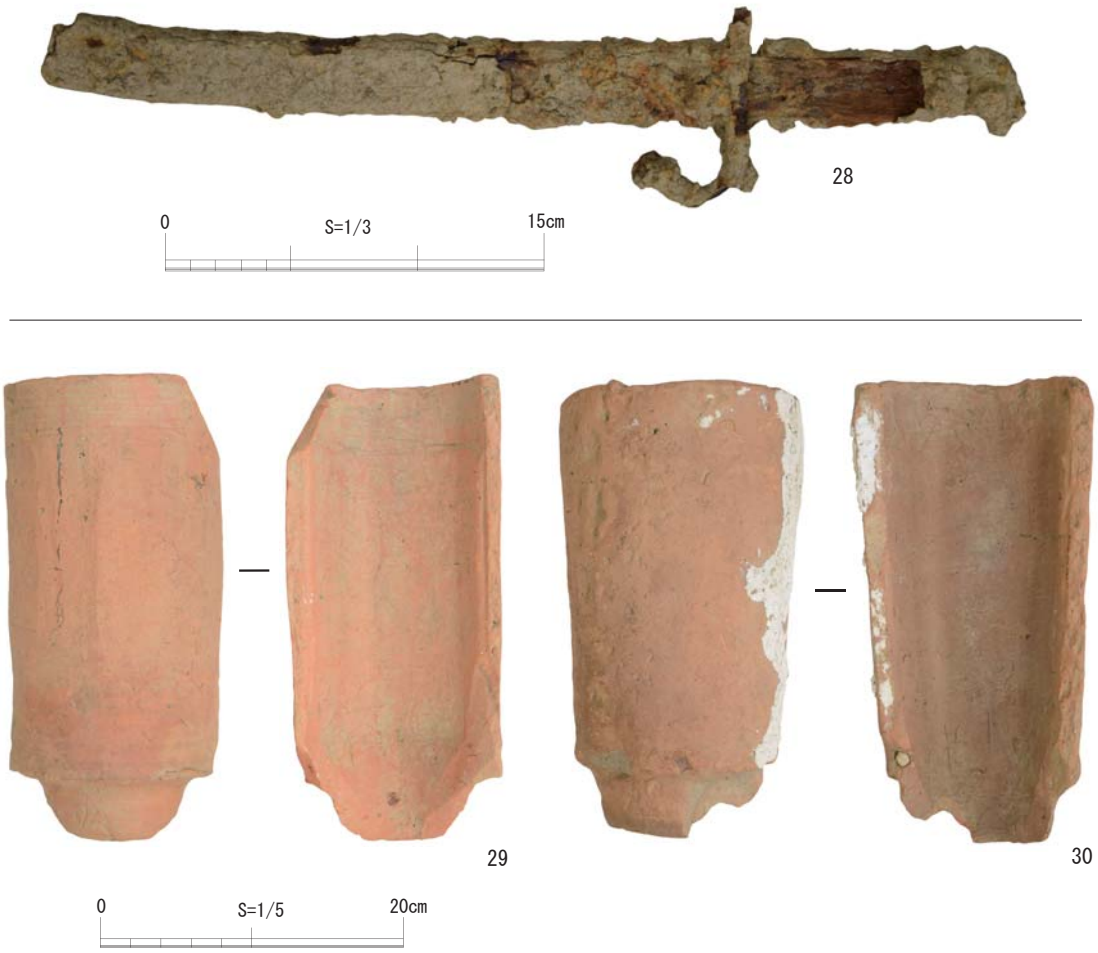
24

26

25

27

図版 21　1 号墓出土蔵骨器



図版 22　1 号墓・8 号墓出土遺物

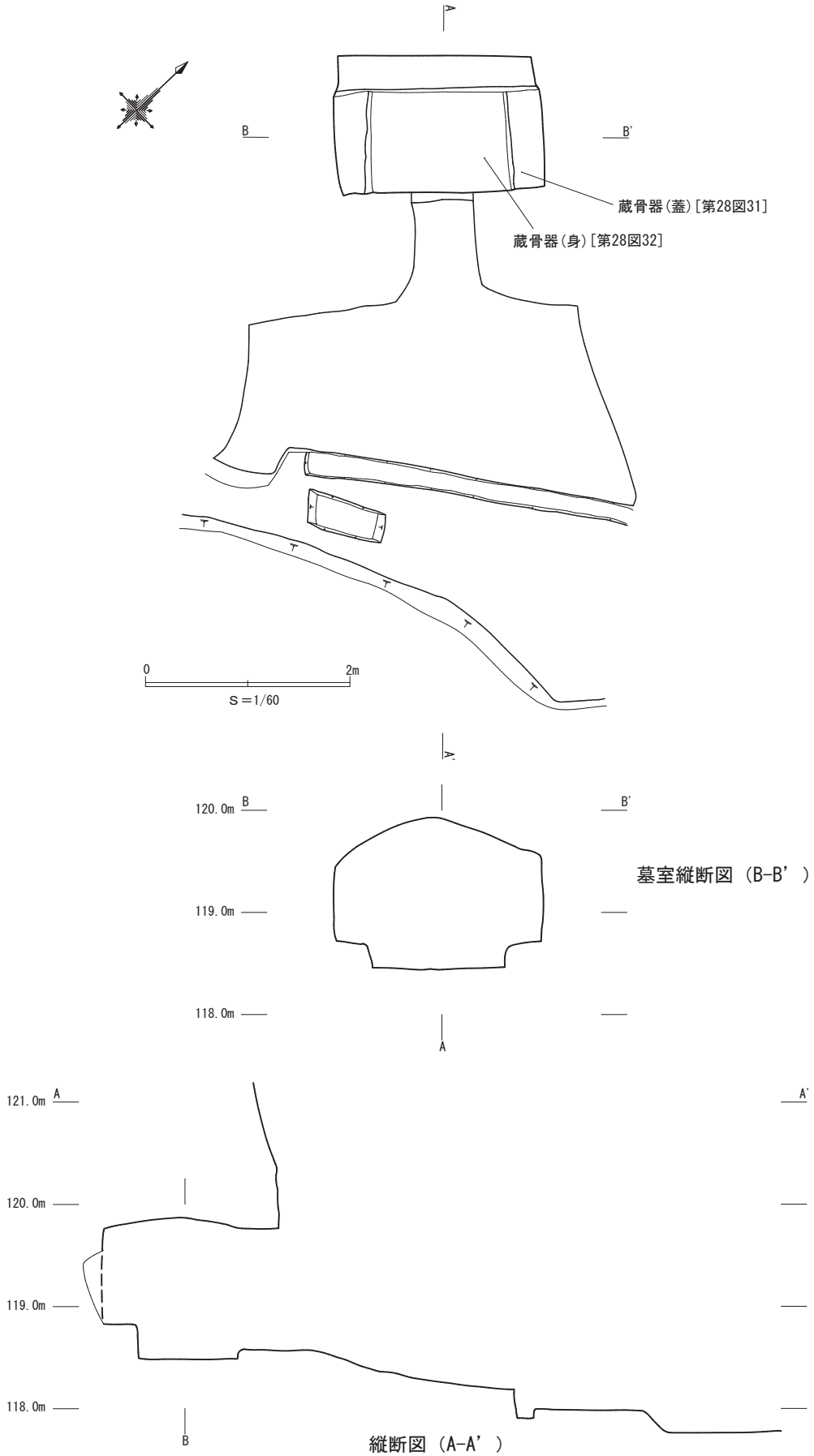
（2）4 号墓

1）遺構（第 27 図）

4 号墓は、丘陵南側に位置する横穴式の掘込墓で、調査区西側に位置する 1・2・8 号墓よりも標高が低い位置にある（第 24 図）。墓の立地する標高は 118 ～ 122 m付近である。東隣には 5 号墓があり、墓庭を共有している。墓庭付近は草で覆われていたが、墓口が見えている状態であった。墓室内はほとんど埋没しておらず、墓室内には蔵骨器一点が横倒しになった状態で検出された。

墓室の平面形は、横長の方形で奥行き 1.34m ×幅 2.06m の大きさで、奥壁側に一段、左右に一段の棚が造られる。正面棚と左右棚にわずかな段差が設けられることから、墓室平面形の分類は 3 類 b に分類される。墓室の天井の高さは 1.40m である。墓口の方位は、東南東（N111° E）を向く。

墓室内から出土した蔵骨器は、一個体である。墓の明確な造営年代は不明であるが、蔵骨器がコバルト釉御殿形であることなどから、おそらく戦前から戦後にかけて使用された墓であると考えられる。また、1 号墓と同様に墓庭から戦時遺物や赤瓦などが出土していることから、同遺構の周辺が戦時中から戦後にかけての攪乱を受けている可能性が考えられる。


A
B
B'
蔵骨器(蓋)[第28図31]
蔵骨器(身)[第28図32]
0
2m
S＝1/60
A'
120.0m
B
B'
119.0m
118.0m
A
墓室縦断図（B-B'）
121.0m
A
A'
120.0m
119.0m
118.0m
B
縦断図（A-A'）

第 27 図　4 号墓遺構図

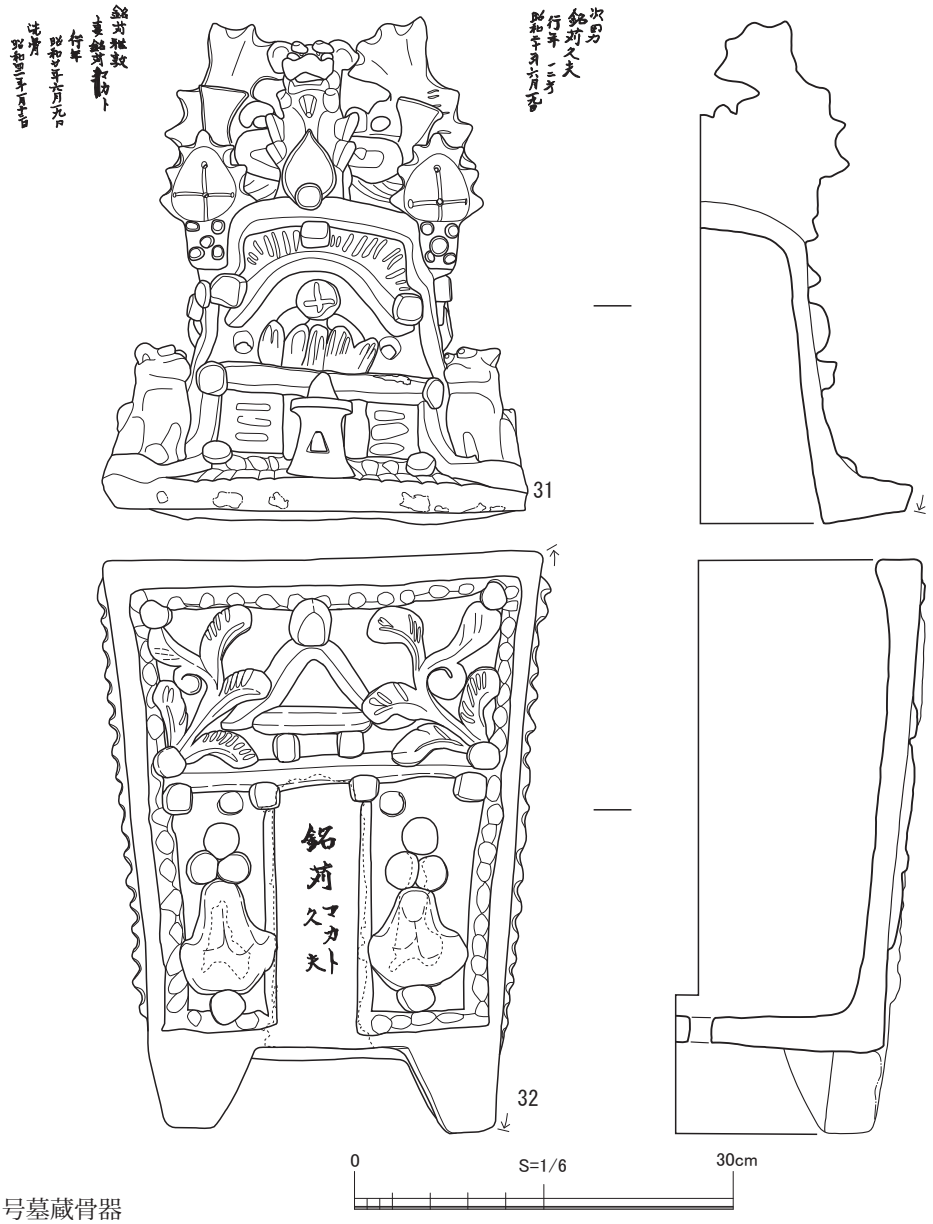
図版 23　4 号墓遺構　　上段左：墓正面、上段右：墓室内蔵骨器検出状況
下段左：シルヒラシ完掘状況、下段右：左壁完掘状況

２）遺物

4 号墓から出土した遺物の種類と数量については、第 15 表を参照頂きたい。このうち、墓室内から出土した蔵骨器 1 点と墓庭から出土した陶磁器 6 点について図化した。以下に詳細を報告する。また、同じく墓庭から出土したボタン 1 点（第 29 図 39）については、写真のみの報告とする。

第 28 図 31 と 32 はコバルト釉御殿形の蔵骨器である。第 28 図 31 の蓋は、棟長 18.0cm、桁長 33.6cm、梁長 27.6cm、器高 40.1cm である。形状は入母屋形で、軒部分は唐破風形である。ほぼ中央付近に、円孔が四面の計 8 個あけられている。文様は主に貼付で、大棟の両端に鯱、正面唐破風軒の中央に獅子、一階瓦屋根の正面左右には獅子が貼り付けられている。型造り成形で、白化粧土の上に全体的にコバルト釉が掛けられ、一部に飴釉で彩色される。蓋の内面に墨書の銘書があり、「銘苅雅敦 / 妻銘苅マカト / 行年 / 昭和廿年六月十九日 / 洗骨 / 昭和四二年一月十三日」「次男 / 銘苅久夫 / 行年一二才 / 昭和二十年六月一九日」と書かれている。

第 28 図 32 の身は、上部 34.4cm × 27.6cm、底部 26.6 × 17.2cm、器高 45.6cm である。正面中央に瓦葺破風の屋門が貼付られ、その左右に葉文が貼り付けられる。また、銘書面の左右には蓮華に乗った法師像が貼り付けられる。裏面は、コバルト釉と飴釉で水玉文が描かれる。四面に円孔が各２個の計 8 個あけられている。底面には円形の穴が 1 個あけられている。型造り成形で、白化粧土を施された後に、表面の屋門内以外全体にコバルト釉が掛けられ、蓋と同様に部分的に飴釉で彩色される。屋門内に墨書の銘書があり、「銘苅マカト / 久夫」と書かれている。



第 28 図　4 号墓蔵骨器

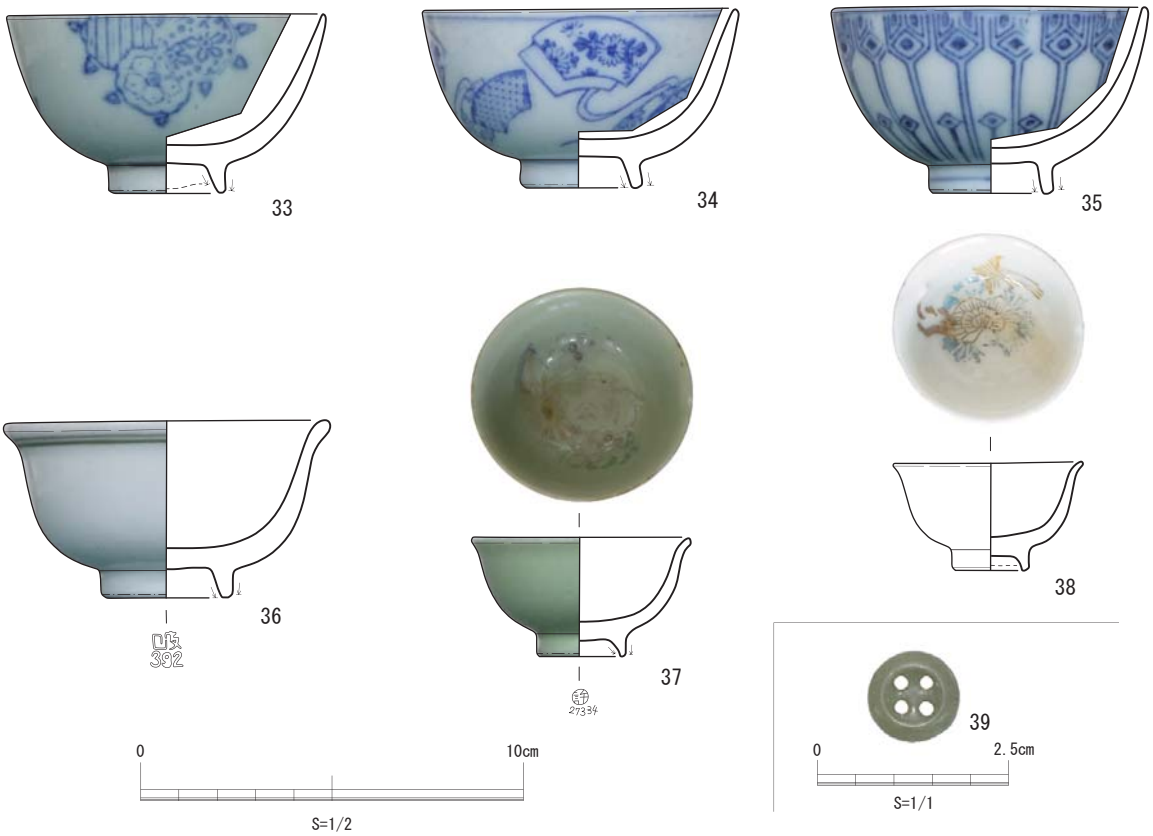
図版 24　4 号墓蔵骨器

第 29 図 33 から 38 は、墓庭出土の陶磁器である。詳細については、第 16 表を参照されたい。

第 29 図 39 のボタンは、直径約 1.2cm で緑色の色調である。中央に穴が 4 つあけられている。軍服のボタンであると考えられる。

第 16 表　4 号墓出土陶磁器の観察一覧表

番号	出土地点	器形	残存部位	口径	器高	底径	施釉	釉色・色調	貫入	文様等	備考
第29図33	墓庭埋土	碗	ほぼ完形	8.30	4.70	3.10	コバルトでの型絵染付後、全体に青みがかった透明釉を掛ける。畳付は露胎。	全面：青みの強い透明釉 文様：コバルト	なし	外面に花柄文。高台上部に二条圏線、高台内側に一条圏線。内面は無文。	瀬戸美濃産。
第29図34	墓庭埋土	碗	完形	8.20	4.70	3.20	全面に透明釉を施釉。コバルトにより文様。畳付は露胎。	全面：白色 文様：コバルトの鮮やかな発色	なし	外面に二枚重ねの扇文をゴム印で一周配置する。扇の中には菊花文等が描かれる。	瀬戸美濃産。子供用の碗か。
第29図35	墓庭埋土	碗	完形	8.30	4.90	3.30	コバルトでの型絵染付後、全体に透明釉を掛ける。畳付は露胎。	全面：透明釉 文様：コバルトの鮮やかな発色	なし	外面に大小の菱形を基本とした文様を配し、菱形下部から高台にかけて茎上に二本線が描かれる。	瀬戸美濃産。子供用の碗か。
第29図36	墓庭埋土	碗	完形	8.50	4.65	3.45	全面に透明釉を施釉。畳付は露胎。	全面：白色 文様：緑色	なし	外面の口縁部直下に二条の圏線。	国民食器。美濃産。底部に「岐392」と押印された統制番号あり。
第29図37	墓庭埋土	小杯	完形	5.80	3.10	2.35	全面にクロム釉を掛ける。畳付は露胎。	全面：緑色 文様：黒・赤・緑等で彩色	なし	内面に桜の花弁に「義勇奉公」と描かれ周囲に旭日旗が描かれる。「支那事変記念」の文字あり。	瀬戸美濃産/底部に「許27334」と押印される。
第29図38	墓庭埋土	小杯	完形	5.00	2.80	2.00	全面に透明釉を施釉。畳付付近に砂目痕がみられる。	全面：透明色 文様：褐色・緑で彩色	なし	内面に褐色で花文が描かれ、周囲に緑で葉文が描かれる。	瀬戸美濃産。



第 29 図　4 号墓出土遺物

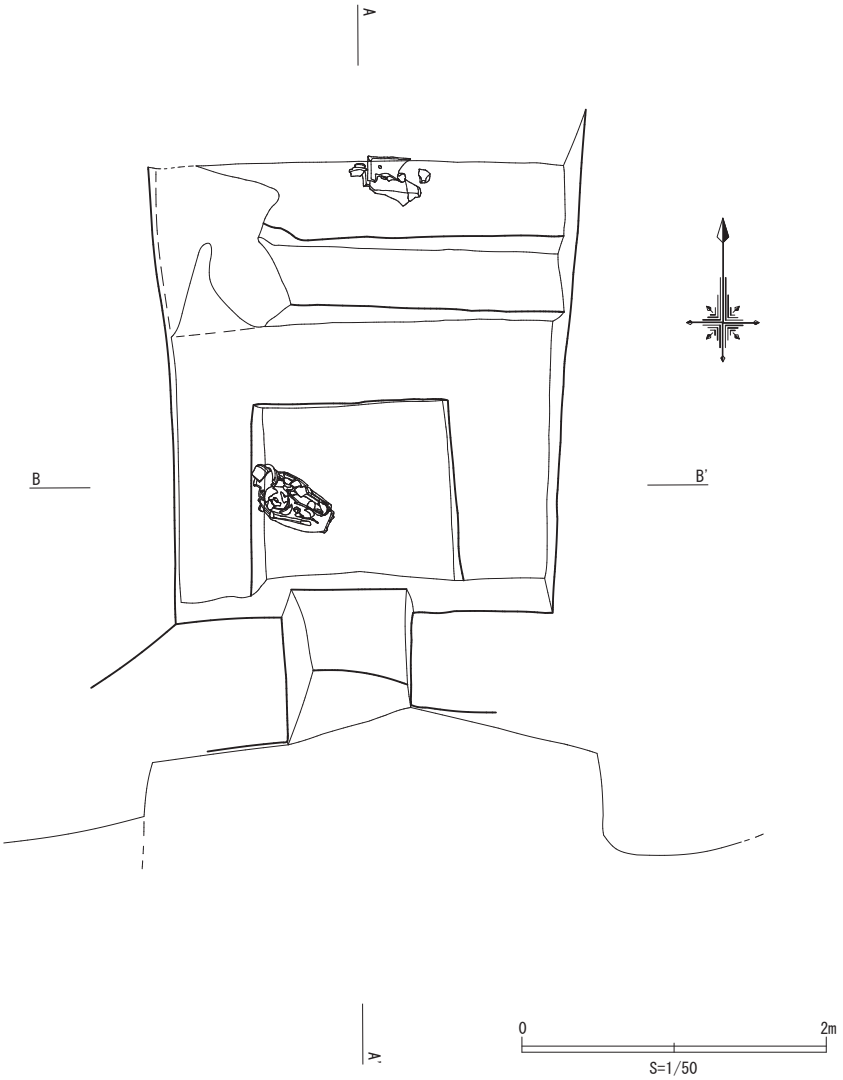
（3）6 号墓

1）遺構（第 30 図）

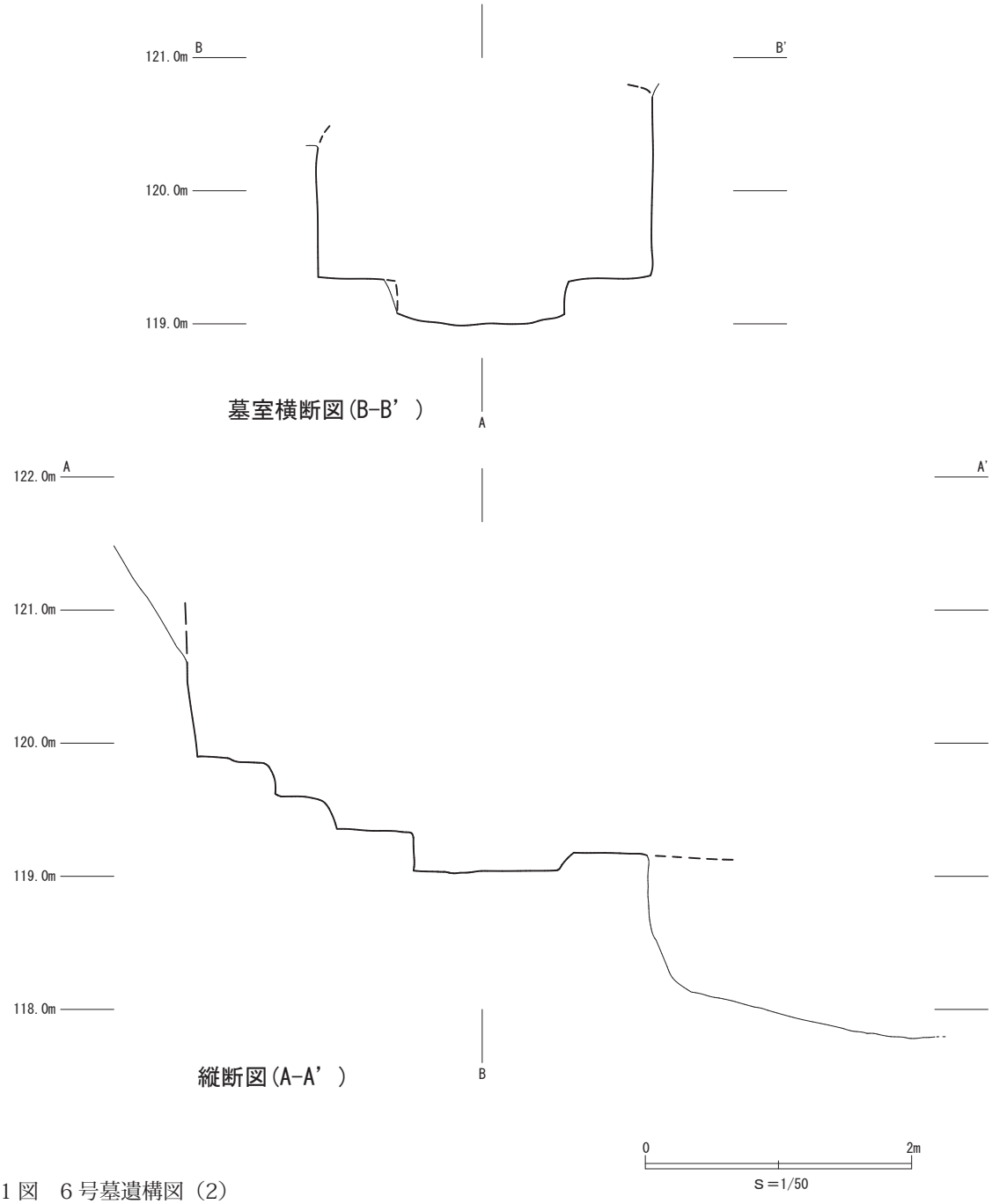
6 号墓は丘陵南側に位置する横穴式の掘込墓で、4 号墓や 5 号墓の東側のほぼ同じ標高に造られている（第 24 図）。墓の立地する標高は 約 118 ～ 122 mである。3 号墓の墓庭埋土を掘削すると、下段より遺構が検出されたことから掘り下げを進めたところ、埋土から戦時中の遺物が多数出土し、それらを含む埋土をすべて除去すると、その下から墓室と蔵骨器などの遺物が検出された。このことから、6 号墓が戦時中もしくは戦後に埋没した後に、その上部に 3 号墓が造営されたと考えられる。

6 号墓は天井が崩落して埋没した墓である。墓室の平面形は、横長の方形で奥行き 2.70m ×幅 2.53m の大きさである。墓室の奥壁側に二段の棚が造られ、その下に更にコの字状の一段の棚が造られる。その形状から、墓室平面形の分類は 5 類 a に分類される。墓室の天井の高さは残存していないため、不明である。墓口の方位は、東南東（N112° E）を向く。

遺物としては、墓室内からマンガン釉甕形と陶製御殿形の蔵骨器の破片が多く検出された。特に、シルヒラシからマンガン釉甕形に人骨が入った状態の蔵骨器が 1 点横倒しになって検出された（図



第 30 図　6 号墓遺構図（1）



第 31 図　6 号墓遺構図（2）

図版 25　6 号墓遺構（1）　　左：墓正面、右：墓室内蔵骨器検出状況

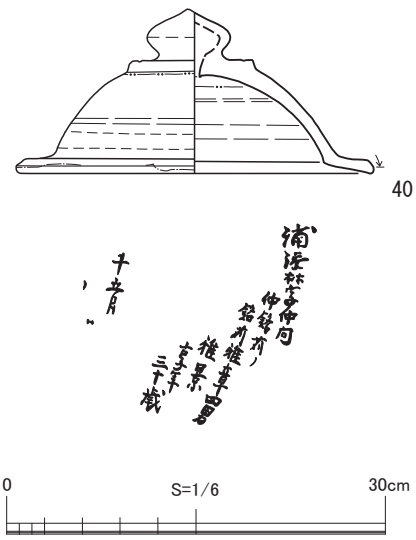
図版 26　6 号墓遺構（2）　　左：墓正面、右：墓室内完掘状況

30・図版 25)。また 1 番棚からは陶製御殿形の蔵骨器片が出土した（第 30 図・図版 25)。いずれも遺物の残存状態は良くないため、詳細は不明である。このほかにはボージャー形の破片がわずかに検出されている。そのため遺構の使用年代がボージャー形の概ねの下限にあたる 1800 年前後まで遡る可能性がある。ただし、これについても遺物の残存状況が良くないことやほかに年代を示す銘書を有する資料も出土していないため、墓の造営年代や使用年代の詳細は不明である。

また、墓室の埋土からは大量の戦争遺物や遺骨が出土していることから、戦時中にこの遺構が壕として利用されるなどの攪乱を受けている可能性が高いと考えられる。

2）遺物

6 号墓から出土した遺物の種類と数量については、第 15 表を参照頂きたい。このうち、墓室内から出土した蔵骨器の蓋 1 点と戦時中に使用されたと思われる遺物 22 点について図化および写真撮影



第 32 図　6 号墓出土蔵骨器

図版 27　6 号墓出土蔵骨器

を行った。以下に詳細を報告する。

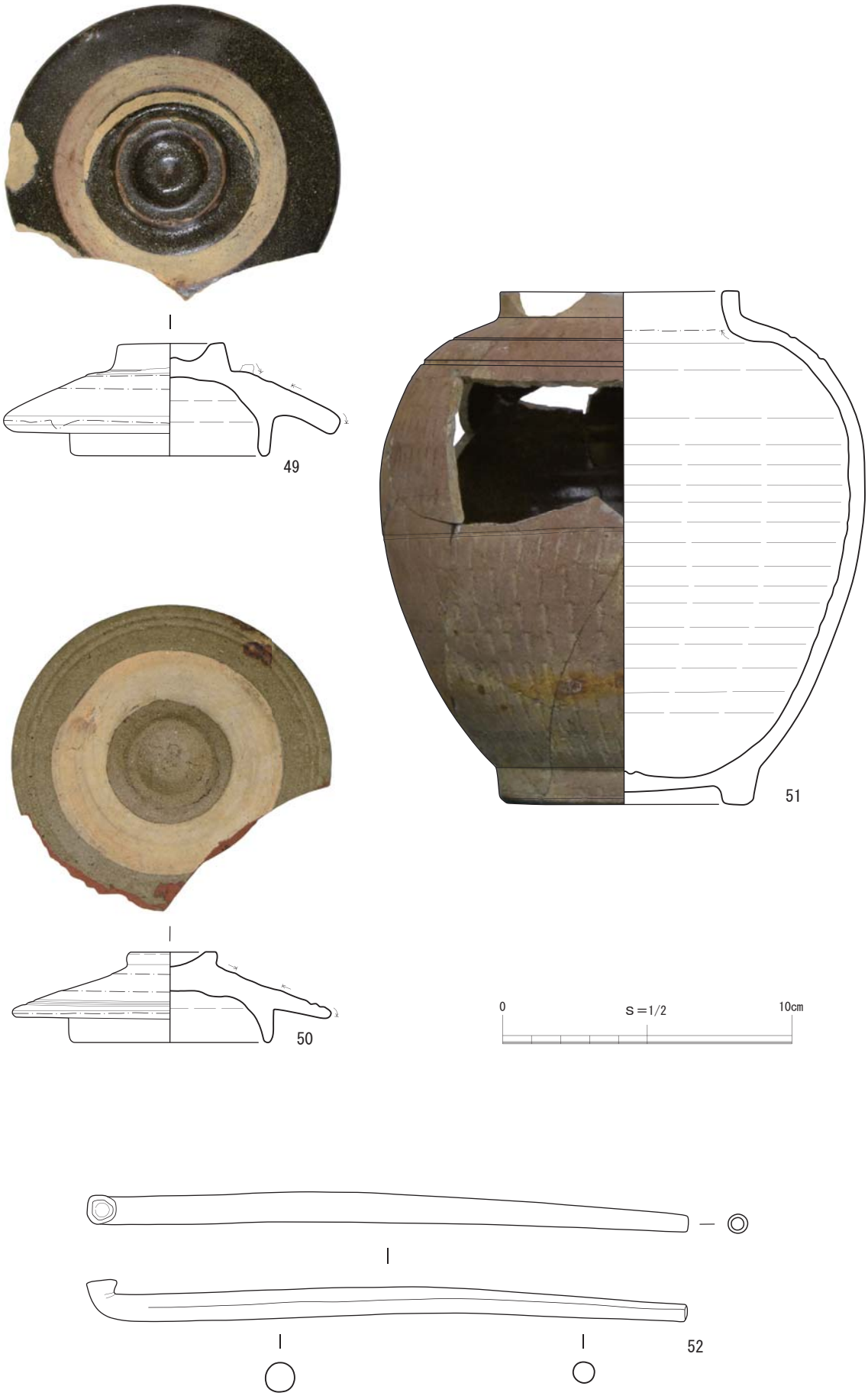
第 32 図 40 は、マンガン釉甕形の蓋で墓室から出土した資料である。上部径が 9.8cm、口径が 28.4cm、内径が 20.2cm、器高が 13.0cm、体部高が 9.0cm である。つまみは宝珠形でつまみ接合部に孔があく。つまみ台は一段で台上に一条の圏線がめぐる。鍔部分は 4.0cm でかえりはない。外面全体にはマンガン釉が掛けられる。内面には以下の墨書の銘書が書かれる。「浦添村字仲間 / 仲銘苅ノ / 銘苅雅章四男 / 雅景 / 享年 / 三十歳・・・年五月 / 洗骨」。

第 33 図から第 34 図は陶磁器については、第 17 表を参照いただきたい。なお、第 34 図 52 は、銅製のキセルである。全長 20.8㎝で、雁首の火皿径 1.00㎝、立ち上がり 1.4㎝、吸口は吸口径 0.7㎝である。墓室埋土より出土したものである。

第 17 表　6 号墓出土陶磁器の観察一覧表

番号	出土地点	器形	残存部位	口径	器高	底径	施釉	釉色・色調	貫入	文様等	備考
第33図41	墓庭南側埋土	碗	ほぼ完形	13.20	5.80	5.00	コバルトでの型絵染付後、全体に透明釉。見込に目痕あり。畳付は露胎。	全面：白色・透明釉 文様：コバルト	なし	外面に点描でひし形の窓を描きその中に花文を配する。内面は口縁部近くに点描、見込みに花文を配する。	スンカンマカイ。砥部産。大正～昭和。底部に印あり。
第33図42	墓室埋土	碗	口縁部から底部（約半分）	8.40	4.65	3.10	コバルトでの型絵染付後、全体に透明釉を掛ける。畳付は露胎。	全面：白色・透明釉 文様：濃淡のコバルト	なし	外面に薄い水色で竹が描かれ、濃淡のあるコバルトで葉が描かれる。	瀬戸美濃産。子供用の碗か。見込みに「丹山」の銘あり。
第33図43	墓室埋土	碗	口縁部から底部（約半分）	7.70	5.30	3.10	全面に透明釉を施釉。コバルトにより文様。畳付は露胎。	全面：白色・透明釉 文様：コバルトのにぶい発色	なし	外面に濃淡のあるコバルトで蔓状の文様が描かれるが、完形資料でないため、形状は不明。	美濃産。子供用の碗か。底部に「岐131」の統制番号あり。
第33図44	墓室埋土	碗	ほぼ完形	8.10	4.80	3.00	コバルトでの型絵染付後、全体に透明釉を掛ける。畳付は露胎。	全面：白色・透明釉 文様：コバルト	なし	外面の二条圏線内の胴部一周に鶴の文様が描かれる（六面）。内面は口縁部内側に一条の圏線が描かれる。	瀬戸美濃産。子供用の碗か。
第33図45	墓室埋土	碗	ほぼ完形	8.20	4.60	3.10	コバルト・薄紅色での型絵染付後、全体に透明釉を掛ける。畳付は露胎。	全面：白色・透明釉 文様：コバルト・薄紅色で彩色	なし	外面に花文を描き、花弁と蕾のみ薄紅色で、葉と茎はコバルトで彩色される。	瀬戸美濃産。子供用の碗か。
第33図46	墓室埋土	碗	口縁部から底部（約半分）	7.90	4.60	3.30	コバルトでの型絵染付後、全体に透明釉を掛ける。畳付は露胎。	全面：白色・透明釉 文様：コバルト	なし	外面口縁部近くに渦巻文を描き、高台近くにも小さな渦巻文を配する。渦巻文の周囲に葉文が描かれる。	瀬戸美濃産。子供用の碗か。
第33図47	墓室埋土	急須（蓋）	完形	5.30	3.40	－	白化粧後、全体に灰釉が掛けられ緑釉彩色される。内面は露胎。	上面：灰色 文様：緑釉で彩色	あり	上面に緑釉で「レ」の字状の一筆書きが描かれる。	沖縄産（壺屋焼）。第33図48とセット。つまみ径1.8cm。
第33図48	墓室埋土	急須（身）	ほぼ完形	6.70	10.70	6.40	白化粧後、全体に灰釉が掛けられ銅緑釉・緑釉・飴釉で彩色。内面も施釉。	全面：灰色 文様：銅緑釉・緑釉・飴釉で彩色	あり	外面胴部中央に緑釉と飴釉で彩色される。注口の周辺等は銅緑釉で彩色される。	沖縄産（壺屋焼）。第33図47とセット。
第34図49	墓室埋土	蓋	ほぼ完形	6.90	3.90	－	外面を黒釉で施釉。内面は露胎。上部を蛇の目状に釉剥ぎ。重ね焼きの痕あり。	外面：黒釉	なし	なし	沖縄産（壺屋焼）。つまみ径3.7cm。
第34図50	墓室埋土	蓋	ほぼ完形	6.80	3.10	－	外面を灰釉で施釉。内面は露胎。上部を蛇の目状に釉剥ぎ。釉剥ぎ部に白化粧。	外面：灰釉	なし	なし	沖縄産（壺屋焼）。つまみ径3.0cm。
第34図51	墓室埋土	壺	ほぼ完形	8.20	17.80	9.00	内面全体に褐釉で施釉。外面は焼締め。	外面：赤みがかった褐色 内面：褐色	なし	外面全体に複数段にわたって飛び鉋で文様がつけられる。	沖縄産（壺屋焼）。近代のもの。

第 33 図　6 号墓出土遺物（1）



第 34 図　6 号墓出土遺物（2）

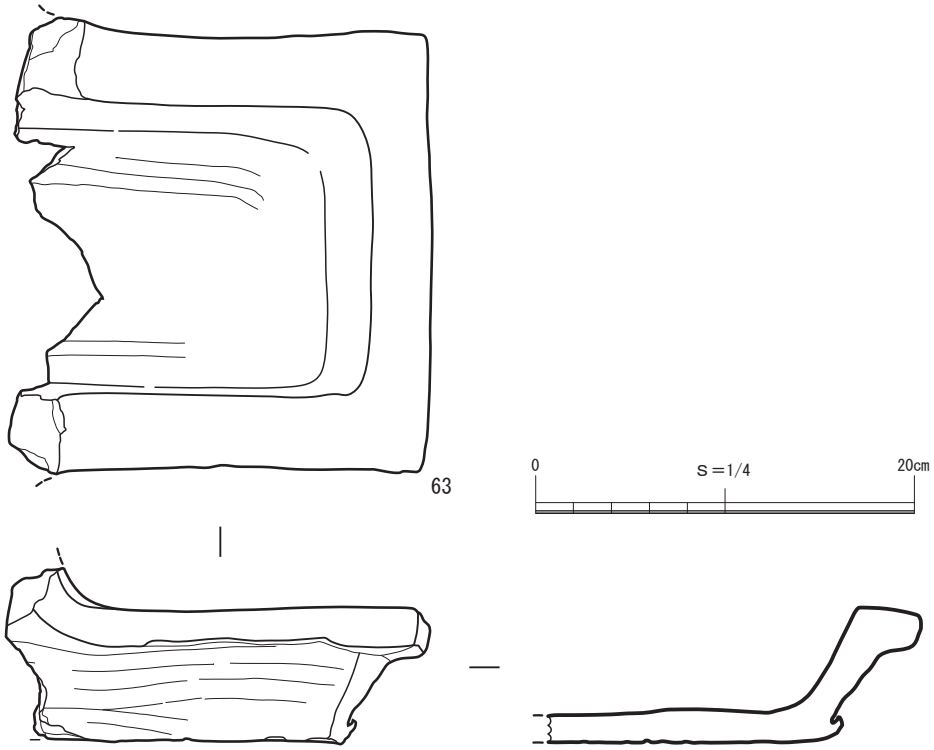
図版 28 には戦争遺物を写真のみ掲載した。図版 28 の 53 は水筒である。一部破損しているがほぼ全形が窺える資料である。墓庭南側埋土より出土。54 は金属製のスプーンである。柄の部分が一部欠損している。55 ～ 57 は、金属製のベルトのバックル周辺の部品であると思われる資料である。58 ～ 61 はプラスチック製品である。58・59 のような透明で円形の薄いフィルター状のものが複数枚重なり、60・61 の箱に収められていた。62 は靴底の破片資料である。同様の破片が数点出土した中で、最も残存状態の良い資料を掲載した。54 ～ 62 は全て墓室内埋土より出土した資料である。

図版 28　6 号墓出土遺物（戦争遺物）

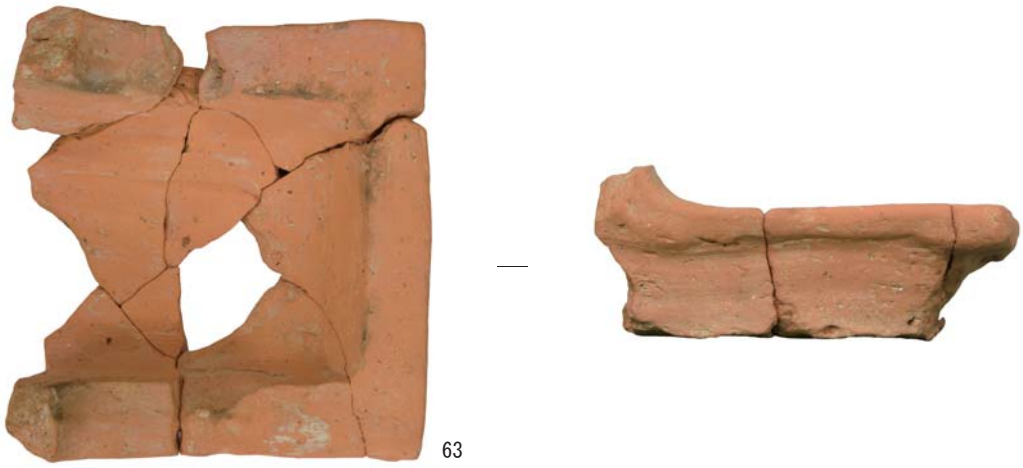
（4）その他の墓

ここまで状態の良い墓を中心に、それぞれの墓ごとにその詳細の報告を行った。それ以外の墓で出土した遺物のうち、2 号墓出土の遺物について以下に図示し報告を行う。遺構の詳細については第 14 表と第 15 表およびの図版 30 の写真を参照頂きたい。

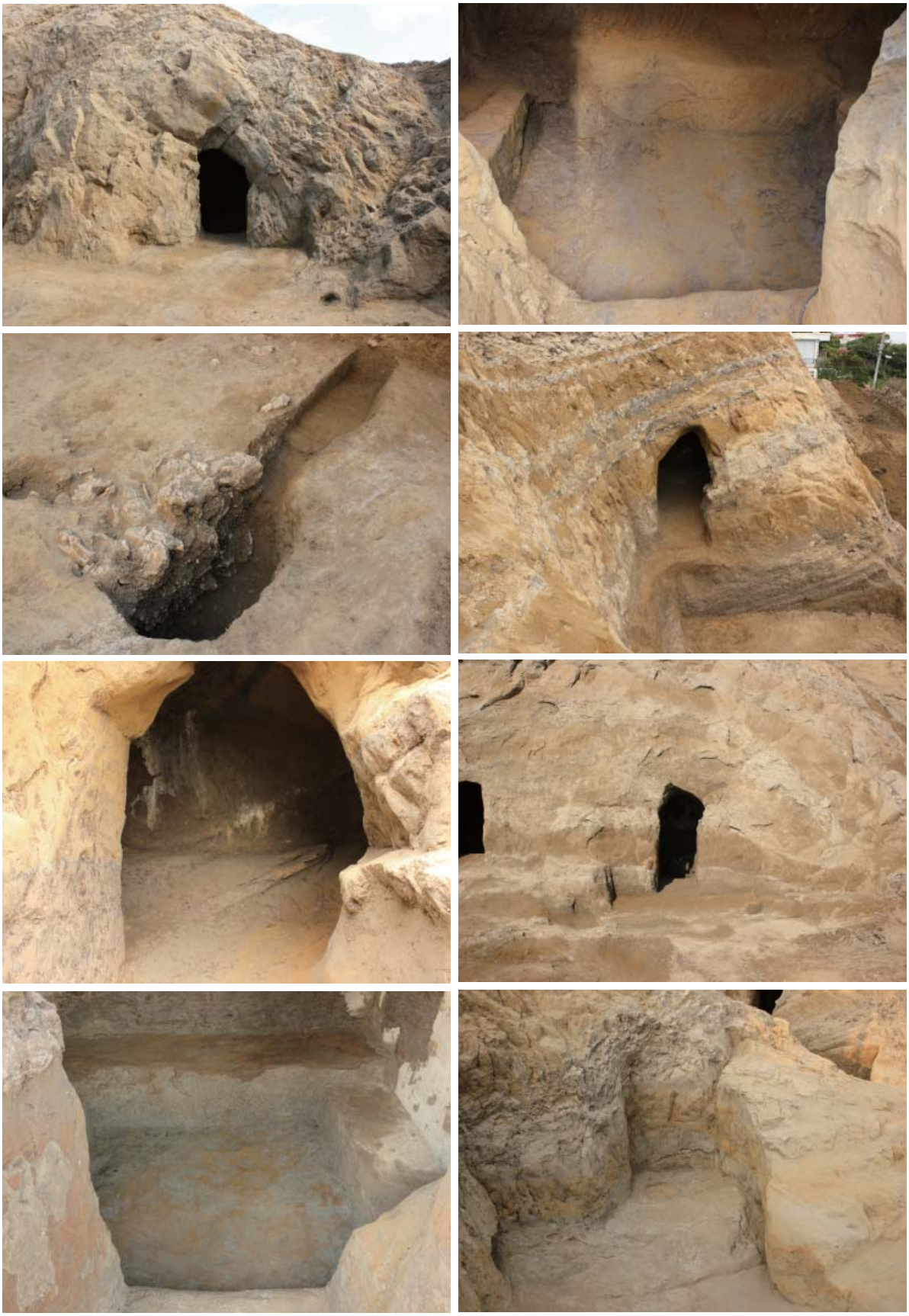
第 35 図（図版 29）63 は、陶製の火炉である。四角い浅鉢状の形状で、口縁の片側が L 字状に立ち上がる。残存部の口縁は 23.2cm、底面から口縁部までの高さ（残存部）は約 7.0cm である。器厚は底面で 1.0 ～ 1.5cm 程、側面の厚いところで約 2.0cm 程である。鍔状の口縁の幅は約 3.5cm である。色調は橙褐色で内面に一部煤の痕がみられる。2 号墓墓庭出土の集石埋土より検出された。



第 35 図　その他の墓の出土遺物



図版 29　その他の墓の出土遺物



図版 30　その他の墓

1 段目左：2 号墓完掘状況、右：2 号墓墓室内完掘状況、
2 段目左：2 号墓墓庭出土集石遺構半裁状況、右：3 号墓完掘状況
3 段目左：3 号墓墓室完掘状況、右：5 号墓完掘状況
4 段目左：5 号墓墓室完掘状況、右：7 号墓完掘状況

第５節　人骨分析に関する所見

（1）出土状況及び残存状況

本調査区では４号墓及び６号墓から人骨が出土した。両遺構とも蔵骨器が原位置で残存してはおらず、人骨の残存状態も良くない。４号墓では骨幹のみ残存する右の上腕骨が１点確認されたのみであり、出土位置が墓庭の埋土であり、本遺構に伴うものであるかどうか心許ないことから、遺構に属する個体としての計数対象からは外し、同定・観察所見のみの記載に留める。

６号墓では墓室シルヒラシの直上で出土した蔵骨器中から概ね全身の部位が認められる成人骨が残存している状況が確認されたほか、奥棚の直上、墓室埋土からそれぞれ散乱状態で検出されている。シルヒラシで検出された蔵骨器は横転した状態で、検出上面が割れているなど破損した状態であったが、蔵骨器内部に納められた状態を保った人骨が確認された。この一群については部位重複等が認められないことから、１個体分がまとまっているものであろうと考えられる。一方で、棚上や埋土などから出土している人骨については、いずれも断片的であるため、蔵骨器から出土した一群の人骨と同一個体に属するものか別個体によるものかを判断することは難しい。そのため、出土地点毎に同定部位の記載を行ったものの、一括として取り扱い、個体計数の対象からは除外している。

上記のことから、本調査区における人骨の出土は６号墓から成人１体分、４号墓の墓庭域から出土した所属遺構不明の６号墓出土個体と異なる詳細不明の１個体が最小個体として数えられる。

（２）観察所見

６号墓シルヒラシ直上で出土した蔵骨器に納められた人骨の一群は頭蓋骨、四肢骨、中手･中足骨、手根・足根骨など一部の部位が見あたらないものの概ね全身にわたる部位が重複せず同定されていることから、単一個体のものであると考えられる。扁平骨や長管骨などで完存する部位はあまり無いものの、本調査区中では比較的良好な状態で残存する資料である。

頭蓋骨では右側の顔面から頭蓋底・側頭骨にかけて欠損しているものの、脳頭蓋あるいは上下顎骨の状態は観察が可能である（図版 31）。乳様突起および外後頭隆起は比較的発達する状態が窺えるが、一方で眉弓の発達はそれ程認められない。寛骨の大坐骨切痕角の状態とも合わせると、本人骨は男性であると推定できる。また、頭蓋縫合については、内面でいずれも進行している様子がみられ、外面ではブレグマ周辺の冠状縫合及び矢状縫合で癒合が進行し始めている状態である。上下顎骨の臼歯の咬耗もある程度進行していることから成年から熟年段階であったと推察される。

残存する骨には取り立てて大きな変異は観察されていないが、顎骨に残存する歯にはエナメル質減形成が認められた。

第 18 表　西上原 A 丘陵の出土人骨一覧表

墓No.	蔵骨器No.	人骨No.	年齢	性別	出土部位	備考
4	墓庭埋土	一括	不明	不明	上腕骨R	
6	蔵骨器1	1	成年～熟年	M	頭蓋骨、下顎骨、環椎、頸椎(3)、胸椎(7)、腰椎(2)、仙骨、肩甲骨L･R、鎖骨L･R、上腕骨L･R、橈骨L･R、尺骨L･R、大菱形骨L･R、有頭骨L･R、有鉤骨L、舟状骨L･R、月状骨L、第1中手骨L･R、第2中手骨L、第3中手骨R、第4中手骨R、第5中手骨L･R、基節骨(3)、中節骨、末節骨、寛骨臼＋腸骨＋坐骨L･R、大腿骨R、膝蓋骨L･R、脛骨L･R、腓骨L･R、踵骨R、距骨L･R、外側楔状骨L、中間楔状骨L･R、舟状骨L･R、第2中足骨L、第3中足骨L、指骨(4)、中手/中足骨	
6	墓室奥棚	一括	—	—	上腕骨L、遊離歯	個体カウント対象外
6	墓室埋土	一括	—	—	頭蓋骨破片、四肢骨破片、その他細片	個体カウント対象外

第 19 表　上顎骨及び下顎骨の歯列残存状況

凡例）歯種記号:残存歯,○:歯槽開放,×:歯槽閉鎖,／:歯槽破損,
△:歯根のみ残存,( ):未萌出,〔 〕:萌出中･閉鎖中,
網掛:齲歯,空白:欠失･未形成

墓No.	地点	人骨No.	残存状況															
			R								L							
6	蔵骨器1	1									○	○	C	P^1	P^2	M^1	M^2	○
			M_3	M_2	M_1	×	P_1	○	I_2	○	○	○	C	P_1	P_2	M_1	M_2	○

第 20 表　下顎犬歯に観察されるエナメル質減形成

墓No.	蔵骨器No.	人骨No.	歯種	LR	出現数	類型	歯冠最下端からの距離(mm)	ストレス受容推定年齢(歳)	備考
6	蔵骨器１	1	C↓	L	2	線状	3.6	4.55.0	I↓・P↓・C↑・P↑にも有り
						線状	5.0	3.54.0	

※類型・計測・ストレス受容年齢推定は山本1987に従っている

図版 31　6 号墓出土人骨　　左：上面　中央：正面　右：左側面

第６節　まとめ

前田西上原Ａ丘陵では、平成 25 年度の発掘調査によって計８基の遺構を確認することができた。調査成果について遺構や遺物の詳細について報告を行ってきたが、あらためて下記の項目ごとに総括し、本調査地区のまとめとしたい。

１．遺構の特徴と墓域の形成について

前田西上原地区には２つの丘陵がみられ、その中で今回報告したＡ丘陵は東側に位置する丘陵である。丘陵の土質は砂粒砂岩 (ニービ) が主体ではあるが、丘陵の北側および西側は第三期泥岩層 (クチャ) であった。本丘陵に所在する墓はすべて、砂粒砂岩 (ニービ) の地質の丘陵に横穴を掘り込んで造られた掘込墓 (フィンチャー) である。

遺構の形態については、まず一番多いのが２号墓から５号墓までのタイプで、いずれも墓室のタイプが 3b 類に属し、大きさも比較的類似している。これらの特徴に共通性が認められることや出土遺物の傾向、互いの位置関係などから、これらの墓については造営年代が近く、かつ同時期に機能していた可能性が考えられる。いずれも埋没の度合いが小さく、比較的後世まで使用されていた痕跡が認められる点も共通している。

次に６号墓である。この墓は墓室の平面形分類が 5a 類である点で、上記の墓とは形態が異なり、かつ蔵骨器の中で破片ではあるが、ボージャー形が出土している点が注目される。この墓は３号墓の墓庭直下に位置しており、６号墓の墓室を埋めている埋土で３号墓の墓庭が形成されていることから、３号墓より古いことが判明している。ちなみに、２～５号墓においてはボージャー形の蔵骨器は確認されていない。なお、蔵骨器の銘書にある「銘苅」姓は隣に位置する４号墓と共通しており、縁戚関係にある可能性がある。

その他の墓として、１号墓と８号墓はいずれも小規模な墓で簡易的な造りである。１号墓からはコバルト釉御殿形と上焼甕形のいずれも近代の蔵骨器が出土していることから、比較的新しい墓であることがわかる。８号墓については、元々は墓として使用されたものなのか判然としない。また、７号墓についても形状が不定形で、墓ではなく壕として造られた可能性もある。

以上のことから、同丘陵では年代的に最も古い可能性があるのが６号墓であり、その造営年代は近世まで遡る可能性がある。６号墓と横並びに造られた４号墓や５号墓は、比較的近い時代に造られた可能性が想定されるが、戦時中の攪乱が著しく、また墓の移転作業が行われ情報量に乏しいため、詳細は不明である。しかし周辺の状況をみてみると３号墓が６号墓より新しい点や、１号墓からは戦後の蔵骨器が確認されているため、これらの墓も含めて概ね近代から戦後にかけて使用された墓であろうと思われる。以上のように、これらの遺構は始めから横並びに並ぶような景観ではなく、早くても近世の終わり頃から近代にかけて順次墓が造られ、最終的にはこのような景観になったのだと考えられる。ただし、いずれの遺構も戦争時の影響を見て取ることができる点では共通しており、この時期に遺構が大きく攪乱を受けていることは間違いない。いずれにしても、遺跡の調査規模が小さく、かつ遺構の保存状態も良くなかったため、古墓群としての性格を明らかにするには不明な点が多い。

また追記するべき情報として、同丘陵は南北方向に延びる丘陵地の頂部付近の南側斜面に位置し、北側斜面についても平成 23 年度に実施した調査で 100 基程度の古墓群が確認されている。つまり同丘陵を含めた一帯が、一連の遺構群であり墓域の形成史を紐解くうえでは、これらの調査成果を含めた総合的な解釈が必要となるだろうということを付記しておく。

２．戦争遺跡としての西上原 A 丘陵

すでに述べたように、同丘陵の遺構はいずれも戦時中の影響を強く受けていることが判明している。まず 1 号墓と 2 号墓の墓庭部分が大きく掘り込まれており、戦時中の遺物が確認されている。また、4・5 号墓の墓庭や、6 号墓の墓庭でも戦時中もしくはその後のものとみられる攪乱がみられた。出土した遺物の中には、銃剣などもあることから、軍人が出入りしていた可能性が高いと考えられる。

5 号墓や 6 号墓の墓室内からは戦争遺物とともに数体分の遺骨が確認されている。また、6 号墓からは崩落した遺構天井部の埋土中から遺骨が検出されたことから、戦時中に遺構が砲撃などを受けて遺骨や遺物を包含したかたちで埋没した可能性が高い。それを裏付けるように 6 号墓からは図版 28 に掲載したような戦争遺物が数多く確認されている。また 6 号墓については、墓室の床面に保存状態の良くない蔵骨器とともに、戦時中の遺物が数多く確認されたことから、墓として利用されていた遺構が戦時中に避難壕として転用され、一時的に利用されていたものと考えられる。このような状況は、戦時中にこの地域で墓を壕として利用したなどの聞き取り成果と符合するものであり、遺構の状態やそこから出土した遺骨や遺物からは、戦時中当時の状況を生々しく感じられる状況でもあった。

上記のような遺構の中でも特に戦争遺物の出土数が多かった 6 号墓の資料については、比較的保存状態の良好な資料が多かったこともあり、抽出し報告を行った。これらの資料は、当該期の人々の使用したものであることから、戦時中の人々の避難時の様子の一端を明らかにしうる資料であるといえる。前田・経塚近世墓群の調査では、過去に実施した多くの地区でもこのような戦時中の痕跡がみられることから、この丘陵のみならず広域にわたって、軍人だけだはなく民間人も巻き込んだ形で戦争が展開されたことが判明している。この丘陵の調査成果も、前田・経塚近世墓群の戦争遺跡としての側面を色濃く反映した遺構群であるということができよう。

〈引用・参考文献〉

安里進 1997「伊祖の入め御拝領墓の厨子甕と被葬者－近世墓の考古学的調査による家族復元－」『伊祖の入め御拝領墓の厨子甕と被葬者』浦添市文化財調査研究報告書第 25 集

安里進・新里まゆみ 2006「比嘉門中墓の家族史－家族の数だけ歴史がある－」『比嘉門中墓の家族史－家族の数だけ歴史がある－ 比嘉門中墓の調査概要』浦添市文化財調査研究報告書

浦添市教育委員会 2007『市内遺跡発掘調査報告書（１）－平成 13 ～ 18 年度調査報告－』

浦添市教育委員会 2010『市内遺跡発掘調査報告書（２）－平成 14 ～ 20 年度調査報告－』

江藤盛治編 1991『人体計測法 2』人類学講座別巻 1　雄山閣

谷畑美帆・鈴木隆雄 2004『考古学のための古人骨調査マニュアル』学生社

藤田尚編 2013『古病理学事典』同成社

山本美代子 1988「日本古人骨永久歯のエナメル質減形成」『人類学雑誌』96 日本人類学会

Knussman.R 1988 Martin/Knussman Anthropologie.Band1, Stuttgart, Gustav Fischer Yerlag

I.W.Cornwall 1964 Bones for the Archaeologist. Phoenix House LTD

D.R.Brothwell 1981 Digging up Bones. Cornell University Pres

E.SCHMID 1972 Atlas of Animal Bones For Prehistorians, Archaeologists and Quaternary Geologists. Elsevir Publishing Company

第５章　前田西前田原Ａ丘陵の調査成果

第１節　調査の方法

本地区（第３図）の調査前は、地表に腐葉土・崩落土などが大量に堆積しており、その中で地山を直接掘り込んだ横穴式掘込墓の墓口やその上部が確認できる状況で、移転が終了したコンクリート墓は１基のみ見られた。伐採や除根作業は、バックホウを用いた機械掘削で行い、その過程で沖縄戦時のものと思われる砲弾片や戦後のガラス瓶などが多数確認されたことから、調査区では近現代の攪乱が著しいことが想定された。

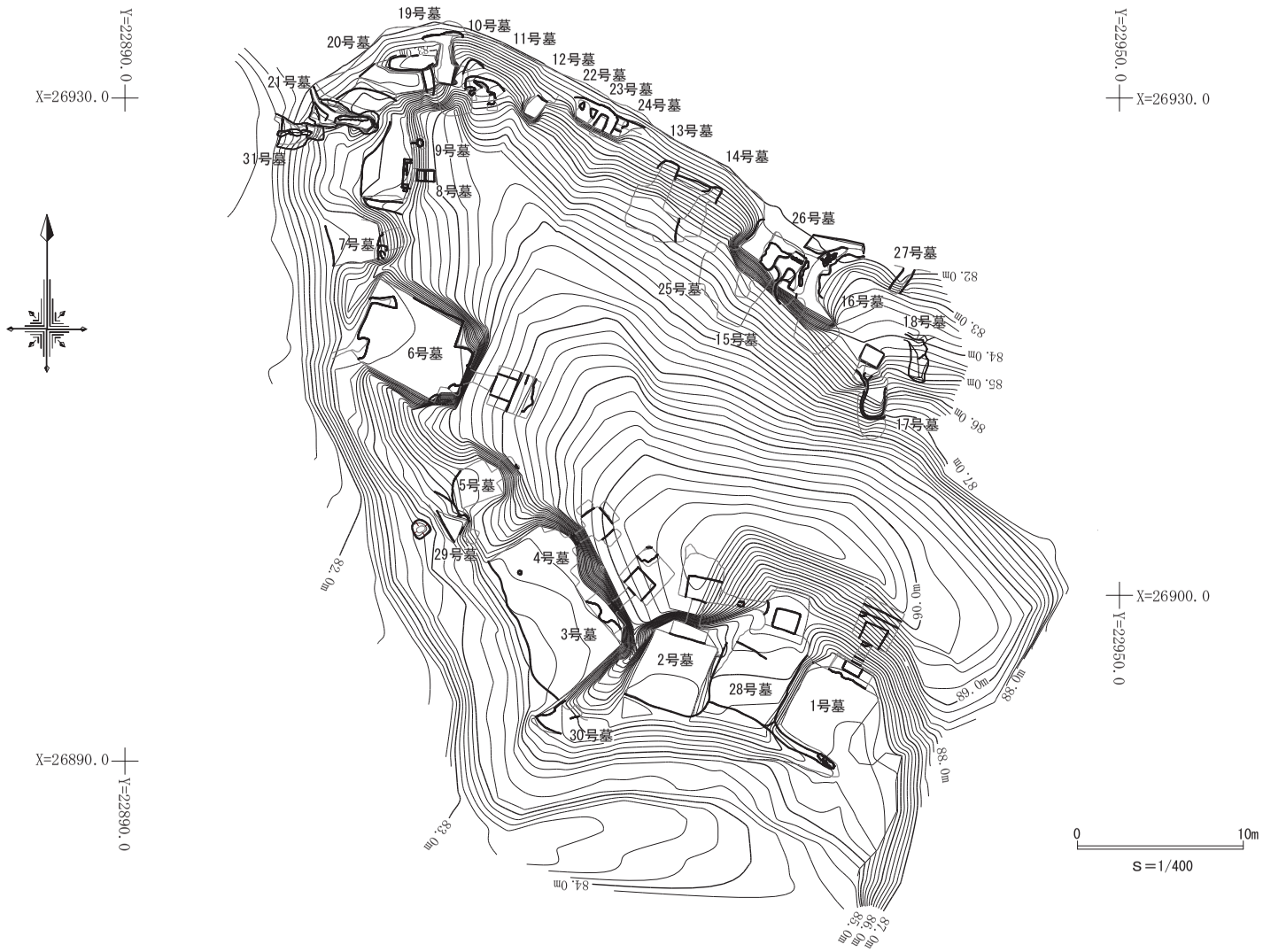
機械掘削で墓正面や庭囲いが検出されると、順次人力掘削に切り替えて遺構細部の検出にとりかかった。前田・経塚近世墓群の遺構は、ほとんどが地山である細粒砂岩 (ニービ) の丘陵に掘り込まれていることから、地山を検出することで概ね墓築造時および使用時の遺構面を検出することができる。人力掘削の結果、調査区の丘陵から複数段にわたって横並びに墓が確認でき、合計 31 基の遺構を検出した。遺構番号は確認した順に付している。なお、調査区の地山はニービと泥岩（クチャ）が混在しており、同じ丘陵のなかでも両方の遺構が存在する。

これらの遺構を検出した後、順次遺構内の掘削を進めた。その結果、調査区の墓はほぼ空き墓であり、その大部分が避難壕として改築されていることが判明した。そのため一次葬人骨や蔵骨器がほとんど見られず、沖縄戦前後のものと考えられる食器などの磁器類、水甕や鉄鍋といった日用雑器などが出土の大半を占めていた。よって今回は、これらの遺物が大量かつ残存状態が良好で出土した墓について 1 /20 の実測図の作成を行い、遺物が伴わず比較的情報の少ない空き墓は略測図を作成した。写真撮影は適宜、調査開始から完掘まで行った。

第２節　層序と遺構

前節に記したとおり、本調査区は戦時中もしくは近現代の攪乱が著しいことが確認されたため、墓の上部や墓前については、重機と人力による掘削によってこれらの土層の除去作業を行い、遺構面の検出を行った。天井部分が崩壊している遺構は、墓室内に墓の天井部分を形成していた地山のブロックと表土層が混在し厚く堆積している状態であり、墓の入り口のみが埋没した墓の内部にはほとんど埋土がない状態が確認された。このような状況であることから、本調査区では明確な層序関係を把握することはかなわなかった。

検出された墓などの遺構は、31 基である（第 36 図）。空き墓が多く、また壕に改築されたものが多い。墓は丘陵ないし頂部付近でそれぞれ横並びに位置しており、その特徴については第 21 表にその概要を記した。なお、墓室の類型については、第 1 表に準拠している。また表中の蔵骨器の有無は、比較的良好な状態で出土したものを「蔵骨器有」としている。そのほか、壕改築の様相として、隣接する墓同士を掘り広げ連結させているものが多いことが挙げられよう（2 号・28 号墓、13 号・14 号墓、15 号・25 号墓）。その様相について、第 4 節の各墓の報告を参照頂きたい。



第 36 図　前田西前田原 A 丘陵地形図

第 21-1 表　西前田原 A 丘陵の遺構一覧表

墓番号	外観形式	墓室類型	墓室（㎡）	墓口方位	法量（m）			蔵骨器の出土状況	一次葬の出土状況	備考
					高さ	幅	奥行			
1号墓	掘込墓	5a	6.15	N150°W 南南西	1.87	2.45	2.54	-	-	墓正面がコンクリートで覆われた遺構。墓室の平面は方形状を呈し、庭囲いは右袖が正面まで周る。
2号墓	掘込墓	3c	8.01	N165°W 南南西	1.92	2.47	2.59	-	-	墓室の平面は方形状を呈し、棚を1段有する。墓室左壁が28号墓へ掘り込まれる。墓室奥壁と墓口に直径約10cmの弾痕が残る。
3号墓	掘込墓	3a	6.2	N131°W 南西	1.93	2.41	2.60	-	-	墓室の平面は方形状を呈し、棚を1段有する。棚は一部不成形で、2～3段の棚があった可能性がある。
4号墓	掘込墓	2b	4.18	N126°W 南西	1.82	2.96	1.94	-	-	墓室は方形状のシルヒラシと、奥・左右に出窓状に造られた棚1段で構成される。棚の境界には柱が造られている。
5号墓	掘込墓	1d	1.09	N123°W 西南西	0.91	1.19	0.93	-	-	墓室の平面は不成形である。左袖下方には029号墓が造られている。
6号墓	掘込墓	5b	6.60	N68°W 西北西	1.83	2.49	2.63	○	-	墓室の平面は方形状を呈する。墓囲いは右袖が墓正面まで周り、周辺の埋土から廃棄された蔵骨器片と人骨等が出土した。
7号墓	掘込墓	1d	1.23	N102°W 西南西	(0.91)	1.19	1.10	-	-	墓室の平面は方形状を呈する。遺物は水甕、鉄片などが出土しているのみである。
8号墓	掘込墓	1c	1.05	N87°W 西	(1.08)	0.73	1.42	-	-	墓室の平面は縦長の長方形状を呈する。墓室床面、サンミデーにはコンクリートが敷かれていた。
9号墓	掘込墓	1d	0.37	N93°W 西	(0.79)	0.59	0.42	-	-	墓室の平面は不成形である。墓室中央には円形上に掘り下げられた箇所があり、蔵骨器を配置していた可能性がある。
10号墓	掘込墓	1a	0.24	N7°E 北	(0.50)	0.86	1.42	-	-	墓室の平面は不成形で、墓室から墓庭にかけて溝がある。
11号墓	掘込墓	1c	0.27	N0°E 北	1.24	3.10	3.48	-	-	墓室の平面は縦長の長方形状を呈し、墓口から墓庭にかけて溝がある。
12号墓	掘込墓	1c	1.18	N37°E 北東	1.09	1.46	1.91	-	-	墓室の平面は縦長の長方形状を呈する。墓庭は削平を受けていたが右袖の一部が残っている。
13号墓	掘込墓	1c	8.12	N22°E 北北東	1.29	0.72	(1.56)	-	-	墓室の平面は方形状であったとみられるが、墓室右壁が掘り広げられ14号墓と連結している。
14号墓	掘込墓	1c	2.49	N21°E 北北東	1.09	1.46	1.91	-	-	墓室の平面は方形状であったとみられるが、墓室左壁が貫通し13号墓と連結する。13号墓から掘り広げられたと考えられる。
15号墓	掘込墓	1a	1.27	N28°E 北北東	1.29	0.72	(1.56)	-	-	墓室の平面は不成形である。墓室奥壁は掘り広げられ、25号墓と連結している。
16号墓	掘込墓	1a	5.62	N39°W 北西	1.65	2.46	2.55	-	-	墓室の平面はやや不成形であるものの、方形状を呈している。墓室の床面には煉瓦が置かれ、鉄鍋や灯明具が出土した。

第 21-2 表　西前田原 A 丘陵の遺構一覧表

墓番号	外観形式	墓室類型	墓室（㎡）	墓口方位	法量（m）			蔵骨器の出土状況	一次葬の出土状況	備考
					高さ	幅	奥行			
17号墓	掘込墓	1a	6.18	N12°E 北北東	1.24	1.51	3.77	-	-	墓室の平面は隅丸の長方形状を呈する。墓室中央に溝を持ち、両壁へと繋がっている。
18号墓	掘込墓	1a	2.43	N1°W 北	-	1.05	2.55	-	-	17号墓の東側に位置するが、墓室や墓庭等のプランが見られない。遺物は出土していない。墓の下方から陶器片等が出土した。
19号墓	掘込墓	1b	5.47	N2°W 北	(1.24)	2.05	2.93	-	-	墓室の平面は方形状である。墓室の左壁は掘り広げられ、20号墓と連結している。
20号墓	掘込墓	1a	4.27	N98°W 西	(0.41)	1.31	3.12	-	-	墓室は墓口からやや屈曲しているものの、長方形状を呈する。
21号墓	掘込墓	1a	2.93	N77°W 西北西	-	3.37	1.12	-	-	墓室の平面はやや不成形であるものの、縦長な形状を呈する。墓室中央には石が配置されており、そこから外へと溝がある。
22号墓	掘込墓	1a	1.01	N24°E 北北東	0.50	0.98	1.31	-	-	墓室の平面は不成形である。
23号墓	掘込墓	1c	0.65	N21°E 北北東	(0.74)	0.65	1.29	-	-	墓室の平面は長方形状を呈する。墓室奥には、台座として使用されていたと思われる瓦が二つ配置されている。
24号墓	掘込墓	1c	0.55	N23°E 北北東	0.75	0.44	1.24	-	-	墓室の平面は縦長の長方形状を呈する。
25号墓	掘込墓	1a	9.58	N77°E 東北東	1.64	5.09	2.43	-	-	墓室の平面は不成形である。墓室の壁面には煤がつき、多量の炭も検出した。墓室右壁が掘り広げられ、15号墓と連結している。
26号墓	掘込墓	1a	3.29	N31°E 北北東	(1.93)	1.38	2.82	-	-	墓室の平面は不成形である。墓口に4つの土坑がある他、墓室左壁は15号墓、右壁は16号墓へと掘り広げられ連結している。
27号墓	掘込墓	1c	0.84	N37°E 北東	0.99	0.49	1.82	-	-	墓室の平面は長方形状であり、墓室内埋土から鉄片や陶器が出土。
28号墓	掘込墓	3a	5.76	N165°W 南南西	-	2.41	2.42	○	-	墓室の平面は方形状であったと考えられるが、天井及び前壁が崩落している。墓室右壁は掘り広げられ、2号墓に連結する。
29号墓	掘込墓	1d	0.45	N63°W 西北西	0.91	0.89	0.56	-	-	墓室の平面は横長の長方形状を呈する。5号墓より下方に位置し左袖に造られている。
30号墓	掘込墓	1c	0.29	N117°W 西南西	0.45	0.66	0.53	-	-	墓室の平面は不成形を呈する、小型の墓である。
31号墓	掘込墓	1a	0.24	N83°W 西	-	1.53	2.78	-	-	8・9号墓下方にある掘込みで、墓室や墓庭のプランが見られない。掘込み中央には砂岩の団塊があり、工具痕がみられる。

第３節　遺物

遺物は、総計で 1,470 点が出土した。出土遺物の数量と内訳は、第 22 表のとおりである。これまで述べてきたように、本調査区の墓はほぼ空き墓であるため、蔵骨器の出土が少ないのが特徴であるが、遺物としては水甕、沖縄戦前後のものと思われる陶磁器類、瓦や煉瓦などが多く見られた。また、壕として大幅に改築された遺構からは木片や金具など調度品の一部も出土している。遺物については、基本的に墓毎に取り上げ作業を行った。以下に種類ごとにその概要を述べていく。

(1) 墓関連遺物

墓の発掘調査でよく出土する遺物として、蔵骨器や、簪や指輪、櫛、瓶といった副葬品が挙げられる。しかし、今回の調査区である西前田原 A 丘陵においては、検出された遺構のほとんどが空き墓であるために、前述したような墓関連遺物の出土が非常に少ないのが特徴である。

蔵骨器は、総点数で 270 点が検出された。その全てが陶製蔵骨器であり、沖縄の那覇市壷屋産のものであると考えられる。種類は家形・甕形に大別できるが、どちらも完形を保ったままの出土はみられず、内訳の半数がマンガン釉甕形の破片であった。また、接合・復元できたものは蓋と身をあわせて７点であり、うち蓋１点がボージャーであった。蓋と身のセット関係が把握できたのはマンガン釉甕形の１セットのみである。今まで行われてきた前田・経塚近世墓群の発掘調査では、水甕やアンダガーミを蔵骨器に転用する例がみられたが、本調査区においても水甕の出土は特に多い。しかしながら、水甕の状態や出土状況からこれらが転用品であるとは言いがたいため、転用蔵骨器として扱わず次項において記す。

副葬品として考えられる遺物もわずかであるが出土している。その内訳は、瓶、煙管、簪、櫛、銭貨、歯ブラシである。いずれも出土は１～３点にとどまり、墓室または墓室内床面直上より検出した。

(2) 戦争関連遺物

本調査区では、軍服ボタンや靴底などがみられる程度であり、ヘルメットや銃剣、薬瓶といったいわゆる戦争遺物の出土は非常に少ない。しかし、壕に改築された遺構より日用品が大量に出土したことから、これらを戦争関連遺物としてまとめ、種別ごとに様相を述べていきたい。

①水甕

出土遺物のなかで、もっとも多かったのが水甕である。完形３点、破片 314 点に上る。破片は、底部や口縁部など個体数に迫ることの可能な資料が多くみられ、判（窯印）のある資料も複数あった。そのほとんどが、沖縄の那覇市壷屋産と考えられる。本調査区で出土した蔵骨器と異なり、壕に改築されたであろう遺構から配置されたままの状態で検出した。人骨をおさめた痕跡は見られず、水甕のなかに食器類を重ねておさめられた資料もあることから、副葬品ではなく戦争関連遺物として報告する。

②食器類

出土遺物のなかで、完形を保ったままの資料が多かったのが食器類である。碗、皿、小杯、湯のみなどがみられ、多くは壕改築のあった遺構からまとまって出土したことから、副葬品や墓前などに共献されたものではないと考えられる。多くは、戦中ないし戦後に配給・流通していたものであり、沖

縄産施釉陶器は全体の半数以下であった。沖縄で「スンカンマカイ」と呼称される砥部焼の碗の資料が多く、底部に印のあるものがみられるため、本報告では別項を設けて説明したい。

③瓦・煉瓦

本調査区からは、瓦・煉瓦の出土も目立った。これらは概して大幅に壕に改築された遺構から見つかっている。16 号墓では煉瓦が床面直上にやや規則的に配されており、床面として使用する板を設置するための台石的な役割を担っていた可能性がある。瓦も検出しているが、各遺構からの検出数が 1 ～ 3 点のみであった。

(3) 戦争関連遺物

その他の遺物として、6 号墓墓室より出土の小形の焼締壷、17 号墓墓室床面直上より出土の焼締筒型瓶、24 号墓下方表採の陶製人形を挙げておきたい。これらの詳細は各号墓での報告を参照頂きたいが、いずれも保存状態が良く完形である。

以上が今回の発掘調査の出土遺物の概要である。次節では、遺構と遺物の残存状態が比較的良好な墓について、実測図などを図示しながらその詳細について報告を行う。

第 22-1 表　西前田原 A 丘陵の出土遺物一覧表

種類 ＼ 墓			1号墓		2号墓			3号墓	4号墓	5号墓	6号墓				7号墓	8号墓	9号墓	11号墓	12号墓	13号墓		14号墓		15号墓	小計1
			墓室	墓庭	墓室	墓庭	斜面南側	墓庭	墓庭	墓庭	墓室	墓口	墓庭	庭囲	墓室	墓庭	墓室	墓室	墓室	墓室	直上床面	墓室	墓口	直上床面	
蔵骨器	ボージャー形	蓋																							0
		身																							0
		破片					6	4																	10
	マンガン釉甕形	蓋												1											1
		身											3												3
		破片	1				9	42		7				109		1									169
	マンガン釉庇付甕形	蓋																							0
		身																							0
		破片												2											2
	御殿形（陶製）	蓋																							0
		身																							0
		破片					3	1						1											5
	不明	破片												1											1
陶磁器	水甕	完形																							0
		破片					1			3				9	1				1	7	49	9	10	7	97
	瓶	完形			1																				1
		破片							1																1
	碗	完形					1							2						2	7	2	9	9	32
		破片					1	5						6							1	3		1	17
	皿	完形			1																	2	1	16	20
		破片																					1	6	7
	小杯	完形												2				1				3		2	8
		破片						1																	1
	湯のみ	完形		1				2		1		3	2								1			2	12
		破片						1																	1
	壷	完形																							0
		破片																							0
	アンダガーミ	完形																							0
		破片																							0
	水注・急須	完形																							0
		破片																							0
	蓋	完形																		1	1			1	3
		破片																							0
	擂鉢	完形																							0
		破片							1					1											2
	香炉・火入	完形																							0
		破片																							0
	灯明具	完形																							0
		破片																							0
	火炉	完形																							0
		破片																							0
	不明												2		1					2	1			5	11
陶質土器																									0
煙管	完形				1																				1
	雁首																								0
	吸口																								0
簪																									0
櫛										1															1
銭貨																	1								1
瓦								1							1	1	3						2		8
煉瓦				1						1															2
歯ブラシ																									0
石製品								1														1			2
泥面子																									0
飾り金具																								1	1
不明鉄製品					1	1	1	1						1							1	1	1	1	9
ボタン																									0
靴類																1								1	2
工具類																									0
ガラス製品						1		3		2		2							3	11	2	1	2	7	34
木片					1						1										1		1	1	5
木炭																									0
焼けた豆																					1			1	2
その他															1					1		1		4	7
合計			1	2	5	2	22	62	2	14	2	5	7	135	4	3	4	1	4	24	65	23	27	65	479

第 22-2 表　西前田原 A 丘陵の出土遺物一覧表

種類 ＼ 蓋			16号墓		17号墓		18号墓	19号墓		20号墓		21号墓		23号墓	24号墓	25号墓		26号墓			27号墓	28号墓		29号墓	30号墓	小計2	合計
			直上	床面	墓室	直上	床面	埋土	下方	墓室	墓口	墓室	墓口	墓室	墓庭	墓室	表採	下方	墓室	直上	床面	墓室	墓口	墓室	墓室	墓庭	墓室	墓室		
蔵骨器	ボージャー形	蓋																								1			1	1
		身																											0	0
		破片																								68			68	78
	マンガン釉甕形	蓋																								4			4	5
		身																								2			2	5
		破片										1												1			2		4	173
	マンガン釉庇付甕形	蓋																											0	0
		身																											0	0
		破片																											0	2
	御殿形（陶製）	蓋																											0	0
		身																											0	0
		破片																											0	5
	不明	破片																											0	1
陶磁器	水甕	完形																1	2										3	3
		破片		5	1		23		1	3	1	147				14	16	2	2	2									217	314
	瓶	完形				1																							1	2
		破片																								1			1	2
	碗	完形				34	1	1			9	2				1	11	2											61	93
		破片		2			10	1	1	2	4					5	10	1	2	2		1							41	58
	皿	完形				13		1	1	1	32					2	5												55	75
		破片					1				6						6												13	20
	小杯	完形	1		1	8										1	2	2											15	23
		破片														1													1	2
	湯のみ	完形			1	20	1	1									2												25	37
		破片			1	2	3												1										7	8
	壷	完形			2	2																							4	4
		破片				1	2										1												4	4
	アンダガーミ	完形			1																								1	1
		破片																				1							1	1
	水注・急須	完形				1	1																						2	2
		破片					1																						1	1
	蓋	完形				5											5												10	13
		破片																											0	0
	擂鉢	完形																											0	0
		破片					8																						8	10
	香炉・火入	完形	2									1					2												5	5
		破片																											0	0
	灯明具	完形	1																										1	1
		破片																											0	0
	火炉	完形																											0	0
		破片					1												1										2	2
	不明		1		1	1	7	2		2						1	16		2										33	44
陶質土器							236				1																		237	237
煙管	完形							1																					1	2
	雁首																												0	0
	吸口							1																					1	1
簪										1																			1	1
櫛																													0	1
銭貨																	2												2	3
瓦				1	5		2			2				2			1		4	2	1								20	28
煉瓦			21		1													2	2										26	28
歯ブラシ										1																			1	1
石製品																													0	2
泥面子															1														1	1
飾り金具					2											2	2		2										8	9
不明鉄製品			2		1	3		1				3				1	3		1	1	1	1	1						19	28
ボタン			1			1											35						1						38	38
靴類			1																										1	3
工具類					4	1																							5	5
ガラス製品				1	3	3		5			1					4	6		3	1			1	1	1			30	64
木片			1													1													2	7
木炭			1										1			1	1												4	4
焼けた豆						1																							1	3
その他						1				1																			2	9
合計			32	9	24	98	297	14	3	13	54	154	1	2	1	34	127	11	20	8	2	4	79	3	1				991	1,470

第４節　各墓の調査成果

前田西前田原Ａ丘陵の調査では、合計 31 基の遺構が確認され、墓に関係する蔵骨器や副葬品等の遺物も得られている。これらの遺構と遺物の概要については、第 21 表と第 22 表に既に示したとおりである。本節では、これらの墓の中から遺構と遺物が確認できた 11 基（2・4・13 ～ 17・21・25・26・28 号墓）の報告を行う。なお、本章で報告を行う以外の墓については、第 36 図と第 21 ～ 22 表及び第 4 節（9）をもって報告とする。

（1）　2 号墓・28 号墓

１）遺構（第 37 図）

2 号墓・28 号墓は横穴式の掘込墓で、壁が掘りぬかれ連結している。同丘陵の頂上付近の斜面部に位置する（第 36 図）。2 号墓の墓口方位は南南西（N165° W）である。墓室は平面が方形状であり、墓口から奥に向けて直線的に約 2.6 m掘り込まれ、Ｌ字状の棚を 1 段有する。墓室左壁の一部が 28 号墓へと掘り進められており、その際左棚は削平されたものと思われる。墓室の直線部分の奥行きは 2.59 m、幅 2.47 m、高さは 1.92 mを測る。また、墓口の入り口正面は本来長方形状だったと考えられるが、円形状に大きく開いている。これは、入口正面左側に約 10㎝の弾痕が残っていることから砲撃を受けた痕であると考えられる。なお、墓室内奥壁にも同類の弾痕がみられる。墓室内天井はアーチ状を描き中央が高くなっているほか、その中央には墓口から墓室奥まで溝がはしっている。おそらく壕として使用される際に造られたものと思われるが、その用途は不明である。墓室からは煙管の完形品、南側斜面よりボージャー形、マンガン釉甕形の蔵骨器破片が出土している。いずれも銘書は確認できなかった。

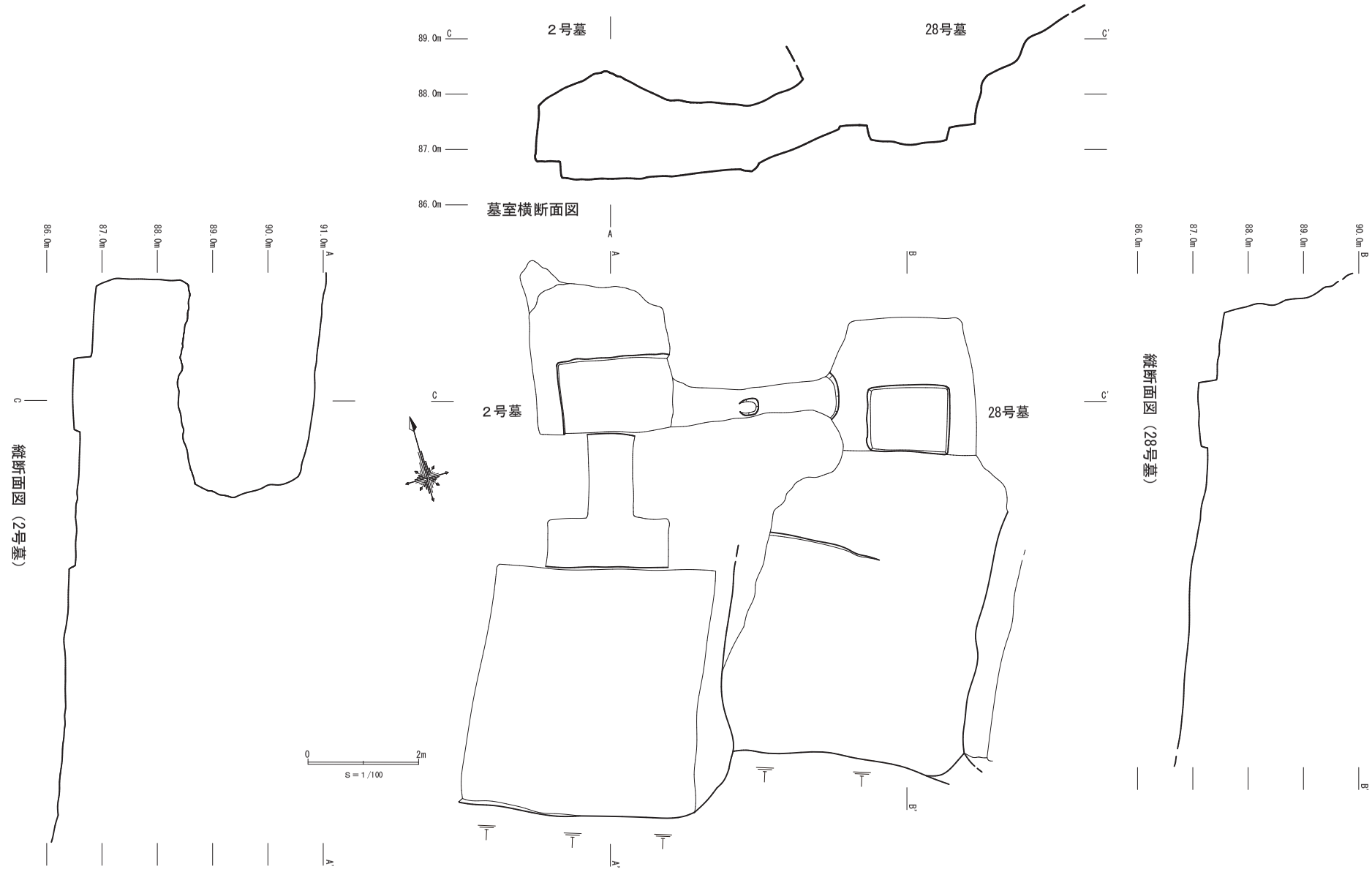
28 号墓の墓口方位は 2 号墓と同じく南南西（N165° W）である。墓室右壁が 2 号墓へと掘り進められ連結している。一見コの字状の棚を 1 段有しているように見えるが、奥の棚の幅と左右の棚の幅を比較すると墓室奥にはもう 1 段または 2 段の棚が存在しており、後の時代に削平された可能性がある。残存する墓室の直線部分の奥行きは 2.42 m、幅 2.41 mで、天井崩落のため高さは不明である。墓室から遺物は出土しなかったが、墓庭よりボージャー形、マンガン釉甕形の蔵骨器片がまとまって出土しており、おそらく壕に改築する際に墓室内の蔵骨器を墓庭に出したものと考えられる。28 号墓の明確な造営年代は不明であるが、墓庭より得られた蔵骨器の出土傾向をみると、蔵骨器 1 からは「乾隆六拾年・・・」（乾隆 60 年＝ 1795 年）の銘書が確認されたこと、その後の 1800 年代（蔵骨器 2、「咸豊七年・・・」）、1900 年代（蔵骨器 5、「大正十二年・・・」）の銘書まで確認されたことなどから、1700 年代末から 1900 年代の大正ないし昭和初期まで継続的に使用された墓であると考えられる。また、戦後の銘書などが確認できなかったことから、沖縄戦時に崩落した墓の可能性が想定できる。

２）遺物

2 号墓・28 号墓に伴う遺物の種類と数量の内訳は第 22 表のとおりである。

2 号墓の南側斜面より、ボージャー形、マンガン釉甕形、御殿形の破片が計 18 点出土している。これらは墓域からの出土ではないが、出土地点から考えると 2 号墓に伴った遺物の可能性が高い。2 号墓から出土した蔵骨器は概して小破片であるため、図化は省略する。

蔵骨器以外の出土品については、保存状態の良好な以下の 2 点について報告を行う。

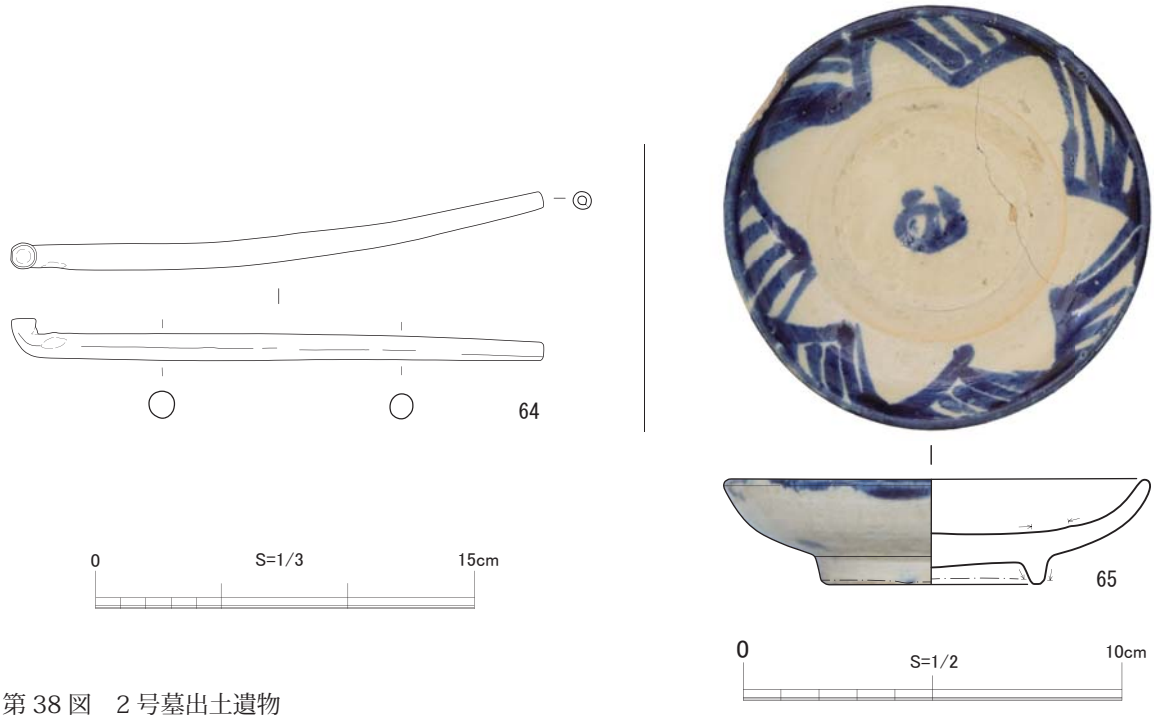


第 37 図　2 号墓・28 号墓遺構図

図版 32　2・28 号墓遺構　　1 段目左：2 号墓、右：2 号墓 墓室内完掘状況、
2 段目左：2 号墓 墓室内左壁（28 号墓と連結）、右：28 号墓 墓室完掘状況
3 段目：28 号墓 墓庭庭囲い（右） 遺物出土状況

第38図64は完形の煙管である。青銅製で、雁首から吸口まで青錆が付着している。全長21.12㎝で、雁首の火皿径0.91㎝、立ち上がり1.50㎝、吸口は吸口径0.34㎝、重量は65.4gである。墓庭より出土。

第38図65は沖縄壷屋産の皿である。全面に白化粧後、呉須により内面に草文を描き透明釉を掛ける。見込に蛇の目釉剥ぎを施す。口径11.25㎝、底径5.90㎝、器高2.8㎝である。墓庭より出土。



第38図　2号墓出土遺物

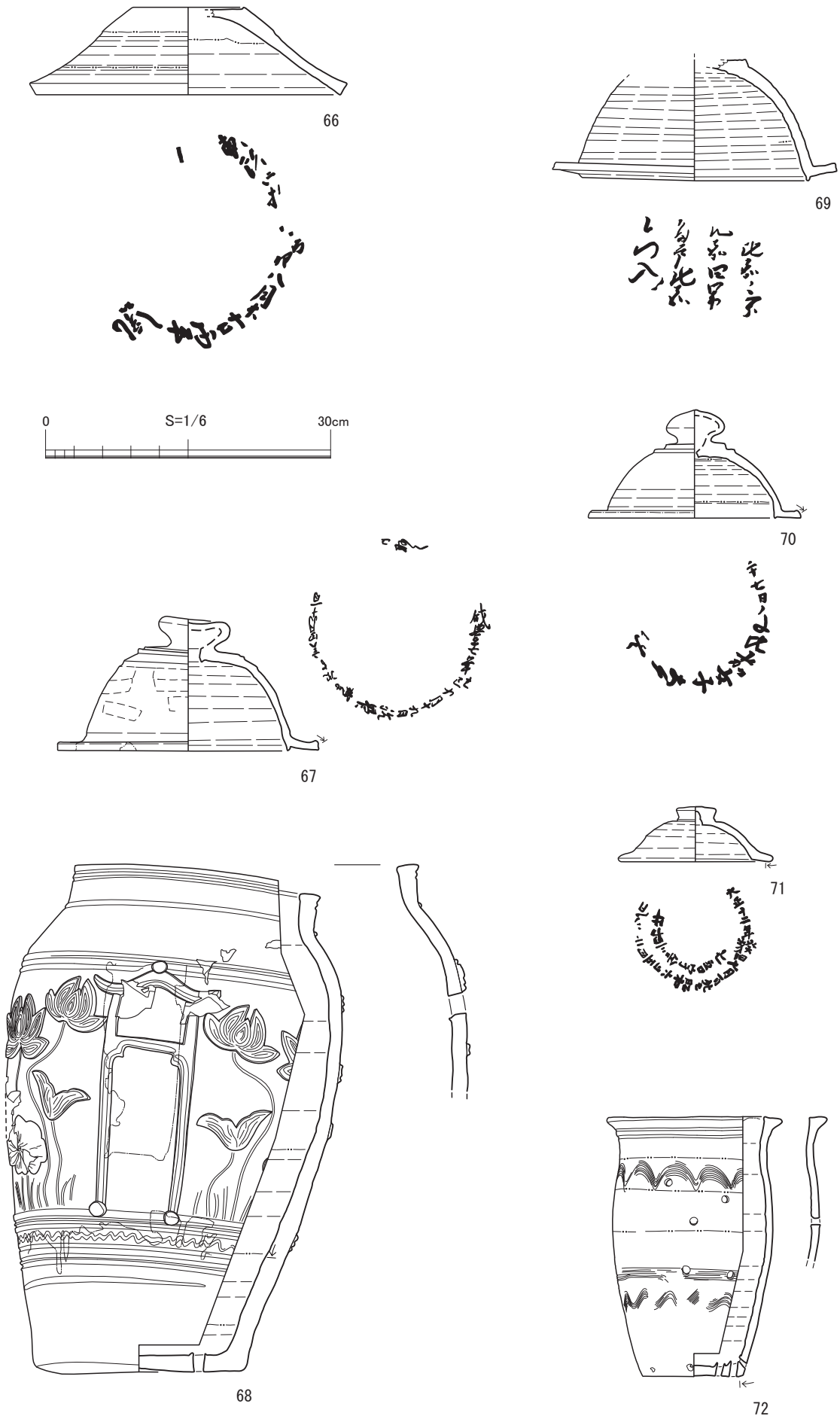
28号墓からは、ボージャー形の蓋と身がそれぞれ1点、マンガン釉甕形の蓋4点、身6点が出土した。これらは破片の状態でまとまって墓庭から出土している。接合復元によってほぼ完形を得られたまたは銘書の残る蔵骨器7点を図化した。以下、詳細を述べる。なお、法量などの一覧については第23表、銘書については第24表を参照頂きたい。

蔵骨器1（第39図66）はボージャー形の蓋である。つまみとつまみ台のない笠形と考えられるが、欠損により判然としない。端部は平坦である。形状は安里編年のⅦ式（1750～1820年代）に該当し、裏には乾隆60（1795）年死去の銘書があることから、おそらく1790年代の資料であろう。

蔵骨器2（第39図67・68）はマンガン釉甕形である。蓋（第39図67）のつまみは扁平形で、つまみ台はヘラで削りだし成形される。つまみ台の下位には幅8㎜の溝状沈線が1条廻っている。かえりの先端は尖るように作られる。身（第39図68）は口縁部が直口する器形で、口唇部は平坦に成形される。マンガン釉は全体に掛けられるが、胴下部と屋門内は施釉されず露胎する。文様は蓮華文を貼り付け、横帯の2～4が凸帯となることから、安里編年の第Ⅲ期（1810～1850年代）の資料であると考えられる。蓋には咸豊7（1857）年洗骨とある。

蔵骨器3（第39図69）はマンガン釉甕形の蓋である。つまみ部分は欠損し形状は不明であるが、つまみ台は一段である。鍔はやや反り、端部は丸く成形される。かえりは粗雑な印象である。マンガン釉は外面全体に掛けられ、内面縁部にも一部みられる。裏に銘書があるが、年号や干支の情報は確認できなかった。

蔵骨器4（第39図70）はマンガン釉甕形の蓋である。つまみは宝珠形で、つまみ台はヘラによ



第 39 図　28 号墓出土蔵骨器

図版 33　28 号墓出土蔵骨器

る削りだしで成形される。鍔は平坦で、端部は丸くなる。かえりはわずかに確認できる程度である。マンガン釉は外面全体に掛けられる。裏に銘書があるが、年代に関する情報は得られなかった。

蔵骨器５（第 39 図 71）はマンガン釉甕形の蓋である。つまみ台が無いタイプで、つまみは扁平形である。鍔は平坦で、端部は丸くなる。かえりはみられない。また口径が 16.3㎝と小型になのも特徴である。裏に銘書がみられ、大正 12（1923）年に死去、及び昭和６年に洗骨されたとある。

蔵骨器６（第 39 図 72）はマンガン釉甕形の身である。口縁部が外反する器形で、口唇部は平坦に成形される。マンガン釉は口唇部から外面全体に施釉される。屋門は無く、文様が横帯に沈線でかかれることから、安里編年の第Ⅵ期（1930 年～）の資料と考えられる。

第 23 表　28 号墓の蔵骨器観察一覧表

蔵骨器番号	図版番号	種類	蓋	つまみ/屋根形状	接合部孔	つまみ台・圏線	鍔(cm)	かえり(cm)	大きさ(cm)※	文様	成形/調整	釉薬/施釉範囲	窯印	銘書	死去年(西暦)	洗骨年(西暦)	備考
			身	マド枠(庇部cm)/屋門形	縦長軸×横長軸(cm)	窓数/形	横帯	底面孔									
1	第39図66 図版33-66	ボージャー形	蓋	不明	不明	なし	なし	なし	- 33.4 32.0 - 9.2	なし	おそらくつまみの無い笠型。鍔端部は平坦。外面は回転ヘラ削り調整、内面は櫛目調整。	なし	なし	あり	乾隆60 (1795)	-	上部欠損。
2	第39図67 図版33-67	マンガン釉甕形	蓋	扁平形	あり	1段・1条	3.3	0.4	9.9 27.5 21.2 14.15 12.0	なし	つまみ台削り出し。かえりの先端が尖る。ロクロ成形後、ヘラ削り調整とナデ調整。	マンガン釉を表面全体に施釉する。	なし	あり	-	咸豊7 (1857)	一部欠損。
	第39図68 図版33-68	マンガン釉甕形	身	唐破風形貼付	24.3×9.7	3個方形	凹2 凸1 凸3 凸3	6個円形	26.5 34.7 22.5 53.5	肩部:なし 胴部:蓮華文(貼付＋沈線) 胴下部:波状文(沈線)	直口口縁、口唇部は平坦。屋門は柱貫、柱の玉飾りがつく。ロクロ成形後、丁寧なナデ調整。	マンガン釉を表面全体に施釉する。口唇部、胴下部、屋門銘書面は露胎する。	なし	なし	-	-	蓮華文の花は貼付、茎は沈線で描かれる。
3	第39図69 図版33-69	マンガン釉甕形	蓋	不明	不明	1段	3.3	0.4	- 30.0 23.4 - 12.8	なし	鍔はやや反る。内外面ともに回転ヘラ削り調整。	マンガン釉を表面全体に施釉する。	なし	あり	-	-	上部欠損。
4	第39図70 図版33-70	マンガン釉甕形	蓋	宝珠形	あり	2段	2.8	0.03	6.2 22.4 17.0 11.4 7.9	なし	鍔はわずかに反る。内外面ともに回転ヘラ削り調整後、内面はナデ調整で成形。	マンガン釉を表面全体に施釉する。	なし	あり	-	-	1/2欠損。
5	第39図71 図版33-71	マンガン釉甕形	蓋	扁平形	あり	なし	2.3	なし	- 16.3 11.7 5.8 -	なし	鍔は平坦で、端部は丸くなる。内外面ともに回転ヘラ削り語、内面はナデ調整で成形。	マンガン釉を表面全体に施釉する。	なし	あり	大正12 (1923)	昭和6 (1931)	
6	第39図72 図版33-72	マンガン釉甕形	身	なし	0	5個円形	凹2 凹6 - -	13個円形	18.4 16.6 10.4 27.4	肩部:波濤文・波状文(沈線) 胴部:なし 胴下部:沈線文	外反口縁、口唇部は平坦。成形後はヘラ削り調整。	マンガン釉を表面全体と口唇部に施釉する。	なし	なし	-	-	底部際(側面)に円形の孔が11個廻る。

第 24 表　28 号墓の蔵骨器銘書一覧表

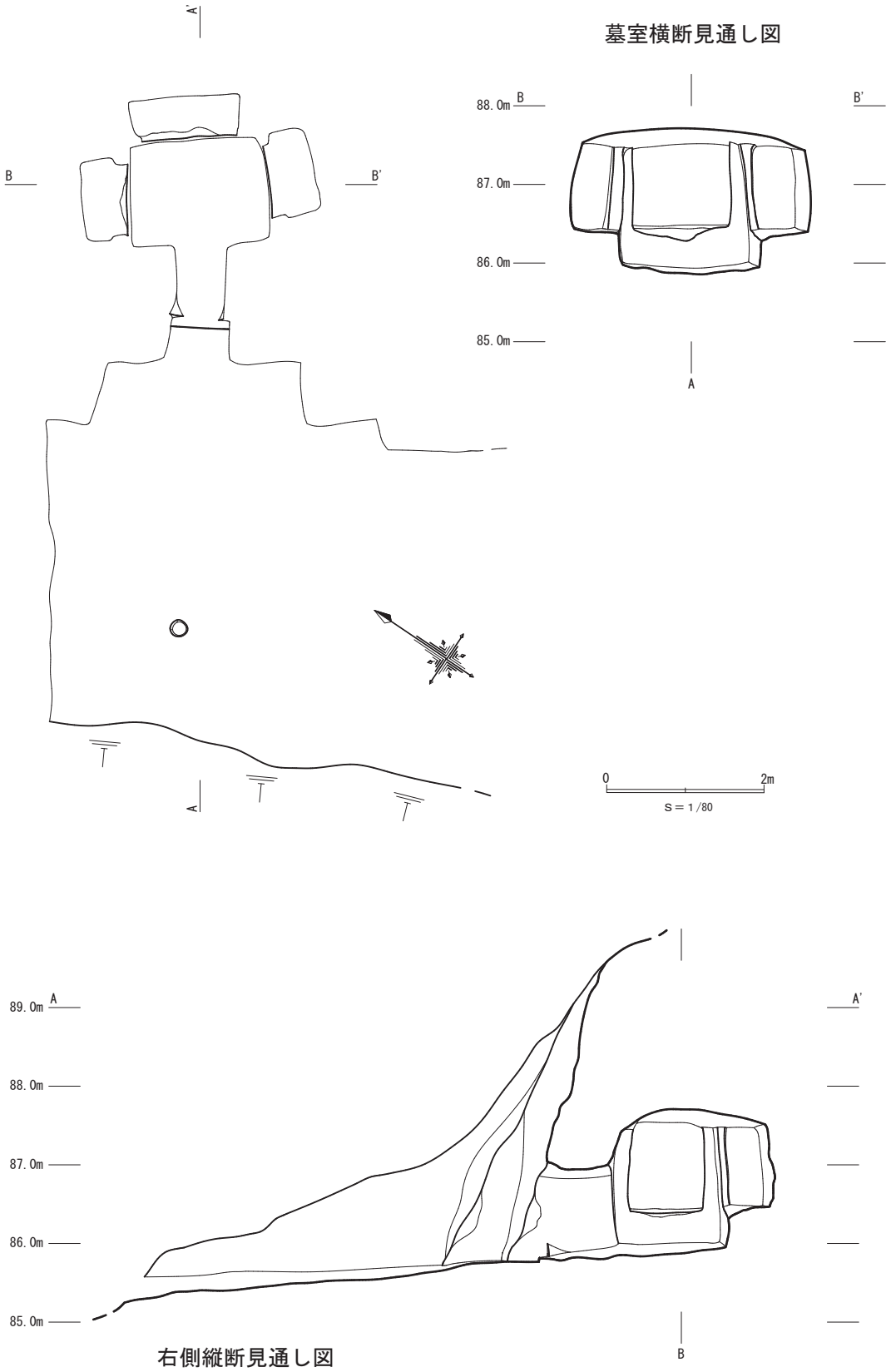
No.	墓番号	蔵骨器番号	図版番号	銘書内容	被葬者	死去年	洗骨年	備考
1	28号墓	1	第39図66 図版33-66	〈蓋〉乾隆六■〔拾ヵ〕■■卯八月十五日西平之〈判読不能〉/乳〈判読不能〉	<1>不明 <2>不明	<1>1795？ <2>不明	<1>1795？ <2>不明	<1>と<2>は同一人物の可能性あり
2		2	第39図67 図版33-67	〈蓋〉咸豊七年乙巳九月十九日洗骨嫡子次ら亥四月十一日〈欠損〉なへ	<1>不明	-	<1>1857	
4		3	第39図69 図版33-69	〈蓋〉〈欠損〉比嘉二ら/比嘉四男/かま戸比嘉/■入	<1>比嘉二ら <2>比嘉四男 <3>かま戸比嘉	-	-	
5		4	第39図70 図版33-70	〈蓋〉〈判読不能〉■十七日かま比嘉女子お■〔とヵ〕洗〈判読不能〉	<1>かま比嘉女子お■	-	-	
6		5	第39図71 図版33-71	〈蓋〉大正十二年癸■〔亥ヵ〕旧七月一日死亡昭和六年五月■〔二ヵ〕日洗骨/■■〔比嘉ヵ〕宇舎三男牛	<1>■■宇舎三男牛	<1>1923	<1>1931	

(2) 4 号墓

1) 遺構（第 40 図）

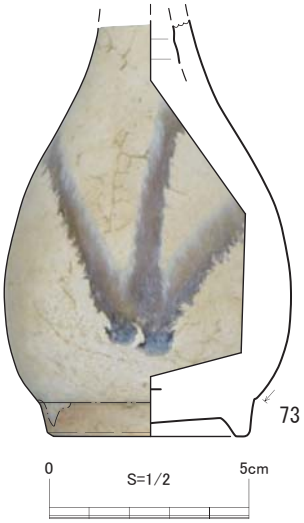
4 号墓は調査区丘陵の頂上付近南西側に位置する、横穴式の掘込墓である（第 36 図）。墓口方位は南西(N126° W)を示す。墓口には閉塞石が残存しており、これを撤去したのち掘削を行った。墓室は、方形状のシルヒラシと、奥、左右に出窓状に造られた棚 1 段で構成されている。棚はそれぞれ段差が見られず同じ高さで造られており、その幅もほぼ同じであるが、横に幅広い形状なため墓室内全体が横長な印象をうける。また棚の境界にはそれぞれ柱が造られている。これらは比較的丁寧な造りであ

図版 34　4 号墓遺構　　上段左：4 号墓 遠景（右：3 号墓・左：4 号墓）、右：4 号墓 完掘状況、
下段左：4 号墓 墓室内奥壁完掘状況、右：4 号墓 墓室内奥壁 左柱


墓室横断見通し図
88.0m
87.0m
86.0m
85.0m
A
B
B'
A'
0
2m
S＝1/80
89.0m
88.0m
87.0m
86.0m
85.0m
右側縦断見通し図

第 40 図　4 号墓遺構図

り、戦中の大幅な壕改築がなされずほぼ原形を保っていることから、同丘陵では珍しい遺構であるといえよう。ただし、墓室内壁面には明り取りのための窪みが見つかっている。墓室の直線部分の奥行きは 1.94 m、幅は最大 2.96 m、高さは 1.82 mを測る。墓庭の庭囲いは右のみで、隣接する 3 号墓の墓庭との境界がみられない。墓室から遺物は出土せず、墓庭の下方より陶磁器片や骨が出土している。



第 41 図　4 号墓出土遺物

2) 遺物

4 号墓に伴う遺物の種類と数量の内訳は第 22 表のとおりである。4 号墓からは蔵骨器の出土がみられず、陶磁器が 2 点出土したのみである。うち 1 点を図化した。

第 41 図 73 は墓庭下方より出土した沖縄壺屋産の瓶子である。口縁部が欠損している。全面に白化粧を施すが、畳付は露胎する。外面には飴釉で葉文が描かれるが、釉垂れにより境界がぼやけている。透明釉掛けが薄かったのか、全体的に釉が剥げ落ちている。底径 5.0㎝。

（3）13 号墓・14 号墓

1）遺構（第 42 図）

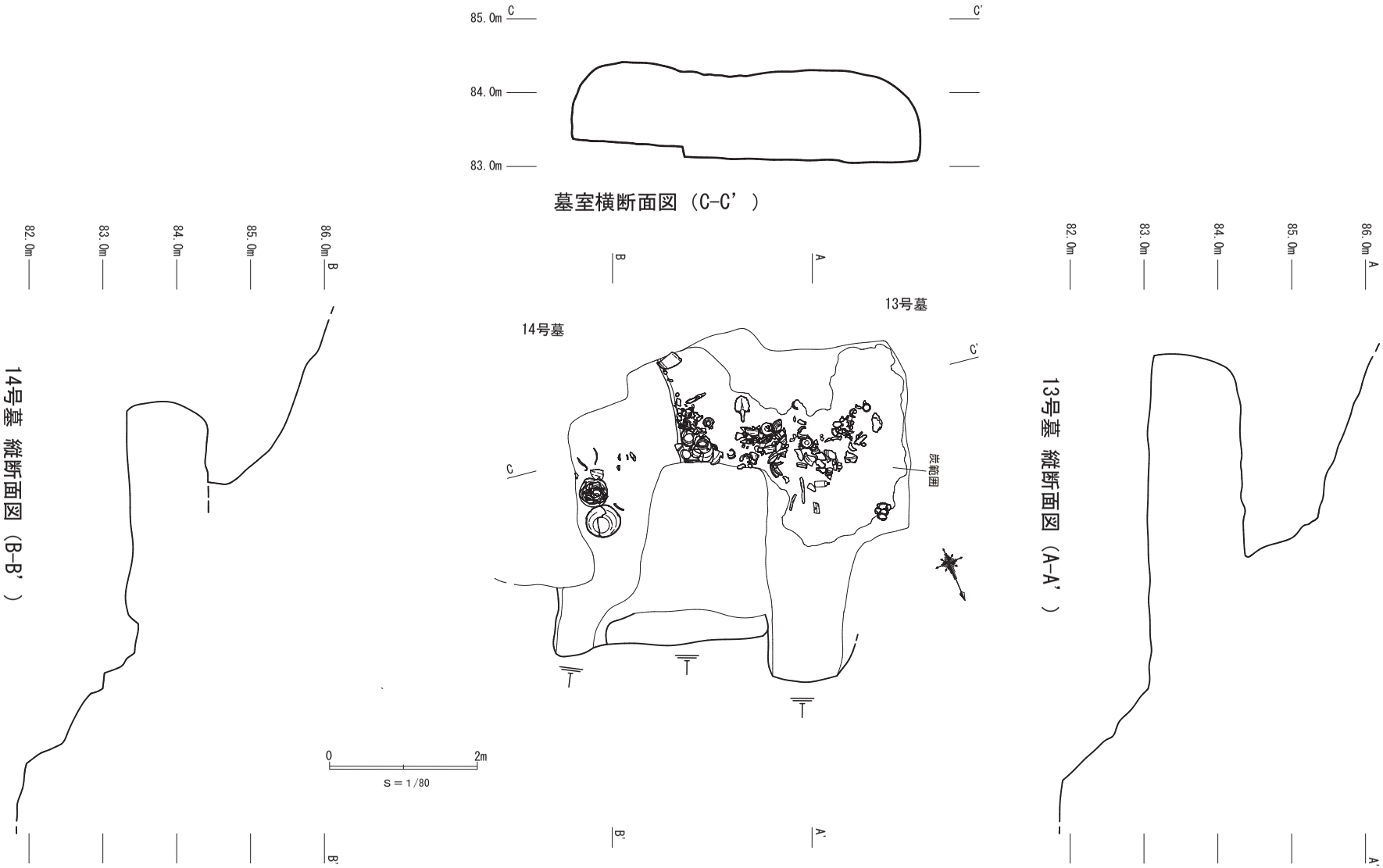
13 号墓・14 号墓は横穴式の掘込墓で、壁を掘りぬかれ連結している。同丘陵の北東側斜面中腹に位置する（第 36 図）。13 号墓･14 号墓ともに墓口方位は北北東（13 号墓:N22° E､14 号墓:N21° E）である。墓室は本来方形状であったと考えられるが、13 号墓の右壁より大きく掘り広げられ、14 号墓と連結している。連結した墓室内は広く､13 号墓の墓室の直線部分の奥行きは 3.48 m､幅 3.10 m､高さは 1.24 mを測り､14 号墓は墓室の直線部分の奥行きが 1.91 m､幅 1.46 m､高さ 1.09 mを測る。床面には炭が広がり、陶磁器片のほかガラス片や鉄片が散乱している状態であったことから、戦争中に壕として利用されていたと考えられる。また、墓室壁面・天井には明瞭な工具痕が残っており、これらは墓を築造したときのものではなく、壕として改築されたときの痕であろう。さらに、14 号墓の墓口には水甕が並んで配置され、水甕の中より碗などの陶磁器類が出土した。墓室内からも大量の完形陶磁器が出土したが、蔵骨器や人骨の出土がみられなかった。

2）遺物

13 号墓・14 号墓に伴う遺物の種類と数量の内訳は第 22 表のとおりである。

13 号墓からは、蔵骨器の出土がみられず、水甕、碗、湯のみ、ガラス製品などが出土している。とくに水甕は完形の状態で出土しなかったものの､個体数は多いものと考えられる。また､沖縄で「スンカンマカイ」と呼称される、本土産陶磁器の碗（砥部焼）が 4 点、沖縄産施釉陶器の碗が 1 点、ほか戦前に流通したであろう碗の完形品もみられた。14 号墓からも蔵骨器の出土はみられず、13 号墓と似た遺物の様相となっている。水甕をはじめとして、碗、皿、小杯などが見受けられた。碗は概して本土産が多く、砥部焼のほか瀬戸美濃産のものの出土が目立つ。

13 号墓・14 号墓より出土した陶磁器の詳細については以下第 25 表のとおりである。



第 42 図　13 号墓・14 号墓遺構図

図版 35　13・14 号墓遺構　　上段左：13 号墓 墓室完掘状況、右：13・14 号墓遺物散乱状況
下段左：14 号墓 墓室完掘状況、右：14 号墓 墓口 遺物出土状況

第 25-1 表　13・14 号墓出土陶磁器の観察一覧表

番号	遺構名	出土地点	器形	残存部位	口径	器高	底径	施釉	釉色・色調	貫入	文様等	備考
第43図74	13号墓	墓室床面直上	碗	完形	13.30	6.50	4.65	コバルトでの型絵染付後、全体に透明釉を掛ける。畳付は露胎。	全面：透明釉 文様：コバルトのややにぶい発色	あり	外面が点描でひし形の窓を作り中に花文。内面は口縁部にあわせ点描で逆三角形を配する。	スンカンマカイ/砥部産/大正～昭和/底部に印あり
第43図75		墓室	碗	ほぼ完形	13.20	6.20	4.70	コバルトでの型絵染付後、全体に透明釉を掛ける。見込にハマ跡あり。畳付は露胎。	全面：透明釉 文様：コバルトのややにぶい発色	あり	外面に鶴。内面は口縁に沿って点描、間に松竹梅文を描く。	スンカンマカイ/砥部産/大正～昭和/印なし
第43図76		墓室	碗	完形	10.90	5.60	5.05	全面に透明釉を施釉。	全面：透明釉 文様：にぶい緑色	なし	外面の口縁部直下に二条の圏線。	国民食器/底部に「山形屋」と押印あり/統制番号がないため戦時中の製品より古い可能性
第43図77		墓室床面直上	湯のみ	完形	6.50	7.30	3.90	全面に透明釉を施釉。畳付は露胎。	全面：白色	なし	なし	美濃産/底部に「岐382」と押印された統制番号あり
第43図78		墓室床面直上	碗	完形	21.60	6.15	8.95	内面は白化粧後、灰釉を施釉。外面は畳付以外褐釉を掛ける。見込に蛇の目釉剥ぎあり。	外面：黒褐色 内面：灰白色	あり	なし	沖縄の壷屋産(ワンブー)/底部にアルミナあり

第 25-2 表　13・14 号墓出土陶磁器の観察一覧表

番号	遺構名	出土地点	器形	残存部位	口径	器高	底径	施釉	釉色・色調	貫入	文様等	備考
第44図80	14号墓	墓口	碗	完形	12.90	6.40	4.80	コバルトでの型絵染付後、全体に透明釉を掛ける。見込にハマ跡あり。畳付は露胎。	全面：透明色 文様：コバルトのややにぶい発色	なし	外面が点描でひし形の窓を作り中に花文。内面は口縁部にあわせ点描で逆三角形を配する。	スンカンマカイ/砥部産/大正～昭和/底部に印あり
第44図81		墓口	碗	完形	12.90	6.10	4.70	コバルトでの型絵染付後、全体に透明釉を掛ける。畳付は露胎。	全面：透明色 文様：コバルトの鮮やかな発色	なし	外面が点描でひし形の窓を作り中に花文。内面は口縁部にあわせ点描で逆三角形を配する。	スンカンマカイ/砥部産/大正～昭和/印なし
第44図82		墓口	碗	完形	11.00	5.80	4.00	全面に透明釉を施釉。畳付は露胎。	全面：白色 文様：コバルトの鮮やかな発色	なし	外面に手描きで線を引き、間に印文で花文を配する。	瀬戸美濃産か？
第44図83		墓口	碗	完形	11.35	6.00	4.00	全面に透明釉を施釉。畳付は露胎。	全面：白色 文様：青と黄褐色	なし	外面に吹付で富士・鷹・茄をモチーフにした文様。	美濃産/底部に「岐1047」と押印された統制番号あり
第44図84		墓口	碗	完形	12.00	5.15	4.20	全面に透明釉を施釉。畳付は露胎。	全面：灰白色 文様：にぶい青・緑色	なし	外面に銅版転写による銀杏葉の文様。	瀬戸美濃産/文様が製作段階でかすれたのか一部不鮮明/粗雑品か？
第45図85		墓口	皿	完形	13.20	2.50	7.40	全面に透明釉を施釉。畳付は露胎。口縁部の縁に鉄釉か？	全面：青みがかった白色 文様：青色の鮮やかな発色	あり	内面に銅版転写による梅の花を配する。	瀬戸美濃産/貼り合わせが悪くばらつきがあるほか、口縁部の一部に別の転写の跡がみられる。
第45図86		墓室	皿	完形	12.70	2.55	7.40	全面に透明釉を施釉。畳付は露胎。	全面：白色 文様：ややにぶい青色	なし	内面に銅版転写により区画されそれぞれ寿・禄・福の字あり。中央にも福の字。	瀬戸美濃産/貼り合わせがずれている/底部に暘刻印らしき跡あり
第45図87		墓室	皿	完形	10.90	2.00	6.85	全面に透明釉を施釉。口縁部の縁に鉄釉か？	全面：やや青みがかった白色	なし	内面に銅版転写により入小菱をバックに松竹梅の文様。	瀬戸美濃産か？/松竹梅はそれぞれ月や桜の窓の中に描かれる
第45図88		墓室	小杯	完形	4.90	2.80	1.95	全面に透明釉を施釉。畳付は露胎。	全面：白色 文様：にぶい青色	なし	外面に印文による草文	瀬戸美濃産か？
第45図89		墓室	小杯	完形	5.65	2.80	2.15	全面に透明釉を施釉。口縁部に緑と桃色の釉薬。畳付は露胎。	全面：白色	なし	なし	鋳込み成型にて、底部高台が桜の形を呈する/高台内は渦状の巴形を施す/海軍食器か？

第 43 図　13 号墓出土遺物

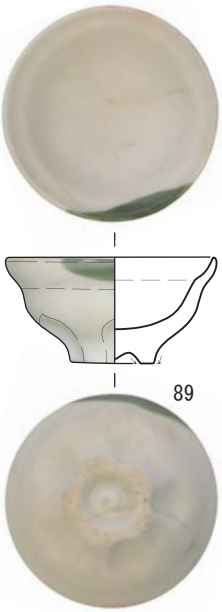
第 44 図　14 号墓出土遺物（1）

85

87

86

88



89

90

0 S=1/2 10cm

0 S=1/3 15cm

第 45 図　14 号墓出土遺物（2）

また、陶磁器以外の遺物として、13 号墓の墓室より出土した焼けた豆と思われるもの（第 43 図 79）や、14 号墓の墓室より出土した石製品（第 45 図 90）がみられた。後者の石製品は、琉球石灰岩製で、成形面を 5 面有している。縁部に孔が 1 つあけられ、糸擦れ痕もともなう。表裏での成形に差がある。擦痕が確認でき、砥石の可能性も考えられるが詳細は不明である。341.8g を量る。写真のみ掲載した。

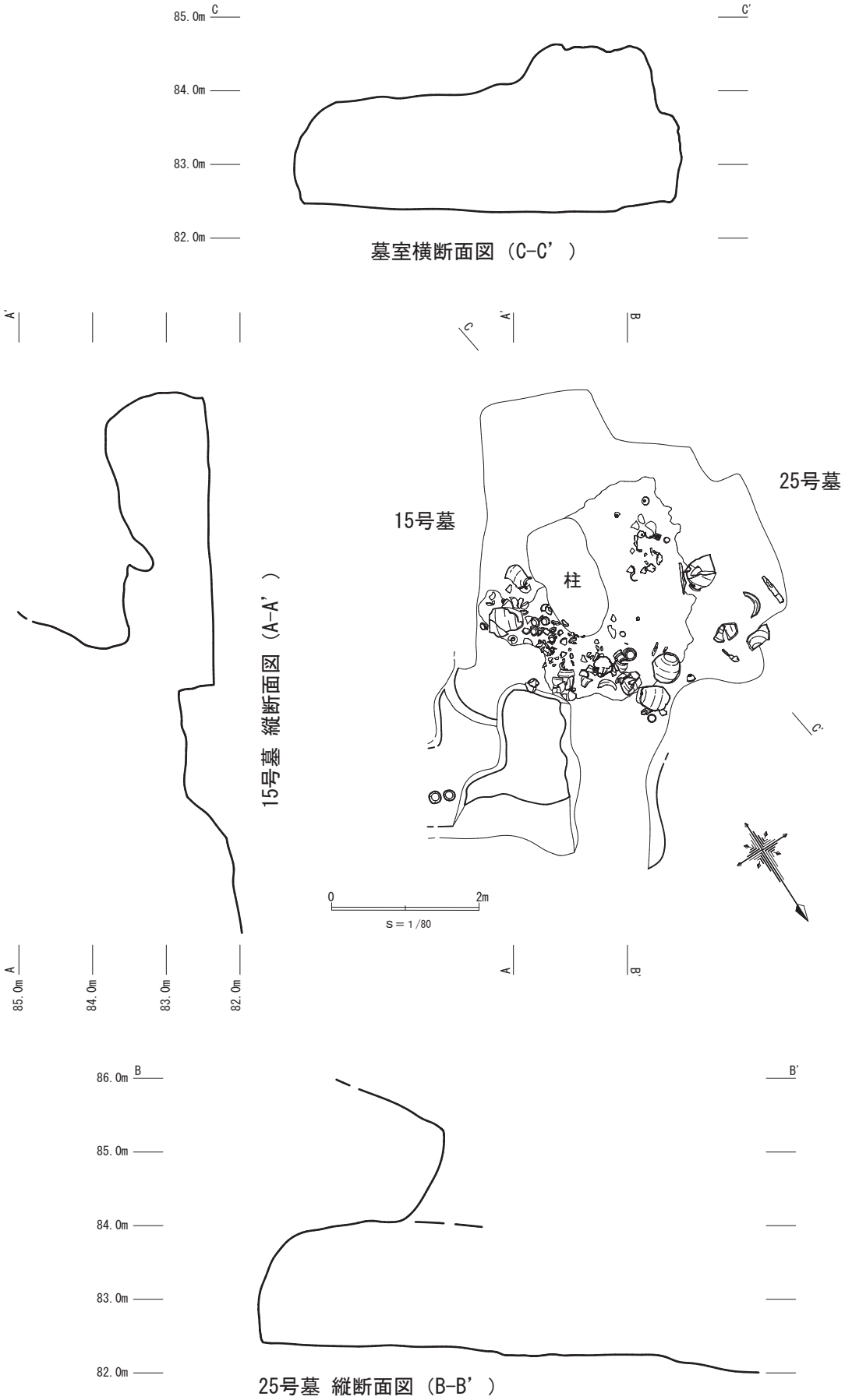
（4）15 号墓・25 号墓

1）遺構（第 46 図）

15 号墓・25 号墓は横穴式の掘込墓で、壁が掘りぬかれ連結している。同丘陵の北東側斜面に位置する（第 36 図）。墓口方位は 15 号墓が北北東（N28° E）、25 号墓が東北東（N77° E）を示す。15 号墓の奥壁と 25 号墓の右壁が掘り広げられ連結しており、両者ともに墓室の形状は不定型である。15 号墓は墓室の直線部分の奥行きが約 1.56m、幅 0.72m、高さは 1.29m を測り、25 号墓は墓室の直線部分の奥行きが 2.43m、幅 5.09m、高さ 1.64m であった。13 号墓・14 号墓と同様床面には炭がみられ、また 25 号墓の墓室内壁面には煤が付着していた。15 号墓・25 号墓ともに蔵骨器の出土はなく、水甕の完形や大破片が多く出土したほか、大量の碗や皿が完形品の状態で出土している。これらから、戦時中に壕として改築され使用されたこと、またその際に大量の日用品が持ち込まれたことが想定できる。

図版 36　15 号墓・25 号墓遺構

上段左：15 号墓（左から 2 番目）・25 号墓（右）、右：墓室内遺物検出状況①
２段目左：墓室内遺物検出状況②、右：25 号墓 墓室内壁面受熱状況



第46図　15号墓・25号墓遺構図

2）遺物

15 号墓・25 号墓に伴う遺物の種類と内訳は第 22 表のとおりである。

15 号墓からは、近代～現代に流通していたと考えられる碗や皿が多く出土している。その多くは本土産であり、碗の半数以上は「スンカンマカイ」と呼ばれるものであった。

25 号墓からは、15 号墓同様近代～現代に流通していたと考えられる碗、皿、小杯といった食器類が完形の状態で大量に出土した。また、水甕の完形品や破片も多く出土している。そのほか、火入として使用されたとみられる資料が出土している。そのうち第 51 図 116 は表面に「シップ薬」と印字されており、容器を火入として再利用していたと考えられる。

15 号墓・25 号墓より出土した陶磁器の詳細については以下第 26 表のとおりである。

第 26-1 表　15・25 号墓出土陶磁器の観察一覧表

番号	遺構名	出土地点	器形	残存部位	口径	器高	底径	施釉	釉色・色調	貫入	文様等	備考
第47 図91	15号墓	墓室床 面直上	碗	完形	12.95	6.70	4.80	コバルトでの型絵染付後、全体に透明釉を掛ける。見込にハマ跡あり。畳付は露胎。	全面：白色 文様：コバルトの鮮やかな発色	なし	外面が点描でひし形の窓を作り中に花文。内面は口縁部にあわせ点描で逆三角形を配する。	スンカンマカイ/砥部産/大正～昭和/底部に印あり
第47 図92		墓室床 面直上	碗	完形	13.70	6.55	4.95	コバルトでの型絵染付後、全体に透明釉を掛ける。見込にハマ跡あり。畳付は露胎。	全面：白色 文様：コバルトのややにぶい発色	なし	外面が点描でひし形の窓を作り中に花文。内面は口縁部にあわせ点描で逆三角形を配する。	スンカンマカイ/砥部産/大正～昭和/底部に印か？(不明瞭)
第47 図93		墓室床 面直上	碗	完形	13.60	6.50	4.80	コバルトでの型絵染付後、全体に透明釉を掛ける。見込にハマ跡あり。畳付は露胎。	全面：白色 文様：コバルトのやや鈍い発色	なし	外面が点描でひし形の窓を作り中に花文。内面は口縁部にあわせ点描で逆三角形を配する。	スンカンマカイ/砥部産/大正～昭和/印なし
第47 図94		墓室床 面直上	皿	完形	10.75	2.15	6.00	全面に透明釉を施釉。畳付は露胎。	全面：白色 文様：にぶい緑色	なし	内面に銅版転写により松竹梅の文様。文様の間にも松竹梅の字が入る。	瀬戸美濃産か？/転写の際一部がかすれ文様が不明瞭/底部に砂が付着
第48 図95		墓室床 面直上	皿	完形	13.00	2.65	7.50	全面に透明釉を施釉。畳付は露胎。	全面：灰白色 文様：青と緑のにぶい発色	なし	内面に銅版転写により梅の実の文様と福の字。口縁には梅の花。青・緑の2色構成。	瀬戸美濃産/張り合わせがずれている
第48 図96		墓室床 面直上	皿	完形	13.10	2.70	7.40	全面に透明釉を施釉。畳付は露胎。	全面：白色 文様・にぶい発色	なし	内面に銅版転写による桜花文や草文。緑1色で構成。	瀬戸美濃産/転写の際一部がかすれ文様が不明瞭
第48 図97		墓室床 面直上	皿	完形	13.00	2.55	7.50	全面に透明釉を施釉。畳付は露胎。	全面：青みがかった白色 文様：にぶい発色	なし	内面に銅版転写により青海波文をバックに桜の文様。青1色で構成。	瀬戸美濃産か？
第48 図98		墓室床 面直上	皿	ほぼ完形	12.60	3.65	5.10	全面に透明釉を施釉。畳付は露胎。	全面：青みがかった白色 文様：鮮やかな発色	なし	内外面に呉須で梅や菊の花文を描く。	底部に「陶峰園製」の呉須印(書き？)あり

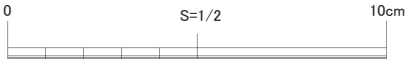
第 47 図　15 号墓出土遺物（1）

95

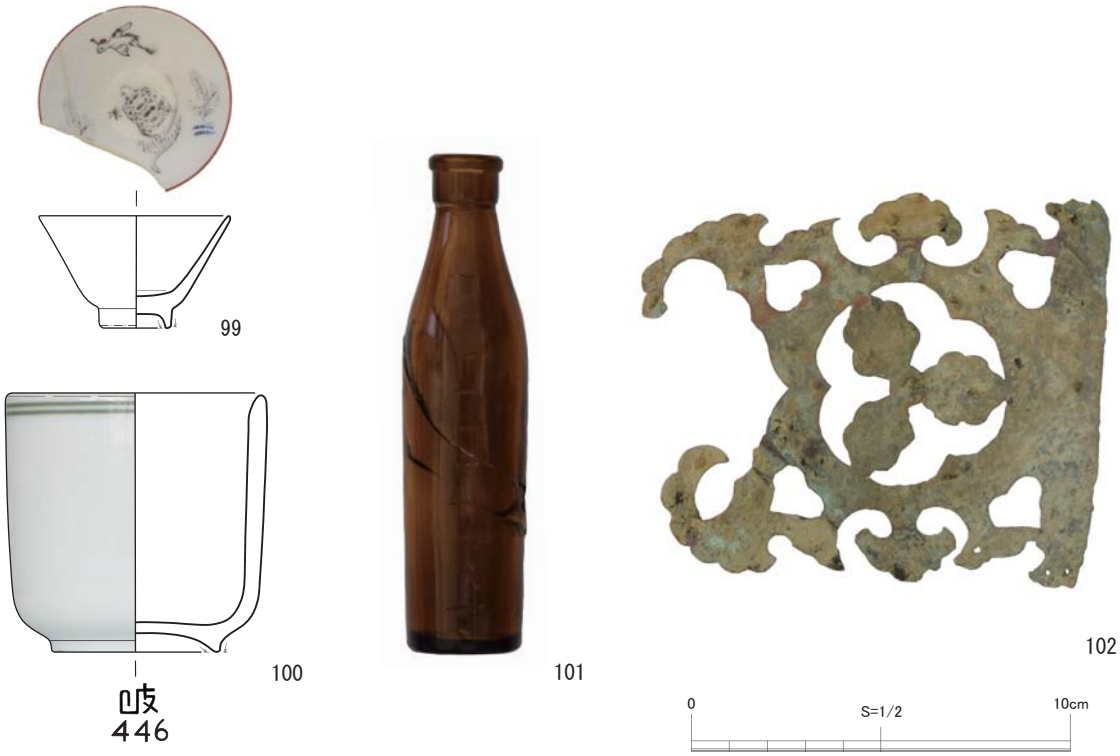
96

97

98



第 48 図　15 号墓出土遺物（2）



第 49 図　15 号墓出土遺物（3）

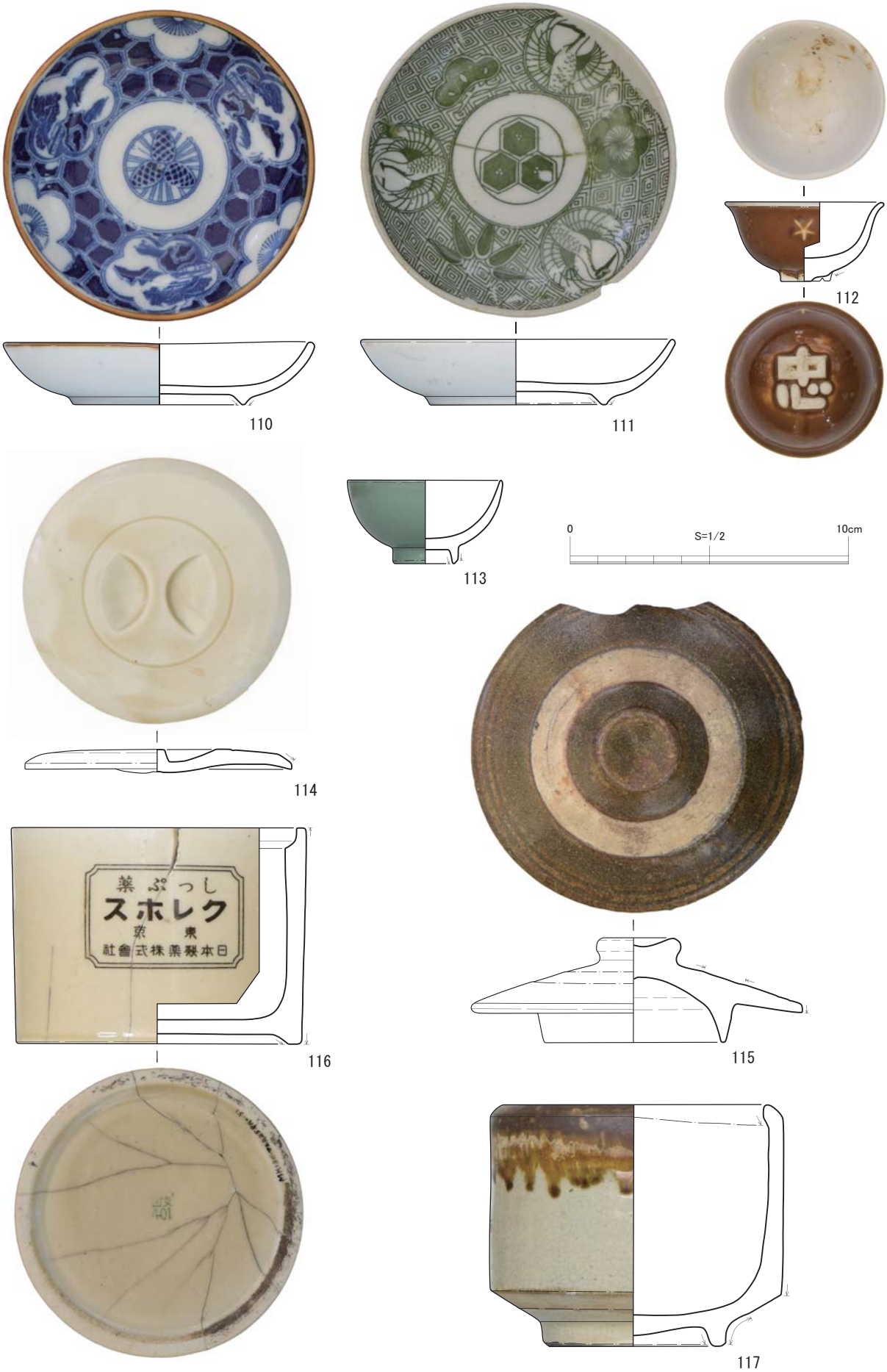
第 26-2 表　15・25 号墓出土陶磁器の観察一覧表

番号	遺構名	出土地点	器形	残存部位	口径	器高	底径	施釉	釉色・色調	貫入	文様等	備考
第49図99	15号墓	墓室床面直上	小杯	ほぼ完形	5.10	2.90	1.85	全面に透明釉を施釉。畳付は露胎。口縁部の縁は赤の釉が掛かる。	全面：白色 文様：にぶい発色	なし	内面に印文で鶴、亀、草文が配される。黒・赤・青の3色で構成。	肥前産か？/欠損部分にも印文の可能性
第49図100		墓室床面直上	湯のみ	完形	6.90	6.90	4.50	全面に透明釉を施釉。畳付は露胎。	全面：白色 文様：にぶい緑色	なし	外面の口縁部直下に二条の圏線。	国民食器/美濃産/底部に「岐446」と陰刻された統制番号あり
第50図103	25号墓	墓室床面直上	碗	完形	12.80	6.70	4.95	コバルトでの型絵染付後、全体に透明釉を掛ける。見込にハマ跡あり。畳付は露胎。	全面：黄味がかった白色 文様：コバルトの鮮やかな発色	なし	外面が点描でひし形の窓を作り中に花文。内面は口縁部にあわせ点描で逆三角形を配する。	スンカンマカイ/砥部産/大正～昭和/印あり
第50図104		墓室床面直上	碗	完形	13.90	5.70	4.95	コバルトでの型絵染付後、全体に透明釉を掛ける。見込にトチン跡あり。畳付は露胎。	全面：青みがかった白色 文様：コバルトのややにぶい発色	なし	外面が点描でひし形の窓を作り中に花文。内面は口縁部にあわせ点描で逆三角形を配する。	スンカンマカイ/砥部産/大正～昭和/釉がややぼやける
第50図105		墓室床面直上	碗	完形	8.30	4.80	3.10	全面に透明釉を施釉。コバルトにより文様。畳付は露胎。	全面：白色 文様：コバルトの淡い発色	なし	外面を4区画設け、それぞれに寿字文、上部に五角帯文をゴム判で配する。	美濃産/底部に「岐357」と陽刻にて統制番号あり
第50図106		墓室床面直上	碗	完形	7.80	4.45	3.00	全面に透明釉を施釉。コバルトにより文様。畳付は露胎。	全面：白色 文様：コバルトの鮮やかな発色	なし	外面に桃、寿字文を交互に配する。高台内にも圏線を1条廻らす。	瀬戸美濃産/子ども用の碗

第 50 図　25 号墓出土遺物（1）

第 26-3 表　15・25 号墓出土陶磁器の観察一覧表

番号	遺構名	出土地点	器形	残存部位	口径	器高	底径	施釉	釉色・色調	貫入	文様等	備考
第50図107	25号墓	墓室床面直上	碗	完形	8.40	4.70	3.05	全面に透明釉を施釉。コバルトにより文様。畳付は露胎。	全面：白色 文様：コバルトのにぶい発色	なし	外面に菊花文の入る扇状の窓をゴム判で配する。	瀬戸美濃産/子ども用の碗
第50図108		墓室床面直上	碗	完形	8.10	4.70	3.15	全面に透明釉を施釉。コバルトにより文様。畳付は露胎。	全面：白色 文様：コバルトのややにぶい発色	なし	外面にゴム判で唐草文と菱文の一部にみえる丸文を交互に配する。高台内にも圏線を1条廻らす。	瀬戸美濃産/子ども用の碗
第50図109		墓室床面直上	湯のみ	完形	6.80	4.90	3.20	全面にクロム釉を掛ける。	全面：淡い緑色	なし	なし	瀬戸美濃産か？/高台内に砂が付着
第51図110		墓室床面直上	皿	完形	11.20	2.30	6.30	全面に透明釉を施釉。コバルトにより文様。口唇部にクロム釉。畳付は露胎。	全面：青みがかった白色 文様：コバルトのややにぶい発色	なし	内面に銅版転写による亀甲文(吉祥文)をバックに見込にまつぼっくりなどを配する。	瀬戸美濃産
第51図111		墓室床面直上	皿	完形	11.30	2.35	6.55	全面に透明釉を施釉。緑釉により文様。畳付は露胎。	全面：白色 文様：にぶい緑色	なし	内面に銅版転写による入子菱文をバックに松竹梅と鶴文が配される。	瀬戸美濃産/貼り合わせで歪み、一部文様が消失している
第51図112		墓室床面直上	小杯	完形	5.70	2.85	1.80	全面に透明釉を施釉。外面に褐釉を施釉。底部は露胎する。	外面：褐色 内面：白色	なし	外面に陸軍の星マークを型押し。内面に日章旗・桜・船などが描かれる	肥前産か？/高台は「忠」の字に成型/内面の文様の色は消失している/「念記隊営■」の銘が確認できる/陸軍食器
第51図113		墓室床面直上	小杯	完形	5.60	3.00	2.30	全面にクロム釉を掛ける。畳付は露胎。	全面：淡い緑色	なし	なし	瀬戸美濃産か？
第51図114		墓室床面直上	蓋	完形	9.60	0.85	9.60	庇上面に釉を施釉。	全面：淡黄白色	なし	つまみの周囲に圏線を1条。	内面に墨の付着あり/第51図116とセット関係か
第51図115		墓室床面直上	蓋	完形	11.95	3.80	6.60	庇上面に鉄釉を掛けた後、蛇の目釉剥ぎ。	庇上面：黒褐色	なし	庇上面の縁直近に圏線を2条。	沖縄壷屋産/第51図117の蓋として使用したか？
第51図116		墓室床面直上	容器（火入）	完形	10.50	8.80	6.65	外面に灰釉を施釉。	全面：淡黄白色	なし	なし	表面に「しっぷ薬クレホス」「日本■薬株式會社」と押印あり/底部に「岐401」と押印にて統制番号あり
第51図117		墓室床面直上	火入	完形	10.60	7.90	10.40	全面に白化粧の後外面に褐釉、透明釉を施釉。腰部は蛇の目釉剥ぎされ、畳付は露胎。見込にハマ跡あり。	全面：黄味がかった乳白色 口縁部：褐釉のまだらな発色	あり	口縁部直下に鉄釉を施すが、重ね焼のためか釉が剥げた跡あり。跡の上は透明釉の発色なし。	沖縄の壷屋産(ヒートゥイ)/円筒形で腰部から高台脇まで斜めに折れ曲がる/鉄釉の釉垂れのほか内面に透明釉が垂れ落ちる



第 51 図　25 号墓出土遺物（2）

図版 37　25 号墓出土遺物

陶磁器以外の遺物として、25 号墓からは鞐（図版 37：121、122）が出土している。２点とも銅製で、墓室内床面直上より出土した。図版 37 の 121 は長さ 1.61㎝、幅 1.34㎝、厚さ 0.1㎝である。122 は長さ 1.66㎝、幅 1.29㎝、厚さ 0.09㎝である。また、15 号墓、25 号墓ともに調度品のものとみられる飾り金具（第 49 図 102、図版 37：128 ～ 132）が出土している。周辺には木片が出土したことから、調度品が持ち込まれていたことは明らかである。そのほか、15 号墓から薬瓶と思われるガラス瓶（第 49 図 101）、25 号墓からはボタン（図版 37：123 ～ 126）、銭貨（図版 37：118・119）、おろしがね（図版 37:127）、何かの記念品であろうメダル（図版 37:120）が出土している。これらは写真のみ掲載とした。

（５）16 号墓

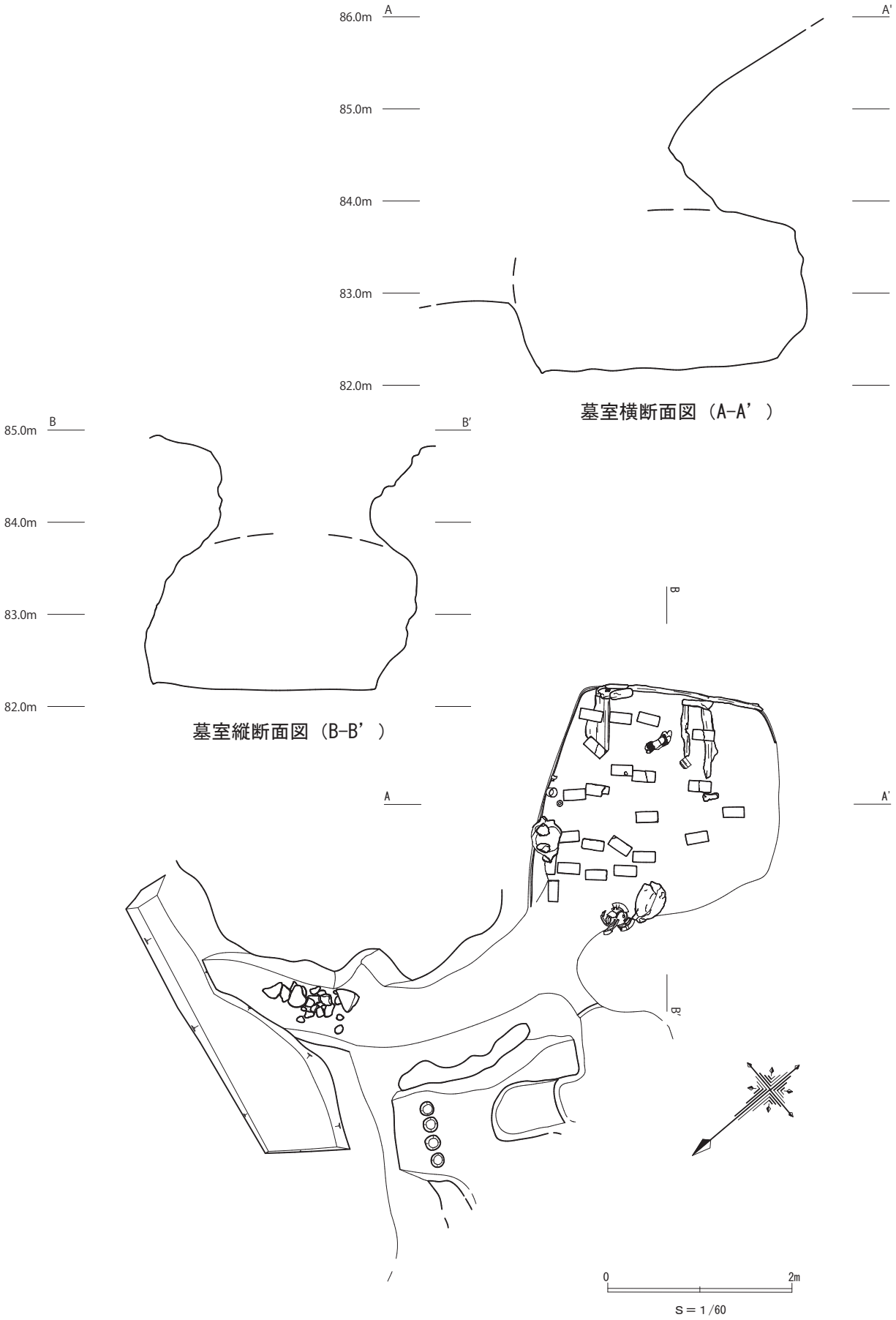
１）遺構（第 52 図）

16 号墓は、15 号墓・25 号墓に隣接する横穴式の掘込墓である。同丘陵の北東側斜面に位置しており、左壁が掘りぬかれ 26 号墓と一部連結している（第 36 図）。墓口方位は北西（N39° W）を示す。墓室の直線部分の奥行きが 2.55m、幅 2.46m、高さが 1.65m を測る。墓室の平面形は不明瞭ではあるが方形状を呈している。墓室内床面直上より、やや規則的に配置された煉瓦が 21 点も出土した。その周辺に木片が検出したことから、煉瓦は床面として使用する板を設置するための台石的な役割だったと考えられる。そのほか、大型の鉄鍋、完形の香炉や灯明具、靴底などが検出したが、蔵骨器や人骨は出土しなかった。墓口からは、配置されていたかは不明であるが水甕の破片が集中して出土している。以上より、16 号墓も他遺構と同じく戦時中に壕として使用されていたと考えられる。想定している羨道が直線的でなくカーブを描いていること、墓室内入口の位置が中央でなく右端であることから、従来あった墓を大きく改築したか、あるいは、最初から壕として掘り込みを行い築造した遺構の可能性もあろう。

２) 遺物

16 号墓に伴う遺物の種類と内訳は第 22 表のとおりである。前述したように、16 号墓からは蔵骨器の出土はなく、水甕の破片や鉄鍋、火入などが出土した。隣接する 15 号墓・25 号墓と異なり、碗や皿といった食器類の出土は少なかった。これらの中から、図化可能な資料計 4 点を報告する。出土した陶磁器の詳細は、以下第 27 表のとおりである。

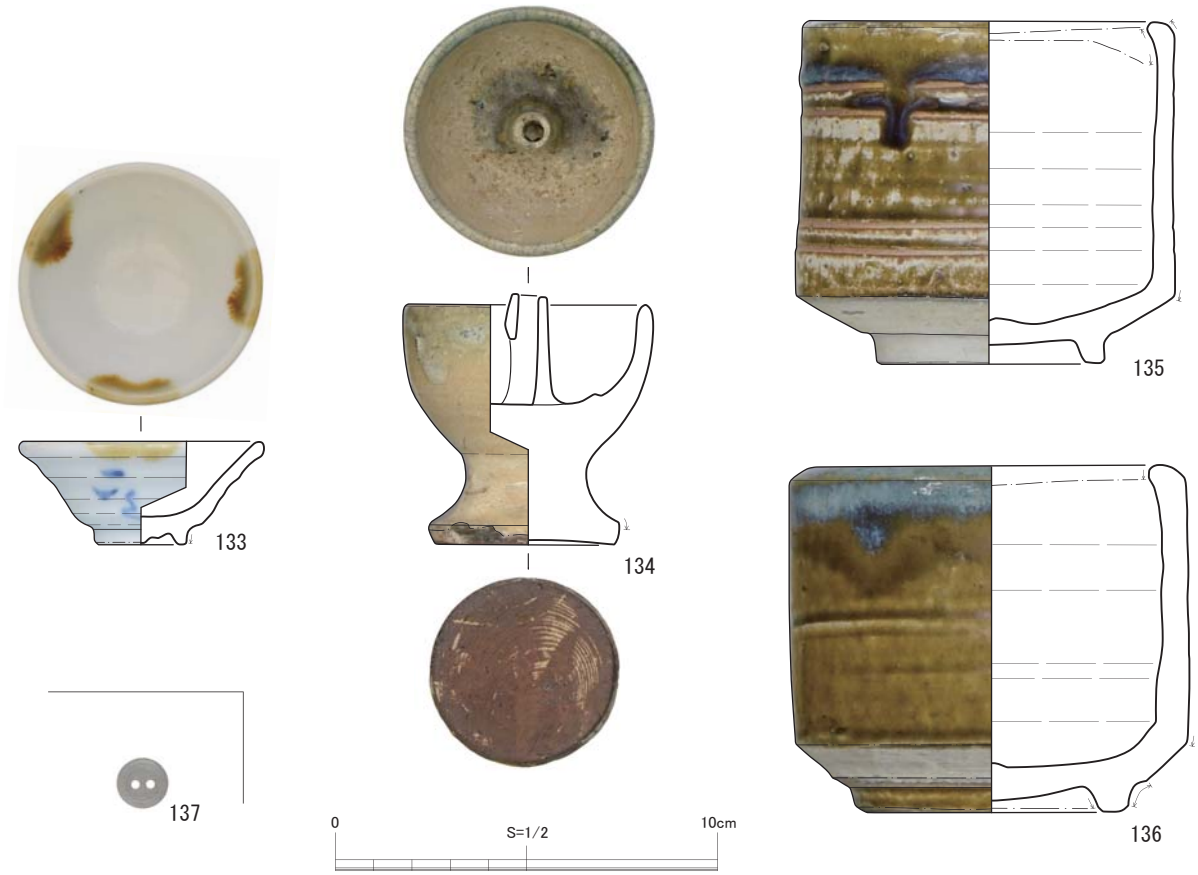
図版 38　16 号墓遺構　　左：16 号墓（左）、右：墓室内遺物検出状況



第 52 図　16 号墓遺構図

第 27 表　16 号墓出土陶磁器の観察一覧表

番号	遺構名	出土地点	器形	残存部位	口径	器高	底径	施釉	釉色・色調	貫入	文様等	備考
第53 図133	16号墓	墓室床 面直上	小杯	完形	6.40	2.70	2.50	全面に透明釉を施釉。畳付、高台内は露胎。	全面：白色 文様：まだらな黄褐色	なし	外面にコバルトによる字？と内面口縁部縁際に飴釉による彩色が3箇所みられる。	肥前産か？/高台内は渦状の巴形を施す
第53 図134		墓室床 面直上	灯明具	完形	6.50	6.60	4.90	全面に白化粧の後全体に透明釉、口縁部・灯芯支えの突起の上部に緑釉を施釉。底部は露胎する。	外面：灰褐色・口縁部はオリーブ黄色 内面：灰白色	あり	なし	沖縄の壷屋産/灯芯支えの突起は円筒形で片側に切れ込みを有する/内面に砂の付着あり/底部に糸切り痕あり
第53 図135		墓室床 面直上	火入	完形	9.80	8.95	6.00	全面に白化粧の後外面に飴釉・緑釉を施釉。腰部から底部にかけて釉剥ぎがなされ露胎。	外面：まだらなオリーブ色 内面：灰白色	なし	外面の上下部両方に、釉薬をかき取り2本の沈線が施される。口縁部直下に緑釉を廻らすが飴釉と混ざり、まだらな青色の発色部分あり。	沖縄の壷屋産(ヒートゥイ)/円筒形で腰部から高台脇まで斜めに折れ曲がる/緑釉の釉垂れが著しい
第53 図136		墓室床 面直上	火入	完形	10.40	9.10	7.10	全面に白化粧の後外面に飴釉・緑釉を施釉。畳付及び腰部は露胎するが、高台脇・高台内は施釉される。	外面：オリーブ色 内面：灰白色	あり	口縁部直下に緑釉を廻らすが飴釉と混ざりまだらな水色に発色する。	沖縄の壷屋産(ヒートゥイ)/円筒形で腰部から高台脇まで斜めに折れ曲がる



第 53 図　16 号墓出土遺物

なお、陶磁器以外の遺物として、墓室床面直上よりボタン（第 53 図 137）が出土した。

（6）17 号墓

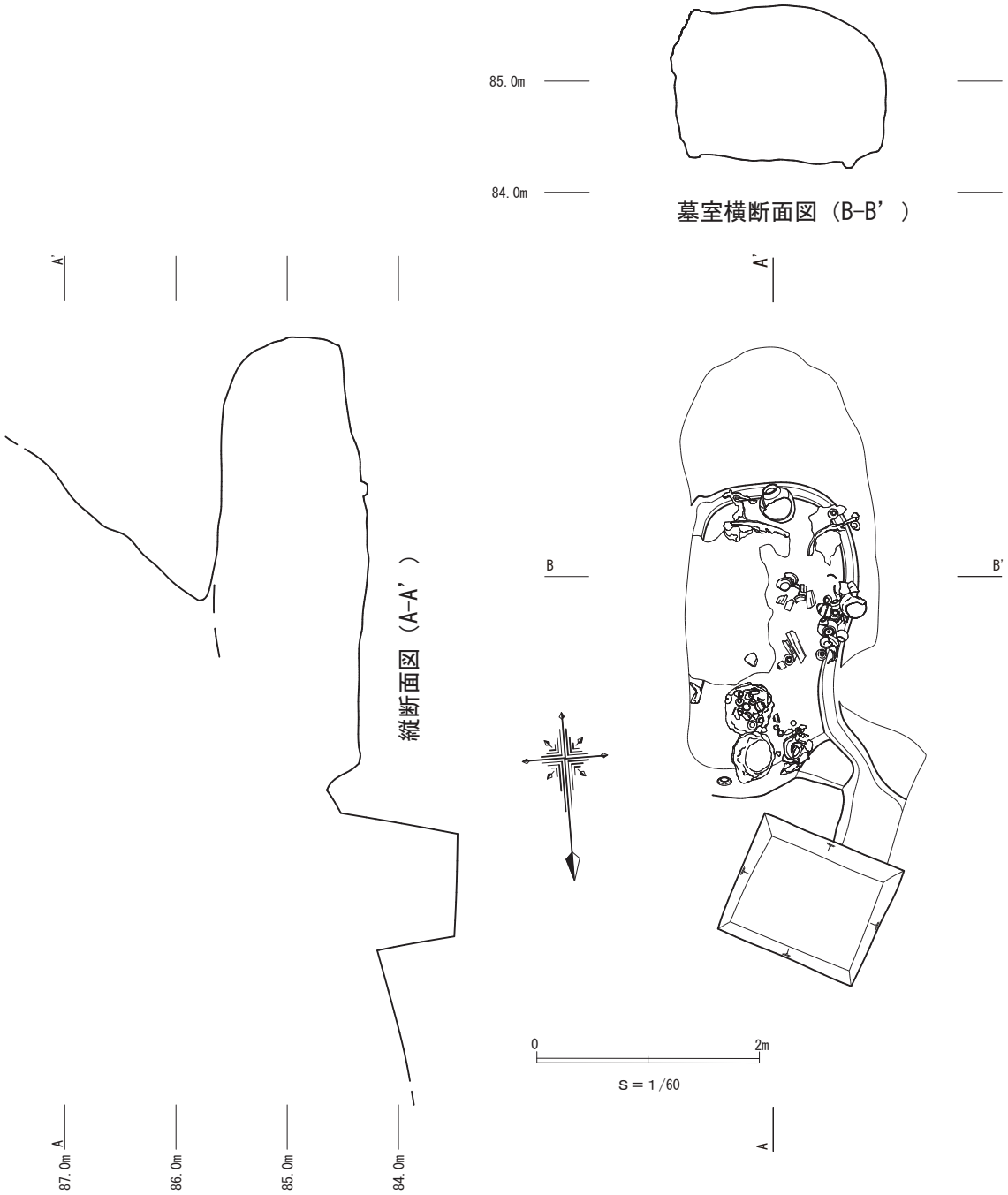
1）遺構（第 54 図）

17 号墓は丘陵の東部斜面の中腹に位置する横穴式の掘込墓である（第 36 図）。墓口方位は北北東（N12° E）を示す。また、墓口前には墓口を隠すようにフールが設置されていた。墓室の平面形は隅丸の長方形状であり、墓室中央から両壁へとつながる溝を検出した。墓室の直線部分の奥行きは 3.77m、幅 1.51m、高さ 1.24m を測る。蔵骨器は出土せず、完形の皿や小杯、湯のみといった食器類が大量に出土した。その中の数点は大型鉄鍋の中に納められた状態で見つかっている。また、調度品と思われる木片や飾り金具も見つかったことから、他の遺構の項でも前述してきたように、日用品が大量に持ち込まれた避難壕であると考えられる。ただし、出土した遺物をみると、うぐいす杯といった珍しい資料もあり、他の遺構より比較的上等品が多い点が特筆される。なお、羨道の形状や墓室内入口の位置をみると、16 号墓同様従来あった墓を大幅に壕へと改築したものか、もしくは最初から壕として掘り込みを行って造られたものかという両方の可能性が考えられる。

2）遺物

17 号墓に伴う遺物の種類と内訳は第 22 表のとおりである。蔵骨器は出土せず、遺物の大半を食器類などの陶磁器が占めている。17 号墓から出土する陶磁器の種類は多彩で、碗や皿、湯のみ、小

図版 39　17 号墓遺構　　上段左：17 号墓、右：17 号墓 墓口前フール検出状況
下段左：17 号墓 完掘状況、右：墓室内遺物検出状況



第 54 図　17 号墓遺構図

杯のほか、鉢、急須、蓋、醤油差し、焼締筒形瓶、アンダガーミなど近世～現代の資料が得られている。これらは本土産のものが多く、スンカンマカイといった砥部焼のほか、瀬戸美濃産、肥前産が多くの割合を占めており、沖縄（壺屋）産は少ない傾向にあった。陶磁器の詳細は第 28 表のとおりである。

なお、陶磁器以外の遺物として、調度品のものと思われる飾り金具（第 60 図 170・171）が墓室より出土している。おそらく、箪笥の取手部分と考えられる。また、第 60 図 172 は直径約 2.0cm の金属製のボタンである。第 60 図 173 は茶色のガラス瓶で、瓶の中央に縦書きで「みづほ染料」の文字がみられる。いずれも墓室床面直上よりの出土である。

第 28-1 表　17 号墓出土陶磁器の観察一覧表

番号	遺構名	出土地点	器形	残存部位	口径	器高	底径	施釉	釉色・色調	貫入	文様等	備考
第55 図138	17号墓	墓室床 面直上	碗	完形	12.80	6.40	5.15	コバルトでの型絵染付後、全体に透明釉を掛ける。見込にハマ跡あり。畳付は露胎。	全面：黄味がかった白色 文様：コバルトの鮮やかな発色	あり	外面が点描でひし形の窓を作り中に花文。内面は口縁部にあわせ点描で逆三角形を配する。	スンカンマカイ/砥部産/大正～昭和/全体的に茶ばんだ貫入が入る/印あり
第55 図139		墓室床 面直上	碗	完形	13.10	6.40	4.90	コバルトでの型絵染付後、全体に透明釉を掛ける。見込にハマ跡あり。畳付は露胎。	全面：青みがかった白色 文様：コバルトのにぶい発色	あり	外面が点描でひし形の窓を作り中に花文。内面は口縁部にあわせ点描で逆三角形を配する。	スンカンマカイ/砥部産/大正～昭和/印あり/型絵染付がやや雑である
第55 図140		墓室床 面直上	碗	完形	13.10	6.30	5.20	コバルトでの型絵染付後、全体に透明釉を掛ける。見込にハマ跡あり。畳付は露胎。	全面：黄味がかった白色 文様：コバルトのややにぶい発色	あり	外面が点描でひし形の窓を作り中に花文。内面は口縁部にあわせ点描で逆三角形を配する。	スンカンマカイ/砥部産/大正～昭和/印なし
第55 図141		墓室床 面直上	碗	完形	13.80	6.30	4.90	コバルトでの型絵染付後、全体に透明釉を掛ける。見込にハマ・トチン跡あり。畳付は露胎。	全面：青みがかった白色 文様：コバルトのややにぶい発色	なし	外面が点描でひし形の窓を作り中に花文。内面は口縁部にあわせ点描で逆三角形を配する。	スンカンマカイ/砥部産/大正～昭和/印なし
第56 図142		墓室床 面直上	碗	完形	13.10	6.40	5.60	全面に白化粧の後透明釉を全面に掛ける。見込には蛇の目釉剥ぎを施す。畳付は露胎。	全面：灰白色 文様：緑釉と飴釉のにぶい発色	あり	外面に葉文が緑釉と飴釉で施される。	沖縄の壷屋産/畳付部分に白土が付着/口縁部縁の一部が剥げ露胎する
第56 図143		墓室床 面直上	碗	完形	10.90	4.90	3.85	全面に透明釉を施釉。畳付は露胎。	全面：白色 文様：にぶい緑色	なし	外面の口縁部直下に二条の圏線。	国民食器/美濃産/底部に「瀬424」と緑釉で押印された統制番号あり
第56 図144		墓室床 面直上	碗	完形	10.30	5.70	3.70	コバルトでの型絵染付後、全面に透明釉を施釉。畳付は露胎。	全面：白色 文様：コバルトのにぶい発色	なし	外面に横線を2条、縦に2重線を等間隔に配し、内面に花文。	瀬戸美濃産か？/口縁部はかえらず直口する/子ども用の碗か？/印なし
第56 図145		墓室床 面直上	碗	完形	8.20	4.80	3.10	全面に透明釉を施釉。	全面：白色 文様：コバルトのにぶい発色	あり	外面にコバルトにより丸窓の中に交差線と点による文様が施される。	瀬戸美濃産/子ども用の碗/全体的に茶ばんだ貫入がみられる
第56 図146		墓室床 面直上	碗	完形	8.30	4.80	3.10	全面に透明釉を施釉。	全面：青みがかった白色 文様：コバルトのにぶい発色	なし	外面に菊花文と菱子文。高台脇にも2条圏線。	瀬戸美濃産/子ども用の碗/全体的に茶ばんだ貫入がみられる
第56 図147		墓室床 面直上	碗	完形	9.10	4.35	3.15	全面に透明釉を施釉。上絵付。	全面：白色 文様：茶色 (不鮮明)	なし	外面にゴム判で自転車に乗る男の子と日章旗が対になり配される。	瀬戸美濃産か？/子ども用の碗/文様の色がほぼ落ちている
第56 図148		墓室床 面直上	碗	完形	8.10	4.70	3.20	全面に透明釉を施釉。畳付は露胎。	全面：白色 文様：緑色	なし	外面の口縁部直下に二条の圏線。	国民食器/美濃産/底部に「岐286」と呉須で押印された統制番号あり

第 28-2 表　17 号墓出土陶磁器の観察一覧表

番号	遺構名	出土地点	器形	残存部位	口径	器高	底径	施釉	釉色・色調	貫入	文様等	備考
第56 図149	17号墓	墓室床 面直上	碗	完形	8.20	4.65	3.20	全面に透明釉を掛ける。畳付は露胎。	全面：白色 文様：緑色	なし	外面の口縁部直下に二条の圏線。	国民食器/美濃産/底部に「岐286」と呉須で押印した統制番号あり
第56 図150		墓室床 面直上	皿	完形	17.1 × 13.5	2.6 × 2.4	11.6 × 8.5	内面にコバルトで文様を描き、全面に透明釉を掛ける。	全面：青みがかった白色 文様：コバルトの淡い発色と藍色の2種	なし	内面にゴム判による城と手描きによる木の枝・石垣。	瀬戸美濃産/菱皿
第57 図151		墓室床 面直上	皿	完形	13.20	2.70	7.50	全面に透明釉を施釉。内面の文様のほか、口縁部縁に鉄釉が廻る。	全面：白色 文様：コバルトの鮮やかな発色	なし	内面に銅版転写による入子菱文や松竹梅が配される。	瀬戸美濃産
第57 図152		墓室床 面直上	皿	完形	13.10	2.70	7.50	全面に透明釉を施釉。	全面：白色 文様：コバルトの鮮やかな発色	なし	内面にゴム判による菊花文や草文のほか、見込に寿字文。	瀬戸美濃産/内面に付着物や煤あり
第57 図153		墓室床 面直上	皿	完形	13.80	1.95	8.65	全面に透明釉を施釉。畳付は露胎。	全面：白色	なし	内面にプリント印文。	瀬戸美濃産/底部に「硬質磁器 特■」と押印あり
第57 図154		墓室床 面直上	皿	完形	13.20	2.20	6.80	全面に淡い青色の釉を掛ける。畳付は露胎。	全面：青灰色	なし	菊花皿。見込み部分に圏線を2条、中央に文様(花？)を施す。	瀬戸美濃産か/まだらに発色する
第58 図155		墓室床 面直上	小杯	完形	5.40	3.00	2.20	全面に透明釉を施釉。内面に緑釉を吹き付け。	全面：白色 内面：緑色、描かれた文様は赤	なし	内面に緑釉吹き付けで海軍の錨マーク、内面に日章旗や桜花文が描かれる。	肥前産か？/錨下方部に「石川」と書かれる(色が落ちている)/海軍食器
第58 図156		墓室床 面直上	小杯	完形	5.60	3.00	2.50	全面に透明釉を施釉。口縁部の縁に薄桃色の釉。	全面：白色 口縁部：薄桃色	なし	口縁部縁を薄桃色の釉掛け。見込に海軍の錨マークが型押し。日章旗が赤で描かれる。	肥前産か？/日章旗は色が落ちている
第58 図157		墓室床 面直上	小杯	完形	5.40	2.80	2.00	全面に透明釉を施釉。外面に鉄釉を施釉。底部は露胎する。	外面：褐色 内面：白色	なし	外面に「志きしまの大和心を人とは↘朝日よにほふ山桜花」と陸軍の星マークを型押し。内面に日章旗が赤で書かれる。	肥前産か？/高台は桜形に成型/陸軍食器
第58 図158		墓室床 面直上	小杯	完形	5.30	3.25	2.40	全面にクロム釉を掛ける。畳付は露胎。	全面：淡い緑色 文様：薄桃色と黄色	なし	内面にイッチン描きで、黄色で清水寺、薄桃色で桜が描かれる。桜は一部吹き付け。	美濃産/笛部と底部に孔を有する(うぐいす盃)/底部に「岐15」と陽刻された統制番号あり
第58 図159		墓室床 面直上	鉢	完形	18.40	6.30	8.50	全面に透明釉を掛ける。	全面：白色 文様コバルトのにぶい発色	なし	内面を4区画にわけ印文で菊花文など花の文様を配する。外面にも高台付近に3条圏線を廻らせる。	肥前産か？/蛇の目凹型高台

第 28-3 表　17 号墓出土陶磁器の観察一覧表

番号	遺構名	出土地点	器形	残存部位	口径	器高	底径	施釉	釉色・色調	貫入	文様等	備考
第59図160		墓室床面直上	醤油差し	完形	12.70	5.25	6.35	全面に透明釉を掛ける。口縁部、注口縁にコバルトを施す。	全面：青みがかった白色 文様：コバルトの鮮やかな発色	なし	口縁部にコバルトで幾何学文様。注口や口縁部直下にもコバルトを廻らせる。	内面見込に「醤油」、底部に「今井商店 大正区泉尾濱通四丁目」と呉須にて押印あり
第59図161		墓室床面直上	蓋	完形	7.95	2.35	6.35	全面に透明釉を掛ける。外面にコバルトで文様を描く。	全面：青みがかった白色 文様：コバルトの淡い発色と濃い発色	なし	外面に花文をコバルトで描く。文様下部はセット関係にある第59図165の文様に続く。	第59図165の湯のみとセット関係か
第59図162		墓室床面直上	急須（蓋）	完形	6.00	3.00	4.40	全面に透明釉を掛ける。高台は露胎する。コバルトで文様。	全面：白色 文様：コバルトの鮮やかな発色	なし	外面に吹き付けで葉文。葉脈や木の枝を筆書き。	瀬戸美濃産か？/第59図163の身とセット関係
第59図163		墓室床面直上	急須（身）	完形	6.10	9.10	6.60	全面に透明釉を掛ける。畳付は露胎。コバルトで文様。	全面：白色 文様：コバルトの鮮やかな発色	なし	外面に吹き付けで葉文。葉脈や木の枝を筆書き。	瀬戸美濃産か？/茶漉しのため注口前に32個の小孔あり/内面に桜花の型押がみられる/第59図162の蓋とセット関係
第59図164		墓室床面直上	湯のみ	完形	7.60	5.00	3.30	全面に透明釉を掛ける。吹き付けでコバルトが施釉される。	全面：青みがかった白色 文様：コバルトの淡い発色と藍色	なし	外面に吹き付けで葉文。	美濃産/底部に「岐321」と陰刻された統制番号あり
第59図165		墓室床面直上	湯のみ	完形	7.40	5.50	3.30	全面に透明釉を掛ける。外面にコバルトで文様を描く。	全面：青みがかった白色 文様：コバルトの淡い発色と濃い発色	なし	外面に葉花文をコバルトで描く。文様上部はセット関係にある第59図161の文様に続く。	第59図161の蓋とセット関係
第59図166		墓室床面直上	湯のみ	完形	6.30	6.60	3.50	全面に透明釉を掛ける。畳付は露胎。	全面：白色 文様：赤や水色	なし	外面にプリント印文。	美濃産/色が安全に落ちているが葉文あり/底部に「岐518」と陽刻にて統制番号あり
第59図167		墓室床面直上	湯のみ	完形	6.70	6.60	3.40	全面に透明釉を掛ける。畳付は露胎。	全面：白色 文様：茶や橙色	なし	外面にプリント印で花文と葉文。内面にも黄の色味があるが文様かは判然せず。	底部に「昭和陶器」と押印にて社印あり/一部煤が付着する
第60図168		墓口埋土	壷	完形	11.30	17.10	10.50	全面に黒釉を掛ける。口唇部と胴下部～高台は露胎。	全面：赤黒色	なし	外耳の高さで2条圏線。	沖縄壷屋産(アンダガーミ)/内面の一部露胎/人骨片など付着物なし
第60図169		墓室床面直上	瓶	ほぼ完形	3.80	26.40	9.10	なし	素地：赤褐色	なし	なし	焼締筒形瓶/沖縄壷屋産/肩部に向かって末広になり注口まで窄まる形状/19世紀製作

第 55 図　17 号墓出土遺物（1）

第 56 図　17 号墓出土遺物（2）

151

152

153

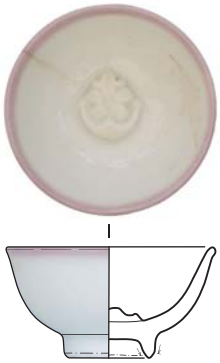
154

0　S=1/2　10cm

第 57 図　17 号墓出土遺物（3）

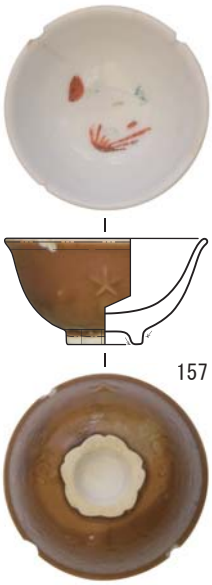
155

158



156

159

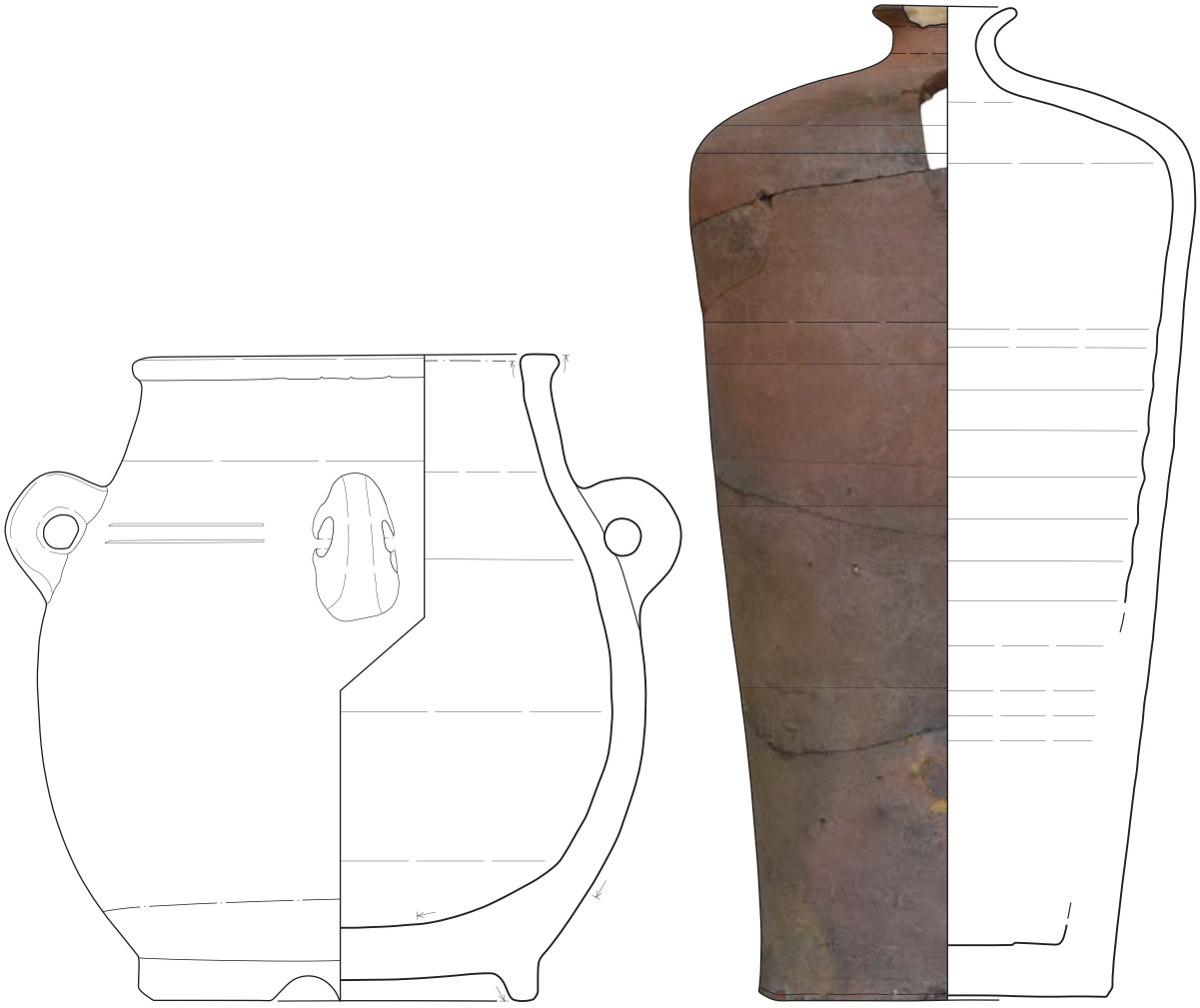


157

0 S=1/2 10cm

第 58 図　17 号墓出土遺物（4）

第 59 図　17 号墓出土遺物（5）



170

172

171

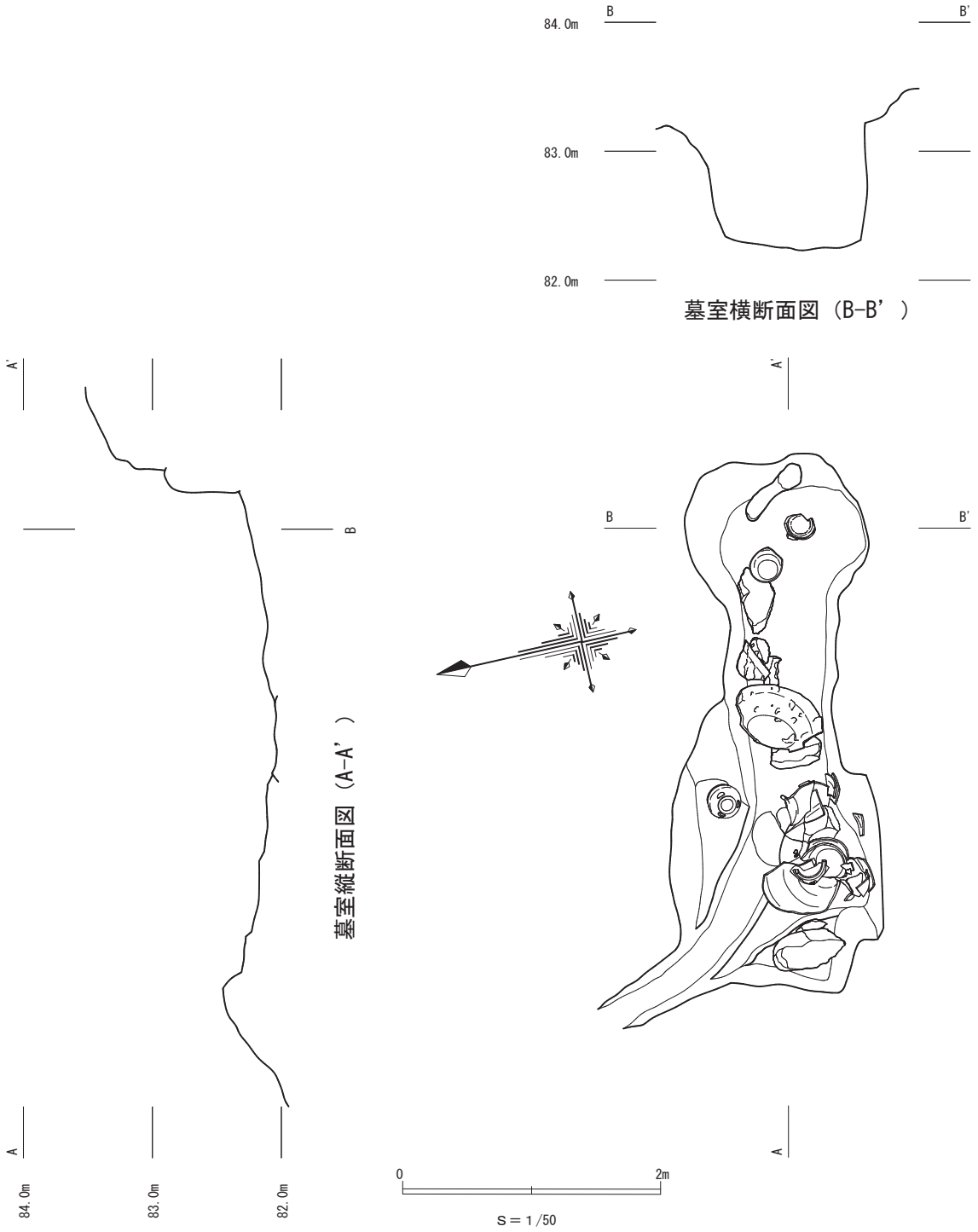
173

第 60 図　17 号墓出土遺物（6）

（7）21 号墓

1）遺構（第 61 図）

21 号墓は丘陵の北端に位置する横穴式の掘込墓である（第 36 図）。墓口方位は西北西（N77° W）を示す。墓室の平面はややいびつであるが縦長の形状を呈する。墓室の中央には石が配置されており、そこから外につながる溝が確認された。そのほか、周辺より鉄鍋や炭が検出されたことから、遺構が竈として使用されていた可能性ある。天井部分が崩落していたため墓室の高さは不明だが、奥行きは 1.12m、幅 3.37m を測る。蔵骨器は、マンガン釉甕形の底部破片が出土したが、銘書は確認できなかった。



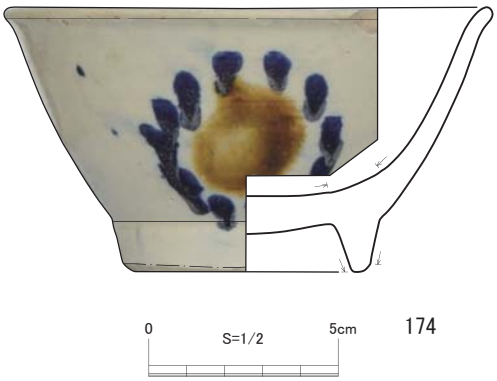
第 61 図　21 号墓遺構図

図版 40　21 号墓遺構　　左：21 号墓 墓室内完掘状況、右：遺物検出状況

（2）遺物

21 号墓に伴う遺物の種類と内訳は第 22 表のとおりである。前述したように、蔵骨器はマンガン釉甕形の破片が 1 点出土しているが、銘書や全体の器形は確認できなかった。そのほか、水甕の破片が 147 点も得られた。しかしながら、これらは小破片であり窯印などの情報が得られなかったため、本報告では省略する。

蔵骨器以外の遺物は、鉄鍋、碗、香炉が出土している。その中でも、図化可能の碗 1 点について報告を行う。第 62 図 174 は沖縄壺屋産の碗である。墓室埋土より出土した。全面に白化粧後、外面に飴釉での丸文を３個、それぞれ周辺にコバルトで小楕円文を配する。文様は釉垂れが著しい。見込には蛇の目釉剥ぎを施す。口径 13.0㎝、底径 6.4㎝、器高 7.0㎝である。



第 62 図　21 号墓出土遺物

（8）26 号墓

1）遺構（第 63 図）

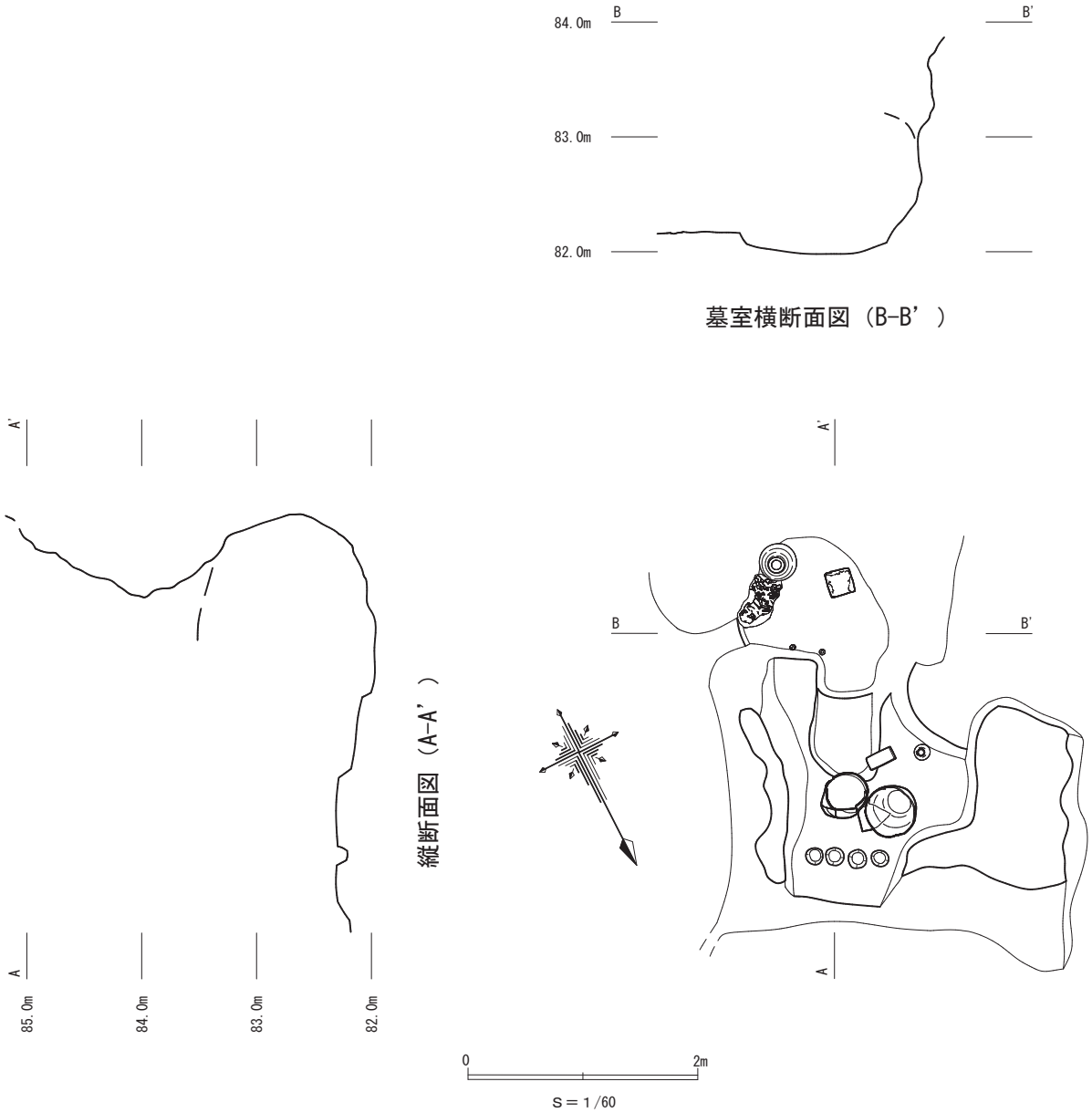
26 号墓は、15 号墓および 16 号墓に隣接する横穴式の掘込墓である（第 36 図）。墓口方位は北北東（N31° E）を示す。墓室の平面形は不定型であり、墓口には 4 つの土坑が確認できる。土坑の形状や大きさから、小型の蔵骨器あるいは水甕などを据え置いた跡とみられる。墓室の左壁は 15 号墓、右壁は 16 号墓へと掘り広げられ連結している。墓室の直線部分の奥行きは 2.82m、幅 1.38m、高さは約 1.93m を測る。蔵骨器の出土はなく、水甕、碗や小杯、瓦といった遺物の出土が目立つ。そのほか、漆塗りの板状製品が出土した。同製品は風化が進んでおり、漆が膜状に残存していた。連結する 15 号墓および 16 号墓と同じく、戦時中に壕として改築された可能性が高い。

2）遺物

26 号墓に伴う遺物の種類と内訳は第 22 表のとおりである。

蔵骨器は出土せず、それ以外の遺物として、水甕と壷の完形品が出土している。ここでは壷につ

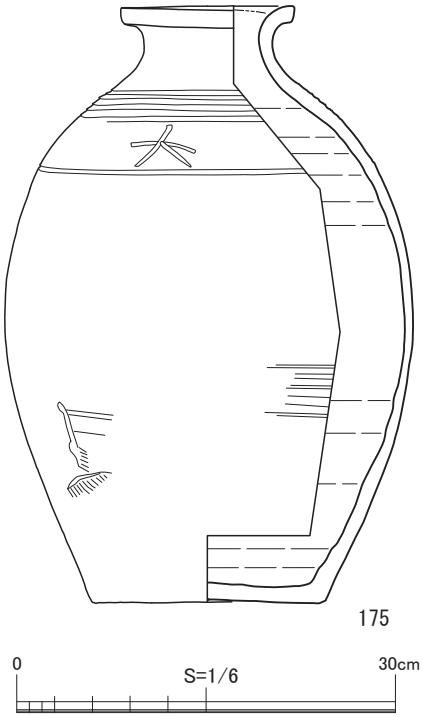
図版 41　26 号墓遺構　　左：遺物検出状況、右：完掘状況



第 63 図　26 号墓遺構図

いて報告する。第 64 図 175 は、沖縄の壺屋産荒焼壺である。無釉であり、口縁部がわずかに歪んだ器形になっている。肩部より上位に横位の沈線が 7 条、その下に判（窯印）、さらにその下に沈線がみられる。判は「大」と読むことができ、これは壺屋の渡慶次朝定という屋号の判であることがわかった（『やちむん』第 11 号、「壺屋の屋号と判について」）。口径 13.7㎝、胴径 32.3㎝、底径 18.4㎝、器高は 47.4㎝を測る。底部には珊瑚石灰石による目積みの跡が 3 か所確認できる。遺構の形状だけでなく、中に人骨がみつからなかったことから、第 64 図 175 は転用蔵骨器ではなく副葬品、または遺構が壕として機能していた際に壷として使用されたか、あるいは避難時に隠したものなどいくつかの用途が考えられよう。そのほかの遺物については、以下詳細を述べる。

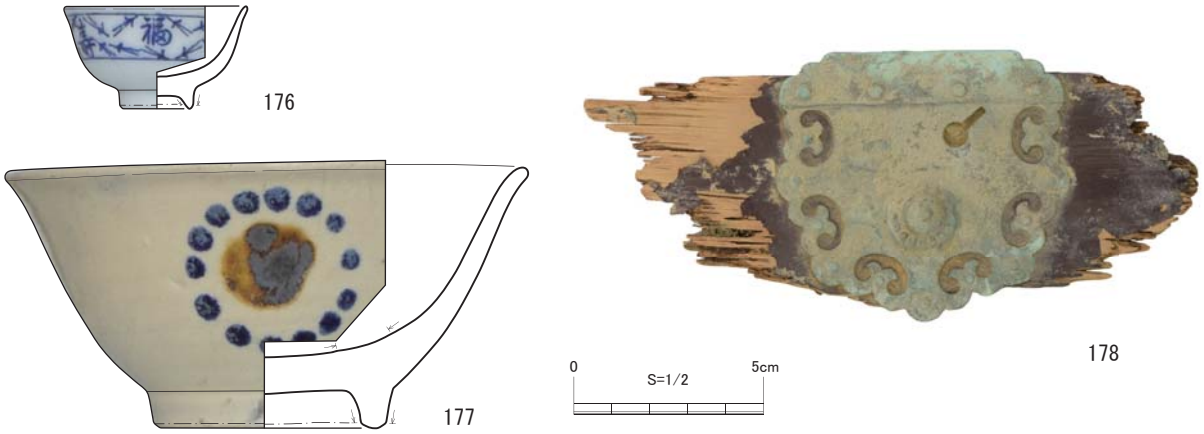
第 65 図 176 は、瀬戸美濃産の小杯である。墓室床面直上より出土した。外面に呉須による 2 本の圏線とその間に寿字文を配する。口径 4.9㎝、底径 1.95㎝、器高 6.9㎝である。



第 64 図　26 号墓出土遺物（1）

175- 窯印

図版 42　26 号墓出土遺物



第 65 図　26 号墓出土遺物（2）

第 65 図 177 は、沖縄壺屋産の碗である。墓室床面直上より出土した。全面に白化粧後、外面に飴釉での丸文を 3 個､それぞれ周辺にコバルトで小楕円を巡らせている。見込に蛇の目釉剥ぎを施す。口径 13.8㎝、底径 6.6㎝、器高 6.9㎝である。

第 65 図 178 は、調度品のものと思われる飾り金具である。

(9) その他の墓

ここまで状態の良い墓を中心に、それぞれの墓ごとにその詳細の報告を行った。それ以外の墓で出土した遺物のうち、特徴的なものや状態の良いものについて、以下に図示し、報告を行う。各遺構の詳細については第 21 表を参照頂きたい。なお、陶磁器の詳細は以下第 29 表のとおりである。

つづいて、陶磁器以外の遺物について述べていく。第 66 図 179 は、青銅製の煙管である。雁首から吸口まで青錆が付着している。全長 15.4㎝で、雁首の火皿径 1.05㎝、立ち上がり 1.23㎝、吸口は吸口径 0.79㎝、重量は 34.5g である。19 号墓の墓室埋土より出土した。

そのほか、9 号墓の墓庭より 1 セント（第 66 図 180)、20 号墓の墓室埋土より計量皿（第 67 図 188）と歯ブラシ（第 67 図 189)、29 号墓の墓室埋土よりガラス製の瓶（第 67 図 190・191）が出土している。これらについては、写真のみ掲載した。

また、6 号墓の墓庭庭囲い（右）周辺より蔵骨器が出土している。6 号墓は空墓であり、遺構について節を設けていない。しかし、出土した蔵骨器片に銘書が確認できたため、銘書のみ報告を行う。

第 29 表　その他の墓の出土陶磁器の観察一覧表

番号	遺構名	出土地点	器形	残存部位	口径	器高	底径	施釉	釉色・色調	貫入	文様等	備考
第66図181	19号墓	墓口埋土	皿	ほぼ完形	13.90	2.60	2.70	コバルトでの型絵染付後、全体に透明釉を掛ける。	全面：白色 文様：コバルトの鮮やかな発色	なし	花の文様と見込み部分には松竹梅が配される。	肥前産か？/蛇の目凹型高台
第66図182		墓室埋土	碗	ほぼ完形	9.50	4.60	4.30	全面に厚く透明釉を施釉。呉須にて文様を描く。畳付は露胎。	全面：青みの強い乳白色 文様：呉須のにぶい発色	なし	外面に抽象的な文様のほか花をモチーフにした文様を筆書き。内面に圏線を4条描く。	中国産青花の徳化窯系の外反碗/底部に名款あり(不明瞭)
第66図183		墓室埋土	碗	完形	13.85	6.10	6.10	全面に厚く透明釉を施釉。呉須にて文様を描く。畳付と高台脇は釉が剥ぎ取られ露胎する。	全面：青みの強い乳白色 文様：呉須の淡い発色	なし	外面に寿字文、簡略連弁文、内面に圏線を呉須で施す。	中国産青花の徳化窯計の外反碗/底部に「和美」の名款あり/19世紀製作
第66図184	20号墓	墓室埋土	皿	完形	13.00	2.20	7.70	全面に透明釉を施釉。畳付は露胎。	全面：青みがかった白色 文様：黒・茶・赤色	なし	内面に吹き付け、筆書きで鶴を描く。	肥前産か？/色落ちが著しいが、太陽や葉も描かれている
第67図185		墓室埋土	皿	完形	14.70	4.70	8.60	全面に透明釉を施釉。コバルトにより文様。	全面：青みがかった白色 文様：コバルトの鮮やかな発色	あり	内面に山水文。口唇部に鉄釉を施す。	型成形・輪花/蛇の目凹型高台
第67図186		墓室埋土	皿	ほぼ完形	14.75	4.85	9.20	全面に透明釉を施釉。コバルトにより文様。	全面：青みがかった白色 文様：コバルトの淡い発色	なし	内面に山水文。口唇部に鉄釉を施す。	型成形・輪花/蛇の目凹型高台/底部に「富貴長春」と熟語銘あり
第67図187	24号墓	下方表採	人形	完形	-	-	-	なし	胎土：赤褐色	なし	高さ：4.85cm、幅5.20cm。	恵比寿をモチーフにした顔人形/両こめかみに紐通しの孔があく

第 66 図　9 号墓・19 号墓・20 号墓出土遺物

第 67 図　20 号墓・24 号墓・28 号墓出土遺物

詳細については第30表を参照いただきたい。なお、これらは小破片のため図は割愛する。

第30表　6号墓の蔵骨器銘書一覧表

墓番号	蔵骨器番号	図版番号	銘書内容	被葬者	死去年	洗骨年	備考
6号墓	-	-	〈蓋〉光緒弐拾三年〈欠損〉二月十七日死去/比嘉筑登之親雲〈判読不能〉■シ	<1>比嘉筑登之親雲	<1>1897	-	
	-	-	〈蓋〉〈欠損〉■■■〈欠損〉/〈欠損〉■〔年ヵ〕五月十七日■〈欠損〉	不明	-	-	
	-	-	〈蓋〉①〈欠損〉■村三男亀 ②〈欠損〉■村拾■〈判読不能〉月〈欠損〉	<1>三男亀 <2>不明	-	-	<1>と<2>は同一人物の可能性あり
	-	-	〈蓋〉①二代名加那〈欠損〉/大正参年七月貳〈欠損〉/當〈欠損〉/大正〈欠損〉 ②〈欠損〉拾貳月拾五日洗骨/〈欠損〉加■那妻ナビ西玉城/〈欠損〉也 ③〈欠損〉才/〈欠損〉月廿二日洗骨 ④〈欠損〉■拾三戊■〈欠損〉 ⑤〈欠損〉■〔治ヵ〕三■〈欠損〉	<1>二代目加那 <2>加■那妻西玉城	<1>1914？ <2>不明	<1>1914？ <2>不明	「二代目」と記載あり

第5節　人骨分析に関する所見

(1) 出土状況及び残存状況

本調査区の墓遺構は基本的に移転後の残渣であり墓室内部に原位置を保って残存する蔵骨器などは出土していない。そのため人骨についても蔵骨器内に納められた状態で出土したものはなく、墓室内あるいは墓庭などの覆土中から得られたものである。人骨の出土が確認できた墓遺構は調査区内の全31基のうち4基で、2号墓では墓室内から、3・6・28号墓においては墓庭からそれぞれ確認されている。

第31表　西前田原A丘陵の出土人骨一覧表

墓No.	蔵骨器No.	人骨No.	年齢	性別	出土部位	備考
2	墓室埋土	1,2	成人	不明	軸椎(2)、頸椎、基節骨、膝蓋骨L、距骨L/R、第3中足骨L	
2	墓室埋土	3	幼～小児	不明	頭蓋骨破片、上顎骨R、胸椎、鎖骨L、腸骨R	
2	墓室埋土	4	乳幼児	不明	尺骨R、大腿骨R	
2	遺構南側斜面	一括	—	—	下顎骨、上腕骨L、橈骨R、大腿骨L、脛骨R	
3	サンミデー埋土	1	不明	不明	肩甲骨L、鎖骨L、上腕骨L	
6	門側袖内側埋土	1	老年	不明	前頭骨、頭頂骨、側頭骨、下顎骨R、鎖骨R、上腕骨L、橈骨R、尺骨L・R、大腿骨L、脛骨R、腓骨破片、距骨R	
28	墓庭埋土	1	成人	M	頭蓋骨破片、環椎破片、頸椎(2)、胸椎(4)、腰椎(3)、椎骨、胸骨、肩甲骨L・R、鎖骨L・R、上腕骨L・R、橈骨L・R、尺骨L・R、有頭骨R、舟状骨L、第1中手骨L、第2中手骨L・R、第3中手骨L、第4中手骨L・R、第5中手骨R、基節骨(5)、中節骨(4)、末節骨、腸骨L・R、坐骨R、恥骨L、大腿骨L・R、脛骨L・R、腓骨L・R、踵骨R、距骨L・R、内側楔状骨L・R、立方骨L、舟状骨L・R、第1中足骨L・R、第2中足骨L、第4中足骨L、第5中足骨R、第1基節骨L、基節骨(5)、末節骨	
28	墓庭埋土	2	不明	不明	大腿骨L	
28	墓庭埋土	3	乳幼児	不明	頭蓋骨破片、下顎骨、椎骨(6)、肩甲骨L・R、鎖骨L・R、上腕骨L・R、橈骨L、尺骨L・R、腸骨L、坐骨R、大腿骨L・R、脛骨L・R、腓骨L・R	
28	墓庭埋土	4	幼児	不明	頭蓋骨破片、下顎骨、軸椎、椎体(21)、肩甲骨R、上腕骨L、腸骨L、坐骨R、恥骨L、大腿骨R、脛骨L・R、距骨L・R	

（2）観察所見

1）２号墓

墓室内から頭蓋骨の破片や椎骨・四肢骨などが断片的に出土しているが、いずれも残存状態はそれ程良くない。それでも骨の発達状態及び部位の重複から成人２体・未成人２体分が少なくとも含まれることが推定される。このうち、成人を№１・№２、未成人を№３・№４として個体識別を行った。

成人骨については軸椎が重複して同定されていることから最小個体数を２と計数したものの、それ以外の部位は基節骨や膝蓋骨・中足骨などが残存するのみであることから形態的な観察所見を得ることは困難であり、各部位を個体毎に分類することも難しいことから一覧表（第 31 表）においては一括して記載した。なお、軸椎のうちの１点については椎体腹縁に骨棘形成が観察されている。

一方、未成人骨の上顎骨を観察すると第１及び第２乳臼歯が萌出完了しており、歯槽内に第１切歯及び第１小臼歯の形成中の歯冠が残存している様子が確認できた。ただし、第１大臼歯の歯槽部が欠損していることから、この上顎骨は幼児から小児段階であったと推定され、これに伴う四肢骨の一群と合わせて№３の個体として識別した。また、これらの一群より明らかにサイズが小さな四肢骨が同定されており、より幼い年齢段階の個体の骨が含まれていることが窺えることから、これらの一群を乳幼児段階の№４の個体として記載している。

２）３号墓

サンミデーから肩甲骨・鎖骨・上腕骨が出土している。ただし、いずれも部分的に残存しているのみであることから詳細は不明である。

３）６号墓

前頭骨・頭頂骨・側頭骨・下顎骨の他四肢骨が墓庭の覆土中から出土している。散乱して出土していることから全て同一個体に属するものであるかどうかは不明であるが、下顎骨の歯槽が閉鎖している様子が窺えることから、少なくとも老年の個体が含まれていることが想定される。

４）28 号墓

墓庭にボージャー形蔵骨器・マンガン形蔵骨器の破片が出土しているものに伴って人骨が出土しており、壕に転用された際、納められていた蔵骨器が墓庭に遺棄されたことに伴い散乱したものと思われる。

上記の人骨群の部位同定を試みたところ成人と未成人骨が少なくとも２体分ずつ混在していることが窺われた。このうち成人骨はその残存状態などから基本的に同一個体に属する一群であると思われるが、大腿骨が１点重複することから最小個体数を２とした。同一個体に属する一群を№１、重複する大腿骨を№２として個体を識別した。№２は断片的であるため年齢段階等の詳細は不明であるが、共伴の成人骨よりは未発達ではないかと思われ、未成人骨を含め他の個体と残存状態が明らかに異なることから識別している。

№１は全身の部位が比較的良好な状態で残存しているものの、頭蓋骨は小破片が残るのみである。他の部位が良好な状態であることから考えると、頭蓋のみ持ち出されている可能性も窺われる。頭蓋骨がみられないことから詳細な年齢段階等の推測が困難であるが、腸骨の大坐骨切痕角から男性ではないかと推測される。胸骨および種別不明椎骨の椎体腹縁の１点ずつに骨棘形成が観察される他、尺骨の骨幹横経に左右で発達差がみられる点が観察所見として挙げられる。

未成人骨については部位重複から２体分が存在していることが窺われ、明瞭なサイズ差が確認できることから個体識別が可能である。№３では下顎骨がほぼ完存しており、乳切歯が萌出完了、乳犬歯から乳臼歯までが萌出開始直後ないし未萌出段階であることから、乳児から幼児期にかかる頃合いの年齢段階ではないかと推定される。それ以外の四肢骨には形態的な変異などは観察されていない。№４の四肢骨は№３に比べると明瞭に大きく、残存する下顎骨と遊離歯から少なくとも第２乳臼歯が萌出完了、また第１大臼歯が未萌出であるとみられることから幼児段階ではないかと推定される。ただし、いずれも断片的であることから計測等は不能である。なお、未成人骨で両者のいずれに属するか不明な部位については一括としてまとめた。

第 32 表　墓別による人骨の最小個体数一覧表

墓No.	成人												未成人				年齢性別不明	計
	成年			熟年			老年			年齢不明			若年	小児	乳幼児	年齢不明		
	M	F	性別不明	M	F	性別不明	M	F	性別不明	M	F	性別不明						
2												2		1	1			4
3																	1	1
6									1									1
28										1					2		1	4
合計	0	0	0	0	0	0	0	0	1	1	0	2	0	1	3	0	2	10

※推定年齢段階がまたがっている場合はより上の段階でカウント

第 33 表　上顎骨及び下顎骨の歯列残存状況

凡例）歯種記号：残存歯，○：歯槽開放，×：歯槽閉鎖，／：歯槽破損，
△：歯根のみ残存，（ ）：未萌出，〔 〕：萌出中・閉鎖中，
網掛：齲歯，空白：欠失・未形成

墓No.	地点	人骨No.	残存状況 R	残存状況 L
2	墓室埋土	3	R：／　m² (P¹) m¹　○　○　(I¹) ○	L：
6	門側庭囲い内側埋土	1	R：×　×　×　×　×　／　／　／	L：
28	墓庭埋土	3	R：(M₁)　○ (m₂)　(m¹) (m₁)　○ (c)　○ i₂ (I₂)　i¹ i₁ (I₁)	L：○ i₁ (I₁)　○ i₂ (I₂)　○ (c)　(m¹) (m₁)　(m²) (m₂)　(M¹) (M₁)
28	墓庭埋土	4	R：○　○　○　○	L：○ (I₁)　○　○　○

第 34 表　骨に見られる変異等の観察表

墓No.	蔵骨器No.	人骨No.	部位	左右	変異種別	観察所見
2	墓室埋土	1，2	軸椎	—	変形	椎体腹縁に骨棘形成
28	墓庭埋土	1	胸椎	—	変形	椎体腹縁に骨棘形成
			椎骨	—	変形	椎体腹縁に骨棘形成

第６節　まとめ

前田西前田Ａ丘陵では、平成 25 年度の発掘調査によって計 31 基確認することができた。調査成果について遺構や遺物の詳細について報告を行ってきたが、あらためて下記の項目ごとに総括し、本調査地区のまとめとしたい。

１．遺構の特徴と墓域の形成について

前田西前田地区には４つの丘陵がみられ、その中で今回報告したＡ丘陵はほぼ中央部に位置する丘陵である。丘陵の土質は砂粒砂岩（ニービ）が主体ではあるが、丘陵の東側は一部第三期泥岩層（クチャ）を挟んだ互層であった。本丘陵に所在する墓はすべて、このような地質の丘陵に横穴を掘り込んで造られた掘込墓（フィンチャー）である。

遺構の形態については、丘陵の東側と西側で様相が大きく異なることが挙げられる。本丘陵の西側に位置する１～７号墓は、墓室が６㎡前後かそれ以上の規模が多く、また墓室内はおおむね棚や天井など使用当時の状態を保っており、墓庭も当時の規模･形状であった。対して東側に位置する墓は、墓室の平面形状が不定型であり、西側の墓と比較すると小規模である。また、13 号･14 号墓、15 号･25 号墓のように本来は小規模であった隣接する墓の壁同士を連結させ、さらに掘り広げることによって壕として利用する例もみられた。

墓室類型でみると、１号墓と６号墓が５類になるが、それ以外の多く（25 基）は棚を成形しない１類である。そのほか、唯一４号墓のみ、棚が出窓状になる２ｂに該当した。仲間稲マタ原近世墓や那覇市のナーチュー毛古墓群の類例から、４号墓の造墓年代は 17 世紀代まで遡る可能性がある。遺構の形態のみで述べるなら、おそらく４号墓が同丘陵ではじめに造墓され、隣接する３号墓や１号墓など、丘陵西側に位置する墓がほぼ同時期に機能し始めたといえるだろうか。西前田Ａ丘陵の東側に並ぶ遺構の殆どが壕に改築されているため年代観を述べることは困難であるが、遺構の規模や周辺の埋土にも蔵骨器が見られないことから、同丘陵において主に墓として機能していたのは西側だった可能性がある。東側の遺構については、前述したように墓室内の壁が掘りぬかれ連結したもののほか、16 号墓や 17 号墓にみられるような墓口～墓室までの羨道が曲線的なもの、きわめて小規模でいびつな遺構もみられた。よって、丘陵の東側にみられる遺構は、墓が壕に改築されただけでなく、沖縄戦時にはじめから壕として掘り込まれた遺構もあることも視野に入れなければならない。また、丘陵全体を見ると、墓室から蔵骨器の出土がないこと、またその蔵骨器もコバルト掛けなどの戦前から戦後にかけて流通していたような蔵骨器が圧倒的に少ないことから、沖縄戦以降墓としての機能をなしていなかったといえる。すなわち、西前田原Ａ丘陵の墓としての主な使用時期は古くて 17 世紀代から戦前までであろう。

２．遺物の特徴と年代観について

西前田Ａ丘陵の大きな特徴として挙げられるのは、蔵骨器の出土が非常に少なく、皿や碗などの食器類や水甕といった日用品が圧倒的に多く出土したことである。第３節で述べたように、煙管や簪、瓶といったいわゆる副葬品、銃剣などの戦争遺物の出土についても、「前田・経塚近世墓群」の他の地区の様相と比較しても少ない傾向にある。しかしながら、従来だと墓室より出土した碗や小杯などの陶磁器類は副葬品として報告するのだが、本丘陵においてはこれらについて「戦争関連遺物」として扱い報告している。理由として、聞き取り調査での情報と、出土状況にある。今回調査をするにあたっ

て、周辺住民の方の証言を得ることができた。その内容は「沖縄戦前後において、（同丘陵の）墓に大量の碗や皿などの日用品を隠した」というものである。証言を裏付けるように、同丘陵の主に東側の遺構からは大量に日用品が出土した。また、遺構には蔵骨器や人骨が伴わず、隣接する墓同士を連結させるなど壕に改築しているものも見られたため、出土した日用品は、墓として機能していた時の副葬品ではなく戦時中の避難安置のものと考え、本丘陵では「戦争関連遺物」と報告した。

戦争関連遺物をみてみると、陶磁器は沖縄壷屋産のものより、砥部、瀬戸美濃、肥前といった本土産のものが多い。とくに、沖縄で「スンカンマカイ」と呼称される砥部産の型絵付けは比較的多い傾向にあった。また、瀬戸美濃産の資料もバリエーションに富んでおり、碗や皿といっても、子ども用の小碗や、菱皿、輪花皿など、今現在県内において類例の少ない資料が得られている。小杯については、いわゆる海軍食器、陸軍食器なども多く出土しており、数点には部隊名などが書かれる。いずれにせよ、出土した陶磁器類の大部分は近代～戦前に属するものであり、当時住民が使用していた食器類の様相を強く反映したデータと考えられる。砥部焼と統制番号を付するものについては、別項にて詳細を記述したい。

続いて、蔵骨器をみてみると、本丘陵より得られた蔵骨器は全て墓室外からの出土であり、その全てが破片であった。接合の結果復元できたものとともに、小破片のため図化は行っていないが銘書が確認できた蔵骨器についても包括し述べることで、本丘陵より出土した蔵骨器の特徴としたい。蔵骨器の主な出土内訳をみてみると、ボージャー形の蓋１点、破片78点、マンガン釉甕形の蓋５点、身５点、破片 173 点となっている。種類ごとに述べると、ボージャー形の蓋（蔵骨器 1）はつまみ・つまみ台のない笠形になっており、安里編年のⅦ式（1750 ～ 1820 年代）に該当する。銘書には乾隆 60（1795）年死去とあり、形状と銘書には整合性があるといえるだろう。次にマンガン釉甕形であるが、図化を行った蔵骨器の身（蔵骨器 2、6）についてみていく。2 は蓮華文が貼り付けされていること、横帯の２～４が凸帯になることから安里編年の第Ⅲ期（1810 ～ 1850 年代）に該当し、セット関係にある蓋の銘書を確認すると咸豊７（1857）年洗骨とあるため、整合性があろう。6 には屋門は無く、文様が横帯に沈線で描かれることから、安里編年の第Ⅴ期（1930 年～）に属すると考えられる。また、蔵骨器５から、大正 12（1923）年に死去、および昭和６（1931）年に洗骨という銘書が確認できた。以上をふまえると、前述した「墓としての主な使用時期は古くて 17 世紀代から戦前まで」という西前田原 A 丘陵の年代観を、「ボージャー形からマンガン釉甕形への過渡期（17 世紀後半）から戦前まで」と、より具体的に推定することができる。陶製御殿形の蔵骨器破片もわずかながら見られたが、総じて小破片であり、墓域外の埋土からの出土であったため、同丘陵で主に使用されていた蔵骨器はマンガン釉甕形と想定している。なお、銘書の確認できる蔵骨器もあったが、欠損部分が大きく、被葬者や村の情報を読み取ることはかなわなかった。唯一明確に被葬者について書かれたのは６号墓出土のマンガン釉甕形蓋の「光緒二拾三年・・・比嘉筑登之親雲（上）」のみであったが詳細は不明である。

３．砥部焼（スンカンマカイ）と統制番号を付する陶磁器について

遺物の特徴でも述べたが、西前田 A 丘陵より出土する陶磁器の多くは本土産のものであった。その中でも、「スンカンマカイ」と呼称される砥部産の型絵付碗と、統制番号が付された瀬戸美濃産の陶磁器が多い傾向にあったため、ここで項を設けこれらの特徴を述べていきたい。

スンカンマカイは概ね愛媛県砥部町で製作された碗と考えられており、沖縄県内では近世以降の墓や集落といった遺跡においてよく出土する資料である。前田・経塚近世墓群の他の地区でも出土していたが、そのなかでも本丘陵のスンカンマカイの出土量は非常に多く、保存状態も良好であった。ス

ンカンマカイについては下地（1994）、宮城（2002）と報告がなされており、また、那覇市教育委員会刊行の文化財調査報告書のなかでも詳細が語られている。よって、これらの報告を踏まえながら西前田A丘陵出土のスンカンマカイの特徴を述べていく。まず形状を観察すると、出土したものは全て口径13㎝前後、器高6.5cm前後の口縁部が外反する碗であった。これは『喜友名貝塚・喜友名グスク』の報告書において「端反碗」と報告された器種であり、以降宮城が「四寸碗」と呼称したものである（宮城2002）。すでに沖縄県内で出土するスンカンマカイの多くはこの器種であると指摘されている（那覇市教育委員会2010）。

次に文様をみてみると、見込み、（口縁）内面、外面に文様が施され、構成は大きく２種類の文様に分けられることがわかった。宮城の分類によると、窓絵花文碗と窓絵鶴文碗である。前者はおそらくスンカンマカイで最もポピュラーな文様だが、両者ともに出土例は多い。見込の文様も松竹梅と五弁花の２種みられ、窓絵花文碗、窓絵鶴文碗問わず施文されていた。また、高台内にある印は１種のみ確認できた。これらは製作する窯（人・会社）、時期、流通先の違い、または県内で流通した際の値段や単純に購入者の好み、流行など様々な事象を検討できる材料と予想しているが、これについては今後の課題とし、特徴を述べるに留めたい。

統制番号などが付された陶磁器については、最初に統制番号について概略する必要があろう。統制番号とは「生産者別表示記号」のことであり、昭和初期からつづく戦争の長期化によって物資が不足する中で、陶磁器製品の生産から販売までを統制するため用いられたものである。生産地及び生産時期を特定できる貴重な資料なため、今回西前田A丘陵より出土した統制番号を付する陶磁器を確認したところ、ほとんどが「岐○○」で、「瀬○○」もみられた。よって、統制番号を有する資料については、全てが瀬戸美濃産である。詳細については第35表を参照いただきたい。

第35表　統制番号を付する陶磁器一覧表

生産者別表示記号（統制番号）		生産地	生産者	出土遺構	器種	備考
岐	382	高山	佐々木宇一郎	013号墓　墓室床面直上	湯のみ	
岐	1047	瑞浪町	大嶽宗三郎	014号墓　墓口	碗	
岐	446	高山	長江久太郎	015号墓　墓室床面直上	湯のみ	2条圏線(国民食器)
岐	357	土岐口	小島房吉	025号墓　墓室床面直上	碗	
岐	401	高山	鈴木山三郎	025号墓　墓室床面直上	薬容器/香炉として使用か	「しっぷ薬 クレホス」・「日本■薬株式會社」と印あり
瀬	424			017号墓　墓室床面直上	碗	2条圏線(国民食器)
岐	286	土岐口	伊藤留九郎	017号墓　墓室床面直上	碗	2条圏線(国民食器)
岐	15	笠原町滝呂	柴田桂一	017号墓　墓室床面直上	小杯	
岐	321	高山	加藤英三郎	017号墓　墓室床面直上	湯のみ	
岐	518	土岐口	吉本菊夫	017号墓　墓室床面直上	湯のみ	
岐	286	土岐口	伊藤留九郎	017号墓　墓室床面直上	湯のみ	2条圏線(国民食器)

〈引用・参考文献〉

安里進 1997「伊祖の入め御拝領墓の厨子甕と被葬者－近世墓の考古学的調査による家族復元－」
『伊祖の入め御拝領墓の厨子甕と被葬者』浦添市文化財調査研究報告書第25集
安里進・新里まゆみ 2006「比嘉門中墓の家族史－家族の数だけ歴史がある－」『比嘉門中墓の家族史－家族の数だけ歴史がある－ 比嘉門中墓の調査概要』浦添市文化財調査研究報告書
内間靖　2002 「判(ハン)について―当館収蔵品に見られる資料を中心に―」『壷屋焼物博物館紀要』

第３号　那覇市立壷屋焼物博物館
浦添市教育委員会 2004『墓からわかる家族の歴史　近世墓シンポウジム報告書』
浦添市教育委員会 2005『仲間稲マタ原近世墓群 稲マタ原陣地壕群』
浦添市教育委員会 2007a『市内遺跡発掘調査報告書（１）－平成 13 ～ 18 年度調査報告－』
浦添市教育委員会 2007b『前田・経塚近世墓群』
浦添市教育委員会 2010『市内遺跡発掘調査報告書（２）－平成 14 ～ 20 年度調査報告－』
浦添市教育委員会 2011『前田・経塚近世墓群（２）首里大名地区』
浦添市教育委員会 2012『前田・経塚近世墓群（３）前田真知堂Ｂ丘陵（１）前田真知堂Ｃ丘陵（２）』
浦添市教育委員会 2011『前田・経塚近世墓群（４）経塚子の方原Ａ丘陵（１）』
浦添市教育委員会 2014『前田・経塚近世墓群（５）経塚南小島原Ａ丘陵』
江藤盛治編 1991『人体計測法 2』人類学講座別巻 1　雄山閣
沖縄県教育委員会 1999『喜友名貝塚・喜友名グスク　―宜野湾北中城線 (伊佐～普天間) 道路改築事業に伴う緊急発掘調査報告書（Ｉ）―』
財団法人岐阜県陶磁資料館 2008『萩谷コレクション 全国の戦時中のやきもの』
下地安広 1994「沖縄から出土する近代磁器 - 浦添の遺跡を中心に」『南島考古』No.14 沖縄考古学会
瀬戸市歴史民俗資料館 2001『企画展 ＜代用品＞としてのやきもの』
谷畑美帆・鈴木隆雄 2004『考古学のための古人骨調査マニュアル』学生社
砥部町教育委員会 1969『砥部焼の歴史』砥部焼歴史研究会
那覇市教育委員会 2000『ナーチュー毛古墓群－那覇新都心土地区画整理事業に伴う緊急発掘調査－』
那覇市教育委員会 2009『垣花村跡―那覇港湾施設管理棟整備工事に伴う緊急発掘調査報告―』
那覇市教育委員会 2010『鏡水土砂場原 A 遺跡―陸上自衛隊那覇駐屯地整備場建設工事に伴う緊急発掘調査報告―』
藤田尚編 2013『古病理学事典』同成社
町田市立博物館 1987『明治印判手の磁器 ―岩崎安吉氏の寄贈による―』
三杉隆敏・榊原昭二　1998『陶磁器染付文様事典』柏書房
瑞浪市陶磁資料館　2012『番号の付されたやきもの―戦時下の瑞浪窯業生産―』
美濃古窯研究会 1999「昭和 16 年３月 岐阜県陶磁器工業組合連合会所属生産者別表示記号（統制番号)」『美濃の古陶　美濃古窯研究会会報』第８号
宮城弘樹 2002「いわゆるスンカンマカイについて」『壷屋焼物博物館紀要』第３号　那覇市立壷屋焼物博物館
山本美代子 1988「日本古人骨永久歯のエナメル質減形成」『人類学雑誌』96 日本人類学会
Knussman.R 1988 Martin/Knussman Anthropologie.Band1, Stuttgart, Gustav Fischer Yerlag
I.W.Cornwall 1964 Bones for the Archaeologist. Phoenix House LTD
D.R.Brothwell 1981 Digging up Bones. Cornell University Pres
E.SCHMID 1972 Atlas of Animal Bones For Prehistorians, Archaeologists and Quaternary Geologists. Elsevir Publishing Company

報告書抄録

ふりがな	まえだ・きょうづかきんせいぼぐん６　まえだまちどうＡきゅうりょう（１）・まえだにしうえはらＡきゅうりょう・まえだにしまえだばるＡきゅうりょう
書名	前田・経塚近世墓群６　前田真知堂Ａ丘陵（1）・前田西上原Ａ丘陵・前田西前田原Ａ丘陵
副書名	浦添南第一土地区画整理事業に伴う緊急発掘調査報告書
シリーズ名	浦添市文化財調査報告書
編著者名	安和 吉則・安斎 英介・上原 千明・菅原 広史
編集機関	浦添市教育委員会
所在地	〒 901-2501　沖縄県浦添市安波茶一丁目１番１号　Tel:098-876-1234
発行年月日	平成 27（2015）年２月５日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地		コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯	東経	発掘期間	発掘面積	発掘原因
前田・経塚近世墓群	前田真知堂Ａ丘陵	沖縄県浦添市字前田小字真知堂	47208	-	26°14′11″	127°43′38″	平成 25 年 7 月 22 日～12 月 10 日	2,100㎡	記録保存調査
	前田西上原Ａ丘陵	沖縄県浦添市字前田小字西上原	47208	-	26°14′14″	127°43′59″	平成 25 年 10 月 28 日～12 月 26 日	990㎡	
	前田西前田原Ａ丘陵	沖縄県浦添市字前田小字西前田原	47208	-	26°14′34″	127°43′45″	平成 25 年 7 月 24 日～12 月 25 日	1,900㎡	
	種別		主な年代		主な遺構		主な遺物		特記事項
	墓		近世～近代		墓等 75 基		蔵骨器、副葬品、人骨、戦争遺物		

要約	浦添市前田と経塚に所在する砂岩の丘陵地には、近世から近代にかけて 1,000 基を超える墓が造営されており、それらの遺跡を総称して前田・経塚近世墓群と呼んでいる。平成 25 年度に字前田に位置する真知堂Ａ丘陵、西上原Ａ丘陵、西前田原Ａ丘陵の発掘調査を実施した結果、75 基の墓等の遺構が出土した。遺構からは墓に伴う蔵骨器や副葬品のほか、戦時中にこれらの遺構が壕として使用されたことを示す戦争遺物が数多く出土した。本遺跡は調査で得られた蔵骨器等から近世から近代にかけての遺構群であると考えられる。また、戦時中の遺物が数多く出土していることから、戦争遺跡としても位置づけられる。

浦添市文化財調査報告書

前田・経塚近世墓群 6　前田真知堂 A 丘陵（1）・

前田西上原 A 丘陵・前田西前田原 A 丘陵

浦添南第一土地区画整理事業に伴う緊急発掘調査報告書

2015（平成 27）年 2 月 5 日発行

編集・発行　浦添市教育委員会

〒 901 - 2501　沖縄県浦添市安波茶一丁目 1 番 1 号

TEL:098-876-1234　FAX:098-878-1487

印刷・製本　株式会社　尚生堂

〒 901 - 2114　沖縄県浦添市安波茶一丁目 6 番 3 号

TEL:098-876-2232　FAX:098-876-2332